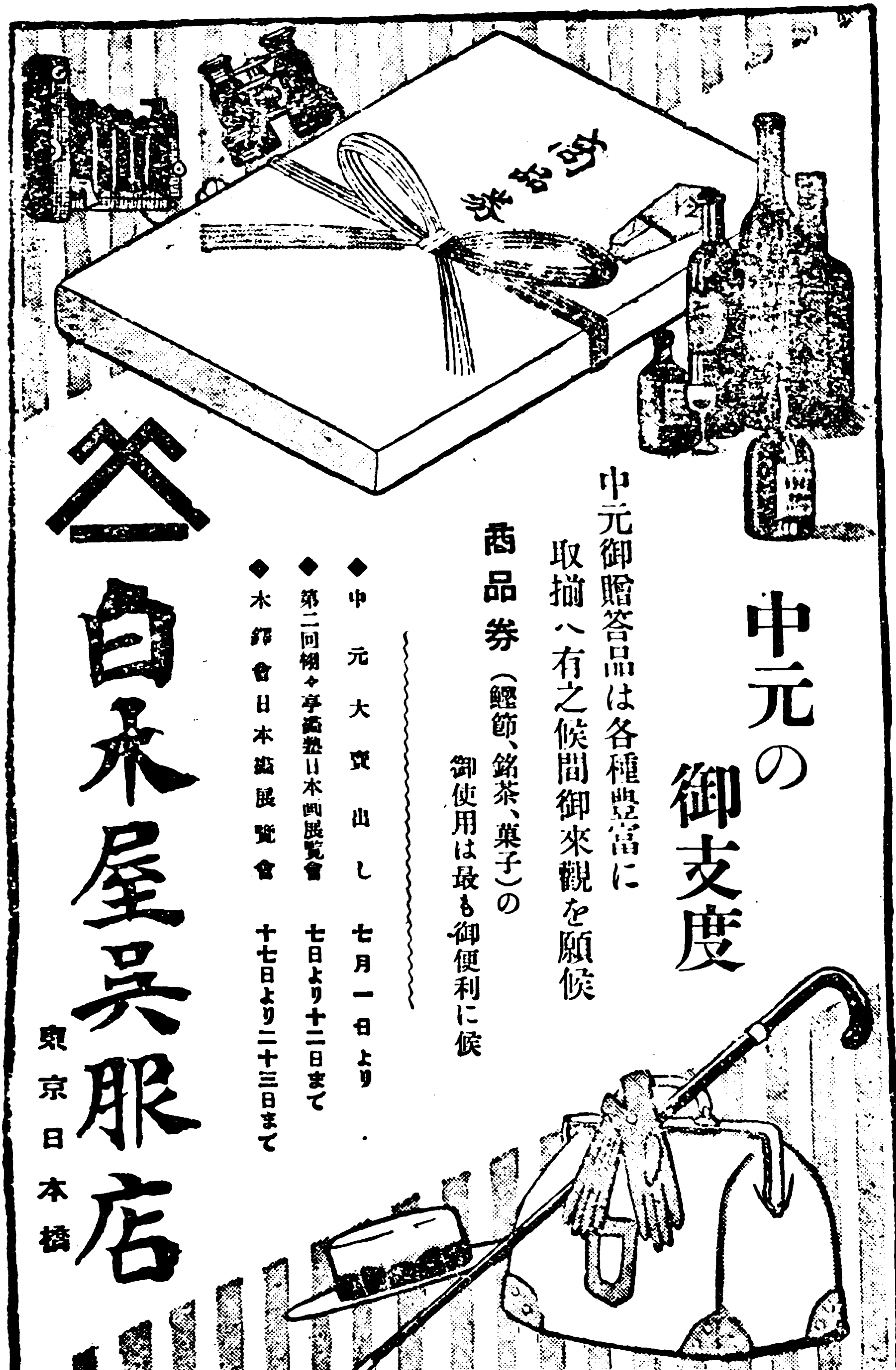
THE RECONSTRUCTION

改造

勞働問題
社會主義
批判號

七月増大號



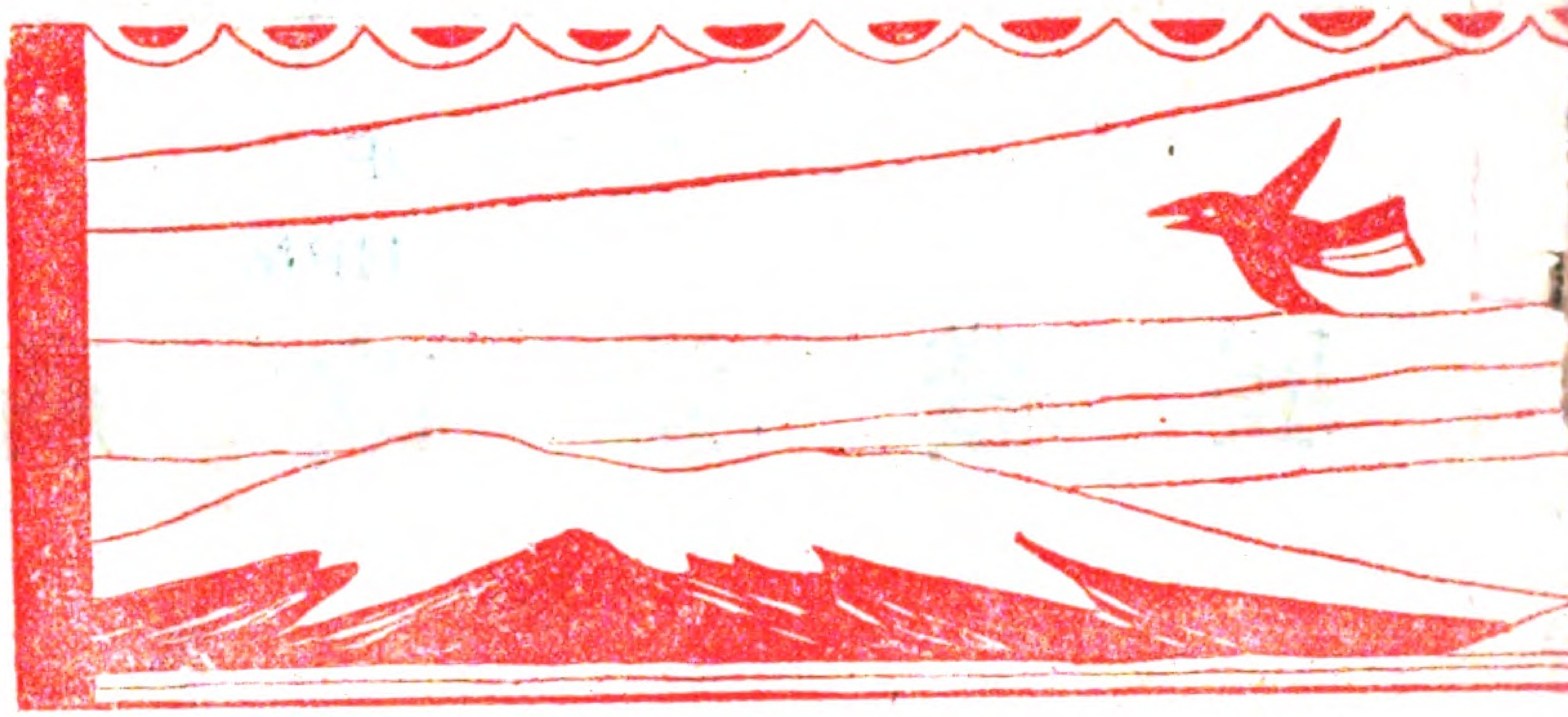
御中元
中元の御支度
中元御贈答品は各種豊富に取揃へ有之候間御來觀を願候
商品券（鰹節、銘茶、菓子）の御使用は最も御便利に候
◆中元大賣出し　七月一日より
◆第二回栩々亭畫塾日本畫展覽會　七日より十二日まで
◆木郁會日本畫展覽會　十七日より二十三日まで
白木屋呉服店
東京日本橋

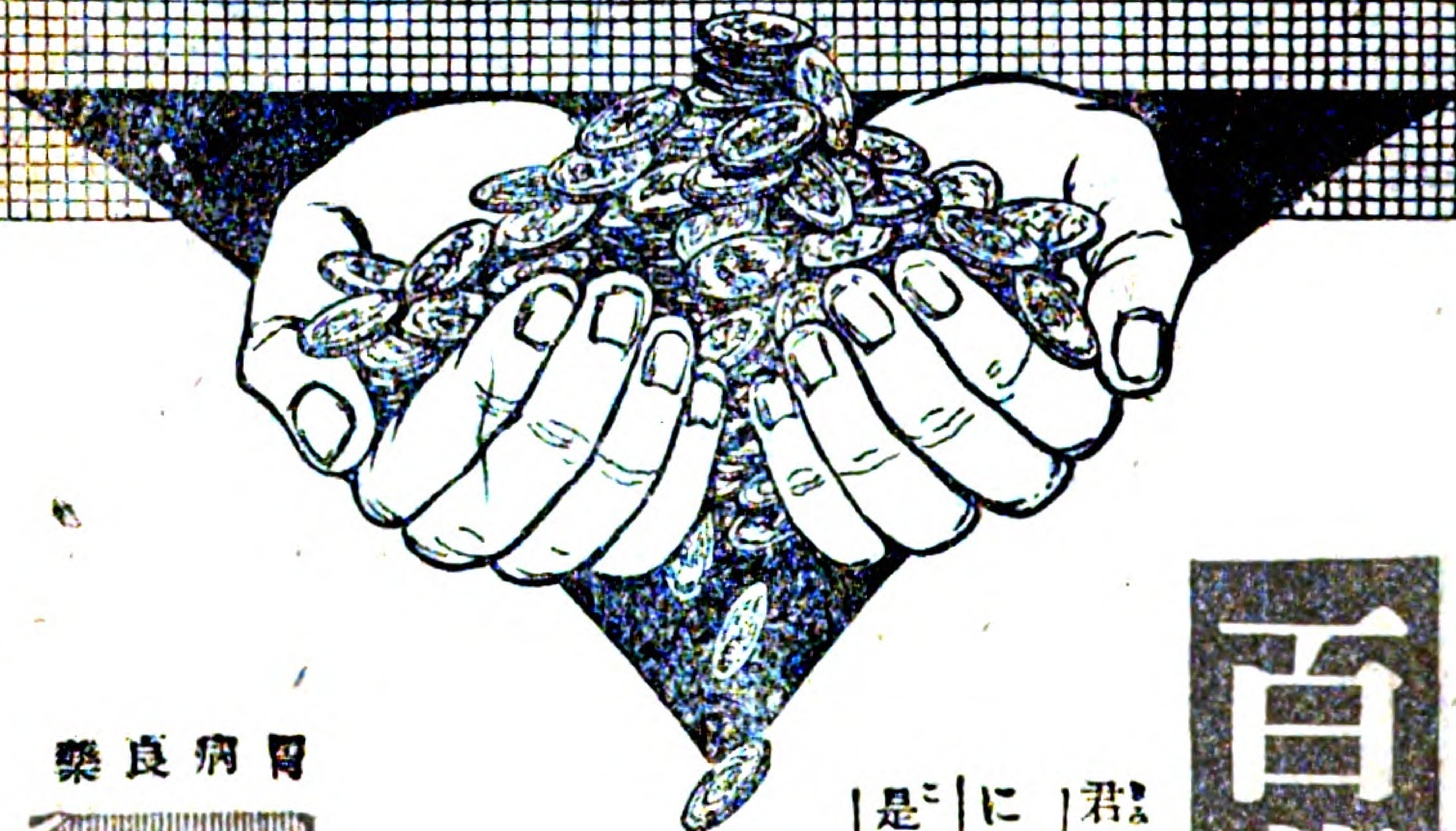


改造第四號目次



社會主義批判





戰後重大問題の羅針盤、一日も不可缺大新聞

正大切實の意見、的確精敏の報道は日本の代表的新聞として夙に內外に至大の信用を博し且つ近時の紙面は更に益々活躍せり

日本一の時事新報を讀め!!

紙面廣く記事豐富、一新聞にて萬事に不足なく特に近來讀者の激增は眞に驚く可きものあり今や世間は實質ある新聞を要求す

夕刊四頁、朝刊八頁、何人にも興味多き大新聞

東京　時事新報社　發行・取次所全國各地に在り

新聞界の覇王

夕刊 朝刊

報知新聞

報知新聞は

最も大新聞にして發行部數の多きこと天下に冠たり

報知新聞は

記事の正確報道の機敏を旨とし懇切丁寧を主義とす

定價

▲一部二錢五厘▲一ケ月金五十八錢△夕朝刊兩配達は外に金參錢●郵送一ケ月金七十三錢（郵税共）▲三ケ月金貳圓（郵税共）▲郵券代用五分增

廣告料

五號活字十五字詰一行金七十五錢▲雜報欄二圓▲一の面及揭載場所指定は一行毎に十錢增

報知新聞は

社會の改良を主眼として國民一般の大なる味方なり

報知新聞は

婦人の好伴侶にして最も家庭的の特色を有し居れり

「電話番號」

本局		
編輯局	特	五〇〇〇
編輯部	特	五〇〇一
編輯局	長	五〇〇二
編輯局	長	五〇〇三
廣告部	長	五〇〇四
販賣部	特	五〇〇五
販賣部	長	五〇〇六
會計部	長	五〇〇七
代理部		
監理部		五〇〇八
安信所		五〇〇九
安信部		五〇一〇

發行所

東京麴町區有樂町貳丁目壹番地

報知社

振替口座東京七三九番

東洋一の新聞

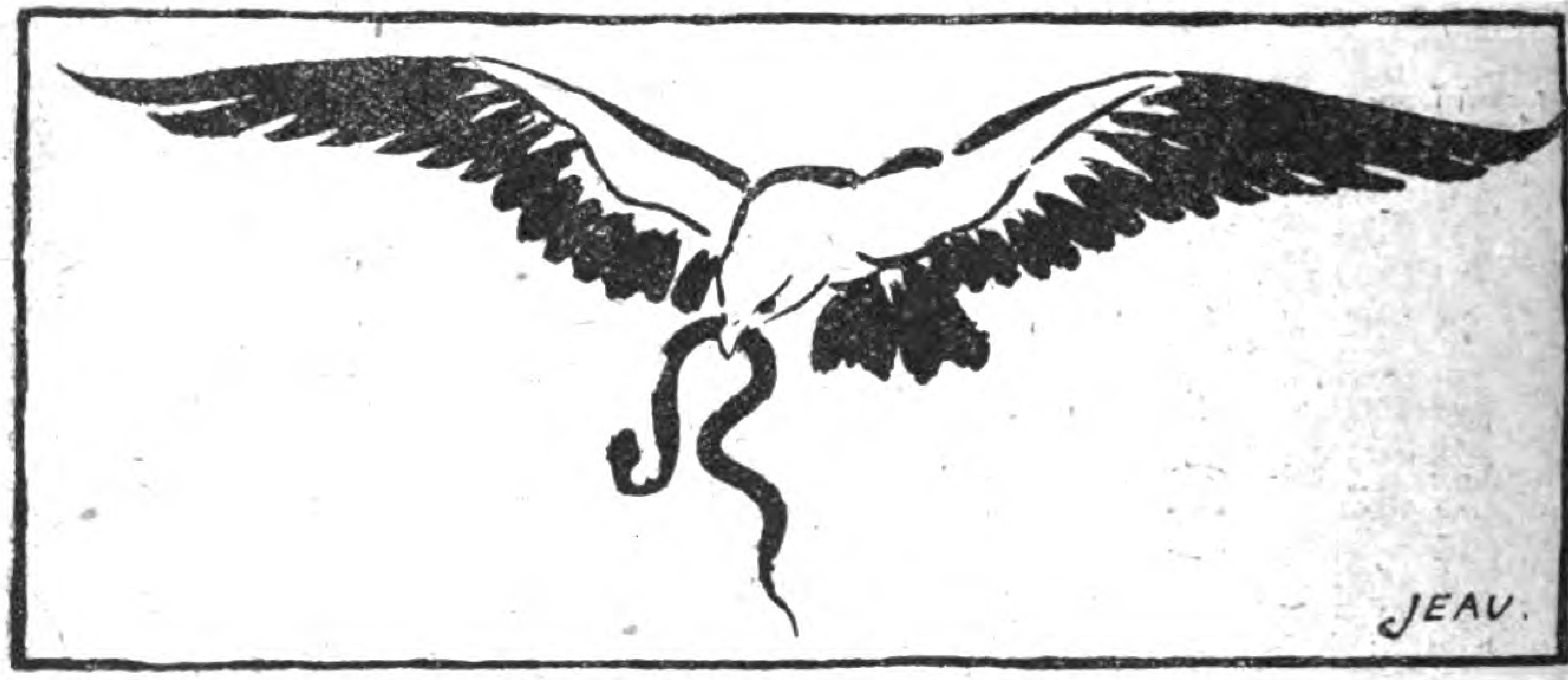
讀賣新聞と
講和問題

我が讀賣新聞は、巴里に於ける講和會議の形勢を、細大漏らさず、讀者に報道するに全力を傾注し、倫敦、巴里、紐育各方面の大通信社と連絡を取りつゝあるのみならず、曩に通信員として、秋元俊吉氏を牧野男爵と同行せしめ、且つ巴里に於ける數名の講和關係有力者に通信を委囑し居れば、此の前古未曾有の大會議の情況が、手に取るが如く、讀賣新聞紙上に顯はれ來るべきは、本社の確信する所也、而して

讀賣新聞社長　秋月左都夫

讀賣新聞社主　子爵　本野盛一

今又茲に兩氏渡歐し讀賣新聞の爲に講和會議地に於て大に通信の筆を揮はんとす。讀賣新聞紙上に、如何に講和會議の有力なる通信の掲載さるべきかに就ては、我社は大に讀者諸君の御期待を翼望する次第なり。尚は本野子爵夫人は、歐洲婦人界の近情に就て通信せらるゝ筈なれば、是亦た大に我が婦人附錄に光彩を添ふるならんと信ず。伏て大方の御購讀を冀ふ。



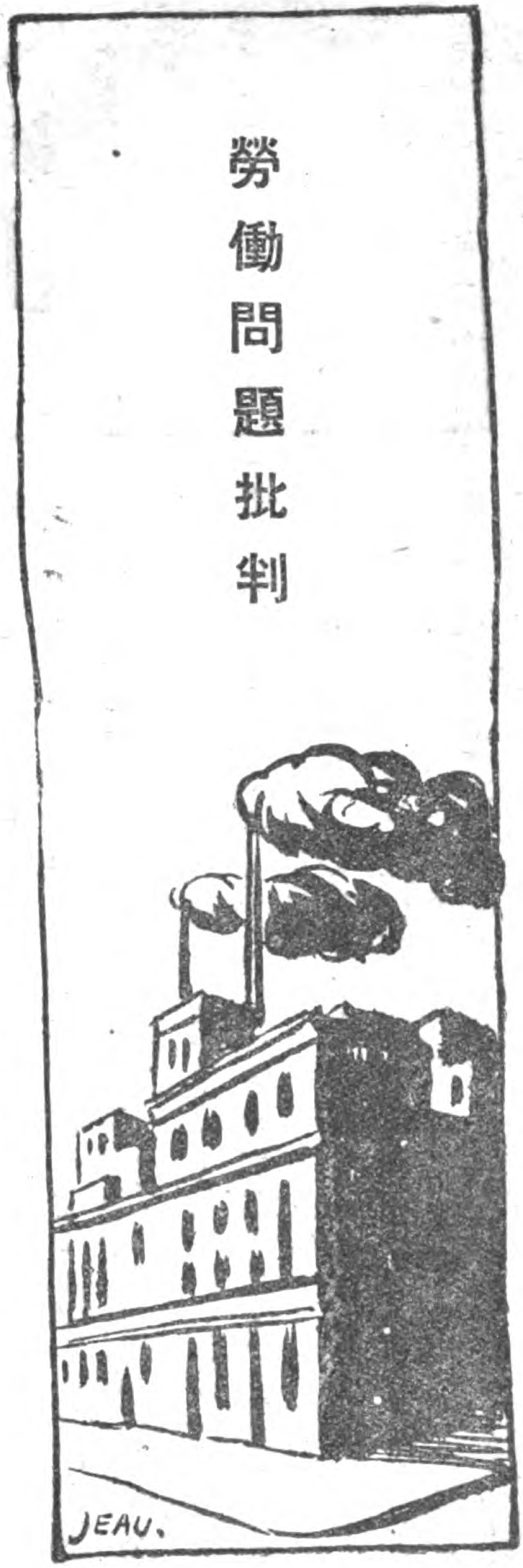
（改造七月增大號）

過激思想のその五分前

十四日、西伯利の視察をすまして歸朝した、山梨陸軍大官は、過激派は微弱なもので、論ずるに足らぬなどゝ、輕く御手柄話をされておる。成程、銃劍を以て、皇軍に抵抗するものゝみが、過激派であつたら、左様かも知れぬ。大抵の人々が、左様な觀察をして、得々と歸朝してくる、しかし、その微弱で、歯牙にかけないでもよい位の、過激派の政府は儼乎として、全露に號令して居るではないか。獨逸でも、米國でもその微弱な過激派のために席捲されて居るではないか。鐵砲玉では抵抗して來る、過激軍は掃蕩し得るが、その思想に向つては撃退が困難である。戰線で歯に立つ戰が、尠いからとて直ちに以て、過激派の微力とか、全滅とかを斷言するは、今信玄を以て稱せらるゝ、山梨將軍の言葉とも受取れぬ。

飛行機戰爭の慘狀に恐れ慄き、水雷戰の不意打に、恐れを抱いたのは、昔の夢であつた。今はもうマルクスでも追付かぬやうにすべてが大轉換して來た。電光的思想の急播で、國家てふ堅い／＼砦を、根本的にくつがへそうと、執拗い蛇の如く、附き纏つておるものが現れた。一億萬噸の超努戰艦より、百萬機の大飛行機より、敵として恐ろしいのは、その過激派である。その過激思想である。汨々大江を決しやうとする。その渦卷きが、目に見えないで、歸れる將軍は、矢張り孫呉の韜略のみを、腦中にきざめる、兜甲燦たる錦綺の將軍であつた。幾何學的に觀察のつかぬ、輓近の過激思想は、いやがる東洋にも。支那にも無遠慮に、且つ膽大に押寄せて來た。そしてトグロを卷いて、海洋の一角を、睨みつけておる巨蛇のやうに。その爛々たる眼差のもの凄いによつて、大抵のものは怯氣を出しておる。

如斯、恐るべき、險涯に立ちながら、普通選擧問題でも、資本家對無資産階級の問題でも、解決を遲滯荏苒しておるのは、平常決心と勇氣とを誇る、大和民族の所業であらうか。西へ走るか、東へ疾行すべきか、毒蛇の見舞を受けぬ前に、決心をつけて、一目散に急行せねばならぬのだ。人の心は目に見えぬ、形とならぬ前のタイムこそ、眞に勇氣を鍾むるタイムである。山雨至らんとする、五分前の靜寂は物凄いもの、經綸の士はこの境地を發見せねばならぬ。



(一) 經濟生活改造途上の一大福音

——勞働非貨物主義の公認——

法學博士　福田德三

(一)

國際聯盟に附帶する國際勞働法制に我邦が加入したことは、失態だらけの日本外交に取つては實に怪我の功名と言ふ可きものである。然るに我邦にては、人種差別撤廢の要求が容れられなければ、國際聯盟を脱退せよとまで力説する人にして、國際勞働法制に加入することに大いに反對して居る人が尠くないようである。是は自家矛盾も甚しいのである。國

内に於て、勞働者に對して文明國の通義たる合理法保護をさへ加へない國が、差別撤廢を要求するなど〻云ふは、我田引水論も甚しいのであつて、英米佛の僞善的正義人道論に引けを取らぬ不埒千萬な主張である。而して米國や濠洲に於て、日本移民が排斥せらる〻其の經濟上具體的の理由は、日本勞働者が勞働條件の要求に於て甚だ幼稚であること是れであるは、否定する能はざる事實である。若しも、日本勞働者の生活程度が高まり、其勞働條件の要求が、米濠勞働者と同一程度に進んで居るのに、彼等が日本勞働者を排斥するならば、其れは人種的僻見に基く不都合として飽迄爭ふ可きであるが、今日の日本勞働者の程度を以て、無差別待遇を求むるは、聊か無理な次第である、故に眞に人種差別の撤廢を熱望するならば、國際法制の强制を待つまでもなく、日本は自ら進んで、國際法制の認めた程度の勞働保護を實行して、而して後に、正々堂々と差別撤廢を主張す可きである。然るに、既に國際聯盟の一員となり、其の勞働法制に加盟することになつてから後も、其の除外的取扱を求むるなど〻は實に驚き入つた話である。殊に此等の主張者が雇主資本主の意向を迎合する人々によつて臆面もなく唱道せらる〻は、百鬼晝行とも云ふ可きである。前月の「太陽」や「解放」の拙文に於て早大教授服部氏の此種の議論を罵倒して置いたら、早大學生らしい人々から、脅迫的の書狀が大分舞ひ込むが、イクラ脅迫されても、予輩は、服部氏の議論を大愚論なりと斷定するを止め能はぬものである。學者なれば、局外公平の議論を立つ可し學者に誤謬や錯誤は免れないソレハ仕方がないが、或利害關係を背景として、我田引水的に立論するは、學界の神聖を汚瀆する大曲事である。服部氏は學者たる招牌をかけて實は商業會議所の爲めに德用論をやつて居るのではないかと思ふ。果して然るならば、實に甚しき曲事で、我輩は執念深く鼓を鳴らして、其の不可なるを糺さずして已む能はざるものである。而して平生敬重して措かざる 獨立自由の學府早稻田大學の神聖の爲めに實に痛歎に堪へない 次第である。早大諸君は匿名の脅迫狀を寄せるやうな卑怯をやめて、正々堂々と予輩と論戰を試むるの勇氣はないか。予

輩は何時でも交戰を辭せざるものである。

(二)

さて國際法制は其第一條に勞働を商品として取扱はずと云ふ大宣言を掲げて居る。人或は之を以て例のウヰルソン式の瞞着的修辭なりとして一笑に附するものがある。其立案者に於ては或は單なる修辭として掲げたのであつて、ウヰルソン式であるかも知れない。然し我々は、其修辭なりとも既に一度公言せられた以上は、之を責め責めて、何時かは事實上の公認たらしむる日の來る爲めに努力せねばならぬと信ずるものである。今日の世界に於て、殊に我日本に於ては、勞働は商品としても亦た殆んど最劣等の種類の取扱を受けて居る。せめて商品としての充分なる取扱を受ける丈けに進むことは、年來我々の切望する所であつた。故に今國際法制に加入したとて、商品としての取扱をせぬなどと云ふことは、殆んど一のユートピアに近い空想であることは言ふ迄もない。然しソレダカラとて、右の主義宣言を一笑に附するは當を得て居らぬと信ずる。兎に角宣言丈けでも、勞働非商品主義を公認することとなつた以上、日本の勞働問題は、全く新しい生活に立入つたもので、從つて日本の勞働政策は根本からして立て直さねばならぬ。工場法の如きも根本的大改正を急要とするは申すまでもないことである。政府に於ても多少準備に取かゝつたようであるが、民間の輿論が之を鞭韃するにあらざれば、又々骨拔き的改正に墮して仕舞ふことは、殆んど鏡にかけて見得るようである。勞働時間を八時間にすること、幼工使用を禁ずること、婦人賃銀を同質の男子賃銀と同一とすること、團結權の承認、生活賃銀の保障、婦人監督官の設置等は、今直ちに之を法律上に於て規定して、嚴重なる條件の下に於ける除外例丈けを許るす可きである。法の規定其物を國際法制以下に引下ぐることは、斷じて不都合である。今企の爲め、世界經濟生活改造の一

大福音たり、勞働者に取つて「マグナカルタ」とも云ふ可き國際勞働法制の條を左に揭げて置く

（一）勞働は單に貨物或は商品と認むべからずとする大原則

（二）被傭人幷に傭主が適法の目的の爲め結合する權利

（三）其時代及其國に於て適度の標準として承認せらるゝ所の生活標準を維持するに適當なる賃銀を被傭人に支拂ふこと

（四）一日八時間或は一週四十八時間制を以て目標とすべき勞働標準とし未だ之を採用せざる國は之を採用すること

（五）日曜日又は便宜の日に於て每週一回死滿二十四時間連續する休暇を與ふること

（六）幼年勞働を廢止すること、及び靑年勞働者の教育の繼續を許し且適度なる身體の發育を確保する規定を課すること

（七）男女とも同一價値の勞働に對し同額の報酬を受く可き原則

（八）勞働條件につき各國が其法律を以て定めたる標準を基とし適法に其國に居住する凡ゆる勞働者の經濟上公平なる待遇につき適當なる顧慮を拂ふべきこと

（九）各國は被傭者保護の法令の實施を確保する爲監督官制度を制定し其中に婦人監督官を加ふること

（三）

當面の問題として、第一に來るは第二條の團結權の認承是れである。此の規定を誠心誠意に遵守せんとならば、我治安警察法第十七條は即時に全廢せねばならぬのである。此一條を存して置いて、團結の認承などと云ふは世界を欺くものである、聯盟國の信義を破るものである。如何に溫情主義の縱斷關係のと云つて見ても、此一條ある間は駄目の事である。恐らく頑冥者流も廢止の切要を認めざるを得なくなつたらうから、近く其斷行を見るかと思ふ。若し然らざれば日本は文明國として背信の所業を敢てするとの批難を世界中から招くに相違ない。

第四條、第五條、第六條、第八條、第九條は之に準ずる規定を工場法中に設く可きである、除外や割引は一切不可である。第三條は具體的の實施には餘程の困難が伴ふ、コレは即時に實行は出來まい、併し着々として此目標に向つて進み、少くとも、最低生活賃銀を保障し得るようにせねばならぬ。第七條も即時實行は困難である、現に小學教員さへ女教員の俸給は、男教員の其れよりも遙かに低いのである。併し同じく此標準に向つて進む方針丈けは確立せねばならぬ。さて殘る所は、第一條である。是れに就て少しく論じて見よう。

（四）

勞働を單に貨物或は商品と認むべからずとする大原則を認むると云ふことは、具體的の施設として如何にすれば宜しいかは大問題である。而して今日の賃銀制度、資本組織にして存續する限り此原則の認承と云ふことは、事實に於て矛盾である。此意味に於ては、此第一條は世界永遠の平和、軍備全廢などと同樣の大空想であると罵られても辭することは出來ない。故に世人が之をウヰルソン式の修辭なりと一笑することになるのである。然しソレは物の見方にある。「單に貨物と認む可からず」と云ふ「單に」と云ふ一字が挿入せられて居るのは、大に意味のあることと思ふ。即ち今日の賃銀雇傭制度の下に於ける、勞働の雇傭は、商品としての取引たることは已むを得ない。之を根本的に顚覆しようと云ふのではない、其期する所は、單に其れ丈けに止まつて、其以上又其以外に、勞働とは畢竟するに人間の力作に外ならぬこと、從つて其力作の提供は、人間其のものに關係するものなることを忘れ又は無視せぬようにすると云ふことにあるものと思ふ。勞働が商品たること其事を否認するのではない。其は已を得ざることである、然し其れ丈けで安心、滿足して居てはならぬ、更らに一歩進めて勞働雇傭の人間的方面をも發揮せよと云ふのである。斯く解釋すれば決して空想

ではない、單なる一の作辯ではない、否勞働問題の取扱ひ方、其見方に一大福音を齎らすものである。否な世界の經濟生活改造の上に一大福音たるものである。即ち勞働の人間性 Humanity of Labour を認めて、從來の如く單に勞働の商品性 Commodity of Labour のみを視ることを已めよと云ふのである。吾輩は此第一條を斯く解釋するものである。

(五)

勞働者狀態の改善の爲には、幾多の施設が行はれた、併し何れも其商品性を過重するもので其人間性を十分に理解したとは云へない。此點に於ては、近來流行の米國テーラー氏主張にかゝる「科學的經營法」は甚しき誤謬に陷つて居る。テーラー氏は揚言して曰く勞働問題とは畢竟、賃銀と時間との問題である。賃銀を十分にやり、時間を短かくしてやりさへすれば、勞働の不安、不平はなくなると。科學的經營法は即ち如何にして勞働の能率を高め、之によつて時間の短縮賃銀の引上げを實現し得可きかを最高の問題として、幾多有効有力なる工夫を旋らすもので、其實績は實に顯著である。併し乍らコレハ勞働の人間性を彌々益々減滅するもので、其商品性を更に強くインテンシファイするものである。勞働の不平、不安は決して單に賃銀や時間のみに限られるものではない。否勞働問題の根抵は單に勞働者の貧乏に存するのではない。河上博士が「貧乏物語」を著して、社會問題の根本は貧乏に在りとの說を大に力說せられて以來、我邦では貧乏の重要に着目する人の殖へたは、誠に結構の事ではあるが、貧乏が社會問題の根本なりと思ふのは、大なる謬見である。此點に於て余は極力河上博士に反對せざるを得ぬものである。若し貧乏さへ取除けば宜しいといふのなら、テーラー式科學的經營法は大に歡迎す可きものである。然るに實際の事實として、テーラー式に依る所でも、勞働問題は決して減じて

居ない、否却つて不平の聲が高くなつて居るので、其爲めテーラー式は一時程の人氣がなくなつたは、適確なる事實であり、勞働者も雇主も之を批難するもの其本國たる米國に續出するのが今の實情である。ソレハ畢竟勞働の人間性を無視するからである。

（六）

テーラー式では、勞働の能率を高める爲に、勞働を全く器械的のものたらしめ勞働者をして、其頭を使はしめる必要を全く省くことを眼目として居る。勞働に考事は敵である。今迄の勞働が力作しつゝ、考ふることを必要として居たから、考ふること丈け無駄となり、時間も徒費する。其必要を全く取去つて、勞働者は勞働時間中一も物を考ふる、頭を使ふと云ふ必要をなくなして、一意專念力作にのみ全精神を集中せしめる。之が能率を增進するのである。成程其爲めに、能率は增進する其代り勞働者は彌々益々唯だ働くのみの動物と成り下つて仕舞つて、僅に殘つて居た人間味は全く取り去られて仕舞ふのである。コレでは人間たる勞働者は永く耐へることが出來ない、從つて不平、不安が昂じて來たのである。

（七）

一體勞働が苦痛であると云ふのは其が力作であるからではない、力作は人間の生理、心理上必要で、或程度迄の力作は人皆之を營むことが、人間生存上の根本要求である。其力作が過大になれば、過大其のものから苦痛の起るのは勿論である。併し今日の勞働の最も苦痛とする所は其れではない。外にある。何かといへば、勞働は創意が伴はぬと云ふこと是れである。雇主の命を唯々諾々として、自分は何の工夫をすることも許されず、唯だ器械的に力作に從ふと云ふ事が、人間たる勞働者に取つては、最大の苦痛であるのである。自分の頭を働かせ、物事を考へると云ふことを許されぬのが最大の苦痛である。創意の餘地なく唯執行のみをすると云ふことが最大の苦痛である。故に時間短くて力作其ものは過大で

なくとも苦痛は依然として渝らないのである。之に賃錢を多くやつて、生活に事欠かせぬは結構千萬ではあるが、其爲に勞働其ものゝ苦痛は、輕減せられないのである。貧乏を取除いても、苦痛は依然として存する。從つて不平、不安は去り得ぬのである。時間を短くして過勞を免かれしめ、賃銀を十分にして貧乏を免れしめることは、實に肝要である。併し其れ丈けでは、根本的解決は付かないのである。況んや時間を短くする爲め、賃錢を多くする爲めに、テーラー式によつて、益々勞働の人間性を破壞すれば、一方に得る所は、他方に失ふ所を却つて償はざる結果を持來たすのである。是れテーラー式に勞働者が反抗するようになつた原因である。利益分配法とても略ぼ同じである。利益分配と稱して實は留保せられたる賃銀を後拂すること其事既に甚だ疑問であるが、假りに數步を讓つて、利益分配法が宜いとしても、それは單に勞働者の收入を殖やすのであつて、而して他方利益を多く產み出す可く、或は過勞し、或は人間味を破却することを免れぬ、從つてテーラー式の場合と同じ結果に陷る。殊に利益分配法の爲めに、勞働者が其力の極度まで働く結果は、其全部が勞働者に歸着するのではない、其一部のみしか貰へぬので他の部分は資本主の利益を增大するのである。犬にパンを見せてチン〳〵をさせるようなものである。犬は一片のパンは貰へるが、其爲にチン〳〵の藝當をやらせられて、パンの授主の弄み物となるのである。三島彌吉氏の三益主義とは、能く正直に標榜したものである。勞働者の利益の爲めではない、三益主義で、資本主も懷を肥やす名案である。資本主は利益を得る斗り、其れに對する損は一もないが、勞働者は若干の利益の爲めに、益々其力作上に於て人間性を滅却せねばならぬのである。賃銀受授關係に於ては成程利益の分配に預るとて、人間らしい待遇を受けるようであるが、其勞働時間の全部をあげて、非人間的取扱を、インテンシファイするのである。資本主と云ふものは、轉んでも唯は起きない、誠に甘い事を考へ出すものであるが、勞働者こそ迷惑此上ない譯である。

(八)

國際法制第一條の眞意を吾輩の解する如くに取れば、斯く力作に當つて人間性を滅却することは、反對す可きである。勞働を商品として取扱はずと云ふことは、決して賃錢の受授の上のみに限る可きではない。否其最も重要なる適用は、勞働生活の大々部分を占むる所の力作其ものゝ上に於てゞなければならぬ。單に賃銀の支拂に人間味を増した丈けで力作作業其ものを益々非人間化して行くのは右第一條の精神に逆行する所以である。勞働非商品主義の正さに大いに歡迎す可きは、力作作業其のものを人間化 Humanize すると云ふ一點になければならぬ。強いて極端な事を云へは、時間や賃銀は元の儘でも、力作作業其ものをウント人間化することを得れば是れ眞に勞働者に取つての大幸福、大解放である。

(九)

力作作業を人間化すると云ふは、勞働者に物を考へる餘地を與ふることから始めねばならぬ。殊に創意の餘地を與へねばならぬ。インダストリアル、デモクラシーとは此事である。其れには勞働者をして經營上に參政權を得せしめねばならぬ。一工場、一經營を一の代議政治によつて運營せねばならぬ。此を名けて Democratic Control of Industry と云ふ企業の方面に干與せしめることは、今日の處實行の望甚だ乏しい、何となれば事實不可能である。株式會社の株主さへ、企業には干與せぬ、唯だ報告を聽取る丈けで、實際帳簿の檢閲はやらぬ、やり得ぬ、やつても効はない、却つて害がある、況んや勞働者に於てをや。今日の資本組織の存續する限り企業上の Democracy は、實行不可能である。商賣上のコントロールは出來ない相談である。コレハ現狀に任せる外はない。之に反し技術上、經營上、殊に實際具體的の作

業は、行はんとするならば直ぐにも Democratic Control の下に置くことは出來る。武藤山治氏の發案かと思ふが鐘紡では、作業上職工の意見を好んで採用する方針を取つて、之を奬勵して居る。之れは營業利益增進の爲めにやつて居るのであるが、之れを變じて勞働者本位とし、且つ意見を採用すると云ふに止まらず、必ず意見を陳述す可き權利と義務とあるものとし、一週一回とか、毎月一回とか、職工議會を開いて(其時間は、必ず之を勞働時間中に算入するを要す)差支ない限りは、其決議を待つて作業上一切の事項を定め、工場長は其決議實行の義務あるものとす可きである。若し Direct democracy が實行不可能なら Representative democracy としても差支ない。即ち代表議員を撰出せしめ、其議會に工場經營の主權を與ふ可きである。

(十)

然し右は歐米では、直ぐに實行出來ると思ふが、日本では中々困難であらう。ソコデ其準備(工場議會開設準備と名けて置かう)を爲す可きである。其れには色々な事もあらうが、吾輩の今考へて居る所は、次の事項である。一は日本で國會開設の下稽古として地方長官會議を開いた、其樣に、工場使用職工中、多少教育あり、見識あり、人の前で物を言ふことを憚らざるものを撰出して、時々工場以外に於て、諮問會を開くこと是である。其撰出されたものは、自分の考を立てることに勉む可く奬勵するのである。又た他時に同僚職工の意見なり思はくなりを取次ぐ責任を帶ばしむ可きである。其陳述した所は必ずしも採用すると拘束せず、併し成る可く之を尊重し、其可なるものは、ドシ／＼實行することゝするのである。

紡織工場のように女工のみ又は多數が女工である場合には、右の實行も困難であらう、併しながら奬勵、誘掖して行けば、出來ないことは決してないと信ずる。

（十一）

次には工場監督官をして、職工に接近せしむることである、監督官に對してなしたる陳述に就ては、雇主は決して職工を責めないと云ふことを工場法に嚴かに規定す可きである、此事は女工の場合には殊に必要と思ふ。現に予の乏しい經驗でも、監督官が女工からの申立によつて、工場主の不都合を發見した實例が若干ある。女工からの投書は時々監督官の許へ來るそうである。コレハ大に奬勵せねばならぬ。予の實驗中、或工場には病室の設けはあるが、ソレハ夫婦者の職工か役員の住居に宛てて女工中の病人は大病人と雖も普通の寢室に置いてあることを、其工場を巡視中一女工から聞いて發見したことがある。

（十二）

最後に予の最も力說せんと欲することは、Employment manager（人事支配人又は人事技師長）の設置之れである。今日の工場は商賣方面には、支配人あり、技術方面には、技術長、工場長があるが、人間方面には、單に雇入、解雇を司る人事係がある計りである。今日の工場は金儲け本位であるから、仕方はないと云へば夫迄であるが、金儲けの爲めに高給の支配人、金儲實行の爲めに技師長、工場長を置いて居乍ら、最も大切な人間の爲めには、殆んど何も置いて居ないのである。即ち人間を單に道具、貨物、商品と見る、否商品以下に見て居る最も有力なる證據である。尤も倉敷紡績の大原孫三郎氏の如く自ら社長であり乍ら、營業、技術には夫々部長主任を置いて居るが、人事課長は自ら之を兼て居て技術や商賣の事は人任せにして、自分は專ら男女工の生活、寄宿舍、貸屋、幼稚園、病室の設備に心を潛めて居る人も我邦にないではないが、其は寧ろ稀有な取除けである。大抵は商賣や技術の事には頭を使つて居ても、人間の方面は全く知らず、女工の寄宿舍などへは、設立以來一度も入つて見たこともないと云ふ社長や重役斗りである。彼等は男女工を以て恥

介千萬にも飯を食つたり寢たり病氣をしたりする道具だ位にしか思つて居らぬのである。同じ道具でも器械は飯も食はず、寢もせぬから、之を可愛がる。飯を食ひ病氣になるような贅澤な道具はヤクザ者位にしか考へて居らぬのである。現に或る製糸工場で予輩を案内した幹部の一人は云つて曰く「如何も工女と云ふものはイジの汚ないもので、おまけに男を欲しがると來て居ますから、コンナ厄介なものはありません」と、而して、其欲しがる男を防禦す可く殆んど鐵條網にも類する木柵は、何れの工場にも拵らへてあつて、一々鍵をかける。女工は動物園の猿の如くに其鍵をかけられた木條網の中から一歩も踏み出ることを許されないのである。斯くの如くんば監獄と相去ること幾干もなしと云つて可なりである。製糸工場の多くに於ては、繭を煮る釜の側に楊枝と歯磨（憐れなる女工は毎朝口中を掃除するものと見へる、コレ丈けでやつと彼等は人間味を發露して居るのである!!）とがブラ下げてある。何故洗面所で、顔を洗はないのかと問へは、彼女等は答へる、洗面所にはタラヒもなく冬は水がつめたい。繭の釜ならタラヒの代用にもなり、溫かい御湯がイクラでも出て來ると!! 繭はヲカイコ様と唱へて大事にする。女工は飯を食つたり、男を欲しがつたりする厄介な道具奴等である。コレデハ人間味は何處に之を求め得られよう。

予は力說せんとす、先づ人事支配人、人事技師長を置け。器械よりも原料よりも先きに人間の取扱を研究せよと。近來米國や英國では此の Employment manager を置く工場が大分ある。其始めの動機は、職工の出入頻繁なるを防ぐにあつた。其道の人々の研究した處では例へば、米國デトロイトにては職工の出入の爲めに、能率を減ずること二十五パーセントであるそうで、之を止めた爲めに二十五パーセントの能率增進を見たと云ふ。（詳くはボイト、フツシアー氏の Industrial loyalty と云ふ本を見よ）此點も我邦に於ても十分に研究す可きことであるが、Employment manager を置いて專問に調査す可きである。而して作業上に於ける人間の取扱を重大事として高給の役員をして之れを專掌せし

め、且つ各種能率と疲勞との問題を研究せしむれば、結局營業上の利益をも增し得よう。米國では Fatigue and Efficiency の問題は、近來大いに研究せられ、其結果を應用して、利益を增進すると同時に、勞働者の待遇に着々改良を施して居るものが殖へて來た。我邦でも少くとも大工場では直ちに之れに倣ふ可きである。例へば前例した大原氏の如き人は世間的の調査事業に費やす金があるなら自己の工場の一部でもいゝから、之を疲勞、能率研究の用に供し、然る可き專門家に托して、實驗、調査、研究をして、他の工場主に參考の材料を提供したならば、國に貢献し又た勞働者の利害を進むるに於て世間的に聞への宜い事業に於けるよりも更らに有効有力であらうと思ふ。其れに付けても Employment manager に其人を得なければ、我邦多數の工場長の如きを相手では何も出來る見込はない。人間と云ふことに十分に理解あり同情ある人が其處に居なければ、外部から研究者が飛込んでも、手の着けようはないことゝ思ふ。

(十三)

之を要するに國際勞働法制第一條に、勞働非商品主義を公認したことは、目前の効果は一もないであらうが、之を善用すれば經濟生活の改造に取つて一大福音となり、勞働問題の解決に有力なる貢献を爲すことゝ思ふ。我々は Humanity of Labour「勞働の人間性」てふ標語を向後は公然と高く掲げて其の爲めに奮鬪し得られる丈けでも、愉快此上ないことと思ふ。大戰爭の齎らしたものゝ內此の國際勞働法制丈けは、實にウヰルソンの言前たる「世界をして人類の住むにより善き處たらしむる」一方法である。我邦は無自覺に之に加盟したのではあるが、既に加盟した以上、其加盟をして、大いに有意義たらしめ、大いに有力有効たらしめるは、正さに我々の頭上にかゝる大事業であると信ずる。而して是れ實に、經濟生活改造途上に於ける一大福音と斷言す可きものである。(八・六・十認む)

附言。此文を「解放」及「太陽」六月號の拙文と併讀せらるれば幸甚である

(二) 八時間勞働制の確立

早稲田大學教授　安部磯雄

一　保健上の要求

八時間勞働制の問題に就ては、勞働者側と資本家側との兩面より觀察する必要があると思ふ、八時間制度の要求は久しい間勞働者側より唱へられた問題であるが、愈々其實行に入ると何等か六ケ敷い事情を纒綿して來て却々理想通りに行はれなかつたのが今日迄の實狀である、然るに先般來、米國では或鐵道組合に於て早くも八時間制度を斷行し而も每週土曜日を四時間に制限して一週間を通じ四十四時間と云ふ實例を示した、斯る例は米國でも寧ろ異數とせらるゝ處で概括すれば四十八時間乃至夫れ以上のものが尠くない、何故勞働時間を八時間に制限すべきかと謂ふに之には種々の理由がある。

勞働者側の理由として先づ第一に時間制限の基礎を爲すものは健康問題である、勞働時間の長きに失すれば失する程勞働者の健康狀態は漸次惡化し隨つて全體の勞働能率に驚く可き影響のある事を免れぬ、今日我國の工場に於ては此最も恐る可き健康問題に餘り多くの考慮を拂はぬ結果勞働者は常に健康上一種の危險を冒して働かねばならぬ、殊に婦人幼年者の勤務狀態に至つては寔に寒心す可きものがある、日本の紡績工場、生糸工場等では十二三歲より二十歲前後の工女を使役して居るが、其勞働時間は十二時間であり、紡績工場の如きは其上に猶四五時間の夜業を課する爲め長きは一日十六七時間を働くのである、此の如き長時間に涉り過當な勞働の結果として健康を害するに至るのは素より當然の事で專門家の調査に依つて見ても紡績工場生糸工場等に肺結核患者の多數なるは歷々證明され居る事實である、其肺病患者が田舍に歸ると直ちに之を一鄕一村に傳播し延いては社會の衞生狀態を破壞して害毒の及ぶ處實に測り知られぬのである、嘗つて私が長野縣の某地に赴いた時其附近の或村では村會の決議を以て村內より工女に應募する事を一切嚴禁して居るのを見た、之等は工女出稼の度每に肺病患者を逆輸

入して到底一村の衛生を保全し得ない處から病菌防遏の爲めに斯る措置を執つたもので外國にも其實例は決して乏しく無い、勞働時間の制限を健康上の必要より促さるゝは如何なる國と雖も當然起る可き問題である。

二　勞働者の地位向上より來る要求

第二は勞働者の地位の向上より來る要求である、勞働者が自己の權利を擁護し自ら地步の向上發展を圖る爲めには勞働組合を組織せねばならぬが勞働組合の成立を見たる曉には之に附隨したる種々の仕事が起つて來る、假令ば消費組合、信用組合等勞働者の生活狀態を安固ならしむる機關が設けられ之が勞働者自身の手に依つて經營さるゝ事になれは當然玆に時間の餘裕を求むる必要が生ずるのである、英國の如き消費組合の發達は定に羨望に耐えざる程で勞働者の總てが是に加入し役員又は係員等の選擧も全部加入勞働者の互選を以て行はれ恰も昔時の希臘時代に於ける集會の如く純粹のデモクラシーが實現されて居る、故に勞働者は常に之等の會合に出席せねばならぬのであるが、其集會も勿論夜分の事であつて勞働時間の長い今日の狀態では如何にするも出席の時間を得られ無い、又假りに辛じて出席する事が出來ても其間若くは夜業に渉る長時間の勞働に依つて精力の大半は消耗し盡され極度の疲勞困憊の爲めに何事をも爲す能はず其勇氣も出ない譯である、日本に於ても最近勞働組合を組織するの議が漸く行はれて來た模樣であるが、依然十時間乃至十二時間の長い勞働時間では折角組合丈けを組織して見ても所謂佛作つて魂入れずと何等の効果をも收め難いであらう。日本の勞働者は概して夜分になれば寢るのが唯一の欲である、若し日本の當事者が勞働組合を組織し發達せしむるに誠意があるならば是非共勞働時間の短縮より先に實行す可きものである。

三　勞働者精神生活の要求

第三は分業制度に伴ふ勞働者自身の修養を必要とする爲の時間の要求である、此問題は勞働者全體が總て斯く感ずるや否やは別として今日の產業組織を以てすれば其發展は勘く共分業制度の發達に俟たねばならぬのである、一例を擧げると懷中時計一個を造るにも大工場の製作順序は百十三種からの分業制度になつて居る、即ち職工一人の仕事は懷中時計百十三分の一に當り之を一日十時間乃至十二時間繰り返し每日同じ事を更らに繰

り返して居つては如何なる人間も全く機械化し無味乾燥に流れて生涯を砂漠の中に送るが如く人生の大部分は沒却されて終ふのである、然し生産の上では此分業制度を最も必要とし今日之を排斥する事の不可能なるは勿論であるが然し乍ら人間の價値は分業制度の發達に隨つて漸次滅却されて來る、玆に於て分業制度と勞働者の生活とを調和する途は勞働時間を短縮し分業に依りて享くる人生の缺陥を勞働者自ら補はねばならぬのである、私の理想を言へば八時間制限の如きは未だ〳〵手緩いので將來は四五時間程度にまで短縮するを少しも不可能とは思つて居らない、一方には機械の發明が旺んに起り之を應用して立派に生産高を增進する事が出來れば勞働時間を四五時間に短縮するも決して生産力との調和を圖り得ない譯は無いのである、若し勞働時間が理想通りに短縮さるゝとせば譬へば電車の車掌運轉手の如きも勤務の餘暇には書齋に入つて充分勉强する時間を得られるし熱心のある者は自ら畫室を設けて趣味の世界に遊ぶ事も出來る修養と趣味との兩面を人生より控除しては人間の生活は實に悲慘なるものである、先般巴里の勞働會議に於ても勞働法制九箇條の原則を決定し之を世界共通に適用さるゝ事となり早晩各國に其實行を見るに至るであらうが勞働法制の最初に規定されたものは勞働時間を八時間に制限する項目である、而も此八時間制度は勞働時間の制限としては初歩に屬するもので理想は前述の如く四五時間までに進まなければならぬ。

四　時間短縮と能率の增進

次に資本家側の勞働時間短縮に對する觀察は如何と謂ふに、之も亦事實に於ては勞働者側と利害を一致して居るのである、然るに資本家側の僻見として單に生産力を增加する事にのみ腐心せる結果成る可く勞働時間を延長すれば目的を達し得るものと思ふて居る傾向がある、日本に工場法の設けられた時十二歳以上十四歳未滿の幼年者に對しては一日十二時間以上使役するを得ずと規定された、私は之すら實に恐る可き長時間であり斯る幼年者に取つては過當な勞役であると思ふて居たのであるが資本家側は却つて此制限に不平を並べ結局政府でも十一時間以上に延長する除外例を附加して資本家の承諾を得た、之では折角幼年勞働者の時間制限を設けても實際には何にもなつて居らない、然し時間の長い事が果して生産力を增加する適當の方法なりや否やは多大の疑問を附さねばならぬ、人間の精力には自ら限りあり精力を消耗したる後に於ては如何に長時間仕事

に縛り付けて置いても成績は擧らぬのである、私の知人で或紡績會社に重要なる地位を占むる人に對して嘗つて私は斯う言ふ獻策をした事がある、即ち十二時間の勞働時間を以て一晝夜二回の更替を爲さしむるは小供の爲めに甚だ宜しくない。八時間更替として三人の小供に分擔せしむれば生産の成績に於ても工女自身の爲めにも頗る好結果を得るであらうと陳べた、然るに其人の曰く、工女一人に九時間働かした能率は僅に十二時間働かした成績と匹敵する、故に工女二人で十八時間働けば一晝夜の仕事は上るのであるが資本家は却々之を承知せず唯時間が永ければ永い丈けの効果を收め得るものと思つて居るので致し方がないと言ふ事であつた、此説には慥かに根據がある、或工場では從來十時間の制度であつたが之を九時間に改めたるに其後の實績は十時間制の時よりも更に多くの收獲を得た、之等の事實に徵して勞働時間の短縮が必ずしも生産能力に影響せざる理由を確め得ると同時に適度の短縮は却つて長時間の勞働に勝つた能率を示すに至る事を知るであらう。

五　貿易上の打擊なし

第二の理由は外國貿易の關係に於て勞働時間の短縮に反對する資本家側の誤謬である、日本の資本家は日本商品が外國品と競爭の出來るのは勞働者が低い勞銀を以て長時間從業する在來の風習を日本勞働者の特色なりと信じ今後勞働賃銀が高率に上り勞働時間が短縮さるゝ時は外國品との競爭は絕對に出來なくなるとの懸念を持つて居る、然し日本の資本家の言ふ勞働者の特色なるものに對して外國人は少しも痛痒を感じて居らない、何故ならば勞働者の賃銀が低率なる事は勢ひ生産能率に影響し特に日本品と競爭する爲めに自國の勞働賃銀を低下する必要を認めないのみならず若し低下すれば生産力は半減して多大の損失を招くに至ると謂ふに在る且つ又勞働時間を日本の如く徒らに長からしむるは勞働者の根氣を鎖磨し盡し反つて其生産能率を減退せしむる原因となり産業上由々敷き惡結果を齎すであらう、日本の斯る勞働組織の不完全なる狀態は日本自ら其産業界の將來に憂惧すべき傾向を馴致するもので之が爲めに自國が日本品より打擊を受くる事は無いと言つて居る、日本の資本家としても最低勞銀率の確定乃至八時間制限問題の如き世界一樣に實施さるゝ場合に於て日本のみ獨り之に耐えぬと云ふ理由は無い、日本の資本家側は此點に充分注意を拂つて勞働者待遇の觀念を根本的に一新しなければ外國貿易にも亦劣敗國たるを免れ

ぬのである。

六、實驗心理と時間短縮

最後に勞働時間の短縮を如何に必要とするかに就き一二實驗心理の研究の結果を陳べて見たいと思ふ、日本では兎角數でコナすと云ふ幼稚な考が付纏ふて精細に其利害得失を講究する事なく勞働時間の如きも單に永けれぱ効果ありとし動もすれば時間を全然無視して仕事を强ゆる風習があるが、人自ら其身體精力に限りあり仕事と休養との關係が如何に緊密なるかは下の實驗に依つても知らるゝのである、即ち伊太利の某大學敎授にモツソーと云ふ學者がある、此人の實驗に依れば極めて簡單な事であるが或る長さの糸の一端に錘を結び付け此糸を横木に懸けて他の一端を指先で曳く時は錘がそれに隨つて上る、之を幾回も繰り返すと指頭は漸次疲れて來て僅に十六分間で指が動かなくなつた、乃で二時間休憩した後前回の如くに試みると復十六分續くる事が出來た、即ち二時間の休養を以て完全に精力を恢復したのである、然らば若し一時間休憩する時は八分間は續く筈であると考へて實驗した處が今度は四分間で駄目になつたと云ふ事である、之等の實驗に依つて見ても何等に限らず二時間位の定まつた休養は是非必要であつて人を使役するには學術的科學的に研究も實驗心理の基礎に立つて適度の休養を與へなければならぬ、休養は實に仕事の爲めの休養であつて寧ろ仕事の一部分と見る可きものである、又英國政府では戰時中珍しい能率調査を行つた、夫は佛蘭西の戰線に於て英兵の塹壕を堀る際に試みられた事であるが、英軍は之を二個の小隊に分ちて競爭せしめた、塹壕は其長さ深さ巾等の一定して居るもので競爭するには都合がよい、割當てられた一方の士官は其一小隊を更に三分して一組は五分間全力を盡して之に從事し他の一組と交替するといふ趣向にした、即ち一組は五分働いて十分休憩するのである、然るに一方の小隊の初めより全部仕事に取懸つて休息なしに働いた、其結果は云ふ迄もなく前者の勝利に歸したのである、吾々が仕事の完成を急ぐ爲めに其手段を誤つて遮二無二働くのは少しも効果の無い事が之に依つて證明せられる、勞働時間の制限を直ちに實行せねばならぬ理由は右の實驗に徴して明かであらう、若し時間を適度に減少すれば生産力は却つて増大するとも決して減少される憂ひはない。

七　資本家より解放せよ

吾々の働くのは人間としての發達を遂ぐる手段であつて勞働其物が人生の目的では無い、昔希臘時代の學者抔は奴隷が學者貴族等の生活を造つて呉れぬならば希臘は進化せぬと考へて奴隷の必要を說いて居た、今日は所謂其奴隷なる者は現存しないが事實は昔の希臘時代に於ける奴隷と等しく少數の者が勉强し道樂する爲めに多數の者が働いて居る、勞働者は資本家の生活の爲めに犧牲となつて居るといふ有樣である、斯る遣り方は人と間しての價値を全く滅却するものであつて、譬へ生產力に多少の減退を見るものと假定しても社會組織の根本的改革の上に之を改めて往く事は頗る大切な問題である、勞働時間の制限は單純なる生產上の利害問題のみでなく人間生活の廣義な解釋よりも極めて重大であり殊に八時間限度と云ふが如き比較的實行の容易なる制限は成る可く速かに實施して廣く產業狀態の改善を期せなければならぬ。

社會政策乎社會主義乎（三）

法學博士　河津　暹

一

我國論壇に於て勞働問題の論ぜらるゝこと今日程喧しきことはあるまい、曾て工場法の制定が議會の問題となつた時には一方には資本家側からは盛んに其の法案の不備を指摘して之を葬り去らんと試みたのに對し、一方には工場法の制定を以て我經濟社會の爲には當然なさゞる可らずと信ずる論者は筆に舌に其の意見を發表して輿論を動かさんと試みたのであるがこの重大なる社會政策的施設に關する論議も實は社會一部の論議たるに止つて、我國社會一般は之に共鳴して注意することはなかつたようである、同問題の解決如何に由りては自己の生活に大なる影響のあるべき勞働者階級すら、鎭守樣の祭禮の相談ほどに力瘤を入れなかつたようである。其他勞働問題が時事問題として顯はれた機會は決して一再にして止らなかつたのであるが、社會一般からは注意を引かなかつたようである。然るに今日は如何である、數名の友人が集れば勞働問題は必ず其話頭に上ると

いふも決して誇張の言で・ない、從て新聞雜誌も毎日この種の記事を掲載せざることなきに至つたのである。而して今から十年前には「社會主義」は勿論「社會政策」の如き文字を口にするを憚つた社會が今日では此等の文字を口にして何等疑を抱かぬようになつたのは今更ながら社會思潮の變化の激烈なるを驚かざるを得ぬ。十年前勞働問題を論じて稍根本的、過激的に亘つたものに對して少からず壓迫を加へたとは社會が此等の問題に對して殆んど知識を有しなかつたが爲であつて文明國民として汗顏の至りではあるが、翻つて十年經つての今日、縱令、歐洲戰亂の結果、歐米諸國の社會事情に多少知識を得、多少の刺激を受けたとはいへ、我國民の多數は果して此等の問題を咀嚼することが出來るまでの域に達したのであらうか、失禮ながら私は尙この點に疑を抱くものである。我國民の多數が尙これ等の問題を了解し、咀嚼し、正論と邪論とを識別し、更に縱令其の論が理論として正しいものであるにもしろ、假に之を我國に應用することが出來るや否やにつき鑑別する丈の能力がないとすると、此等の問題を論議する學者先覺者が其の意見を公にし社會民衆を指導するに當つては特に細心の注意をなさねばならぬと信ずる。此等の問題が世間の注意を引くに乘じ、奇矯なる文字を駢ね、豪快なる言辭を弄んで、民衆の歡呼を買はんとするが如きはこの際大に愼まねばならぬことである、世に曲學阿世は學者として最も恥づべきことといふ、學者が特權階級の利益の爲に學問の命ずる所に背きて堅白の辯を立つるが如きは其罪輕からざれども之と同時に凡俗の歡呼を得るが爲に其の良心に背いた言論をなすことも其罪決して輕くはないと信ずる。

予輩は敢て世に公にせらるゝ勞働問題に關する論説意見を指して悉く世に阿ねるものであると斷言するものではないが、其の論説意見の一部分はこの種のものであるといひ度いのである凡俗の歡呼に迎合するといふのは論者の心事を忖度することであるから、具體的に論者並に論文の名辭を掲げて之を追窮することは假になすことを憚らねばならぬことであるが、少くとも上に陳べた社會民衆を指導するに當つてなさねばならぬ注意を缺いてゐるものが少くないといふを憚らぬ。論者が如何なる動機から其の説を立つるかは予輩の關知することではないが、其の論が動もすれば社會民衆に危害を及す虞があるから特にこゝに之を排斥するのである。それも社會民衆の多數が十分に正邪を識別する丈の見識素養があるのなら敢てかゝる憂を抱く必要もないのであるが、社會民衆の多數が其れ丈の見識素養がない

とすると、か丶る憂を抱かざるを得ぬ次第である。其れも社會民衆が正邪曲直を十分に識別する丈の見識素養がないにしろ、論者の説明が平明にして解し易いものであつたなら、常識に訴えても、少くとも或程度までは論者の意見に對して取捨をすることが出來ると信ずるけれども、此頃公にせらる丶勞働問題に關する意見は動もすれば平明なる説明を避けて、故らに難解の哲學的文學を用ひて讀者を煙に卷くものがある。予輩の如く讀書を職業とするものにとりては朧氣ながらも論者の趣旨とする所を捕捉することが出來ると信ずるけれども、社會民衆の多數は恐くは予輩の如く咀嚼する丈の餘裕はないから、論者の片言隻語によりて論旨を判斷し、之を正しいものとなし、或は之れに由りて其の思想を造らんとするものがないとも限らぬ。これが甚だ危險なのである。警察官等が創作や。脚本などの寸言尺語を捕えて之を以て風俗を破るとか道徳を傷くるとかいつて、非常識の取締を行ひ識者等から非難を被ること稀ではないが、寸言尺語に由つて全般を推斷し、之を是非するの危險は獨り警察官のみの陷るべきものではない、社會民衆も共に陷り易い誤謬である。警察官等の陷りたる誤謬は其の効果が直接に顯はる丶丈、識者等からの批判を受くることが出來るのであるが、社會民衆の陷りたる誤解は容易に之を訂正することが出來ないから其の結果は社會の思想を腐敗せしめ、破壞せしめ容易ならざることに立到るのである。予輩が中外新論六月號に勞働問題を論じて社會民衆に敎へんとするものは難解の哲學論は避けて平明な説明をしなければならぬとの愚見を披陳したのも畢竟社會民衆をして誤解せしむるの危險を虞れたからである。

二

近頃勞働問題を論ずるものは動もすれば社會主義若くは之に類似の論旨を鼓吹するのである。歐米諸國は今次の大戰亂に促されて社會組織の根柢から改造するのであるから、我國も亦社會組織の根柢から改造しなければならぬ、現今の經濟組織は私有財產制度の基礎の上に築かれたものであるから、今日見る如き富の分配が不公平を來すのである、故にマルクス等の唱へた社會主義の根本精神に由つて私有財產を根柢から破壞しなければならぬ、其は今日は當に其時であると敎ふるのである。現今の社會に於て所得額に甚しき懸隔があり、從て富有なるもの益々富み、而かもこれ等の富有者は其の富を善用するの道を知らず、徒らに奢侈なる生活を營み、不健全なる消費行爲をなして恥づ

ることなきに反し、社會生活の落伍者、不幸なる運命に陷れるものは衣食にすら窮するの狀態は世相を觀ずるもの丶直ちに心つかねばならぬ所であつて、何人と雖もこれが健全なる社會狀態であるといふものはあるまい、故に識者はこれ等の社會狀態を矯正せんとするのは當然のことであつて予輩も之に對して異議を挾むものではない。世の中には今日富裕となつたものは決して初から富裕者であつたのではない、同じく貧乏村の住民であつたのであつたが世の多くのものが心なき生活を行ふに當り身を挺して、千辛萬苦、或は死生の巷に彷徨し、或はいふにいはれぬ惡戰苦鬪を行ひ辛うじて築き上げたる富である、其れを富有者を惡魔の如く呪ふのは殘酷であるといふものがある。其れは或る程度までは眞理であらうが、決して全部眞理といふことは出來ない、これ等富有者も衷心から其の造り上げた富其物は自己の力量才幹のみに出つたものであるとは信じてゐまい、僥倖といはうか、運命といはうか、兎に角社會の力に由りてなされたものであることは承認してゐるのであらう、其れがないにしても、力量才幹が光を放つことが出來たのは資本其物が與つて力があることは承認する所であらう。資本其物が偉力を顯はすのは社會組織其物の賜でなければならぬ。社會主義者等の主張が誤つてゐるにもせよ、社會組織の根柢を攻擊するのは其の所であることは承認するであらう。假りにこれ等の富有者は貧乏村から身を起して今日あるを致したのは悉く其の力量才幹に由るものであるとした所で、其の子孫が力量才幹もないのに其の資本力を繼承して社會上層に蟠踞することが正しいものであるといふことは出來まい、其れも、自分獨りで事業を營み、生產を行ひ、販路を擴張するのなら兎に角、其のとは到底出來るものではないのであつて、多くの同胞の力を藉らねばならないことである以上、これ等援助をしたものが衣食にすら窮してゐるのに自分計りが金殿玉樓の裡に生活し酒池肉林の樂を享受することは決して正しきことでないことは富有者と雖も少しく心あるものは氣付かねばならぬ事柄でなければならぬ。故に、世の中で資本主義一點張りの議論をなすものがないではないが其の論旨が甚だ薄弱であつて殆んど採るに足らぬものである。而かも此種の意見も間々見受けるのは世の中で餘りに勞働者本位の議論が勢を逞くして資本家企業家の如きは社會に存在する必要がないかの如くにいはれるから、之に對抗して上に陳べたやうな主張が出るのであらう。予輩は今日の經濟社會に於て資本主義的議論が相當の地步を維持し得るとは信ずることは出來

ぬ。若し今日の富の分配、所得の形成が公平でないといふ事實を承認する以上はこの結論に到達するのは多くを論ずる必要はあるまい。

三

予輩は今日の經濟社會では勞働問題の解決としては社會主義若くは之に類似の主義に出るか、それとも社會政策、若くは社會改良主義に出るか二者其の一に出でざるものと信ずる、從つてこれからは社會主義が勝を制するか、それとも社會政策が勝を制するかであると信ずる、言葉を換へていへば勞働問題の解決は現今經濟社會の基礎である私有財產制度を破壞する迄行かねば目的を達することが出來ないか、其れとも私有財產制度を破壞しなくとも自ら解決することが出來るかである。

一成程、現代の富の分配宜しきを得ないのは根柢に於ては私有財產制が經濟社會の基礎をなしてゐるからであるから私有財產制を破壞したならば資本の魔力を消滅することが出來るであらうといふ想像が起らぬものでもない、然し乍ら、一方からいへば資本の魔力があればこそ、我々が生活をなすに必要な資料の生產が出來、經濟の發展を庶幾することが出來るのである、所で資本の魔力は之を否認することは出來ないが、其の魔力は何も個人の手にある必要はないのであつて社會の共有であつても差支はないではないかの議論も起り得ると信ずる。然し社會のみが資本の魔力を手にすることが出來て、個人は其の魔力の餘光にのみ與ることが出來るのみであるとすると、實は其の魔力を十分に働かすことが出來ないのである、言葉を換へていへば資本といふ魔力は個人の手にあつて初めて十分なる働をなすことが出來るものである。我々が如何に苦んでも僅に我々の生活を安泰に營むことが出來るに過ぎないものとすれば、我々は甚大な刺激を受けないのであるが、我々は安泰に生活を營むことが出來るに止まらずして、子々孫々安泰に生活を營むことが出來るのみではない、更に社會上に優勝な位置を占むることが出來るとすると甚大な刺激を受くるのである。資本の魔力が十分に働をするのは、かくの如き刺激に本きて活動する個人の手に存する場合なのである、そうして見れば、經濟生活の向上の如きは我々生活の標的ではないといふ人生觀からいへば問題にならぬが、苟も經濟生活の向上が我等の生活にとりて輕視す可らざることであるとすると、こゝに矛盾に逢着せざるを得ないのである。即ち、生產を多くし、我々の經濟生活をよくするには

私有財產制を認め、少くとも或る程度までは資本主義の活躍を承認せざるを得ないが、そうすれば資本の魔力が個人の手に存する限り少くとも或程度までは富の分配、所得の形成が公平を失するに至ることを覺悟せざることを得ぬ、富の分配、所得の形成の公平を得せしめようとすると、生產を多くし、經濟の發展を庶幾することが困難とならざるを得ぬ。是れが正直にいふと社會主義若くは之と類似の主義を實行するに困難である一大障害である。それならば社會主義者等は私有財產制を破壞した所で之に代はるべき新しい、而かも社會の發達に有效な、健全な社會組織の基礎を我等に敎へてゐるかといへば悲しい哉今日まで之を敎へて居らぬ、して見れば社會主義者、若くは之と類似の主義を奉ずるものは今日までの所現今の經濟社會組織の缺乏を指摘し、之を攻擊し、從て經濟社會組織の基礎を破壞すべきことを敎へたのみであつて、其れ以上には出てゝ居らぬと信ずる。現に近頃我國論壇に顯はれた勞働問題に關する論說、意見の中で社會主義に由るもの若くは其の傾向あるものは、文章なり言ひ廻しなりは甚だ巧妙であつても畢竟現今の經濟社會組織の基礎を破壞すべきことを敎ふるに止つて其以上には出でてゐぬようである。サンヂカリズムを唱ふるものなどは、現今の經濟社會組織が宜しくないといふならば之を破壞しさへすれば、之が爲に或る社會組織を產れ出ださすことが出來るであらう而かもこの社會組織は縱令理想的でないまでも、今日の經濟社會組織よりは多少善いものであらう、故に新しく產れ出づべき經濟社會組織が如何なるものであるかは特に之を顧慮する必要はあるまい、我々は缺點多い現今の經濟社會組織を破壞すれば其れで宜しいのであると主張してゐるが、隨分心細い話ではないか、この世で添ふことが出來ぬ若い戀人が未來は一蓮托生といつて出來ることやら、出來ぬことやら明でないことを賴みに、あえない最後を遂げようとするのと或程度まで似てゐるではないか、側面から觀れば未來に對する憧憬といふよりは寧ろ現在に對する失望といふものではないか、我々はかくまでしなければ、現今の經濟社會の缺點を矯正することが出來ないのであるか、かくまでしなければ勞働問題の解決をなすことが出來ないのであるか、否問題の解決といふよりは其問題の解決は殆んど絕望であるといふのであるか、予輩はこれ等の論者の論調の豪宕であるよりも寧ろ凄愴であるを見て少からず疑を抱くものである。

予輩は勞働問題の解決にかくまで悲觀的態度を採る必要はな

いと信ずる。歐米諸國については予輩は之を論ずる丈の材料を有しないが、我國では幸か不幸か社會政策的施設に氣がついて之を初めだしてから未だ數年にしかならぬ、學者等が工場法の制定の必要を唱へ出したのは餘程前のことであるが、資本家側からの反對があつて永い間實行することが出來なかつた、實行することになつても歐米諸國の工場法と比較して見ると甚だ不完全のものである、其點は甚だ遺憾であるが一面から見ると改善の餘地が多いともいへる、工場法にして既に然り、其他の社會政策的施設に至つては未だに見るべきものが少い、社會政策的施設が未だ見るべきものが少いのは甚だ遺憾ではあるが之を試むべき餘地が甚だ多いともいへるのであるから、政府も、資本家側も、思潮の變遷に注意して、社會政策的施設を實行し、若くは實行することを助けて國民の經濟生活をして安定せしむることに努力して貰ひたい、我々國民は先づ之を要求するのが穩當であり、順序でなければならぬ。これ等の要求もせずに、又其の要求に耳を藉すか藉さぬかにも注意せずに、外國に於ける過激にして、實行することも出來ず、實行することが出來たにしろ之れが我國經濟社會に——若くは我國勞働者階級に幸福を來すことが出來るや否やも甚だ不明である論議に奔ることが得策であるとは考へることが出來ない。或は予輩の意見を以て微溫的であり、姑息であると非難するものがあるかも知れぬが、予輩はこれ等の非難は甘んじて受ける。今日の我國經濟社會は微溫的であるかも知れぬが姑息的でもあるかも知れぬが、一向試みられてゐない社會政策的施設を着々として實行すべき時期であると信ずる。予輩の想像する所では朝野の人士が社會政策の精神を尊重し之に本いて經濟社會の缺欠を補ひ、一種の社會改造を行ふことが出來たならば、國民生活の安定は之を庶幾することが出來るであらうと信ずるのである。

四

社會政策とは一言にしていへば現今の經濟組織の基礎である私有財産制度を其の儘にして置くが企業家、資本家をして自由に行動することを許さない、勞働者の意思人格を尊重して之をして其國の文化に應ずる丈の生活は之をなさしむるは勿論、精神的、肉體的の發達をなさしむることが出來るように施設を行ふことをいふのである。この點から考へて見ても我國の制度の中で改正を要すべきものは多々あると信ずるから識者は徒らに哲學的論理的の遊戲三昧に身をやつすことなく、須く實行的な

實生活的な方面に力を注がれんことを國民の一員として要求せざるを得ぬ。

社會政策は決して死文ではない、之を口にし、之を筆にした所で、之が爲に國民生活の不安定は取除かれるものではない。之を實行しなければならぬ。國民に對して社會政策を施して遣るぞといつた所で、國民の衣食住は之れが爲によくなるものではない、生活の安定を得やうとするのが彼等にとりては焦眉の急である、其の急を救ふことをせずして、氣休めの辭をいつた所で、何んの甲斐がある、氣休めの辭を聞いた丈其丈期待する念が多くなつたのであるから、之を待つこと久しきに拘らず、其の期待が實現せられなかつたなれば其れこそ過激な思想に奔る結果になることは明白でなければならぬ。期待が大であれば益々其の失望は大でなければならぬ、希望が大きければそれ丈反動が大くなければならぬ。今日の勞働問題は眞劍の問題である、眞面目の問題である、從つて之に對應するものも亦眞劍でなければならぬ、眞面目でなければならぬ、氣休めでは効がない、實行で行かねばならぬ、此理由に由り予輩は社會政策的施設の着々として實行せられんことを希望して已まないのである。

正直にいふと今日我國の勞働問題の論議の盛んなのは勞働者階級が資本家階級に對して發する絶叫といふよりは寧勞働者階級に對して同情を有する學者識者の警告であるといふ方が當つてゐると思ふ、是等の論者の意見が全部正しくないまでも勞働者階級のいはんと欲する所に一致するものがあるから、相當に反響を生じてゐる譯である。其れはそうとして歐米諸國に行はれてゐる過激な議論、文字を以て或程度までは煽動的態度を採つてゐるものもあるようであるから、其の意見が正しくないにしろ、簡短であるが爲に、若くは其議論は簡短にないにしろ之を簡短なるものと誤解するが爲に勞働者階級が其の煽動的文字に刺激せられて、其のことの自己の幸福を增進するものであるかを辨へずして、過激な思想を抱き過激な行動に奔るものがないとも限らぬ、故にこの際世の先覺者は社會政策的施設に由りて之れが機先を制しないと、遂に測るべからざる結果を見ないとも限らぬのである。要するに予輩の見る所では我國勞働問題の將來は一に係りて社會政策的施設が先手を打つて社會主義的思想の瀰漫を防止することが出來るか、出來ないかにありといひ得る。從つて一方には政府其他が着々として社會政策的施設を實行することを要望すると同時に、勞働問題を論ずるものは我國經濟社會の狀態に細心の注意を拂ひて徒らに過激的思想の

彌蔓を助長しないことを呉々も希望せざるを得ぬ。

（四）勞働運動を何れに導くべきか

法學博士　河田嗣郎

勞働運動は勞働者の地位の向上、境遇の改善、勞働者階級の解放等を目的とするものであるが、其の目的は又、現制度を認めて行はれる可きものと、現制度を根本的に改造せなければならないものとの二通りに分れて現はれて來る。現制度を認めて行かうと云ふ分は之れまでの實際運動としては英吉利式の職工組合運動の如きものが最も有力なるもので、現制度を根本的に改造しやうとする運動は必竟ずるに社會主義運動に他ならず、經濟的運動としても現はるゝが又とかく政治的運動として行はるるものである。獨逸の社會運動や、佛蘭西、伊太利其の他のサンヂカリズムや、或は英吉利の新らしい組合運動や、其の他亞米利加のI.W.W.の運動の如きは就中著明なものである。右兩者は何れも同じ勞働運動ではあるが根本的に現制度を肯定すると否定するとの相違があれば、隨分行き方が違つて居る。

吾が國の現在の勞働運動と云ふのは徒らに聲ばかりで有て未だ多く實際の勞働運動が覿面の大事實として行はれては居ない然し乍ら近き將來に必ず起つて來なければならぬ勢があり、而して其の勢が漸次強くなるのは疑ふ可くもない。其れを如何に導くか、又如何なる方法を採て進むか、其れは豫め定め難く、實際的に運動を起した上で自ら定まる他ないのである。然し何れの國に於ても、勞働運動の幼稚な時期に於ては、勞働者自身の自覺が充分ならず、自ら運動を起す力の足らぬのが例であるから、斯かる時期に際しては大概は知識階級、言ひ換ふれば有識無産階級の人々が其の運動に携はり是れが先達となつて勞働者を指導し、彼等をして運動の端緒を得せしむるのが例である吾が國の現狀に於ても勞働運動の指導者たる任務は矢張り有識無産階級の人々（是は廣い意味に於て勞働者と云へぬ事はないけれども、現今勞働者と云へば肉體勞働者を意味するが例なれば其意味に於ては勞働者ではない）の任務とならざるを得ない。

是等の人々は元來有識者なれば、歐米諸國の事情も、吾が國の經濟實際狀態も、我國勞働者の實際狀態も解つて居る筈である。從つて是等の人々がいま勞働運動指導の任に當るとならば、大體に於て吾國の勞働運動を如何なる方面に進めるかに關する見當だけはつけて掛らねばならぬ筈である。而して又政府當局者の如きも只徒らに愛へたり又徒らに研究に口を藉りて日を過す可きではない。大體の見當だけは早くつけて、自ら進んで勞働運動の方針の決定に與からねばならぬ。

然らば我が國の勞働運動は將來如何に指導すれば善いかと考ふるに、先づ穩健な考としては、英吉利式に職工組合運動（トレード、ユニオニズム）として現はれて來るのが善からふと思ふ。尤も英吉利式職工組合運動と云へども、何時迄も現制度を肯定して變らぬと云ふものに非ず、現に近時の傾向としては其運動が漸次社會改造の運動に向はんとするやうで有て、廣き意味に於ける社會主義運動となるのは免れ得ない處であらうから、我が國の勞働運動も未來永劫に現制度肯定の態度を取り改めない譯には行かぬので、早晩又矢張り社會主義的運動と化して來ない譯にはゆかない事と信じられる。然し其れは稍後の事で今差し當つての運動としては職工組合運動として健實なる發達を遂ぐるを必要とする。先づ職工組合運動として勞働者の間に堅固なる自助的なる多數の組合が組織され、勞働契約上有利の地位を占め、勞働者一般の地位が高められ、境遇が改善せられ、同時に勞働者の社會的自覺と訓練とが出來上つたならば、其れを基礎として更に進んで更に善美なる狀態に向つて社會及び經濟の制度を改善し改造し行く事が餘程有望となつて來、又有效に行はれ得べき筈である。だから差當ての問題としては、此堅實なる基礎を作るのが必要であらう。政府も一般社會も此の目的の爲めに全力を注がなければならぬ。若し此の堅實なる基礎を築き上ぐる事を忘れて輕擧妄動に出づる運動は兎角破壞的になり易く、革命的傾向を迎へ易く、勞働組合が出來たとしても、其れは佛蘭西式なサンヂカー風のものになる恐れがある。若し吾が國の現狀の如く勞働者も一般民衆も社會的自覺を缺き訓練を缺いで居る際に、勞働運動が斯かる傾向に向つて表はれて來れば、其結果は或は露國の現狀見たいにならないとも限らぬ。破壞は行はるゝと雖も建設は容易に行はれず、社會を擧げて大慘劇を演ぜなければならない事になるかも知れぬ。充分なる建設の見込あり、將來更に善美なる社會組織の作り上げらるゝ見込みありて一時的なる慘劇が行はれる分ならば、將來に於ける大なる利益の爲めに一時

の利益を犠牲にすると云ふ意味にて忍ぶ事が出來るが、建設の見込みなき破壞は只の破壞で有て、其れは決して勞働運動其他一般に社會主義運動の本旨とする處ではない。是に對しては社會一般が協心同力して之を避くるに努めなければならぬ。是は吾々社會生活をなす者の共同の責任である。

扨て官民一般の努力、殊に勞働者の自助に依て近き將來に我國に堅實なる勞働組合が出來上つたとして、尙ほ遠き將來の問題に就て考ふれば、前にも之を述べた如く、其は矢張り社會主義的運動として更に進んで行かなければならないであらう。社會問題一般の解決方法としては矢張り社會改造の大任務が殘る譯だから、是に關しては如何に進む可きかを今から豫想して見るも面白いかも知れぬ。社會組織の根本改造に關しては人も知る如く種々な見解や色々な主義が行はれて居るが、之も吾が國諸般の事情と吾が國民の性情とに照して考へて見る時には、我が國に於て受け容れらるべき主義又は實現せられ得べき社會改造のプログラムは、何れにしても國家主義的色彩を帶びたものでなければならぬと思はれる。國家的色彩を帶びたものと云へば、先づ國家社會主義か或は國家的組合社會主義でなければならぬのであるが、此の兩者は可成り行き方が違ふのである。卽ち前者は主として消費的利益の爲めに生產及び分配の國家的統一、國家的直營等の組織を實現せしめんとするものなるに反して、後者は餘りに消費者利益の偏重に陷るを避け矢張り生產者の利益を顧る生產者の團結たる組合制度を基礎として其の上に產業の國家的統一を行はんとするものである。尙ほ又前者は一般的に其思想が餘りに唯物的に傾て、社會主義發生期以來養はれマルクスに依て完成せられたる唯物的社會觀（或は唯物的歷史觀）を根據として立ちたるものであつて、社會改造の事業、將來に於ける社會全般の生活の幸福を齎す可き事業は主として社會に於ける有形的なる諸制度の改造に依て之を行はんとするものである。然るに後者たる組合社會主義は此の唯物的見解に慊らずして、社會改造は制度の改造と同時に人心の改造を行はねばならない、總て社會生活上の諸現象と云はず、一般的に宇宙の現象は精神の働の表現たるに過ぎぬと云ふ唯心的思想に據つて立つて居るもので有るから、社會の改造を行ふに當つては先づ以て人心の改造を行ひ、現時に於ける極端なる物質尊重主義從て生ずる拜金熱、營利心、排他主義等を撲滅して、之に代ふるに宗教、哲學、美術と云ふが如きものに對する憧憬、共助相

互主義の生活と云ふが如きを以てせんとするのである。而して此の精神的改造と相俟つて產業制度の改革としては、中世の組合制度を復活し勞働者が自ら主となりて生產を營み、而も其の生產は必要の爲めにする生產にして金儲けの爲めの生產ではないと云ふ組織を作り出さんと企つるものである。

此の國家社會主義と國家的組合社會主義とは右申す如く根本の考を異にするもので、英吉利に於ても兩者は可成り烈しい論爭をして居るのである。而して此兩者が吾國の事情に當て嵌めて何れがよく我國に適するか、從て將來の社會改良のプログラムとして何れが取らる可きかは、俄に判斷し難き事なるも、若し兩者の中間を行き兩者よりして適當なる處を吸收して、よく我國の實情に適した一個の主義が作り上げられ、一個の學說の系統が出來、一個の纏つた實地政策上のプログラムが出來上る事ともなつたなら餘程面白からうと思はれる。私は今此點に就て頻りと頭腦を惱まして居る所である。從て是等に關する考の纏た時には又世間に問ふて見たいとも思つて居る。社會一般に於ても斯ふ云つたやうな考に於て、差當つての勞働運動と併せて又將來の社會改造の大方針に就て考て見る事を希望せざるを得ないのである。

何れにしても社會改造の事業は一朝一夕にして革命的に行はるべきものではないので行て、よし革命が行はるゝとしても其の行はるゝ爲めには基礎を必要とし、然かも其の基礎が我國に於て今最も缺けて居るのであるから、何は扨て置き此の基礎を作るのが當今の急務で有る。而して其の基礎は實に堅實なる勞働組合運動に於て提供せられなければならぬと信ずる、將來の事は其の基礎の出來るに連れて着々と考へて行き度いものである。

(五) 跛的勞働問題に就いて

阿部次郎

改造記者足下

御提出の問題に就いては私は全然門外漢であります。此場合

に適用せらる可き道德原理に就いては、因より多少の信念を持つてゐるに相違ありませんが、殘念なことには、私にはこの問題の事實に關する徹底した知識が——と云ふよりは寧ろ大體上の智識さへ——缺けてゐます。私は唯自分達の住む社會の上に掛つてゐる一大暗雲として、不安と焦慮とを以てこの問題を懸念してゐるもの、此問題の小學生として識者の徹底した高教を待つてゐるものに過ぎません。今貴下の御命令によつて愚見を申上るのは、要するに小學生の質問書に過ぎないのです。

第一に勞働問題は單純な經濟問題ではないと思ひます。若しこれを單純な經濟問題として見れば、現在餘計に困つてゐるのは工場勞働者よりも地方の小農ではないでせうか。いくら米が高くとも小農よりは所謂「勞働者」の方が樂ではないでせうか。固より工場勞働者には失業や怪我等の危險が多く、此等の點に於いて特別の顧慮を要することは云ふまでもありませんが、全體の收入が少いことに就いては工場勞働者よりも寧ろ小農の爲に心配してやる必要があるのではないでせうか。それにも拘らず工場勞働者の事が現在勞働問題の中心となつてゐるのは、彼等が人格上道德上保健上特殊の危險に晒されてゐるからでなければならないと思ひます。勞働時間工場設備救護保險制度に關する要求は彼等が人格としての要求であつて經濟的物件としての要求ではありません。さうしてこの要求は苟も彼等を人格として認める以上は、其國狀に應じて必ず充さなければならぬ要求であります。彼等が自覺して要求しないならば國家が自ら進んで與へてやらなければならない權利であります。此方面の缺陷の救濟をも勞働者自身が進んで要求するまで放任すると云つたり、資本家の「溫情」に待つと云つたりするのは胡魔化しであります。此意味に於いて勞働者を保護するは私娼を征伐したり傳染病を豫防したりすると同樣に、國民の保健上敎育上の必要であります。これは決して資本家の任意な、要するに打算的な「溫情」に任せて置ける問題ではありません。國家は無自覺な勞働者に代つて資本家を强制する義務があると思ひます。

殊に貴下の先刻の御話のやうに、日本の勞働者の六十パーセント以上は女であるとすれば、この問題は女性に關する特別の顧慮を以て考究しなければならぬ問題であります。先日信州に旅行した友人の話によれば、同地方の製絲工場の工女は「熱情主義」によつて——色事專門の男工との肉體的關係によつて——繋ぎとめられてゐるのが多いといふことでしたが、此の如きは資本主義、生産第一主義の弊害として實に憤慨に堪えないと

ころであります。而も彼等は不攝生な自墮落な工場生活の結果として大抵不姙症に陷り、身心の荒廢は女郎に賣られたものよりも甚しいといふではありませんか。これはどうしても此儘にしては置けない問題であります。これは生産費の膨脹物價の騰貴を賭しても改善しなければならない問題であります。さうして資本家に自己犧牲の精神があり、政府に徹底した財政々策があれば、如何に勞働者の人格的待遇を向上せしむるも、物價騰貴を或程度で喰留めることが出來る筈だと思ひます。私は現今の工場法が、國民の道德上保健上の見地から一日も早く徹底的改正を見ることを希望してやみません。

　併し勞働問題は固より經濟問題でもあるには違ひありません併し經濟問題として見ても、それは一つの產業に協力する資本家と勞働者との利益分配問題ではすまないと思ひます。今假にこの方面の分配は公平に行はれるとします。國家の特殊な保護を受けつゝその重役に半期で十何萬圓とかの分配をしたとか云ふ日本郵船會社の如き會社が、世間體を憚つてその從業員の全體に殆んど平等の分配をするとします。さうすれば社內の不平はなくなるでせうが他の勞働者との不平均は依然として存續します。又凡ての工場勞働者が公平な分配を受けるにしても彼等に――此等の小成金に――五十錢以下の米を食はせなければならぬ小農は益々物價騰貴の爲に泣かなければなりません。勞働問題は、經濟問題として見れば、資本階級の全體と勞働階級の全體との間の分配問題であります。さうしてこの場合には、勞働階級の中堅をなすものが小農であることを特記しなければなりません。私は我が愛する小農のために力を籠めてこの事を云つて置きたいと思ひます。そうして道德上此等の小農はあらゆる勞働者中最も優秀な人達であります。日本や露西亞のやうな國柄では、小農の問題を閑却して勞働問題が解ける譯がないと思ひます。私は工場勞働者のみの利益を主として勞働問題を解かうとする主張には反對です。

　然らば資本家全體と勞働者全體との間の分配は如何にすべきか。この問題についても多少の考がないことはありませんが、何分このやうな大問題に對してまだ自分でもあやふやな思想を述べるのは不本意ですから、當分差控へることにしたいと思ひます。唯この問題は所謂溫情主義でも、所謂主從觀念の復活でも、又勞働者に澤山金をわけてやることでも、共產主義的制度の樹立でも解けないと考へてゐることだけは申上て置きたい。

第一に、傭主が氣が變れば何時でもとりあげることの出來る恩惠、幸ひに一代の間は續くにしても馬鹿息子が出來れば何時轉覆するかも知れないやうな恩惠、さうして假令永久に轉覆せざるにせよ到底局部的現象たるに止つて要するに勞働者全體の問題を解決するには足らざる恩惠――こんな「恩惠」で何が出來ませう。この「恩惠」を「道德的義務」と感じて彼等にこの義務を强ひる權利を國家に托するだけの覺悟のない資本家、又法律の制裁によつて資本家に溫情主義の實行を命令するだけの決心を持つてゐない政府――此等の資本家と政府とが說く溫情主義の說敎が何になりませう。第二に、奉仕の觀念が道德的なのは社會人類に對する奉仕であつて、資本家の利益に對する奉仕ではありませんから、この間違つた基礎の上に立つ舊道德を復活して現狀維持の小康を偸まうとする企圖が到底ものにならないことは知れきつてゐます。資本勞働兩階級の鬪爭を避けようとするならば先づ資本家自身が社會人類に對する奉公の精神を實行しなければ駄目です。資本主義の徹底的處分を承認するだけの勇氣がなければ駄目です。自分がこの實行を怠りながら傭人の「忠義」を要求するなどは虫が好い骨頂です。第三に、さればと云つて勞働者に餘分の金を分配してやることが決して勞働者の幸福にならないことは、既に戰時中に於ける幾多の事例が證明してゐると思ひます。從來の勞働者を小資本家にすることだけでは決して勞働問題の解決がつくわけがありません。勞働問題の中心は寧ろ勞働者に對する人間らしい生活の保證と、分配の不平衡の防止にあると思ひます。さうして分配の不平衡を防ぐ方法は、一つの産業にあづかる資本家と勞働者との間の分配の平均にあるといふよりも、寧ろ資本家の法外な利得を國家が抑制し若くは徵集してこれを一般的福利のために使用するところにあるのではないでせうか。第四に私有財産を否定する意味の共産主義は理想的な宗敎團體にあつてのみ始めて實行が出來る主義だと信じます。今日のやうに利己と享樂とで固つてゐる人心をそのまゝにして置いてその間に共産主義の制度を布くのは、唯懶惰と掠奪との奬勵になるに過ぎますまい。私は今日の社會に於いては何人の制肘をも受けずに自ら使用し得る若干の私有財産を欲するものであります。又我等の文化的事業に使用するために、政府の保護を受けずに纒つた文化的事業を企てる自由を保留するために、多少の財産的不平均をも――財産が私有として「吹き溜め」になつてゐるところをも必要とするものであります。併しその吹き溜めの權利は、勞働者の道德上保

健上の福利を犠牲とせざること、勞働者にも人格的教養と家族的團欒と子女の教育とに必要な分配を與へることを條件として始めて許される權利であることは云ふまでもありません。この條件を充すことは今日の社會に於ける絕對的必要であります。さうしてこの改革が「我國特有」の方法によつて平和の間に行はるゝか恐るべき混亂を通過するやうになるか、それは偏へに資本家と政府とが思ひきつて先手を打つか、勞働者の對抗略取の運動に引ずられて所謂「溫情」を小出しにして行くかによつて定まる問題だと思ひます。若し後の順序をとるやうになれば恐るべき混亂の後に更に恐るべき勞働者の專權がやつて來るのは誠にやむを得ぬ「世のなり行き」です。今の政府や政黨はこの自然の成行をどうしようと云ふのでせう。

(六) 溫情主義に就て

法學博士　桑田熊藏

近時勞働問題解決の方法として溫情主義なるものが世間に現はれた何人が之を首唱したるや又何年頃より起りたるや之を明かにするを得ざるも目下資本家や官僚の間に於て相當の勢力を有せる思想たることは疑もなき事實である此思想の論據に就き又其實行方法に關し未だ精確なる說明に接するの機會を得ざるは遺憾の事である兎に角溫情を以て資本家と勞働者との聯絡を圖ると云ふ常識に基ける通俗なる思想にして且つ資本家や政府に立てる者に取つて都合よき事である

余は我國に於ける此思想の系統を按ずるに曾つて主從關係とか家族關係とか云ふ語が頻りに資本家の間に行はれたとがある然るに主從關係や家族關係と云ふ語には貴賤尊卑の階級的觀念が含まれて居るが故に勞働者の立場より云へば寧ろ之を嫌惡するの傾あるのみならず近世の思潮たる平等の理想に背馳するものとして識者の擯斥する所となつたのである於是乎此舊き思想は新らしき名稱を以て溫情主義として世に現はるゝに至つた溫情主義と云へば勞働者と資本家の間に階級の觀念を沒却し双方

とも對等の地位に立つて道德の關係に依つて聯絡を保つことになるのである之を要するに不對等の道德關係に代ふるに對等の道德關係を以て二階級の調和を圖るに在るのである

溫情主義の主張者は之を以て我國に特有なる勞働問題解決の方法として頻りに之を誇張するの傾向がある之に反對する者は之を以て歐洲に於て識者は已に之を高閣に束ねて之を顧みざる所の陳套なる學說に基ける舊思想なりとして一概に之を排斥し去るのである此正反對なる二種の見解は孰れが正當なるか是れ余が玆に說明を試みんとする所である

余は歐洲の學理實例に徵し抽象的に云へば社會改良主義具體的に云へば社會政策に就き三種の方針あることを常に信じて居るのである即ち國家の權力に訴ふる所の國家的方針、勞働運動に依る所の個人的方針、資本家の道義に依る所の慈惠的方針である我國に於て所謂溫情主義なるものは卽ち此慈惠的方針に外ならぬのである之を以て我國民性や歷史的事實に基ける特有の思想となすは固陋の見解と云はねばならぬ去れば余は溫情主義を以て慈惠的方針の社會政策の意義に解し先づ慈惠的方針の趣旨を明かにするのである

慈惠的方針の理想は經濟と道德の抱合と云ふ一語を以て之を盡すことを得るのである之に關し最も極端なる思想は道德を以て經濟の上に置き凡ての經濟行爲を道德化せんとするのである夫の「マークス」一派の社會主義が凡ての人類の行爲を經濟化せんとする所の所謂經濟史觀と正反對の地位に立つものである此思想は歐洲に於て宗敎道德を本位とせる社會改良家の間に行はるゝものである玆に其一例を擧ぐれば獨逸にて「ラッチンガー」氏は「經濟の道德的基礎」と題する書に於て所有權を說明して居る之に依るときは凡ての財產は神の所有である人の所有すべきものでない所有權なるものは必竟するに人が神に代つて神の財產を管理するに過ぎぬのである去れば人が神の財產を管理するに當つて之を自己の欲望の爲に濫費するは固より不當事たるのみならず私利私慾の念に驅られ妄りに之を增殖するも亦愼むべき事たりと說けり又經濟學上に於て節約の觀念に就ても將來資本增殖の目的を以て節約の論據とせる一般の定說を排して之に代ふるに新らしき意義を以てせるのである卽ち世間に存在せる消費物には一定の數量あり自己獨り多額の消費をなすときは之に伴つて他人の消費を減少するの結果を生ずるなり去れば他人に對して成るべく消費の餘裕を生ずる爲めに自己の消費を節制せざるべからずと說けり是の如き極端なる學說は慈惠的方針の

説明に就き價値少なきを以て筆を之に止め更らに穩健なる學説に移り説明を試みるのである

適當なる程度に於て經濟と道德の抱合を圖るの思想は佛國にては社會改良主義の泰斗たる「ルプレー」に依りて唱道せられ又社會政策の熱心なる主張者たる羅馬法皇「レヲ」十三世は其教書に於て此意見を發表して居る獨逸にて社會改良學者の團體として最も有力なる運動をなせる社會政策會の創立宣言書に於て此趣旨は明瞭に現はれて居るのである「アナーヒズム」とは云へ其學説は以て參考となすべき「クロポトキン」は其著書相互扶助論に於て之に關する理論を發表して居る之に依るときは凡そ生物界に於て生存競爭と相互扶助との二大法則が行はれて居る然るに進化論者は生存競爭の方面のみを見て相互扶助の方面に及ばざるは遺憾の事である人類の關係に於ても亦此二大法則は並んで行はるゝことは爭ふべからざる事實であると斷定して居る

余は此斷定に左袒する者である而して生存競爭は經濟の法則たり相互扶助は道德の法則たりとの前提より立論するときは經濟と道德の抱合は啻に勞働問題の解決に關し社會改良家の將來の希望たるに止まらず是れ實に社會を支配せる現實の法則であることを認めざるを得ない從て慈惠的方針は人類の本性と社會の組織に於て其根柢を有するものと云はざるを得ないのである

凡そ勞働問題の中心は分配の問題にあるのである奈何にして資本家と勞働者の間に分配の公平を保つべきやは此問題の骨子である神髓である社會主義の如く新社會の建設に依ることが唯一の解決方法たりと主張するものは措いて之を問はず苟も社會改良主義に依り現社會の範圍に於て之が解決を求むる者は此點に向つて其力を集中するは必然の事である然り而して公平なる分配をなすに就ては勞働運動に依りて資本家に壓迫を加ふるの方法もあらん國家の干渉に依り之を調節するも亦必要の事たり之と同時に資本家が進んで慈惠の施設をなし其所得を勞働者に分與するも亦可なるべし分配の公平は必らずや勞働運動か然らざれば國家の干渉に依らざるべからず其他の方法は凡て不合理なり不正當なりと云ふは誤謬の見解たるを免れぬのである

右述ぶる所に依れば慈惠的方針は理論上の根據は牢乎たるものあり之を以て社會政策の一方針となすに於て何等反對すべき理由を見出だすと能はざるのである我國溫情主義の唱道者も漫然として固有の民風とか歷史の因襲とか陳套なる理由を拋ち正確なる學理に於て其陣地を求むるならば識者の之に對する非難は大に緩和せらるゝことを疑はぬのである

是を論じ來るときは或は余を以て慈惠的方針卽ち溫情主義崇拜者となし諷歎者となす者あらんも余は唯此方針を以て社會政策の一方針と認むる者である夫の資本家や官僚が之を以て唯一の解決方法となすか然らざれば之を以て重要なる解決方法となすことに反對の意見を有せる者である

慈惠的方針は之を實行するに當つて至大の困難之に伴ふことを覺悟せざるを得ない顧ふに此方針の前提たる經濟と道德との抱合にあることは先きに述ぶる所である去れば資本家に在つても勞働者に在つても道德觀念は必要なる條件たることは固より言を俟たない然れども自由競爭に驅られ錙銖の利を爭ふ所の資本家に對して此觀念の發達を望むことは至難の事たるべく時に往々慈善家と名づくべき者あらんも天下の資本家に向つて慈善家たらんことを要求するは百年河淸を俟つの類たらんのみ歐米諸國に於て宗敎の信仰は尙ほ人心を支配せる所に在つて資本家の道德は或程度に於て之を維持することを得んも我國の如き宗敎の威力殆んど地に落ちたる國に於て此事たる更らに一層の困難を加ふるや明白なる事實である去れば經濟と道德の抱合は理想として間然する所なしと雖も之を事實に現はすこと容易に非らずとせば慈惠的方針の社會的効果は推して知るべきである資本家をして道德觀念を發達せしむるに就き奈何なる方法を採るべきやは道德宗敎の問題に屬し余輩の喙を容るべきことに非らざるも之を經濟上の見地より觀察し工業組織と慈惠的の方針の關係を說明するは必要の事なりと思ふのである

慈惠的方針の實行に就ては左の條件を具備せる工業組織たることを要するのである卽ち一は小工場たることにして一は個人營業たることである

何故に小工場たるを必要とするかと云へば資本家と勞働者との間に道德觀念を喚起する爲には二者互に接觸し昵近するの機會多きこと肝要である小工場に在つては資本家は勞働者と臂を交へて談笑し其間和氣の靄然たるものあるべきも大工場に在つては資本家と勞働者の間に畫然たる溝渠存し双方親愛の情を起こすの動機甚だ薄弱なるを免れぬのである

何故に個人營業たるを必要とするかと云へば個人營業に於いては資本家と勞働者の關係は比較的永久に涉り資本家は自然に勞働者に對する同情を起こす場合多かるべく又資本家にして道義の念に富める者ならんには外部の制肘を受くることなく自己の思ふまゝに慈惠施設を遂行することを得るのである之に反して會社營業に於ては重役は一定の期間を限つて團體を代表して

勞働者に對するが故に其性格の奈何に拘はらず勞働者に對する道德の觀念稍々薄きことを免れざるのみならず一面には株主の利害を顧慮する結果勞働者に向つて其同情を充分に發揮する能はざるのである

慈惠的方針の代表的施設とも云ふべき純益分配制に於て此事實は明に征服せられて居る之を各國の實例に徵せんに純益分配制なるものは本來の性質として實行の困難なるとは已に識者の定論となれるのであるが之に關して充分の効果を收め久しく存續し模範を後世に示せるものは多くは此條件を具備せる工場である然らざる場合には失敗に了はれる事例少なからぬのである

右述ぶる所の二種の條件は固より概括的說明にして大工場にして會社營業たる場合と雖も慈惠的方針を實行せるの事實を否定せんとする者ではないのである

余は玆に本論を了はるに當り以上の所說を約言すれば社會政策に於ける慈惠的方針即ち所謂溫情主義なるものは其理想や觀念に於て敢て非難を加ふべきものに非らず社會政策の一方針として稱揚すべき價値あるものなるも之が實行に就て道德の問題之に關聯せる爲に至大の困難之に伴ふを免れず從つて之が適用の範圍は狹隘なるべく到底之を以て勞働問題解決の主要なるものとなす能はざることである

大阪財界消息

◆歐亂勃發で第一に打撃を受けたのは經濟都市だが就中最も沈衰の慘めさを現實されたのは大阪であつたが同時に歐亂で間もなく好景氣を捲起したのも大阪が一番であつた◆電車内で川合つても『儲かりまツか』を挨拶代りにする葬列に立つても商賣の掛引を忘れぬ猶太根性の大阪人は歐亂の御蔭で大中小の成金が簇生し成金が羨望の焦點となつた◆たゞさへ野卑淫靡な大阪に成金が魔王のやうに傍若無人の振舞をしたから大阪は成金を中心として甚しく惡化され大阪開市以來家運連綿として榮えつゝある純大阪人の淳良な生活をも破壞し盡した感じがする◆財界の好景氣は一番に遊廓を潤ほし化粧の女を殖やし花柳病を蔓延せしめ終に健全なるべき知識階級の人達をも精神的に墮落せしむるやうになつた◆一に金二にも三にも金の大阪では成金の俗惡な驕奢ぶりに著るしく貧民階級の反感を起さした米高とか諸物價の恐ろしい騰り方には時勢だ致方がないと云ふ諦らめも付くが生活上の危い綱渡りに身の痩せを覺える際不勢利得で横暴を極むる成金の振舞はヒドク惡感を起さすものだ◆成金の多いと共に貧乏人の多いのも大阪だ知識階級や勞働階級中にも戰爭の御蔭を蒙らぬ戰時好景氣と全然無交渉なる手合ひは其生活の苦痛より進んで思想上に取返しの付かぬ劇變を萠しつゝあることは疑ひなきことだ◆新らしくとも健全で理解ある思想の感化は喜ぶべしだが大阪の對成金反感黨の頭には隨分と極端な過激な思想が根ざしてる資本家に對する反感富豪に對する反感實生活上の改善に何等考慮を費さず富豪階級のお味方かのやうに政府の施政ぶりを惡解するから起る反感、遵う云ふ惡感反感不平不滿の胸一ぱいの處へデモクラシーや社會主義が間違つて注入される◆自ら獨斷研學して新思想を判斷するに餘裕のない程資本家に虐使されてる大阪の知識階級や勞働階級中の知識ある人達が新聞雜誌から受けた新思想に加ふるに世界的に澎然として起れる勞働運動の次第に効果を擧げつゝあるを見ては何條默し居らるべきや機會一度到らば彼等は期せずして或種の運動を勃發せしむべき恐怖すべき萠しのあることは決して閑却し能はぬ重要な社會問題であらう◆大阪の勞働者約三十萬人彼等の仲間には存外自覺した識者が居る貧者と富者の鬪ひは富者の壓迫に貧者の服從すると云ふ昔からの長い〳〵慣習から離脫して今日の大阪はまま貧者が富者を威壓せねば止まぬと云ふ氣勢を示して來た即ち富の力が智の力腕の力に打負かさるゝ場合が往々在る少くとも富者は智と腕と妥協せねば經濟都市の安全と幸福を增進し得ぬ傾向を示して來た言ひ換れば資本と勞力とを敎へて智力を閑却した經濟學は大阪では富の力と智の力と腕の力とが平等に働きて巧みな妥協をせねばならぬと云ふ經濟學上の改造を現はして來た程大阪なる大經濟都市の實狀に變化を起してる◆成金の横暴に憤慨してる大阪の智者腕力者は生活上の壓迫から免れやうとして眞劍に眞面目に活動してる而して彼等は今は萬々已むを得ず辱を忍んで心ならずも富者の奴隷となつてるが彼等は富者に對し對等の權利を主張し又對等の人格を高唱すべき好機會を今か今かと待受けてる或は機會到らずとも時と場合によつては生活上の壓迫を犧牲にしても騎虎の勢に驅られて富者と爭鬪するかも知れぬ◆そこで大阪の富者即資本家階級も多少は此趨向に省みて眞劍らしく考慮するやうに導かれたやうだ富者が勞働階級を指導するやうな企てが到る處流行するやうだが大阪の勞働階級中の識者は非常に之を不快に感じ勞働階級が富者を指導して遣らうと云ふ意氣込を示してる實際の處大阪の富者は知識階級勞働階級中の識者に較べて其人格も品性も知識もズッと劣つてるやうだ金以外に於ての劣者が優者を指導すべきものでもなければ又指導し能ふ資格もないのは大に笑はせるではないか◆大阪に於る此等の趨勢によつて考ふるに富あるも誇る能はず油斷する能はず智者も敢て貧を恥るに足らずして益其本能たる智を磨き而して腕を資本とする人達も徒らに富に屈し智に從ふに及ばず益々其腕力を强健にして富者智者と對等とならねばならぬ即ち三者相持ち相倚りて圓滿に大阪なる經濟大都市の發展を圖らねばならぬと云ふやうに大阪では富と智と腕とは經濟上切り離すことの出來ない鼎立の何れも大切な要素であると云ふ考へを抱持せねばならぬ◆將來勞働運動や僱傭運動（智識階級の）の發祥地は何うでも大阪であらうと云ふ理解を爲政家にも經濟家にも將た社會政策家にも持つて戴きたいと私は此頃ろつく〳〵感じてる（泥牛生）

社會主義批判



(一)唯心的經濟史觀の意義

──唯物史觀の缺陷を檢す──

賀川豐彦

一　唯心的經濟史觀出現の時代

カウツキーは唯物史觀がマルクスとエンゲルスによつて發見せられたのは全く社會主義とその時代の賜だと云ふて居るが（堺利彦氏譯『社會主義倫理學』一四一頁）シュモラも同樣のことを彼の大著『國民經濟原論』の中に繰返して述べて居る。マルクスの唯物史觀は、だから、一八四〇―六〇年代の英國の產業史と切り離して考ふ可きものではない。あの時代の產業革命史から云へばマルクスの唯物史觀はエンゲルスが云ふ通り一大發見で有つたに違ひないのだ。

然し、一八四〇―六〇年代の經濟史は尤早や今日のそれで無い。我等は既に社會黨の一部の勝利を見、勞働者の猛烈な突進

振りを見た。修正派の人々が云ふ通りに、今日の社會主義はもう經濟學としては價値は無いが、一種の倫理運動として實に爆る可き勢力となつた。それで英國社會黨の首領ラムゼー、マクドナルドも、社會主義とは必しもマルクシズムを云ふのでは無い、社會主義とは一種の傾向を云ふので、それに一定の教條なるものは無い。最近の社會主義の最大特徴は、それが理想主義を加味して來たことであると云ふて居るのは尤もな云ひ方である。

今日まで社會主義と云へば、必ず唯物的でなければならぬと考へて居たものが、サンヂカリズムの神秘主義や、ギルド、ソシアリズムの新理想主義の加味と共に、今日ではマルキシズム對社會主義の對立とも云ふ可き面白い現象を呈することとなつた。即新理想主義に基く社會主義は、唯物的勞働者專制主義のマルキシズムを殘して、遙かに進化して行つた形で有る。

之は明かに自然科學の發達と、諸文化科學の發達の結果、マルクスの唱へた、唯物史觀が、實に無理して立てられて有つたと云ふことが次第に明かになつて來たからである。マルクスは自然科學的メソードを八釜敷云つた人に似合はず、その論理の立て方が如何にもドグマチツクに出來て居る所が多いので、唯物史觀的に經濟學を立てると、一から十まで、それで立て通すと云ふ、まるで、ヘーゲルの辯證法そのまゝを經濟學に輸入するものだから、その經濟學にも實に無理が多い。それは勿論あの當時の一般の學者が、そうで有つたのだから已むを得ないが、今日の學者が、まだ、マルクスのメソードで無ければならぬと云ふのはお可笑な話で、經濟科學がマルクスによつて、歷史的に取扱はれたのは善かつたが、之を辯證的(ダイアレクチツク)に說明した、舊式の經濟學を今日猶有難がらねばならぬと云ふのは實に厄介な話で有る。例へばマルクスの資本論の第二卷の資本流通論を讀むと私は全くヘーゲルの論理學をそのまゝ讀む樣な心持がする。彼は『貨幣——物貨——貨幣』の方程式にしても『物貨——貨幣——物貨』の方程式にしてもその間に何等の心理的係數を讀み込まふとはしない。それを全く運命的必然としてかたづけてしまふ。私であれば物貨の心理化と貨幣の社會化をその中に讀み込みたいのである。實際マルクスの唯物史觀なるものは『共産黨宣言』と、『經濟學批判』だけを讀んでは充分わからぬが、資本論全體の空氣に接するとよくわかる。資本主義の生産だけを抉出するならば、マルクスの唯物史觀は全くの眞理である。私が唯心的經濟史觀などを昇ぎ込む餘地は全くない。然し唯物史觀か

らどれだけ工夫しても階級爭鬪の意志は起らぬ筈であるけれども、方程式の外に倫理運動が有つて、社會主義と稱する人道運動が盛んになつたが、之は『貨幣――物貨――貨幣』の方程式や『貨幣――勞力――貨幣』の方程式では解け無いのである。

然し、之をしも唯物的運動、必然的運動と云ふのならば、マルクス派の唯物史觀と私の唯心史觀とは異名同質のもので有つて、たゞマルクス派の唯物論は『パンが考へ、パンが意志するもの』で有つて、マルクス派の物質と云ふものは私が心と稱するものなのだ。たゞ、私が先に指摘した通りに、今日の社會主義者には偏屈な獨斷的な人間が多くて、自然科學と稱する實は舊式の宗教よりも恐ろしい迷信を持つて居て、物質に言を云はせたり、パンに戀をさすことを平氣で居る（堺利彦著カウツキー『社會主義倫理學一三九頁參照』此處で彼は之を否定して居る）。

元來唯物史觀が勢力を得て來たのは、人類生活が、自然的環境の支配を脫れて、益々人爲的生産の社會經濟に依頼する樣になつたからで有つて、十九世紀の經濟的發展が無かつたならば、唯物史觀と云ふことは、哲學史上に考へ付く人も無かつたであらう。即ち生産の人爲經濟化、商品化、唯物化、器械化、貨幣化、資本化の傾向によつて、十八世紀まで、自然と超自然から生産してもらつて居たと考へた、舊式唯心思想が、急轉して唯物的經濟思想に置換へられる樣になつた。即ち私に云はせれば、器械の發明は人間が發明したと云ふことを忘れた哲學者は、佛國のエンサイクロピディア學派を初め、皆打揃ふて器械の前に降參し、その思想の獨立までをも器械化するに甘じたが、マルクスの如きが矢張りその一人で有つて、彼は資本論第一卷の終の方に書いて居る器械の人間壓迫に脅かされて、彼の哲學までも、その壓迫に委することにしたのである。（ランゲ唯物論史參照）

然し反抗の時代は來た。哺乳動物の天才である人類は、十九世紀の末より二十世紀の初頭にかけて發明に加ふるに發明、發見に加ふるに發見、二千五百年間歐洲哲學史に勢力を持つて居た、唯物論をば、電子物質論によつて、根柢より顚覆し、十九世紀の最大發見の一と考へたダアヴヰニズムにも多少の誤謬あることを發見し、物理學の進歩により、相對律を發見し、認識の主觀性を確立し、更に價値哲學の盛んになると共に、ベルグソニアン、プロゴマチズム、新カント派の主潮と共に、唯物論はどの意味に於ても不信用となり、經濟的生産社會に於ても、『我』の自覺と『社會性』の廻復と共に、勞働者が器械に反抗することが漸く止り、之が哲學上に影響して、人々は段々哲學上の

唯物論を恐れ無くなつたのである。即ち、器械より人間が重ぜられて來ると共に、經濟運動は一個の倫理運動であることが明かに認識されるやうになつたのである。また見逃してならぬことは、勞働運動が漸く成功して勞働者の大臣が現れるやうになつては、勞働階級もたゞ唯物史觀の倫理だけで滿足出來なくなる。皆新理想主義の哲學に移つて行つたと云ふ傾向が無いでもない。即ち人はパンのみによつて生くるものにあらず。生理的價値より心理的價値へ自然と移つて行き勞働者は最低賃銀を要求するにしても、たゞ生活賃銀のみを要求せずして、享樂賃銀までも要求する樣になつたのである。如斯して十九世紀の中半に唯物史觀が現れた如く、二十世紀の今日に唯心的經濟史觀が現れるやうになつたのである。

二　唯物史觀の分解

マルクス及マルクス學派の唯物史觀の解剖は大體に於て大正八年九月號の『日本評論』に掲載したから（拙文『唯心的經濟史觀』參照）此處ではその重複を避けて、たゞマルクスの云ふ唯物史觀なるものを徹底的に分解して見たいと思ふ。河上肇博士がマルクスの唯物史觀の公式だと云はるゝ『經濟學批判』の序文を分解すると次の樣なものになる。

マルクスの唯物史觀
- 關係（必然的生産）
  - 基礎――（法律、政治の基礎は生産關係）
  - 過程條件――社會的、政治的、精神的
  - 運命的關係
- 衝突
  - 生産關係
  - 所有關係
  - （生産關係・所有關係）――社會的物質生産力
- 認識
  - 區別――自然科學的經濟生産の說明／文化的觀念上の形態
  - 矛盾――時代意識の錯覺作用／社會的生産關係對生産關係
- 形式（變化の）
  - 顚覆――（完全なる發達の後）
  - 孵化――（成　長）
  - 解決――條件の成立／過程の成熟
- 階梯（發展の）
  - 四階梯――アジア、古代、封建、資本主義
  - 敵對行爲――（個人對社會生活條件）
  - 理想社會

この中でも、マルクスが『物質生活に於ける生産の形式は、凡て生命の社會的、政治的、知識的過程を決定す』Die Prodetioisweise des materielen Ledens bedingt den sozialen, Politischen nud geististigen Lebensqrozess übevhaupt. と云つたのは有名な唯物史觀の格言となつて居るが、之が何を意味するかに就ては實に議論がある。カウツキーの如きはマルクスを正解した人だと云はれて居るが、その『社會主義倫理學』に於て解釋して居る唯物史觀と云ふものは全く、進化論の主我主義の倫理で有つてそれがマルクスの本音であるか否かは實に怪しいものである。(堺氏譯同書八四、一四三、――二五七頁參照)實際今日の唯物史觀と云はれて居るものでも、ダアヴヰニズムを除いてしまへばどれだけ勢力があるかは頗る疑問である。スパルゴなどはマルクスがダアヴヰンに非常な感化を受けたことを詳しく書いて居るが、私はカウツキーなどが解釋する樣な階級爭鬪の唯物史觀的解釋――之はダアヴヰンの生存競爭說から演繹したもの――であれば別に唯物史觀と稱して特別に八釜敷云ふ必要は無いと思ふのである。

カウツキー――は云ふ『唯物史觀は、或批評家の目するが如き斷く、單純な公式では無く、階級的差異、階級反目が如何にして經濟的發展の中より生ずるかを示すものである』(『社會主義倫理學』日本譯二一三頁)『世には唯物史觀が或種の技術的條件を以て、直ちに或種の生産方法を意味するとなし、甚だしきはそれが直に或種の社會形體、政治形體を意味すると解するものがある。……この攻擊は生産方法と技術的條件とを混同した似せ唯物史觀を打つたまでのものである』(同書二〇六頁)

即ちカウツキーが解釋したマルクス唯物史觀の第一公式なるものは、マルクス自身が手挽の時代は封建時代を出現させ、蒸汽挽の時代は工業的資本主義の時代を出現させると云ふたことを否定するもので有つて『生産の形式』と云ふことの中には階級意識から階級經濟までの凡てを入れるのである。で、もし之をしも經濟史觀と云ふならば、唯心史觀と何の區別があらうか？

カウツキーは唯物史觀と云ふ名をつけたことに面白いことを云ふて居る。

『この新唯物論 Dialectical Materialism は自然科學の唯物論と違つた一種の唯物論である。そこで誤解を避くる爲めに此『唯物論』と云ふ言葉を他の語に代へるが善いと云ふ說も出た。然しマルクス及びエンゲルスは彼の『共産黨宣言』(コンミユニストマニフエスト)を

『社會黨宣言(ソシアリストマニフエスト)』と改稱することを肯じなかつたと同じ理由で、矢張り此『唯物論』といふ言葉を固執した。社會主義といふ言葉には基督教社會主義だの國家社會主義だの云ふ色々な交り物がして居るが、これと同じく、我々の新唯物論を一元論とか、批評哲學とか、現實哲學とか呼びかへては、紳士閥の世界に對抗する意義が拔けて了ふ。之に反し、『唯物論』と云へば基督教に對する勝利以來常に權力に反抗した戰鬪の哲學である。それ故にこそ今の權力階級たる紳士閥がこの言葉を嫌ふのであるが、それ故にこそ我々平民哲學の學徒は亦飽くまでも、この言葉を固執するのである』（カウツキー『社會主義倫理學』堺氏譯一四六―七頁參照）

卽ちカウツキーによれば、唯物論と云ふ名は意地の問題で有つて、眞理の問題では無いのである。兎に角、凡ての眞理は階級爭鬪の道具であるから、紳士閥をいやがらせさへすればそれで善いと云ふのが『經濟史觀』に『唯物史觀』と云ふを蒙らせ置く理由なのだ。それで私はカウツキーの云ふことがマルクスの唯物史觀の正解でありとすれば、唯物史觀と云ふものは既に意味の無いもので有つて、基督教前に於ては『唯物論』が反つて權力階級で有つた場合もあるし（ユダヤの祭司閥の如き、印度ブラマンの六大哲學の一派の如き）この後、今の平民階級が支配階級に上つた場合、この唯物史觀は何等意味をなさないことになるから、唯物史觀を經濟史觀の代用として唱道することの危險を思ふのである。

然し更に經濟的歷史觀が成立するとした處で、私はその絕對性を信ずることが出來ない。マルクスが、勞力價値說を主張する間、その勞力價値なるものはどうしても唯心的でなければならぬ。それで無ければ『勞力は商品にあらず』と云ふ主張が何處からも湧いて來ない。勞働者が人間で有ればこそ、生活上の向上も要求し、勞働全酬權をも主張するのである。人間が『その食ふ所のパンである』と云ふ樣な安價なフオイエルバツハ的の實在であるならば勞力價値說を何故起す必要が有らう。之は拙文『主觀經濟學の體系』（日本及日本人四月號浩然と自由）に於て論じて置いた通りに、マルクスの根本的矛盾で有つて、唯物史觀と勞力價値說とは天と地とが相容れざる如く對立して居るものである。私は勞力價値と主觀價値說を採る爲めに、唯物史觀を捨て、唯心的經濟史觀を立てざるを得ないのである。

三　唯物史觀の論理と其方法論

既にカウツキーの解した唯物史觀は、ダアヴヰニズムを經濟的に直したものに外ならぬとすれば、私はダアヴヰニズムに向つて修正を加へると同樣のことを經濟史觀にも要求せねばならぬ。

即ち生存競爭が種の起原となると考へる謬見をメンデリズムで修正する如く、階級爭闘が凡ての經濟生活を決定すると考へる唯物史觀を新理想主義の唯心的經濟史觀で修正し、境遇が全能であると考へるラマアク說を否定する如く、唯物的生產形式のみが階級を產むと云ふ唯物史觀を否定せねばならぬ。

殊にマルクスが、『哲學の貧窮』を主張して、十九世紀の哲學の無能を罵り、哲學は經濟組織の上に建てられたものに外ならぬ、山に入つて山がわからぬ如く、『斯かる變化の時代をその時代の意識より判斷せんとするは、恰も或個人が、自分自身の事を如何に考へつゝあるやに依つて、其人を判斷せんとすることの無効なるが如く、得る所たゞになきのみならず、寧ろこの意識なるものは、物質生活の矛盾より、社會的生產力と生產關係との間に存在せる衝突よりして始めて說明さる可きものである。』(公式第三節)と主張して、意識の起原を社會組織の衝突に發見せんとする樣な亂暴な出方に出て居るが、マルクスのこの論理は實に、唯物史觀獨特の方法論とでも云ふ可きもので有つて、プログマチズムに於てすら猶、主觀的欲求に論理的價値を置て有るが、この社會的生產勢力と生產關係の衝突より、意識の起原を導かうと云ふ說は一面に於てはプログマチズムの實際主義によく似た處が有ると見えるけれども、その主觀性を缺く事に於て個性の實在を全く許容し無いものである。從つて凡ての認識は全く決定のもので有つて、寫眞の原板に光線が作用して或種の現像する以上に何の認識的價値と云ふものも無いので有つて、資本主義文化の下に、資本主義の哲學と、社會主義の哲學と二個の經濟學が發生することとすら既に解くことの出來ない神秘である。マルクスは價値哲學を否定して、自然科學的メソードを取ると主張するけれども、經濟哲學が既に一個の價値論なるに於ては、どうしてその價値批判を自然科學的方法論に書き換へ得るであらうか、之が私のマルクスに問はんとする根本的疑問である。

認識行爲さへ既に新しき心理學によれば一種の選擇行爲——即價値行爲である。(左右田博士は頻りに心理主義を排斥し、經濟哲學に於ける認識を八釜敷云はれるが、之は明かに矛盾であつて、認識既に價値運動なのだから、經濟上の實在と云ふものは

價値そのものの外にはないのである）で、マルクスの樣に經濟價値の哲學に於て、自然科學的メソードと、歷史的批判メソードを混同することは實に危險なことで有つて、自然科學的メソードでは、實驗と云ふものが出來るけれども、歷史的價値批判のメソードでは、實驗と繰返しが出來ない。凡ての價値は歷史上の時と共に過ぎ去つてしまう。それでマルクスが經濟學にヘーゲル哲學より、『時』を輸入して、經濟史觀をたてたのは、經濟科學上の一大發見であるが、彼が他面に於てまだ、自然科學的メソードに戀々たる所は、どうしても私の合點の行かぬ所である。

然し之はマルクスがヘーゲルの弟子で有ることから起つた誤謬で有つて、凡ての歷史的流轉が、正、反、綜合の三階梯をたどるものであるとした結果、矛盾と衝突に我等が今日考へられない程大きな任務を負したので有つて、このヘーゲル的矛盾と衝突とその決定的自然解決は全く心理的價値批判を外にして、來るべきもの、豫定的のものだとしたものらしい。之がマルクス及唯物的社會主義思想の基底をなすもので有つて、彼の階級爭鬪論も、革命說も、唯物史觀も此處より觀へば異くわかる。で、マルクスは唯心哲學を毀つ時には、それが價値論に基いて居るからと云ふ理由によつて之を排斥し、自己が唯物史觀を立てる時には之れは實在論だとして、價値を取扱ふと云ふ矛盾に陷つて居る。然し之は要するに彼が、價値批判の中心となる可き個性とその心理性を許容しないから起る矛盾で有つて、マルクスに於ては、『一個人』は有つても『我』は何處を探しても、その唯物史觀に發見することは出來ぬ。從つて唯物史觀の認識論なるものは、認識の限界を定めその相對性を決定する以上に、一種の不可知論にそれ自身を導き、唯物史觀の價値なるものも要する所、時代の產物で有るから、絕對の眞理では無く、信用に價しないもので、何を云つて居るか薩張わからぬものであると云はれても仕方が無いものとなるのである。で、唯物史觀に絕對價値を與へんとすれば、どうしても『我』を認定しなければならぬが、唯物史觀に『我』を挿入すれば、唯物史觀は直に消滅して、私が云はんとする唯心的經濟史觀が現れてくるのである。

四　進化論と唯物史觀

唯物史觀の强味は全くその經濟史觀にある。然し經濟史觀と唯物史觀とは全く分離して考ふ可きもので、經濟生活が直に唯

物生活で有ると考へるのは舊式の哲學で有つて、經濟生活は矢張り形而下の運動で有つても、それが『我』の運動であることに於ては少しも變りは無い。そして凡ての『我』の運動には生理生活の外に――即ち化學方程式で解決の出來る唯物生活の外に、心理生活と稱する唯物史觀では全く不可解な方面がある。カウツキーなどは之をしも自己保存の本能に必要なるが故に出來たと云ふ樣な功利的解決をして心理生活を全く唯物史觀の犧牲にせんとして居るが、之は實に矛盾で有つて、最近に發達した、系統發生的進化說 Orctogeretic Evolution では進化には何かそこに一種の超越目的でも有つて、アミーバより人間にまで進化させて居る樣に考へられて居る程である。（拙著『精神運動と社會運動』の一篇『ベルグソン以後の進化論と目的論參照）そんな風であるから凡ての心理生活が凡て生存競爭の爲めに出來たものだと云ふのは全く受取れ無いことである計りで無く、美の運動も、宗教の運動もそれでは全く解釋がつかなくなる。宗教に關してはマルクスは純正の宗教は尊敬した、彼はダンテの神曲の愛讀者で有つた、神曲の愛讀者は神を見失ふことは出來ぬとジョン、スパルゴの如きは辯解して居るが、マルクスが宗敎に心理的價値を全く與へて居らぬのは事實で有つて、社會主義時代となれば、宗教は不必要だとまで宣言して居る。

カウツキーが同樣で有つて、（堺氏譯『社會主義倫理學一七八頁）宗教心理が最近に於て研究したことなどは全くカウツキーの眼中に無いのである。

然し之は無理からぬことで、唯物史觀はヘーゲルの歷史哲學を經濟史的に書き直したもので有る爲めに、之に進化論を加味さそうと思ふても、すぐヘーゲル流の辯證法が進化論の中へ出てくるのである。然しカウツキーなどが取らんとして居る進化論的唯物史觀では生命も、本能も、欲望も、自由意志も皆認めてあるが、それには少しも觸れずに捨てゝ有る。又、唯物史論者には本能や、欲望を解剖せよと要求することは無理なことで有つて、彼等は本能や欲望の主觀的方面には全く必要が無いので、自己に有理な本能や欲望の客觀的、唯物的方面だけを利用すればそれで足りるので、進化論と云つても、唯物史觀の進化論は實に淺薄なもので、生命の本流には全く接觸しないものである。

五、唯心的經濟史觀の成立

それで私は此處に經濟史の解釋を生命進化の本流より解釋し

て見たい氣になる。

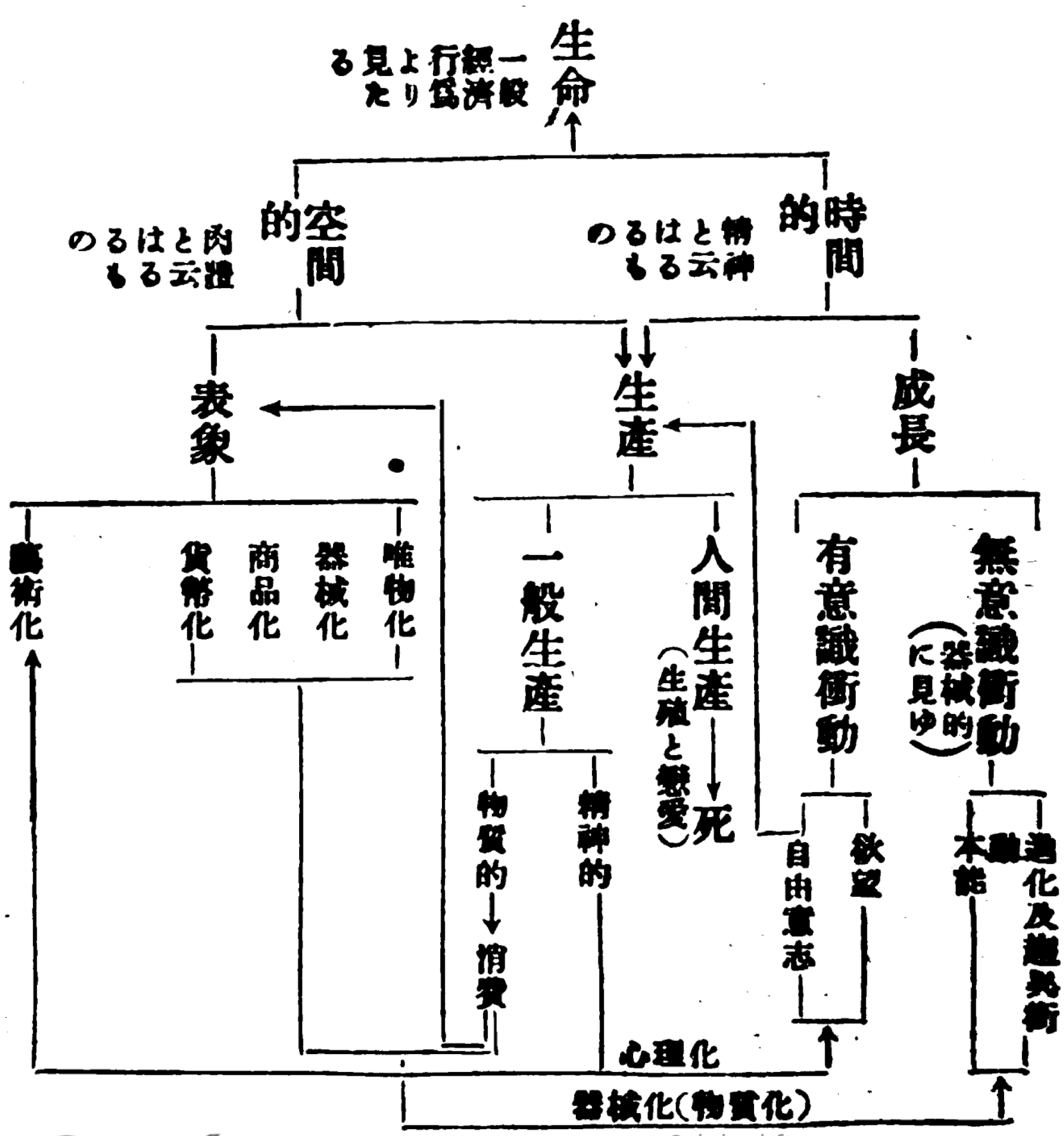
元來經濟史觀の成立したのと經濟的作用が社會を騷がし初めたのと同一時刻で有つて十八世紀末の器械による生産時代が現れ無ければ、我等が今日經濟史觀を以つて居たか否かは疑問である。十八世紀前迄はまだ經濟的勢力より政治的勢力や、宗教的勢力の方が强かつたので、其頃の掠奪は今日の資本主義の餘剩價値の掠奪の樣な體裁の善いものでは無くて全く純粹の泥棒で有つた。然し彼等は之を經濟的に自覺したものでは無くて、政治的勢力或は宗教的の勢力上已むを得ないものとして居た。實際原始社會に於ては、經濟組織が自足的で有つたから、社會的勢力と云ふものは、經濟的から來ることが極く僅かで有つたのだ。然し近世産業革命の到來と共に、世界は一變し、政治も宗教もその勢力を失墜させ、此處に唯物史觀の成立を許すことになつた。之は人類が自然から獨立して人爲的生産によつて自供自足の經濟生活を送ることになつた結果であると云ひ得る。で、もし、客觀的生産即ち南米の土人がパンの樹やコーヒの樹から恩惠を受けるのであれば、それを宗教的に有難がるであらうが、人間が自供自足の器械生活を送ることになつたので、宗教意識は全く失墜させてしまつた。然し、經濟史觀が、歷史の凡てを解釋すると考へるのは間違ひである。經濟生活の上に凡ての精神文化が橫はると云ふのも少し云ひ過ぎる。經濟生活の先に生命があるので、生命の上に精神文化が有るとは云へる。が經濟的生産形式の上に凡ての文化が建築せられて居ると云ふのは少し云ひ過ぎたことである。之は寧ろエミール、ライヒの云ふ如く、經濟的生産形式も確かに文明の諸原因の一つで有つたと云つた方が善からうと思ふ。殊にゴビノーの云ふ如く經濟的原因よりか人種的原因は文化の凡ての原因より强いものがある。何を云ふても文明と云ひ文化と云ふも、人間を置いて何にもないのであるから、同じ生産の形式を持つて居ても古代印度の文明はアリアンの吠陀文化と蒙古種ドラビデアンの文化とは明白に相違を見る。今日でこそ經濟的原因が最大原因であると、見えるけれども、矢張り、純粹な眼を持つて見るならば、人種的素因は凡ての唯物史觀的原因よりも强いものである。

更にこの人種的原因の外に、近世都市に於ける人類自給自足の經濟的生活も、それが人間の生活方法であり、その經濟生活そのものが、人間性そのものによつて支配せられて居るものであると知る時に、此處に唯心的經濟史觀は完全に成立するのである。(此處で唯心的と云ふのは惡いかも知れぬが、生命の衝動

より本能、欲望、自由意志の凡てを通して動く心理的活動を意味するものであるから、舊式の觀念的唯心論で無いことは斷つて置かねばならぬ。)

この邊の消息は私の『主觀經濟學の體系』(『日本及日本人大正八年四月號)及『主觀經濟學の組織(拙著精神運動及社會運動)の中に論じて置いたから此處でそれを繰返すことをやめて、私は生命の經濟的行動の分解をして見る必要があると思ふ。之は生命のどれ程までが唯物史觀的に支配せられるかを知るに誠に善き工夫である

極く不完全であるけれども。下の表が生命の一般經濟行爲より見たる方向をよく示して居ると思ふ。生命は成長して居るものである。そして一般に物理化學的運動しかして居ら無いと考へられるものも進化と趣異を待つて居るのである。それで之が何時爆發して生命の飛躍を試みるか知れ無い、人類に於てはこの趣異の爆發が欲望とその執意に來て居るので有つて、之が既に經濟的環境などを破つて唯心的形式を取るのである。更に生命の衝動が生產の方向に向いてくると、人間生產即生殖と戀愛、の外に、物質的、精神的の生產となる。精神的生產の中には、宗教、哲學、科學、藝術、法律、政治等の文化運動の凡てが加はり、物質的生產には、今日我等が經濟運動と稱する凡てのものが加はるので有るが、之が空間に於ける表象の形式を取ると、表象の性質上物質の形式を取る。殊に之が資本主義の經濟の如く賣る爲めの生產又、儲ける爲めの生產となると、全く貨幣化し



て、物質の循環運動の如き形を取るものである。然しそれは生命の一部面で有つて、成長しつゝある生命の衝動はその表象化をも一種の心理的藝術活動として了ふものである。此處に唯心的經濟史觀は完全に成立するので有る。

生命が必ず物質的表象をとらねばならぬものであるから—その肉體に於て——安價な哲學は常に我等を無理想、無創造、無生命の唯物思想に誘ふものである。唯物史觀はこの種類の唯物思想と根本的に異るもので有つて、時間的推移があるとしても、欲望と自由意志の神秘を理解せず、『我』を通じての生命の飛躍を經濟史觀に認識し無いならば、それは尤早や歴史の形を取らずして、連廻の形を取るであらう印度の古代史の末期には『我』を分解する運動が強く、その宗教は『我』の解説を説いて、唯物史觀的生活に凡てを委した爲に印度は無歴史の國となつた。で、『我』の無い唯物史觀、それは要するに無歴史の歴史と云ふことの外何の意味をもなさない。經濟史が人間の歴史である爲めにはそれはどうしても『我』の歴史であらねばならぬ。

經濟史が『我』の歴史で有ることが發見された時に、化粧本能の推移から來る塗料史、料理の進化から來る食物史、衣飾の進化から來る衣服史、曲線美の進化から來る建築史、メロヂーの進化から來る音樂史、之が皆經濟史の中に生きて來て眞の經濟史が出來る。今日書かれて居る經濟史は皆物品の歴史で有つて、人間の歴史では無い。凡て人間の歴史には發生的心理の印刻が無くてはならぬ。

回バログラフの間違ひ

英國の飛行大尉ホーカー氏の名聲は太平洋横斷の壯擧に據て雷の如く世界に轟き渡つた。氏が未だ飛行家に成つた許りの時であつた。一回大飛行を決行して自信のある程度の高さに上つたので得意になつて早速高度計を或研究所に送て檢査を頼んだ幾千位のレコードが得られたかと報告を待つて居たが來ない。大尉は少し焦れ氣味で飛行倶樂部の書記に電話で問合させた、すると書記が番號を呼だ相手が出るも遲しと。バログラフ(高度計)の高さはと聞くと一呎八吋許りとの返事に吃驚して『えッそんな事があるものですか自分は少くとも三萬呎以上だ思ふが』と憤り氣味で云ふと今度は何を御聞きになるのですかと云ふので書記は憤然として、バログラフの事を聞いて居るのだと云ふ、バログラフと云ふものは何か知りません私は花屋です、アスパラガスの事かと思ひましたで書記先生ギャフン。

(二) 社會主義の致命的缺陷

法學博士　戸田海市

一

社會主義其他何れの主義にしても、其根源を質せば人類に或る根本の要求が有つて、其の要求を如何にして滿すかと云ふとの政策を求めて居るに過ぎない。サンヂカリズム、マーキズムも、歸する處は人生に對する根本的要求である。政治上のデモクラシーも亦同じく人生の根本要求を捉へ、其れを充す爲めに使用されて居るのである。其の根本に横はる要求とは何か、曰く「自由」に歸着するのである。「自由」と云ふ事を世間では往々外面的に取扱ふ傾向がある。從て自由の要求とは何を意味するやに就ても、人々各々意見を異にして居るが、要するに自由とは各自の有する所の個性を、最も克く發展せしむる事に依つて、人類の共同生活に何等か貢献したいと云ふ事に歸着するのである。

然るに現在の文明社會に於て、此自由の發展を最も妨害するものがある。其れは即ち貧富の懸隔である。貧富の懸隔は今日に於ても尚且事實上封建時代と同じ階級制度を作して居る。富者の家に生れた者は當然社會の上流に立つ事が出來る、彼等が如何に無智無解であらうが、如何に風俗壞亂の事に出でやうが、依然として社會の上流に置かるゝ事が當然の如く看做されて居る。是れに反し人口の大多數は貧困の家に生れて、子々孫々自己發展の道を失はねばならぬと云ふ有様で、甚だ不自然極まる話である。此の不自然な階級制度も、下層民が幼稚な時代に在ては大なる不平ともならなかつたが、今日の如く社會が進歩して、中産階級以下の自覺と同時に、此の階級制度が極めて不正不公平なるものとして考へられるやうになつた。故に此の階級制度を除き、各個人に對し、公平に生存發展の均等なる權利を與ふると云ふ事が實現さるゝは、過去に於て封建制度の打破

されたと同様の意味であらう。此の要求を充す爲めに社會主義其他種々なる主義が生れたのである。

斯の如き主義の起るのは、政治上のデモクラシーが行はるゝ社會に於ては當然な事であつて、政治上のデモクラシーが、不自然なる階級制度を倒して起つたと同樣に、經濟上のデモクラシトも起らなければならぬ筈である。日本に於ても社會主義其他の主義の根本の要求は自ら存する譯であらう。

斯の如く吾國に於ても既に經濟上の固定的階級制度改革の要求ありとすれば、其れを充す方法を講じなければならぬ。此の慾求を充す最も大切なる事は、各人に自由發展の均等なる機會を與へる事である。然れども、政治、經濟、藝術、學問其他總ての生活方面に於て、各人の發展を强制的に均一ならしめんとするはデモクラシーの自殺である。人間は各人が各々發展せんとする要求を持て居るものなるに、其れを均一にするは人間の要求を殺すものと云はなければならぬ。

そこで强制均一の結果、各自の自由を奪ひ、其の發展能力あるにも拘らず、發展の努力を失はしめると、各人が爲す可き事をも爲さしめないやうになる。是れ實に社會に對するボイコットであると同時に社會に對する消極的反抗である。世間では積極的反抗を認めて消極的反抗を知らない、然れども消極的反抗は、各自を無自覺たらしめて社會を滅ぼす最も危險なものである。

二

人類には活動能力消費の要求がある。野蠻時代に在りて、衣食住の要求が單純であつた時代には、人間は戰爭などをして活動能力を消費して居た。然し乍ら漸々文明の進歩すると共に、物資の需要が多くなると、之に伴ふ經濟的活動に依り、活動能力の要求を充すと共に生産力が發達して來たのである。然るに現代の如く大規模の生産時代になると、人口の大多數は自己の活動要求を根本的に充す事が出來なくなり、從て不平不滿が起つて來る。之を出來得る限り人類の大多數にとりても活動慾望の根本的に充されるやうに改造しなくてはいけない。

世間では往々、分配を平等にする事に於て、勞働時間を短縮し、生産勞働の苦痛を早く切り上げ、活動慾望を生産活動以外に用ひせしめんとする者があれど、其れは物質消費の多くなつた今日の時代には出來ない事で、矢張り相當の時間生産勞働に服せしむるが當然である。

さうなると、生産勞働なるものを今日の如く苦痛とせしめず、寧ろ樂しんで活動慾求なる人間根本の要求に合せしむる如く改造する必要がある、是れが工夫されぬ間は如何に分配を公平にしても、今日の人類の不平不滿を醫する事は出來ないのである。此の意味を理解せねば現代の根本的要求を充す事は出來ない。

從來主張された社會主義は、此の點に就て甚だしき缺點がある、此の儘は到底何れの世界に於ても實行さるゝ事は難しいのである、社會主義者は、人類の物質生活をば均一にして、精神生活のみ自由に發展する事を許すと云ふのである、其の主張は要するに物質生活に於て人民を國家の奴隷となし、人民は主權者の命ずる儘に、各自分擔せる生産勞働に從事しなければならない。然れども其の精神生活には何等の拘束をなさないと云ふのである。即ち物質生活に於ける各人の發展を强制的に均一ならしめやうと云ふのである。

然し乍ら物質生活と精神生活とは決して離して考ふべきものではなく、例へば玆に物質生活の寒暑を凌ぐべき衣服類にしても、矢張り色彩、形狀、模樣の如き精神生活の要求に應ずる條件を具へなければ、人間は滿足するものではないのである。

だから今後の社會主義は現在の其れよりも一歩進んで自由なる制度を取らねば到底此の社會の進歩も人類の幸福も望む事が出來まい。

（三）合衆的報恩主義の提唱

法學博士　田島錦治

一

内務省では近來國民思想の統一を喧ましく唱へて居るが、人心同じからざる其の面の如しで、百人が百人各々異つた心を持つて居るのだから是れを統一しやうと云ふ事は難しい。然し乍ら日本國民には五千萬人共通の國民氣質と云ふものが有つて此

の氣質を善い意味に導いて行くなれば、即ち近來喧傳せられて居る彼の社會主義、あるひはインチビリアリズムの如き外來思想と、日本の現狀を調和せしむる一助となる事は疑ふべくもないのである。

扨て其の日本人氣質とは何であるかと云へは即ち吾が國在來の武士道である、目下の如く時局紛糾を極めた時、國民の胸の中に燃ゆる忠君愛國の思想である。

僕が近頃喜んで居る事は、今回の戰爭で思はぬ儲けをした所謂戰爭成金なるものが、自ら進んで其の利得を公共事業に寄附し、公益の爲めに使用する傾向の見へる事である。而も其れは格別他から敎へられたのではなく自ら進んで爲して居る、是れ即ち商人の胸底に潛んで居た武士道的精神の發揮されしものと信ずる。日本人は知らず識らずの間に國家及び社會の恩惠を感じ之に酬ゆるの義務を知つて居る國民であると云へるのである。

僕の知つて居る範圍で個人企業家會社や企業者の中にも隨分勞働者優遇の方法を講じて居る者が多い。現に先日も心易くして居る工場の番頭が訪ねて來て申すには、私の工場では純益金の三分の二は主人の收益とし三分の一は職工に配當する組織にしやうと思ふ、と云ふ話で有つた。中には怪しげな會社などが有つて何時の間にやら職工の積立金が消へてしまふ事があるが、確實に利益配當を職工にまで及ぼす事が出來るなら之れに優つた事はない。此の主人は決してピロフイトシアリングの講義を聽いたのでも何でもなく全く自發的に思ひついたのである。日本にも自發的の社會主義者もあれば又キヤピタリズムの人もあらう、然し乍ら今後は必らず斯の如き人が實業家中より現はれて日本人を指導して行くだらうと信じて居る。

政治上に於ても曾て流血の慘を見ずして憲法政治を見た吾が日本では經濟上にも外國の如くサンヂカリスズムやソシヤリズムの過激な運動に惱まさるゝ事なく平和に勞働問題なども解決されて行くだらう。其の爲めには勞働者自身も自發的に武士道の精神を忘れず、資本家或は學者は國家社會の恩惠を忘れなかつたならば其處に兩者間の調和が平和の裡に計られて行くのであると僕は信ずる。職工優遇法なども當然の道として講ずる、工場法なども自然の法則として遵て行く。社會政策である、慈善主義であると特別に考へなくとも他から見れば是れが實行されて居るのでなければならぬ。

然らば國家社會の恩惠と云ふのは何であるかと云へば、例へ

ば日本でも戰爭の影響で思はぬ金儲けをした者がある。然し是れは一歩進んで考へると國家が確立して居ればこそもうけたのである、若し日本が戰敗の國で有たなら儲けどころの騷ぎではないのである。意外の利得を獲たのは全く國家の恩惠であると自覺すべきである。近來土地投機が流行して居る、其の土地で儲けた人も、是れは社會が進歩した爲めに儲かつたのである、白耳義の如くに戰禍を蒙つた國で有つたなら地價は下落するばかりである、儲けたのは國家の恩惠である、と斯う自覺すべきであらう。

さう云ふ風な自覺が起つて來れば眞逆利益を專有すると云ふ譯にも行くまい、土地にしても政府が土地の改良を考へるとすると進んで自分の儲けた土地を提供するが善い、土地收用法などの適用を受けるやうな不體裁な事はあるべき筈でない。

二

外國にはコレクチブズム（合衆主義）と云ふ言葉がある。吾人は國家に對し合衆的に報恩し、同時に子孫に對つては合衆的に恩惠を施すと云ふ事で、此の合衆的（コレクチブ）と云ふ觀念が最も必要な事である。昔は忠臣孝子が多かつたが今日では其れが稀になつた、而して主從の關係なども昔は餘程道德的で有つたが今日では何れも面白くない、寧ろ野蠻な臺灣とか南洋とかに行けば却て昔の美風が殘つて居る、と慨歎する者が有るが是れなどは其の合衆的の意味の解らぬ時代遲れの言葉である、昔は個人的で有つた報恩の範圍が今では合衆的に擴大せられた事を知らぬ人の言である。社會が未開の時代には道德範圍が狹かつた。

今日では使用せらるゝ職工の數も數萬に達し主人も昔の如く只一人ではない、職工は社會全體から恩惠を受け社會全體を主人として居るのである。昔だつたら一人の親方が自分の乾分（雇人）全部を保護して居たが今日はあらゆる雇主が合衆的に職工を保護しなくてはならぬ、更に擴大して國家全體が勞働階級を擁護しなければならぬ、勞働法だの工場法だのは此の意味に於て作られたのである。同時に職工側から云つても職工全體が合衆的に國家全體に報恩して居るので有つて、今日尙ほ舊幕時代の親分乾分の關係を云々して未開地の臺灣や南洋などの眞似をしやうなどゝは全く時代を知らぬ者と云はねばならぬのである。

彼の同盟罷工の如きは勞働者が合衆的に恩を忘れた爲めに起るので、勞働者全體がアザーホールドして合衆的に國家の恩惠

を思ふなれば同盟罷工などは決して起る筈がない。勞働組合（トレイドユニオン）は最初は同盟罷工の機關として組織されたもので有つたが、今日では經濟的に道德的に勞働者の位置を進歩せしめる機關となつて居るやうな始末である。兎も角も使はれる者も使ふ人も總てが一致して自分一個の利益を考へず各自お互に恩惠を受けつゝある事を自覺すれば所謂社會主義の惡影響を恐るゝ必要はない。

僕は資本家と勞働者の關係を密接ならしむる爲めに利益の配當をなすが最も善いと信じて居る。然れども利益を餌にして職工の爭議をなすなどゝは最も危險な事で有つて斯う云ふ小策は合衆的報恩の觀念を破壞するものである。將來は必ずトレイド、ユニオンの組織が完全になつて需要に應じ職工の供給も按分的に行はれるやうになるだらう、其の爲めには何うしても實業教育を進歩せしめなければならぬ。

三

社會主義の如き外來思想と吾が邦の現狀とを如何に調和せしむ可きかと云ふ問題は甚だ重大な問題であるが、僕は今も云つたやうに合衆的報恩主義を以て解決したい、然し其處まで導くは中々一朝一夕の事では難しい。然し日本人には祖先以來の武士道的精神があるから教育の力を以て是れを啓發するのである、結局教育が最も重大な力である。

ある都市では生徒が先生に特別の恩惠を得ん爲めに父兄より種々の物品を贈與する風習がある、現に昨年末の事で有つたが其の都市の砂糖店で一人の萬引少年が逮へられた、そしてその少年は警官の前で、私は小學生であるが先生に贈物をしないと成績が惡くなる、然し自分の家は貧乏で贈物を購ふ資力がない爲めに、つい惡事と知り乍ら萬引を働いたのです、と極めて悲痛なる告白をして居る。是れは事實であるが、僕は決して一個簡單なる問題として看過する事が出來ない。斯の如く腐敗せる教育は僕の謂ふ合衆的報恩主義とは全然相容れないので有つて斯の腐敗せる教育界を改革するに非ずんば未だ國民の運命を教育の手に委任すると云ふことは危險である。

生徒と先生との關係は直接の贈物に依つて左右せらるゝが如く爾く單純なものではない、兩者間には國家社會が介在して居て生徒授業料を國家に收め、先生は月給を國家から得て居る。だから先生は單に自分の授業して居る生徒のみでなく合衆的に生徒に對する恩惠を施し生徒及び父兄はあらゆる教育者に向つて

合衆的に報恩をなすべきである。先生に贈物をするかはりに澤山の市税を負擔し或は教育費中に寄附をなし、教育家優遇の方法を講ずるのが當然である。

教育者の問題と勞働者の問題とを問はず、資本階級は一般的優遇の道を講ずるのが當然であつて恩惠と報恩とに制限や範圍が有つてはならぬのである。

此の合衆的報恩主義こそ、刻下の思想問題を解決する唯一の鍵であると同時に、外來の社會主義と在來の國民性との調和點であると僕は信じて居る。

(四)　社會主義は健全なる思想にあらず

法學博士　田中萃一郎

一

『地方凡例錄』卷の十一に『會津侯御領所には、老幼扶持と云ふて、八十歳以上の民、男女共、壹人扶持被下之。幼稚の者も孤は不及云、兩親有之も、極貧窮にて、大勢の子供養育難成者には、壹人扶持宛被下之。又八十歳に不滿共、鰥寡孤獨の類、病痾等にて稼の難成者には扶持を給ふ。則社倉米社跡米を以救之。年々村々を實意に悉く穿鑿有之事なり。先年御代官江引渡有之たる時も悉く申送り有之。元來正之卿時代領内老幼の手當有之故、御領所の分も、御伺の上領分同樣に老幼扶持を初られたり。都て常陸奥羽等の在々には生れ子を間引と云ふて、大勢出生すれば養育に迫り出產の時直に殺すことあり。會津領は老幼扶持有之故、其事を悉嚴敷停止せられ、實に養育難成者へは年數を限り扶持を給りて是を育つ。依て村の懷姙の女有之時は村役人改之、壹人も不間引樣に致世話との由、誠に善政の遺風可仰と共なり』とあり。この會津藩の老幼扶持は卽ち德川時代に行はれたる一種の社會政策にして全國各地に行はれたる類似の制度に就ては內務省地方局にて出版せる『民政史稿賑恤救濟篇』のうち

にもあまた記述しありて別に取り出でて云ふ可き程のことにあらず。余輩がこの大石久敬の記事を讀みて面白く感じたるは會津領にては老幼扶持の制度あるが故に間引の惡弊を禁じて善政を行へりと云へる處思想の順序なり。

二

佛國のチュギュイ教授は法律は畢竟するに社會的規範に過ぎずと云へり、其意は法律に權威あるは社會の實情に適するが爲なりと云ふに在り、ヘーゲルの所謂現實的は即合理的ならざる可からず。而して道德と雖も時勢の進運と共に變遷す可きは余輩の實に常に口にせる所なりき。而も墮胎の行爲に對しては絕對的に之を惡事なりと信じて疑はざりしも上文に抄出せる『地方凡例錄』の記事のうちに『大勢出生すれば養育に迫り出產の時直に殺すことあり』とあるを讀みて初めて瞭然として悟る所あり。獨佛諸國に於て兩兒制度が殆んど習慣となり物資饒多なる北米合衆國に於て五人以上の子女を有することを例外と爲すは或は兩親が子女の爲に享樂生活を犧牲に供することを好まざるが爲ならん。羅馬人の溺るるや決して他人を救助せんが爲に一身を危地に陷るるが如き愚を爲さずと云へり。この利己心の極度の發達は或は羅馬帝國の盛時を現出せしめたる根本の原因ならん。然れども國土の廣袤には限ありて國民の繁殖には限なく避姙は勿論墮胎も亦罪惡と認められざるが如き時節到來せずとは斷言する能はず。現に我國の人口增加を說きて海外移住の必要を唱ふるや教育ある一米人は人口增加を抑制せば可なるにあらずやと云へり。人口增加を抑制せんとせば避姙か墮胎二者その一を擇ばざる可からず。故に若し國家にして人口增加を必要とせば社會政策を行ふこと恰かも會津藩に於て老幼扶持を實施せるが如く爲さざる可からず。

三

社會政策は元來社會主義と國家主義とを互讓街合せしめたるもの、其の人口增加の勢を助け富國强兵の實を擧げんことを期するは當然の結果なり。然れども社會主義本來の主張は世界主義にあり、富國强兵何するものぞ、宜なり純眞の社會主義者が國家社會主義の如き俗論を唱へざるや。但しオーウェン一流の舊社會主義は即ち一種の社會改善論にして何人も異議なしと雖も、マルクスの新社會主義に至ては社會革命論にして祖國より放逐されて外國に流寓したる亡命者の所說なり、世俗と相容れ

す常に快々として樂まざりし不平家の所論なり、身に一定の職業なく徒に局外より事業界に批評を加へて以て高しとせる不良游民の意見なり、社會の實情に沒交渉にして他國の産業組織に加へられたる觀察をその儘に自國に移植せんとせる飜譯學者の主張なり。マルクス、エンゲルスが前世紀の四十年代の英國勞働階級を視察して立言せる所をその儘に獨逸に當て篏めんとしたる時代錯誤は夙に指摘せられたるが、日本の社會主義者はこの新社會主義創立者の過誤を反覆するを以て寧ろ得意なりとなすが如し、新社會主義の不健全なる思想なることはその亡命者の所說たり、不平家の所論たり、不良游民の意見たり、飜譯學者の主張たるに於て之を斷じ得可きが抑も哲學史上新社會主義の基調と爲すものは古典主義の反動として起れる浪漫主義なり、個人の活躍旺盛なりし希臘羅馬を棄てて宗教の權威思想界を壓倒したりし中古に憧憬するの思想なり。クロパトキンの『互助論』が中古の社會組織を嘆美せるが如き適切に之を證明するものなりと云ふ可し。而して古典主義の健全なるに反して浪漫主義の病的なるは學界自ら定論あり。かるが故に純正社會主義の評論に於ては余輩は敢て架設するの意なし。故に余輩は社會政策論者或は國家社會主義者と共に聊か茲にその主張の當否を檢せんとす。

四

今日我國の社會政策論者のうち學識に於て儕輩を拔けるは恐ふに東京高商の福田教授ならん。教授の雄辯健筆亦余輩の庶幾する處にあらずと雖も、余輩は我國に國家社會主義者少からざるもその理論の根柢に於ては福田教授以上の主張ある可しと思はざるが故に茲に聊か教授最近の所論如何と顧みるに『黎明會』の講演には社會政策論の出發點は生存權なることは二十年來の宿論なりとあり、又生存權の承認は社會改善の第一歩なりとあり。社會を構成する士女は果して社會に向て生存權を主張し得るか、假りに主張し得るとするもそは果して如何なる主張なるか。余輩は曾て生存權の意義に就て疑問を懷きて同學の教を請ひしに正當防禦と同一の主張ならんとの說明を得たり。茲に於てか余輩の疑惑は益す深きを加へたり。云ふまでも無く人の集て社會を爲し更に進んで國家を爲すや茲に初めて相互の自由は保證せらるるの次第にして國家成立せざる以前には放縱はあれど自由はなし。強者の權利行はれて弱者の生命は一日も安きを保つ能はず。國家成立するに至て初めて生命は保護せらるる次

第にしてこの意味に於ては國家は確に生存權を承認するものなりと云はざるを得ず。然れども失業者に非ずして精神上より將た體力上より勞働不能力者と目す可きものにして尙且國家に向て生存權の承認を求め隨て勞働權を主張し得べきか。近來は國家の私人の行爲の上に加ふる干涉も甚しく現に米國の諸州に於ては心身虛弱なる者、發狂人、大酒家、瘋癲、白痴、癲癇、又は救貧院に在りしものの結婚を禁じ、甚しきは瘋癲白痴にして病院又は監獄に在る者及び重罪を犯し改悛の見込なきものは殘酷ならざる方法を以て去勢す可きことを法律上規定したる處あり。國家にして眞に優種學の主張を容れ勞働不能力者を一人も存せざらしむるに於ては國民は生存權を主張し得べく社會も亦之を承認せざるを得ざらん。而も社會は勿論のこと國家に於ても共同生活に適せざるものを不問に附するの時に方て福田敎授の如く『生きて居る者は生かして與れろ、どうでも生かして與れろと社會に向つて要求する所の權利があるものと認めなければならぬ』と主張さるるのは社會にしてもし精神あらば迷惑至極であると搾眉することであらう。

蓋し前九世紀以來天賦人權の主張盛に行はるることとなれるが生存權の如きも天賦人權の主位に置かる可きものにして公民權の一に數ふ可きものにはあらざる可く、アントン・メンガーが之を社會權と名けて公民權と名けざりしも自から理由の存することならん。抑も生存權とは何ぞやと云ふに生命保持の本能に基くものにして而して之が維持保存に現世的と來世的との區別あるが故に饑餓と戀愛との別を生ずるなり、食い氣と色氣と云へば甚だ卑近に過ぐるが如しと雖も生存權の主張は食ひ氣と色氣とを滿足せんとするの謂に外ならず。天賦人權の行はるる自然の社會に於ては色食二慾の發動に向つて何等の制限をも加へざれど人相集て國家を爲すに於ては法律上之に對する規範の定まるあり、而して國家成立の結果文物進步する時は社會上に於ても相當の典禮ありて又桑中の樂を許さず。蓋し國家は人爲的制度なり、國家に於て主張し得る公民權は天賦人權その儘にあらず。然るにアントン・メンガーの生存權論一度我國に輸入せられてより國家は當然國民の食糧問題に就て老婆的干涉政策を執らざる可からずとの主張は當然のものなるかの如く解せらるるに至れり。國家にして若し人口の增加を制限するの權利を行使し得んにはこの干涉は當然加へられ得可きも國民無識にして生活難を思はず人口徒らに增加して食糧の產出之に伴はざるに於ては食糧の市價騰貴するも亦已むを得ざるに非ずや。殊に

工業者の利益をのみ念頭に置きてコブデン、ブライト一流の議論を唱へ食糧の市價をだに低減せば可なりと爲すが如き國家全體の利害を考慮す可き經世家の議論にあらず。今日の社會はその關係極めて複雜なり。その實狀を普く世人に熟知せしむるは急務なり、而も徒らに偏頗なる立脚地に於て煽動的言辭を弄するは最も愼まざる可からざる處なり。勿論余輩と雖も食糧市價の低廉ならんことは之を希望して已まざるものなりと雖も、唯生存權の主張よりして米價問題に對する政府の干渉を要求するの不可なることを茲に一言せんと欲するのみ。過般釜山に於て女教師兩人相抱きて情死せしとの記事も亦國家が生存權擁護の爲に適當の施設を爲さざりしが爲なり迚國家を責めんとするものあるか。苟くも二人の女教師の生命延長の本能に關する大問題なり、この場合に於て國家に責任なしとせば前年の米一揆に對しても何の同情の必要かあらん。要するに公民權としての生存權は國家の當然保護す可きものなるも國家に人口を制限するの權能を與へざる以上天賦人權としての生存權に對しては國家は何等の責任をも有せざるなり。換言すれば老幼扶持の制度を行へる會津領にして初めて墮胎の悪弊を禁じ得るなり。

五

次に有產階級と無產階級との階級戰の學說は元來社會主義者の主張にしてその所論を誇張せんが爲の陳套手段なることは社會主義者と雖も夙に之を是認せり。而して昨今福田教授はベルトランド・ラッセル教授と共に所有階級と創造階級の對立を以て社會の實狀なりとし社會は之を改造せざる可からずとの意見を反覆唱道して社會政策の骨子はこの點に在りと云はんばかりなり。然れども所有欲は果して非德にして享樂欲は果して美德なるか、今日の社會に於て節儉を說くは僞善家の所爲にして宵越しの錢を持たざるが新社會の道德なるか。貧富の差の生ずるは理財の道を守ると否とにあつて存するものなるに之を守るは愚にして之を守らざるものこそ賢明なりと云ひ得可きか、將た又日本は到底資本の量に於ては英米に及ばざれば率先社會を改造して共產主義を實行しボルシェー派の牛耳を握て英米に當らんとするか。余輩は如何にその說明の方法を換ゆるも階級戰の學說には贊成する能はず、少くも今日の日本に於てはかゝる學說の主張を以て有害なりと信ずるものなり。且勞働は創造なりと云ふが如き何の意たるかを解する能はず、勿論或る勞働は創造

ならん、而もすべての勞働は創造にあらず、精神上の勞作にても翻案もあり剽竊もあり否翻案剽竊にても差支なき世の中に於てはすべての勞働は創造なりと云ひ難し。要するに勞働は必ずや加工たらん決して悉く創造にはあらざるなり。蓋し今日の日本は最も資本力の乏しきに苦めり。現行の所得税法の如く仕舞ふ大屋に有利の地位を授くるの得失は別として、勞働は創造なりと云ふが如き言論を以て勞働階級にある可きの時代には非るなり。

然れども余輩と雖も敢て社會政策無用なりと云ふにはあらず、而もその主張の根柢を正義の概念に求めんとするものなり。勿論正義の標準は主觀的に之を求むるの外なく、資本家の正義は必ずしも勞働者の正義と相一致せずと雖も、而もこの陳套の主張こそ最も勢力あるものにして思ふに何人も之を爭ふ能はざらん。而して佛國のブールジ・ア氏に由て二十有餘年前に唱道せられたる協同思想は社會問題解決の標語として最も適切なるものなり。抑も此社會協同思想は社會主義者が勞働階級の權利をのみ主張するに急なるを見て之に對抗して唱道せられしものなりと余輩は年來確信して疑はざりしも獨創の見解に富める學者の間には社會協同思想は社會主義者の主張なりと信ぜられつゝありと云ふ。されど余輩はかゝる問題に就ては必ずしも獨創の見解を信ぜず、ブールジ・ア氏も社會協同思想は基督社會黨に出て獨逸經濟學者に由て實證哲學派に由て何れもその首唱者たることを要求せらると云へるが、要するに社會主義者の權利の力說に對してその義務を指摘せんとするものなり、否すべての社會の要素に向てその義務を責めんとするものなり。雲井龍雄の作なりと云はるる棄兒行の劍舞を見る毎に余輩は日本人の利己主義は愛兒を棄ててなほ且顧みず水中に人の溺るるを救はざる羅馬人以上なるを思ふて且驚き且悲めり。日本人の如き利己主義の思想甚しき國民には社會協同思想を鼓吹して社會政策を實行するは實に刻下の急務ならん。而も社會の成層歐米の如く甚しからざる日本に於て歐米の學説を直輸入して勞働階級を煽動するは余輩その可なるを知らず。況んや社會主義者の如く貧民の窮乏せる倫理的原因を不問に附して社會の革命を期するに於てをや。要するに階級の區別存せず男女の活動自由なる今日に於て個人の倫理的責任を度外視するが如き言論は余輩は毫も之に贊同するの理由を認めざるなり。

(五) 社會主義の歸結

阿部秀助

一

我等の多くが社會主義に對する態度は「憧憬」にあらずんば「憎惡」である、然かも前者は、ともすれば認識の缺乏を意味し後者は或心を以て事に蒞むの嫌がある、論者は出來るだけ、以上の兩態度から遠ざかつて、近世文化的生活の一大暗礁であり迷宮である社會主義の意義及內容を考察してみたいと思ふ。

近世社會主義の運動上に最も大なる勢力を扶殖したものは「カール、マルクス」其人である、勿論、彼以前に於ても一種の社會主義的思想は英、佛の諸國に存してゐたのであるが、然し此思想の特徵とする處は多く「ユトピヤ」式で、之れが宣傳者も亦た之によりて何等鞏固なる政治的勢力を求むることが出來なかつたのである、然るに「エンゲルス」によつて最も忠實な共力者を見出した「マルクス」は單に多數の人心を支配するに足る社會主義的思想を構成したのみでなく、同時に彼によつて組織せられた國際的な社會主義の運動は最近五十年間を通じて歐洲諸國に於て著しく其勢力を增加するに至つたのである、現に獨逸の經濟學者「ドクトル、ゲルハルト、シュルチエ、ゲベルニッツ」の如きは哲人「カント」と「マルクス」とを比較した中に「カントは獨逸の文化生活に於ける典型的な英雄である、彼の西部歐洲に於ける啓蒙的思潮の包括者であり征服者である彼の英名は獨逸魂の世界的征服を意味するものである、然るに十九世紀の後半期に於て、一人の獨逸人があつて、其初めは少數の範圍に在るも迅速と明々白々とを以て世界的統一の實を擧ぐるに至つたが、其人が「カール、マルクス」である、彼れの名聲の下に彼以前の社會主義者の名は曚朧となり彼等の「ユトピヤ」は今や笑の種となり、獨逸の社會民主黨は彼れの名によつて十年を經過せざる中に國際的社會主義の覇權を握り、彼れの著書は神聖視せられ、彼れの思想は正系のものと認められ、彼れの說を信ぜざるものは破門的の態度を以て迎へらるゝに至つたのである」と云つ

て居るが、斯くの如き「マルクス」の地位は論者が彼れを以て研究の中心とする重要な理由で更に第二の理由とする處は、最近我邦に於ける社會主義論の如きも十中八九、「マルクス」を離れて之れを理解することが困難なる點である。

二

論者の見る處を以てすれば「マルクス」は社會主義に「魂」を入れることを忘れた男である、然し斯くの如き輕卒き態度は彼自からの罪と云はんよりも、寧ろ彼れを導いた運命の罪であると思ふ、吾人が「マルクス」の全生涯を回想して、染々と感ずることは、所謂「體驗」と「哲學」との關係である、即ち我等が彼れに就きて第一に體得す可きことは彼れが中世以來、放浪と迫害との歴史を繰り返した猶太人の子であると云ふことである、蓋、中世に於ける猶太人の團體生活は主として宗教的意義を有したもので、只だ當時の宗教が民、刑兩方面に關した法律と內部的關係を有してゐた結果よりして、自ら團體は其所屬者に對して法律上、之れが主裁者たる權能を發揮したものである、而して金貸業の最も盛大なりし時代に於て、團體を組織せるもの丶悉皆が此の業を營みしものでなくて、彼等の中には彼等の日常生活上に必要な手工業に從事したものがあつたと共に、又た一方には全く錢利の問題から遠ざかつて專心猶太法の研究に沒頭せしものも少くなかつたのである、故に中世に於ける猶太人の團體は絕對的に金貸業者の經濟的組合と稱することは不可能であるが、然し、本事業が殊に彼等にとりて重要視せられたのは、彼等の經濟上に於ける滅亡が同時に彼等の社會的滅亡なることを意味せしによるのである、蓋、團體其者の納税力を出來るだけ豐富ならしむることは彼等が全力を擧げて務めた處であつて、之れが爲めに多大の犧牲を拂ふことを辭しなかつたのである、例者、或團體に屬する一二の富豪に巨額の納付金が强迫的に命ぜられた場合には、其團體に屬するものは總て之れを負擔することを常としたのである、何んとなれば、其團體內で大なる納税能力を有するものを弱くすることは、全團體の損害を來たすが爲めである、斯くて皇帝、諸侯、都市の誅求に對して絕えず自己の納税力を涸乾せしめない爲めには出來るだけ他に經濟上の財源を求むることが必要で、即ち彼等にとりて金貸業なるものは基督教徒によつて奪はれた資金を再び彼等の懷中に復歸せしむる方法である。而して此方法は當時に於ては極めて發達したもので大組合と稱せらる丶ものは多きは十人、少くも三人以

上の投資家から成立して、其繼續時期は長くて一年、又、時に特定の金融市場の開設時期に限られたこともある、其他、各都市に於ける猶太人間に相互の競爭を禁じた如き、遠隔の地に對する支拂を便にする爲めに一種の手形を使用したが如き、殊に斯くの如き組合の變體として認む可きものには屢々基督教徒が自己の宗法を犯して此組合に加入した例證も少くないのである、然かも斯くの如きは勿論、變體で、其本質に至つては依然として猶太人自からが自己の生存を全ふせんとする本能の發現である、即ち猶太人が金融に對する狂熱的な態度は一方には彼等が此者の魔力を理解せしと共に、更に自己の生命を全ふする救世主は只だ此者のみと信ぜしを以てである、何んとなれば、當時にありては、只だ金錢のみが彼等を壓迫者の手から救出す力を有してゐたのである、彼の十一世紀に基督教徒の迫害の爲めに悲慘な運命に遭遇した一「ラビー」の言に「基督教徒は暴力家である、只だ此暴力を制し得るものは一に金錢のみ」と、彼の經濟上の滅亡は同時に社會上の滅亡を意味すとなす、中世猶太人の心的內容は生れながらにして既に猶太人たるの運命を有する「マルクス」にとりては、其唯物的史觀の根本的基礎を構成せしものである。

三

由來、歐洲の文化生活と相入れざる運命の下に生れた「マルクス」には階級的鬪爭と物的破壞とは彼れにとりて最大の希望であつた而して此精神的熱火をして更に熾んならしめたものは彼れの時代に於ける彼れの搖籃たる「トリエル」市の狀態であつた、即ち同市は數ある獨逸の都市の中で、最も古き歷史を有するものの一で、此都市が千七百九十四年に其附近の「コブレンツ」と共に佛蘭西に占領せられたことは、市民をして一時、自由の空氣を呼吸する機會を見出さしめたのであるが、それも束の間で、次で實現せられし巴里條約は何事も「ビスマルク」の所謂下士官的國民たらしめずんば止まざる普魯西の領する處となつて、市民の幸福は掠奪せられ、殊に此市に住する猶太人は基督教に改宗せざれば一切の官職に就くを禁ぜらるゝに及んで當時有名な法律家であつた彼れの父は自己の地位を維持する爲めに、已むを得ず改宗するに至つたのである、而して自己の最も敬愛する父の精神的自由を奪つた殘忍な處置に對しては、彼れは生れて二十年後に於て最も激烈な反抗文を公にするに至つたのである、否な單にそれのみでなく彼れの全生涯は或意味に於て

此時代の不快なる印象に對する回答であり、復讐であつたのである、斯くの如く冷き搖籃の中に孕くまれた彼れに調和的な人生觀と世界觀とを與ふ可き使命を有する當時の哲學はさながら歴史を語る木乃伊に外ならなかつたのである、論者の見る處では、獨逸哲學の陷り易き弊は動もすればそが講壇の哲學たる點である換言すれば豐富なる經驗なき青年學徒に對する說明の科學たるに甘んずる點である、殊に「マルクス」時代に於ける同國の理想主義は其時代の現實的狀態を改造し指導することに全く無能力であつたのである。斯くて此思想を墓場に齎らすの時代が到來し、「ヘーゲル」の極左黨は之れが導師で「ストラウス」の基督傳と「フォイエルバハ」の基督教の本質とは之れが引導であり之れが輓歌であつたのである、而して當時心中の寂寞を感じた「マルクス」が其時代の一勢力であつた佛蘭西の自由主義及社會主義に憧れたことは「スタイン」の著書である「現時の佛蘭西に於ける社會主義と共產主義」が彼れに與ひた感化の大なりし點に於て知るを得可きである、又、彼れが佛蘭西革命の非國家主義的雰圍氣の中にあつた巴里を稱し事實は千八百四十三年に彼れが共友「ルーゲ」に與ひた消息中に「哲學の古き學堂、新世界と新首都」と記せしによりて察するを得るのである。

四

「マルクス」の思想的基礎を築いたものは單に以上、述ぶるが如き猶太人たる運命と、普魯西主義の壓迫と、唯物的な佛蘭西文化の影響のみでなくて、更に他の大なる環境が彼れを包圍したことである、即ち當時の獨逸に比して遙かに資本主義の沃土であり、且つ貧富の懸隔が一種の社會的革命を生まんとせし英國の首都たる倫敦に前後、七ケ年に至る放浪生活の後、辛じて安命の場所を見出し茲に「資本論」の大著に筆を染むるに至つたことゝである。

千八百六十六年九月三日、萬國勞働者聯合會の例度の大會が瑞西の「ジネーヴ」に催された際、「マルクス」は其著資本論第一卷に餘力を傾倒していた結果、倫敦を去ることが困難で、彼れは當然其友「クーゲルマーン」に與ひた消息の中に「自分が、今着手中である著書の勞働者階級に與ふる効果は、自分が「ジュネーヴ」の會合でなす演說よりも遙かに大なるものである」との意を洩したのである、但、一面から觀察して「マルクス」が此會合に出席しなかつたことは反對派の乘ずる處となつて現に佛 伊、兩國の代表者中には婦人及未成年者の勞働問題に對して獨逸

方面の一派と相容れざる狀態を呈したのである、即ち後者が此問題に贊意を表せしに對して、前者は家內工業以外に之れが加入を悅ばず、斯くて次回の會合には兩派の軋轢は益々甚しきを來たし遂に國家及之れが權力の存在を公然否定する徒輩の中には相率ひて「バクニン」の周圍に集まり、「ハーグ」會合の際には彼等は熾んに「マルクス」を攻擊したが、然し同會議は別に之れが爲めに議事を變ずることなく。終に左の決議即ち「勞働者の自由を求むる我等の戰は我等をして一箇の政黨として合同し、斯くて以前の黨派から區別せらるゝことが必要である、今迄、吾人は全勢力を經濟戰に集中したが、吾人は同時に農業家及資本家の政治的勢力に對して吾人の勢力を集中することが必要である」と云ふことを可決したのである、而して前に述べし兩派の衝突は「バクニン」の一派が萬國勞働聯合會から分離することによつて終りを告ぐるに至つたのであるが、「マルクス」か直接、勞働運動から其身を遠ざくるに至つたのも、此際のことである但、彼れは當時獨逸に於ける無產者階級の指導者であつた「ラサム」「ベーベル」、「リープクネヒト」とは依然として其關係を維持していたと共に、一面、政治上或は個人的方面の反對者に對しては熾んに論駁を試み、又「ニコラス、ウチン」が彼れに供給した材料を利用して、彼れは「エンゲルス」と共に南歐方面に於ける無政府主義に對抗して堂々たる論陣を張つたのである、其後彼れは一二の實證主義者（殊に懇意であつたのは、當時民主主義の新聞「ベーハイブ」に關係していた「ベアセレット」教授であつた）に近づく以外は、殆んど餘日を自己の著作に費し、時に一、二時間を寄書家として關係せし、紐育「トリビュン」に捧げたことがある、彼れは時として自分の訪問客に對して他の問題は一切口にせぬ程。自己の著作に沒頭し、又、彼れは日曜日を家族と公園の散步に費したのであるが、但、かゝる際、終始自己の專攻問題のみを考えし結果、總て附近の光景等に毫も其注意を拂はなかつたことが屢々あつたのである、又、彼れは時に數週間或は數ケ月を經濟史的研究殊に土地所有權發達史に費したことがある、勿論、此研究は彼れが目的とした研究には間接の關係を有するに過ぎなかつたのである、彼れは又た數學の研究に沒頭したことがある、殊に當時盛大ならんとした經濟學の數學的研究に迎合せんが爲めに微分及積分を研究したのである、更に彼れが經濟學殊に英國の經濟書に對する造詣は非常なるもので多數の點では獨逸の經濟學者「ロッセン」教授に匹敵し其結果、「マルクス」によつて其眞價を發揮した經濟學者も少く

ない、即ち「ペチー」の如き「ゴドウヰン」の如きは其主なるものである、然かも前後一年を隔てゝ彼れの最愛の夫人と長女とが相次で世を去りしことゝ彼れが過度の勞働とは著しく其健康を害して、彼れは千八百八十三年三月十四日自己にとりて第二の生命たる資本論を草せし「テーブル」によりて瞑目せり、生前彼れを最も理解せし「エンゲルス」の記せし中に「多分、醫術で彼れの命は尚ほ二三年を惹止めることが出來きたかも知れぬが、然し斯くの如き存在は「マルクス」の堪ゆる處でなかつたと思ふ自分の事業を完成することが出來ぬことの意識を以て生活することは何等特別の苦痛なくして永劫の浪に葬らるゝに比すれば此上もなく苦痛である」と。

以上述ぶるが如き、體驗と環境とによりて築かられた「マルクス」其人の四個の大建築物は社會的な價値に對する虚無主義と唯物史觀と餘剩價値論と政治的社會主義とである。

五

「ウヰルヘルム、リープクネヒト」が「マルクス」の知遇を得た初期のことである、彼「マルクス」は自然科學が今、當さに新しき革命に對する準備をなしつゝありと信じたと共に十八世紀に世界革命を惹起した「汽力」なる主權者の勢力が失墜して、其代りに遥か偉大な革命者たる電力が其地位を占む可きことを語つた其際、彼れは熱烈な意義で數日前彼れは倫敦市の目抜の場所である「レゼント」街に汽車を運轉せしむる電氣機械の雛形が一般公衆の展覧に供せられたことを告ぐると共に更に進んで叫んだ言には「今、既に問題は解決せられた其結果は蓋、計り知り得可からざるものがある、經濟的革命の進展する途に政治的革命は勢ひ其跡を逐ふことになる、何んとなれば後者は單に前者の表現に過ぎないのである」と、斯くして彼れは自然科學、機械學の進歩や、世界共者に對する概念的說明や、殊に唯物史觀と稱せらるゝものに就いて平素の懷抱する處を述べたのであるが當時、彼れが自己の所信を直截に述べた結果にや、「リープクネヒト」は自己の多年の疑問は宛ら長閑かな春の光に照されし淡雪の如く消え去つたと云つてゐる、更に「マルクス」及彼れの一派が如何に自然科學に憧がれたかは其著書の明かに吾人に示す處で、例者、「マルクス」は其資本論の卷頭に於て經濟的發展を自然的發展の史的過程と見做した如き或は資本主義的生産の法則を自然法として說明せしが如き、更に史的自然法の語は彼れが屢々繰り返した處である、又、後日自然科學に親んだ「エ

ンゲルス」の如きも「フォエルバハ」の唯物論の缺點は彼れが近世的な自然科學に近づくの機會を見出し得なかつた點であると云つてゐる、要するに自然科學は「マルクス」一派にとつて革命的意義を有する科學と信ぜられてゐたのであるが、然し彼等の自然科學に對する態度は後の「ベルグソン」及「ポアンカレー」に見るが如き透徹的のものでなく「マサリック」(現時「チェック、スロバック」の大統領)が云たように單に一研究法上の片言(Wau Wau)に過ぎないのである、現に「マルクス」は吾人の知る範圍では何等自然科學の修養を積んだものでなく、「エンゲルス」に至つては一、二の點に就いて自然科學的知識を有せしのみで、事實上、自然科學的研究や自然科學的思索は我等の彼れに就て見出す能はざる處である、若夫れ「カント」の自然科學に對する態度を以て「マルクス」のそれに比すると、我等は後者に就て何んとなく輕薄な態度や皮想や見解を見出すのである。斯くて其皮想な見解は宗教を以て單に有產者が一般人民に嗅かしむる阿片と見做し、哲學無能論に於ては「フォエルバハ」に共鳴し、玆に一切の文化的價値を否定するに至つたのである、實に彼「マルクス」は近世の思想界が產出した一種の虛無主義者である。

六

「マルクス」派の或者に於て、今尙ほ金科玉條として信奉せらるゝ唯物的史觀更に適切に云へば經濟的史觀なるものは、必ずしも「マルクス」其人の創見ではない、既に「サン、シモン」の如き晩年の著書中に產業の進步發達を以て歷史の決定的要素と見做し、其他、彼れと其說を同ふする「ミーネ」、「ギゾー」の徒の如きも何れも或時代の思想制度等を以て當時に於ける經濟的狀態の反影となし、總ての法則中、所有權に關するものを以て最も重大なるものと見做し、彼の政治的鬪爭も結局之れによつて實現するものと認めてゐるのである、又、「プルドン」の如きは國民經濟學を以て歷史解決の鍵となし、即ち後者は事實を前者は之れが原因を提供するものとなしてゐる、斯くの如きは明かに「マルクス」以前に於て既に佛蘭西思想の中に唯物的史觀の潜んでゐるものを表現せるのである、而して彼れは唯物的史觀に就いて幾何的に發達せるは、「プルドン」の「不幸の哲學」に對する答辯とも見る可き「哲學の不幸」と題する書で、更に綜合的に發展せられしものが「エンゲルス」の協力の下に成つた世に有名な「共產主義の宣言書」である。而して之れが主要な點を概括的に

述べると、總ての歷史は階級戰の歷史である、現時の歷史は有產階級と無產階級との鬪爭の歷史で、而して階級別は或經濟的生產及分配狀態の結果で、之れによつて又、統治被統治關係も規定せらるゝのであると、殊に彼れは千八百五十九年に公にした政治經濟學批判の緒言中に人類の意識が其存在を現定するのでなくて寧ろ反對に社會狀態が其意識を規定するのであると論じてゐるのである、若、「マルクス」にして斯くの如き確信の上に立つとせば、其は到底史的生活を理解することと不可能であると思ふ、今須らく我等の史的生活なるものが果して如何にして理解せらるゝやに就きて考察するに、先づ之れが第一は「見方」の問題である、既に「ベルグソン」が論破した如く、我等が普通認識する方法は所謂、對象の周圍を廻りて觀察する方法で、例者、小供の娛樂用に供せらるゝ獨樂の運動を心棒を中心として觀察することも出來れば、又、其一邊より見ることも出來るのである、斯くの如く種々樣々の見方があるので、隨つて之れが表現も異なつてくるのであるが、然し以上の場合を通じて、之れを觀察する人が常に獨樂の外部に立つて之れを觀察せる點は同樣である、而して此見方は自然科學の見方である、即ち此見方の特色とする處は、常に一定の立脚地よりすると、其表現が「ベルグソン」の云つた如く常に象徵的たる點である、我等は斯くの如き見方によりて歷史は決して理解せらるゝものにあらざることを主張するものゝ一人である、何んとなれば我等の歷史は石塊の歷史でもなければ花瓣の歷史でもない所謂人間の歷史である、然らば人の行爲とは如何。自分が今、左手を動かすとする、此運動を外邊に立ちて見てゐる人の中には、或は手先の點から見てゐる人もあらう、又、それと異なつて自分の體の他の部分と比較して見てゐる人もあらう。然し、かゝる見方の表現のみでは自分の手の運動が何の爲めにやられたかと云ふことは充分明かに說明せられぬのである、何んとなれば第一番目に動かした時と第二番目に動かした時とは自分自身の氣分もちがふし、加ふるに各次の動作は多くの場合を通じて意志の發作である、而して意志が獨創的であることは吾人の行爲をして一時的個別的たらしむることになる、歷史が學問上に於て尊ふ可からざる權威を有するは此點に存すると共に、又、歷史研究の困難なる點も此處に存するのである、斯くの如きは歷史研究上第一の方法は不完全にして、更に「ベルグソン」の所謂沒頭の方法を以てしなくてはならぬのである、即ち目的物の中に沒入して、其物と同一の心的狀態になつて之れを觀察することである、併

大なる史家と稱せられた「ランチ」は既に「ベルグソン」以前に之れが個中の消息を體得して歷史研究上に「同感」の必要を力說してゐるのである、又、今は故人となつた有名な心理學者「ミュンスターベルヒ」が米獨交換教授として伯林大學にやつてきて去るに臨んで我等に告げた中に「意志自由の問題に對して心理學的觀察は充分な解決を與ふるものでない、何んとなれば、吾人の意志は概念的產物にあらず、意志と意志との關係は決して之れを記述すること能はず、只だ同感し得るのみである、想ふに行爲の意志は人類歷史の動力で、歷史上には何等法則の與へらるゝことなく只だ人格の理解あるのみ」と云つてゐるのである、我等は更に他方面から史的研究の意義に就きて考察するに當人が歷史を研究するには自己研究の目的に適合するように材料を現實界から撰擇する必要がある、試みに自分が世界史を編纂するとする、此場合に於て何故に歷山大王の遠征は重要な史實たるを得るか、之れに反して權兵衛が種蒔は何故に史家の顧みる處とならざるか、同じく人類社會の現象である、然かも同一の取扱を受くること能はざる理由如何玆に現象其者と史實との差別が生じてくる、即ち史實とは價値批判の門を通過した事實で、現代哲學として最も有名な「クッフルト」は其著自然科學概念構成論の中に「價値に對する目的物の關係は歷史上の叙述に於ては概念的に分離す可からざるものである」と云つてゐる然らば價値とは如何、價値は外界に存するのでなく目的に向つて努力する意志や欲望を離れて之れを理解することは殆んど不可能である、即ち此點より見れば歷史は價値系統に屬するもので自然科學的な法則的なものでない。

要するに「マルクス」其人の唯物的史觀は經濟的一元論の上に築かれた非現實的な歷史哲學に過ぎないのである。

七

以上、述ふるが如き唯物的史觀と共に、「マルクス」が二大發見の一つと稱せらるゝものは彼の餘剩價値論である「エンゲルス」は此學說に就いて次の如く語つてゐるのである、「過去の社會主義は既存の資本主義生產方法及其効果を單純に惡制度として拒否せるのみ、然かも此場合に取扱はる可き問題は一面、之れが史的關係、或時期間に於ける之れが必要と更に之れが衰亡とを描寫し、他の一面に於ては常に潜在せるの內的性質を露はさゞる可からざることである、斯くの如きは實に餘剩價値論の發見を促した所以である、即ち此學說の吾人に示す處は無數の

勞力を我物とすることが資本主義生産の根本的基礎であると共に、之れによりて勞働者の勞力掠奪の存することである」、然かも「エンゲルス」によつて稱へられた餘剩價値論を明白に理解することは決して吾人にとつて容易の事業でない「マルクス」自身は彼れの價値論に對する理解が困難なことを餘りに其敍述が抽象的である點に歸してゐるが(「マルクス」資本論(第一版)第一卷序言參照)然し、實際は彼れの價値論其者が一種の謎であることである、換言すれば同一の著者によつてなされた資本論の第一卷と第三卷との間に矛盾の存することである、而して彼「マルクス」が餘剩價値論の根本的基礎を明かにしたのは資本論の第一卷で、これは千八百六十七年即ち著者の生前に世に公にせられたものである、次ぎに第二卷は彼れの最後三年目即ち千八百八十五年に公刊せられたもので、其内容は第一卷と同一である、之れに反して著しく異なつてゐるのは千八百九十四年に出版せられた第三卷である、(一時彼れに心醉した「ゾムバルト」教授の如きも其「マルクス」論の中に「犀利な理解力の缺乏は「マルクス」の著書の到る處に吾人の見出す處で、殊に彼れが概念を構成する場合に最も多く其弱點が露出してゐる、彼れは殆んど定義付けることなかつた、彼れの概念は屢々其内容多種多樣で同時に不透徹である、即ち價値、餘剩價値、資本、工場、經營工業上の豫備隊、集積、集中、困窮其他の諸概念は何れも嚴密なる意義を缺けり」と云つてゐる)但此矛盾論に就いては何等其間に矛盾を認めずとなす「エンゲルス」の說と、それに反對する矛盾說と(「ベーム、バウエルク」、「コモルチンスキー」「チール」「ベルンスタイン」、「ツガン、バラノウスキー」)更に以上の兩者を折衷せんとする「ゾムバルト」「シユミツト」「リーブクネヒト」等の說があるが、然し、經濟上の學說は數學の公式と異なつて其「見方」と經驗材料の蒐集方法とによつて如何樣にも論ぜらるゝのである、只だ吾人が此餘剩價値論の根本的要素として認めざる可からざることは此學說が全然唯物的で、吾人の生產的過程に於ける精神的作用を無視し、所謂、經濟上に於ける Kopferbelt を輕視せる點である、斯くて「マルクス」以後の革新派が「カント」に歸る可きことを叫んだのは社會主義としては當然の過程であり、自然の運命である。而して吾人が曩きに「マルクス」は社會主義に魂を入れることを忘れた男だと云つたのも、此點を指したものである。

八

普通、「マルクス」派の多くは生產的手段の社會化(社會的生產の計畫的組織の爲めに生產的手段を私有狀態より公有狀態に移すこと)を以て社會主義と見做してゐるのであるが、然し生產的手段の社會化は單に之れが手段であつて目的ではない、少くとも最高の目的ではない、(若、生產の社會化を以て社會主義なりとせば、今日、此派が敵視せる資本主義的企業例者彼の大なる「オールドハム」紡績會社の如きは其實、會社の株券は勞働者の多數によりて占めらるゝ事實を如何に觀ずるや)眞に最高の目的は「メンガー」が云つた如く一般民衆の個人的利害關係を國家的行動の最高の目的に供することである、而して過去の社會主義者が試みんとせしが如き經濟的改造は單に吾人の社會的生活の一隅を破壞するのみで、同時に吾人は他に三隅の存することを知らなくてはならぬ、況んや社會主義其者の究極目的が一般民衆の幸福にありとするならば彼等は破壞の後ちに建築の責任の存することを忘れてはならぬ、吾人が猶太人根性の生產物たる革命的社會主義を以て滿足すること能はざる點は彼等が單に破壞的運動のみに興味を感ずる仕事師たる點である。

建設の社會主義、——社會主義の理想化、之れ實に論者が現時の社會主義に對する衷心の要求であり、渴望である。

(六月十五日向陵の寓居にて稿了)

(六)社會主義の長短

早稻田大學教授　杉森南山

(一)

一口に社會主義とは言つても、其內に樣々の種類が發達して來てゐる。けれども最も簡略に其要點を摘出するならば、土地資本及萬般の生產機關を國有若しくは公有にすることを直接の目的とする運動である。勿論國といふ事は社會主義者の必要條件とする處ではない。或は直ちに國際的に經濟制度の改造を企てる社會主義者もあり、或は先づ國內に富の產出及分配の改整

を成就した後に國際的に其運動の手を延ばすといふ方針を執る社會主義者もある。又國有或は公有と言つたけれども、有する事が目的ではなく、管理運營することが目的である。最近迄の歴史をいふならば大體に於て無政府主義、國家社會主義、それから産業組合社會主義の三通りに大別することが出來る。無政府的社會主義は現在に勢力を有するものではない。國家社會主義が最近時の社會主義を代表して居る。産業組合社會主義が殊に英國を中心として國家社會主義の向ふを張つて將來を意氣込んで居るのが目下の實狀である。併し社會主義の眞實相は特殊の學說や改革案に存するよりも一種の傾向たる處に存する。學說や改革案は寧ろ符徴に過ぎない。一七七六年の米國の獨立及殊に一七八九年の佛蘭西革命以來の近代生活の一大趨勢である處の所謂個人主義的及民主的精神の一ツの現はれが社會主義であると見てよい。産業組織經濟制度方面に於ける近代の個人主義的民主的精神の發現が卽ち社會主義運動であると見てよい。所謂民主々義が其唱道する者自身の多くが意識して居るよりも深い根柢を、その與に大勢として扣へて居るが故に、幾多の批難と壓迫とに拘はらず生きた題目となり續けて居る如くに、社會主義も實は社會主義者自身が必ずしも明白に意識して居ない尻押しが文明史的に存在し居るのである。

（二）

世間は協力と競爭の舞臺である其協同に組織を與へて之を一層有効的な經濟的なものとなし、又競爭に或程度の制限を附與して全體の協力の邪魔とならぬ樣にする必要を、人はその究極の目的たる個性の保護及伸展の爲めに、或は言ひ換へるならば生活の保護及發展の爲めに經驗と考慮とに依つて敎へられた。そして其必要を滿たす最有力の方法として制度といふものを作り出した。大抵は旣に存在して居る習慣を基礎として、夫れに多少の主義方針及組織を完備させたのが制度であるけれども、意味からいふと今述べた樣に、協力を助成し競爭を調節制御する目的にむかつて、社會を構成する人々の共通意志に依つて作られ且維持されて居る方法が制度なのである。經濟上産業上或は富に關する制度と雖も、この原則に支配されて居る。生活を制度の犧牲とし、若しくは奴隷としてもよい筈はない。制度と生活との關係が不自然不當然になつて居るのを發見した結果が佛蘭西革命であつた。階級の故に、卽ち出生の故に政治的及經濟的に社會上の特權の有無大小が定められて居るのに憤慨して、

功績本位、能力本位の制度を要求した聲が佛蘭西革命の聲である。貴族であるから、又僧侶であるから納税の義務は免ぜられて、支配者といふ權利だけを享樂する。又其反對に百姓町人であるが故に偏へに重税と苦役とを課せられて、參政權も所有權も殆ど認められて居ないといふ當時の制度に改造を施そうとした道徳的意義が佛蘭西革命の中に含まつて居る。序でながら注意して置くが、貴族は其始め國防の任務を引受けた故に免税の特典に浴した譯であつたが、其後軍隊組織に成つて貴族の子孫は免税に値ひする原因を自身には持つて居なかつたのである。又僧侶にしても、其始め彼等は赤貧清貧であつたが故に免税の特典に浴したのであつた。其後彼等も非常な有産者になつて免税に相當する理由を旣は失つて居たのである。

（三）

十九世紀の初めに於ける産業革命が一ツの機會となつて、工場の急速の發達、それに關聯して産業の規模が擴大して、資本家と勞働者といふ相對立する二ツの階級が顯著なる發達を始める樣に成つた。勿論産業革命に機會を與へた一ツの原因は蒸汽機關の發明であつた。即ち從來の手工に代ふるに機械工業を以てするに至つたのである。資本家は、自分は手足を勞せずして莫大の利益を收め、勞働者は、終年生産に從事して自身は衣食住の必要をさへも辛ふじて滿たし得る、或は殆ど滿たし得ない程度の薄給を得て居る。勞作の時間が多くして、國民として又人類の一員としての教養を圖る餘裕もなく、如何に精を出して職務に執勵しても浮ぶ瀬がない。之を一面から見る時には、怠けて消費する丈けの階級と、働いて人間の必要品や贅澤品を生産して、自分は其一人前の消費者とも成り得ないといふ制度が生長して來た。且つ勞働者は機械發達の結果として極めて局部的の作業に終始從事することとなり、其意味から言つても勞作の時間が覺醒時の大部分を占領する事情のもとにあつては、勞働者の人としての生活が破壞されて、殆ど機械其ものゝ一部分のやうな、なさけないものになる。勞働者無くして生産は不可能である、生産の第一條件は勞働者である、然るにも拘はらず其勞働者が人としての必要はおろか、動物としての必要をさへも滿足することの出來ないやうな物質的待遇を受け、他面に於て所謂資本家の階級の中には、單に其資本家たる位置を親の子として相續して居るものもある。又怠惰にして無能なるものがある。能力上の資本家ならばまだ意味があるかも知れぬが、時

級的に資本家といふ特權を享樂して居るものが尠くない。そして全體の報酬から言つて資本家と勞働者即ち雇主と被雇者との間に懸隔が甚し過ぎる。一方が極度に勞して而かも社會的に上の階級へ進む見込が缺乏して居るに反して、他方は多く勞せずして益々富む。勞働者の結果を刈り收めるものが有ゆる意味に於て資本家である。ところが現在の國家といふものは、主として資本家の利益を保護する實質に成つて居る。議員も大臣も自身株主でなければ、間接に資本家の意志を代表して居る。多くの場合に於ては勞働階級から出身して居ないので、勞働者に對する本當の理解と同情にも缺けて居る。友人やら親戚やらが資本家方面に多い。個人的に世話に成つて居ることもあるし、又戰爭などやる時は財源として資本家に贊助を請ふ必要がある。又戰爭其ものが屢掠奪的意義を持つて居て、資本家の爲めに新しい放資企業の方面を造る目的を間接に含んで居る場合がある。といふ樣に觀察して無政府的社會主義も興つたのである。

併し要するに現在の經濟組織の缺陷は其拘束なき自由競爭主義にあると見るのが社會主義者である。産業を國營にして、生産の手段即ち資本及勞働をも、又生産の結果即ち富をも國家社會が之を公平に分配する制度に改める。これが國家社會主義の主張である。無政府的社會主義が破壊的であるに反して、國家社會主義は建設的である。ウイルヘルム第二世即ちカイゼルの治下に於ける獨逸は國家社會主義を比較的に多く採用した一例である。進んで無政府主義と國家社會主義とをザツと批評して見よう。

(四)

無政府主義は尠くとも次の數點からしても非難を免れない。凡そ必要及能力に於ける共通點が社會の各員に亘つて實存する限り之を取扱ふ爲めに社會的制度の力を以てする事は第一に其各員の勞力を省き、第二に其社會全體の安定常固を得る所以である。三角塔の基底の樣なものである。例へば衣食住に關する必要の如きは天才も能才も凡才も大差なく之を持つて居る。又教育にしても普通教育は言はずもがな、其以上の高等專門の教育と雖も若年者の能力其ものを標準として其門戸を開放することとは社會の各員の等しく必要と認むる處でなくてはならぬ。金持の子として生れたるが故に能力は左程でなくても教育の機會を享樂し、貧家に生れたるが故に天分は厚くても之を訓練して發達させる教育の機會が缺乏して居るといふとは社會全

體の進歩の爲めに損失である。能力の徒費だからである。そこで小學校を始めとして教育の設備は之を國家社會の直接責任として其完全を計ることに意味がある。斯様な譯で健康な生活と有効な作業に必要な程度の賃銀及國家社會の一員としての常識を養成するに必要な程度の金錢上、及時間上の餘裕といつた様なものをば、即ち賃銀の最低額、勞作時間の最高數の如き勞働者にとつての基礎的必要條件をば、或は工場法に依りて、或は法律が勞働組合を認めることに依つて直接關接に滿足させることに意味がある。一言にして機會を均等にすることを企てる限りに於て社會主義に倫理的價値がある。勞働者をも資本家と同様に一個の道徳的單位即ち人として取扱ふことは動かすべからざる眞理がある。勞働者だから貧苦し資本家だから道樂してよい道理はない。又勞働者だから卑屈し、資本家だから尊大に振舞つてよい道理がない。畢竟するに産業といふ、生活の、或は社會の、一ツの必要目的に向つて協力する上の手分けに過ぎない。分業である。君臣主僕の關係などが少したりともあつてよい筈はない。使ふものが威張るのは勿論惡るいが、使はれるものが自ら卑下するのも惡い。道徳的價値は夫こそ何人も私してはならぬからである。而かも道徳的價値の本源は、又其主體は常に人にある。言ひ換へれば人格にある。分業としての意味に於ける職業別に依つて有無多少が岐れる筈のものでない。けれども一切の自由競爭を否定して總ての事業を國家社會の直接經營に移すならば、著しい損失が國家社會の上に來る。何となれば進歩の源泉を杜絶するからである。社會は安定のみを目的としてはならぬ。進歩が安定以上の目的であつて、安定は其爲めの手段でなくてはならぬ。處が進歩は多數者からは決して來ない。必ず少數者から來る。大抵の場合には一個人から來る、強い個性の人から來るのである。發明、發見、工夫、獨創が進歩の第一歩である。そして之等の事は天才の特能である。天才は強い個性の別名である。萬人共通な必要と能力とに對してそれを滿たし、それに機會を與へることを能事とする社會主義が、天才者に直接親切であることは六ツかしい。そこで必要と能力とが非常超凡である場合には、そこには聰明なる個性主義を適用する必要がある。

(五)

之を職業的に便宜上いふならば、生活の經濟的及政治的方面に向つては社會主義の原理が比較的に活用される意味が多い。

けれども生活の藝術的、思想的方面に向つては個性主義が適用されなくてならぬ。又自由競爭も一概に無くすることは人間の根本性に反いて居る。個性發展の刺激を得る機會が無くなる、從つて生活が機械になつて進歩成長の成績が擧らなくなる。獨創の便宜が奪はれて仕舞ふ。大多數の平均智能平均道德平均趣味が生活の決定的條件となる。量的に得て質的に失ふ。社會全體の滿足と安定とを計る爲めに秩序を與へることはよいが、其爲めに優れた質の人、即ち卓越せる趣味品性才能從つてそれに根柢しての天才的英雄的事業を犧牲にする樣では結局社會全體の損失である。

譬喩を借りていふならば、世間には機械を有害視する論者がある。生活を俗化するといふのである。併し之は間違つて居る機械は益々其發達を欲しなくてはいらぬ。何故かといふに、機械を使ふことによりて、左も無くんば人間が時間と勞力とを費さねばならぬ處を、機械が代理して與れる。其結果人間は文化的方面等に活動する力が餘計に生ずる。恰度社會主義がこの機械の樣な位置を人生に於て演ずべきものであると思ふ。物質的若しくは經濟的必要の如きものをば、一掃的に萬人を滿たす事が社會の進歩の爲めにも、亦安定の爲めにはいふ迄もなくよい事である。けれども人間は貧乏でさへなければよいといふ性のものではない。精神上智能上の發展と活動と滿足とが生活を幸福にする目的から言つても必要である。其方面は社會主義の直接干與する領分では無い。唯併し乍ら同胞國民或は人類の中に動物的必要又人としての基礎的必要をさへも滿たし得ないものが多數あるにも拘はらず、自分だけが或は個人的に、或は階級的に、藝術、思想等の精神的事業に安んじて從事するといふ事は事實有り得ない譯である。社會は一方から見れば正しく連帶責任であり、又少し哲學的に觀察すれば一體でさへもあるからである。大多數者は其衣食住及常識上の必要を充たせば滿足して働きもし。働いた結果が社會に貢獻もする。要するに人を實質的に觀察して其必要と能力とを標準として、そして相當の社會上の設備と待遇とを經濟上からも政治上からも確保することが社會主義の精神でなくてはならぬ。凡そ社會改良の原則がさうでなくてはならぬのだから、社會主義も夫に一致する限りに於て之を正しいものと見なくてはならぬ。自由競爭は進歩の爲に有用であり、必要であるが、全體の協力關係を犧牲としない程度に於て行はれる事が必要である。其意味に於て自由競爭に制限を附與するとには意味がある。若し單に自由競爭を否定し

社會に民衆本位の秩序を徹底させる事丈けが目的とされるならば、それは下から持ち上げた官僚主義と呼んでよい。國家社會主義が極端になると無政府主義と同じ過失を異る方向に於て犯すものとなる事はこの故である。デモクラシーの隠れたる力は、それの能力本位にも存するが、又外的權威に代ふるに內的意志を以てせんとするにある。強制的に外から保つ秩序を自發的に聰明なる意志の結果として得ることが、デモクラシイの主張者自身が必ずしも意識してゐない、近代思想の一大傾向である。デモクラシイの看板のもとにこの不磨の眞理が多少働いて居るのである。社會主義もこの點に注意しなくてはならぬ。それが國家社會主義であらうとも、産業組合社會主義であらうとも、根抵に於て一切の外的權威に代ゆるに聰明なる意志を以てするといふ哲學が健在して居ることが必要である。

（六）

國際聯盟は、それが聰明なる基礎と手段と目的とに依つて行はれない時には、安固の爲めに進歩を犠牲にするといふ悪い意味の社會主義を國際間に布くものに他ならないものとなる。國民としての天才的英雄的飛躍等が妨げられる様では、結局世界の爲めにならぬ。けれども各國民に共通の必要と能力とを標準として、其處に各國民を保護し、若しくは律する處の、即ち各國民の協力を助成し、競爭を制限する制度を作ることには意味がある。國民的個性を保護し發展することを犠牲とせぬ形に於て列國の組織を企てることは必要である。

（七）マルクス批評概観

堺　利　彦

一

社會主義鎭壓の時代が過ぎれば社會主義懐柔の時代が來る。外から懐柔を企てる者があれば、內からも之に應じて軟化する者が出來る。軟化といふ嘲笑的の言葉、懐柔と云ふ術策的の言葉を使へば、甚だ面白からぬ響を傳へるけれども、大體から見

れば、それは種々なる情勢上、必然に生ずる互讓調和の道行である。只その互讓から生ずる調和點が段々左端に移つて行く事實に注意すべく、又その調和點を段々左端に移させ、遂に最後の勝利を得る爲に、强硬な態度を持して讓步調和を肯んぜぬ本陣の存在する事をも確認すべきである。

但し、鎭壓の時代が過ぎても、調和點から遙かに遠い立場に在る者に對しては、矢張りまだ鎭壓が行はれる。殊に日本に在つては、調和點がまだ發見されてゐないので、全部がまだ鎭壓されてゐる。只だ其間に於いて、少しづゝ懷柔と軟化の傾向が現はれ、互讓調和の道行が始まりそうに見えてゐる。

實際上に於ける此の變遷に相應じて、學問上、智識上にも亦た同じ變遷が現はれてゐる。即ちマルクス默殺の時代が過ぎれば、マルクス矯正の時代が來る。マルクスの偉大と深遠とを認めないものは時代後れの觀を呈して來たが、然しそれと同時にマルクスは偉大であり深遠であるに相違ないが、亦た多大の誤謬を含んでゐる事を忘れてはならないと云ふのである。日本にも今初めて其の時代が來た。マルクス研究の流行、マルクス批評の流行、それが學壇論壇に於ける最近の現象である。默殺しきれなくなれば懷柔を試みる。默殺しきれなくなれば修正を試みる。懷柔しきれなくなる時、修正しきれなくなる時彼等は初めて止むを得ず降參するであらう。然し私は今こゝでそれを問題とするのではない。私は只、我國に於けるマルクス批評家に對し、少しばかり批評を加へて見るだけの事である。

小泉信三君は中央公論で、私がマルクスの經濟論の方面に就いて書いた事が少く、唯物史觀の方面について多く語つてゐる事を指摘して、堺は經濟論に於いてマルクスを取らないのかといふ疑問を提出してゐる。之には先づチヨツト答へて置く必要がある。私はマルクスの經濟論と唯物史觀とを切離して論ずべきものでないと考へてゐる。唯物史觀を資本家制度の解剖に適用したのが即ち彼れの經濟論だと考へてゐる。從つて私が彼れの經濟論を取るの取らないのといふ事は問題にならない。然し私が細かい經濟論について餘り書いた事のないのは事實である。小泉君がそんな事にまで注意してゐられるのには感服する。然しそれは只だ私共社會主義者の間に於ける自然の分業、便宜上の分業に過ぎない。私が演說をするよりも遙かに多く文章を書いてゐるのは、演說といふ宣傳方法を輕視してゐるからではない。そこには其時々の種々なる都合もある、得手不得手の關係もある。

二

北聆吉君がマロック製羊羹色の陣羽織を一着に及んで、社會主義の敵陣を一揉みに揉みつぶそうと企て、忽ち馬上から墜落して論壇を退却するの止むなきに至つた事は。今さら云ふも氣の毒な事實である。然しツイ先年まで、一應の學者先生が北君と同じくらゐなボロ／＼の陣羽織で。北君と同じ様な社會主義征伐の名乘を揚げ、而も墜落退却の憂目を見ず、大威張りで威張り通せた事を思ふと、さすがに世の中は進步したものである。

マルクスの云はぬ事をマルクスに云はせて、それを目標としてマルクスを攻撃するのが、一しきり歐米に流行した社會主義征伐の戰術であつた。マロックは即ち其の戰術を用ゐた、最も淺はかな一驍將であつた。其事についてはマロックと北君とを同時に退治しのけた。山川均君の論文（『中外』大正七年九月號所載）を見ていたゞきたい。

經濟論の方面でソウいふ戰術を用ゐる事は我國に於いても、最も勇敢なりし北君を以て殿りとするらしい。そして今度は、資本論第一卷と第三卷との間に矛盾がある、マルクスは第一卷で築き上げた論據を自ら第三卷で叩きこはしてゐるといふ様な所で戰端が開けてゐる。『マルクスに依つてマルクスを論破するといふ新戰術が又一つの流行にならうとしてゐるのである。（それらの點については、高畠素之君の『資本論解說』及び『國家社會主義』六月號に見られよ。）

三

然るに唯物史觀の方面では、マロック式陣羽織の羊羹色がまた盛んに行はれてゐる。福田德三君すら、唯物史觀は心理的要素を無視するから誤謬に陷るといふ意味の事を云つてゐる。唯物史觀だから物質的條件の事ばかり考へて、それで以て歷史上の事實、社會上の現象を解釋しようとするが、人間の働きには別に心理的條件がある、それも無視するから間違だと云ふのである、誠に無雜作な論斷である。マルクスの偉大を認め、深遠を誇る人が、直ぐにマルクスをそんな淺薄なものにして了ふのが不思議である。唯物史觀が心理的要素を無視した事はない。只だ其の心理作用を物質的條件に依つて解釋するのである。（『解放』七月號『一鳥二不的効果』參照）

河上肇君は、北澤信次郎氏の謂ゆる『時代後れの學說』たる唯

物史觀を信奉する『迂愚』を誇つてゐられる。然し河上君の信奉する唯物史觀は、マルクスの唯物史觀であるか、セリグマンの唯物史觀であるか、我々にはまだハツキリと分りかねてゐる。セリグマンの謂ゆる『歷史の經濟的解釋』の曖昧と矛盾とについては、『社會主義研究』六月號に私が譯載しておいた『唯物史觀に對する諸批評』を見ていたゞきたい。

其外、我々の唯物論を十八世紀の佛蘭西式唯物論其儘の者として、その基礎の上から唯物史觀を批難する者もある。又唯物史觀を經濟宿命論と爲し、個人の努力を無効とするものだとして、攻擊する者もある。又唯物史觀論者は物質主義者だから理想を持つ事が出來ないといふ、哲學上の理想主義と實際上の理想とを混同した論者もある。それらが皆な唯物史觀に對する曲解(若しくば誤解)に過ぎない事は、我々の既に幾度か辨明した所である。

米田庄太郎君の近著『輓近社會思想の變遷』は、カント哲學の社會化と、社會主義のカント化とを說いたもので、換言すれば社會主義の倫理化であり、從つて又、唯物史觀の精神的折衷說である。之に對しては、私の『社會主義倫理學』(カウツキー著「倫理と唯物史觀」の反譯)を見ていたゞきたい。

四

以下私は Z. B. Boudin の "The Theoretical System of Karl Marx" (一九〇七年著)の第一章『マルクス及その近時の批評家』を摘譯若しくは所々を譯述)して、私の『マルクス批評概觀に代へる。

『哲學上、社會學上、若しくば經濟學上の論文なり著述なりを、苟くも新思潮に觸れると稱する者は、一としてマルクス主義(マルクス主義反對)を以て其の根本動機としてゐない者はない。公然或は陰然、マルクス主義と戰はんが爲に特に發行される週刊月刊等の雜誌も多い。之は勿論、マルクス及び其の學徒の主張が一般人心に對して支配的勢力を示して來た證據である。……………

『又マルクス批評が斯樣に其量を增したばかりでなく、今日のマルクス反對文學は其の聲調に於いて大なる變化を示してゐる。曾ては學問界に於けるマルクスの地位を輕視するのが一般普通であつたのに、今日ではそれが全く消失したばかりでなく却つて個人として及び學者としてのマルクスを讃美する事が顯著な特色となつてゐる。更に一層重要な事は、マルクス新批評家の

大部分が、マルクス主義を新學說として其の正否を論證する態度を取らず、既に確立した舊學說として、全部的に或は部分的に其の誤謬を證明し、從つて其の矯正補足の必要を主張する點に在る。然しながら彼等の中。一人も、マルクスが諸學說を公然辯護し得る者はない。彼等の殆んど總ては、マルクス以前の諸學說に對するマルクスの批評の正當なる事を是認してゐる。即ちマルクスの學說は其の當時に在つては正當であつたと云ふのである。然し其後に於ける社會の發達は、當時の材料の不十分な事を示した。故に今日の智識としては、マルクスを修正し若しくは補足する必要があると云ふのである。中には、マルクスの主張は全然間違つた事實を基礎とした者であるから、全然放擲すべきだと云ふ論者がある。然し大抵の批評家は修正に止つてゐる。

『マルクス反對十字軍の本統の始なりは一八九七年にベルンスタインの論文が「イイエ、ツアイト」に載つた時からである。それが即ち修正主義の最初の出現である。ベルスタインが此の新意見を立てるに至つたのには、種々なる社會的及び政治的理由があるが、兎にかく久しいあいだマルクス主義の主要なる代表者の一人として承認されたベルンスタインが、其マルクス主義の修正を主張したのだから、前々からのマルクス反對者等は得たり賢しとして再び盛んに火の手を揚げた。然し彼等は其の昔しの無効無力な武器を棄てゝ、修正主義の新武器を取る事にした。是れ近時マルクス反對文學の一齊に修正主義的色彩を帶びる所以である。

『マルクス批評家を大づかみに分類して見ると、次の三つになる。第一、主としてマルクスの哲學系統を論ずる哲學者。第二マルクスの經濟論を批評する經濟學者。第三、社會發達の法則に關するマルクスの學說を取扱ふ社會學者。然し彼等は皆、マルクスを論駁しても、それに代るべき自己の學說を持つてゐない。其の結果は社會科學に於ける虛無主義となつてゐる。マルクス主義を全然放棄せよと主張する反對論者が、それに代るべき社會學說を持たぬばかりでなく、修正主義の本尊ベルンスタインすら、科學的社會主義の不可能を論證しようとした。最も有力なマルクス批評家たるワイゼングリユンは斯う云つてゐる。『マルクス主義の恐慌は社會科學の全體に於ける恐慌である。』亦以てマルクス主義の規摸の廣大と、組織の堅固とを見るに足る。

『マルクス批評家の所論に對して一々別々に答辯する事は絕

對に不可能である。假りに可能であるとして無益なる精力の浪費である。何となれば彼等の大部分は單なる反覆であり。又同じ事實と同じ論據の上に立つ者である。さらばと云つて、彼等の中。一人を取つて其の代表者と爲し、其の所論を論駁する事も出來ない。彼等は皆それ〴〵に獨立した論點を持つてゐる。彼等の銘々が一貫した議論を立てゝゐないばかりでなく、彼等相互の間に甚だしい不一致があり、又彼等の一が他の者に依つて論破してる場合も屢々ある。更に彼等は、マルクス主義の根本要素に對する解釋、即ちマルクス主義の何であるかについて甚だしく一致を缺いてゐる。從つて各批評家は銘々自己一流のマルクス主義を作りあげて、それを攻撃してゐるのである。：……………』

＊　＊　＊　＊　＊

私は本誌の本號に寄書する暇を失つて、其旨編輯者にお斷りしておいたが、種々の事情上、矢張どうしても少しなりと書かねばならぬ事となり、纔かに之だけのものに拵へた。近々發行される私の文集『唯物史觀の立場から』及び私の久しく出してゐる雑誌『新社會』を參照を乞ふ。

新刊紹介

婦人の勝利　山川菊榮著

謂はゞ本書は婦人問題の手引草に過ぎません、著者の目ざした所は、この問題に就て深く研究を積んで居られる方々よりも、寧ろ多くを知つて居られる方々に在り、一般の讀者に婦人問題の概念を摑んで頂ければ十分ですとは、著者の言である、女史の本問題に造詣深きは呶々を要せぬ所、本書は以上の趣旨より極めて平易に、先づ神話傳説時代よりの男女關係を極めて面白い物語を讀む樣に叙述し、原始社會の男女關係より、文明社會の男女關係に論及し、最近の婦人運動の眞義を説いて餘す所がない、近時の婦人運動を目して單なる社會現象と思ふて輕視して居る人に與へて其妄を開き、自覺せる婦人に本書を捧げて婦人の重要なる地位を自覺せしめたい（定價一圓廿錢　本郷弓町日本評論社發行）

船場のぼんち　石丸梧平著

『場船のぼんち』は髙須梅溪君が近松西鶴以來の大阪の小説家であると言つた石丸梧平君の創作集第一輯として出された者で、只もう物資本位の大阪と、その商家の裏面及内幕、そして富有な商人の家に生れた子と親達ちの關係や氣分が何の漏す處もなく良く書かれて居る、大阪に生れ、大阪に育ち大阪を徹底的に理解してゐるその大阪の小説家梧平君ならでは出來ない事である、『富坊』とその母は可成り良く書けてるが中村の姉さんなどがも少しハツキりして欲しいことお寺の若い住職がも少し何とか成つてゐたらよほど面白いのではあるまいかと思つた、兎に角本年迄の内での有ゆる作物中の指折りものであることは疑ひない。（定價金六拾錢　本郷四方堂發行）

日本より派遣すべき國際勞働委員の適任者は誰か

世界改造史上特筆すべき國際勞働會議は、近く華府に於て第一回の會議を開催することに決定した。日本も該規約に加盟した以上當然代表者を派遣せねばならず、現に政府筋に於ては、内々委員の選定中とのことである。然し乍ら斯の如き問題は、單に政府に其人選を委ねて置かずに資本家及勞働者の代表者は、資本家或は勞働者が自ら決定すべきものだと思ふ。仍つて我社同人は、勞働者諸君に飛檄すると共に、朝野有識の士に對して、左の二個條の問題を提出して、御意見を求めた。〆切後に御返事を頂いた分も、十餘に上つたけれども、遺憾乍ら掲載することが出來なかつた。

一、委員たるべき人の資格

二、資本家及男女勞働者代表者としての適任者幷に推擧の理由

○ 山川均

歐米の資本家政府の代表者の會議を、國際勞働會議と名づく可きか、それとも國際資本會議と名づく可きかが第一の疑問であります。聞く所によれば、米國は講和會議の委員に各國とも勞働者の代表者を加へる提議をしたが、英、佛、伊の三國の反對によつて立消えとなつたと云ふことである。之は米國以外の國では、勞働團體の首領にして同時に資本家の傀儡たるゴムパアスのような、重寶な人物が見付からない爲めだと云ふことである。來る可き國際勞働會議の性質と、之に列席する謂ゆる『勞働者の代表者』の性質とは推して知るべしで、之に對する各國勞働階級の態度は今より想像するに難からずと考へます。

この國際勞働會議に參列する爲に、政府によつて選ばれる勞働者の代表者とは、如何にも珍奇な觀念であります。

假りに委員の人選が勞働者に一任せられたとしても、團體組織のない日本の勞働者に取つては、代表者の選出は實際上不可能であります。政府は外國の手前。日本に勞働團體のないことを氣にして居りながら、一方には純粹に勞働者自身の手に成る團體の發生を極力沮止して居る事實は屢々耳にする所であります。そこで小生は、此際日本の勞働者としては寧ろ此選擧にボ

イコットし、其れと同時に萬國の勞働階級に對して、日本の勞働者が自己の代表者を送り得ない事情を訴へるのが、最も有利な政策であると考へます。

しかし他の事情の下に、若し代表者を擧げるとせば、小生は日本勞働者の代表者として堺利彦君を推薦します。其理由は(一)堺君は社會主義者であるからであります。勞働問題の解決を以て或る他の目的の手段と見做さず、勞働階級の究極の完全なる解放の爲に勞働問題の解決を叫んで居る者は、社會主義者の他にはないからであります。又た(二)その人物、學識、識見、經歷から、堺君は日本の勞働者を代表して各國の勞働階級の代表者と椅子を並べることのできる第一人者であると考へます。日本の政府や資本家を代表して、各國の政府や資本家の代表者と應酬する上品な人物は他に幾らもありますが、各國勞働者の代表者の前に、日本の勞働者を代表する適任者は多くあるまいと考へます。婦人の代表者については婦人の自決に任せたいと思ひます。

○　女子大學教授　高梨孝子

一、勞働問題に就いて學識と經驗を有せし上、勞働者に多大の同情を持ち、我勞働界を改善せんとの抱負ある人にして、而も感情にかられず、姑息に陷らず、能く資本家と勞働者との相方を理解し、極めて冷靜に又公平なる判斷力を以て事を計る人。

二、米國より歸朝後日淺きため誰が適任者なるや選定に苦む。

○　厨川白村

一、答ふる所を知らず候

二、貴問中に與謝野夫人の名あり。日本が有する最もすぐれたる女詩人を、一方には勞働者の代表として世界に示すは結構に候。英國の閨秀作家にして、婦人運動の旗頭たりまた『婦人と勞働』の著者たる Olive Schreiner 女史の向ふを張る、また妙なりと存候。與謝野夫人には御迷惑なるべきか。

○　堺利彦

政府の誠意が認められぬ時に、こんな推擧をして見ても無益なことです。それよりは政府の好きな人をやらせて、恥をかゝせるが一番です。

○　與謝野晶子

(一)官選とせずして、國民の輿論の選定に出ること(二)一ツの階級に偏せず、すべての人間の生活の利益に就て、公平なる意見を立て得る人たること

資本家側では、左右田博士、勞働者側では、堺利彦、賀川豐彦、山川菊榮氏を推したく思ひます

○　鐘紡女工　さだ子

一、本名は御出し下さいますな、妾共は廣い世間に、如何やうな人があるか知りませんから、たゞ妾共の仲間の人達が病氣にならぬやうに御心配の願へる御方にやつて頂きたいと思ふばかりでございます。

○　報知新聞　山本利一

政府側、岡實、吉坂工場監督官、資本家側、小池張三、勞働者側、安部磯雄、

岡、吉坂兩氏の見解は吾々と相容れざるも、最近歐米の形勢に刺戟され、稍急進的となりしとの事なれば、又小池氏は比較的歐米を理解し居る爲め、勞働者代表者は、實は吾々勞働者より出すべきも、今の場合適任者なければ、多年此方面に研究し勞働者を了解し居る安部氏を推さんとするもの也。

○　法學博士　上杉愼吉

何人も派遣するに及ばず。

○　法學博士　ミノベタツキチ

だれが行つたとしても、大なる差異なかるべし。

○　法學博士　堀江歸一

一、資本家の代表者なるには、現に工業を經營し、且つ日夕多數の勞働者に接近し、其實情に精通する人、勞働者の代表者たるには、現に勞働に從ひつゝある人、兩者共に右の資格の外に、英語の素養を必要とす。

第一項に擧げたる資格を共有するは何人なるか、小生は知り申さず。

○　神戸製鋼所職工　松田貢

一、勞働者代表者としての人選は、全國の各大工場より代表者一名宛を出して、協議決定する事

二、候補者としては、賀川豊彦、安部磯雄、河上肇、戸田博士、福田徳三氏等とす。婦人は知らず

○　法學博士　建部遯吾

一、獨立判斷

二、資本家法學博士桑田熊藏君、男子勞働者文學士法學士藤田喜作君、女子勞働者高梨たか子女史、藤田君は社會學專攻の文學士にして、且經濟學科卒業の法學士也、少年時より日傭勞働者其他あらゆる勞働生活を經驗し盡せる堅忍常識の士也。現に朝鮮銀行員として奉天に在勤す。恐らくは天下無比也。

○　內田魯庵

一、世界の思想的大勢に通じ、且同感し、現下の改造の意義に徹底するを第一要件とす。(官歴や工場經營の經驗等は改造を目的とする此會議には無用也)

二、資本家代表者としては、桑田熊藏氏可ならん。勞働者側としては、堺枯川氏可ならん。婦人代表者としては、山川菊榮氏を(此人を除きては他に適任者一人もなし)

右の外學者としては、河上肇氏、河田嗣郎氏、高野岩三郎氏、安部磯雄氏の參列も亦可ならん。夫れに又新思想理解者として、生田長江氏、片上伸氏を參列せしむる必要もあらん。

○　土工　吉川芳郎

一、今日公認されたる勞働者自治團體なきを憾むものに候、去り乍ら自今我國の勞働狀態より察し、吾等の代表的委員とし

ては、常に我等の味方として自ら任じ、吾等の尊敬し、悲惨なる吾等の實生活に理解あり、信望ある社會學者肌の知識勞働者を派遣し、利權を擁護致度と存候

二、資本家委員は小生圏外者たるの故を以て御免蒙り度候、河上肇、茅原華山、與謝野晶子三氏は前記の資格を具備し、吾國勞働界の權威者として列國委員に遜色なく、吾等も安じて信頼致すべく候不具（深川富川町三一久保田方）

阿部秀助

○

一、委員たるべき人の資格としては、歐米に於ける勞働社會に適するは勿論、我邦勞働界の特殊性をも併せ理解するの人たらざるべからず、加ふるに語學に堪能なることと

二、資本家側としては深井英五氏、勞働者側としては、堀江歸一氏、賀川豐彦氏、山川菊榮氏適任なるべし。

法學博士　神戸正雄

○

一、勞働者仲間、又は資本家團體にて衆望を擔へる人たれば足れり。

二、右は資本家團體、又は勞働者仲間の選定に待つべく、吾等の如き門外漢の指定すべき限りに非ず。

車力　野口一雄

○

拜啓勞働委員は賃金勞働者ならざるべからざること當然の理に有之候、少なくとも二年以上體力勞働に現在從事せる者にして全國勞働者會議に依り選擧せられたる者ならざるべからず。如何に同情者なればとて、教授學者等は勞働者に非されば其資格なし、又婦人委員は之を工場女工中より選擧すべきは當然となし存じ候、政府若し之を實行せずとせば、何人にても差支へなしと雖も、到底滿足なる成績を望む能はずと存じ候（本所區花町一ノ身居方）

硝子工　青柳金次郎

○

國際勞働委員は第一に我勞働界に深き研究と、語學に精通し且世界的勞働に精通するを要す。鈴木文治氏は單に賣名又は時代の生める表面のみの勞働研究者に非ず、嘗て米國勞働大會にも二回出席し、尚實地研究者と認む依而推擧す（府下大井町四一五七）

石坂養平

○

一、我國に於ける資本家勞働者の一般生活狀態に關する正しい理解を有し、世界各國の勞働問題の歸趨、勞働者の生活狀態勞働條件などに就いて博い知識を持つて居ると、これは委員の資格として殆んど原則的に必要です、その他の附帶條件としては、交際上手であるとや、風彩の堂々たるとや、場慣れのしてゐるとや、押しの強いとなどいろ〳〵有りませうが、先づ外國語に堪能であつて、晴れの舞臺に於て雄辯を揮ふことが出來たら充分だらうと思ひます。

二、資本家側として岡實氏も良いでせうが、和田豐治氏や藤山雷太氏などはどうでせう。良さそうな氣がします。男性勞働

者側として河上肇氏も安部磯雄氏も良いでせうが、福田徳三氏に是非御苦勞を願ひたいものです、氏の學者にして而かも熱血男子たる所が勞働者に有利な何物かを齎らさずに措かないだらうとの期待を起させます、女性勞働者側としては先づ山川均氏夫人菊榮さんでせう。

○　職工　平澤計七

一、（一）人格者たる事、（二）内外の新思想及び勞働事情に精通し居ると、（三）國際勞働法規委員會及び國際聯盟會議に出席し、若くは目睹して其眞相を知り居る者

二、勞働者代表者としては鈴木文治氏、氏は委員としての資格を備へ居ればなり。

○　機械仕上工　井上倭太郎

一、現在工場に於て實務に從事し、工場及勞働者の實情に通じた者

二、これに就ては多少自信を有し居るも今暫く發表するを得ず（下澁谷一八五二）

○　山田わか

一、我國の勞働狀態に精通し、我國の產業組織の進步を害するとなく、最も進步した勞働者の要求を貫徹し得る技倆のある人、

文明が進步すれば進步する程婦人の勞働は其性質が變つて來ると思ひます、で、勞働婦人代表者としては現在の勞働婦人を保護すると同時に、前述の理想の實現を妨げないやうな解決をなし得る腕を持つ人、

二、男子勞働者側としては河上氏安部磯雄氏は適當な方かと思ひますが、此方達としても直接な勞働者ではないのですから理想的な方達かどうか分りませんが、唯、勞働者の代辯者としては宜しいでせう。婦人側では此處に擧げられた、どなたも適任者だとは思ひません、勞働婦人を保護するに付ても婦人の特性、婦人の使命といふことを頭に置いてかゝらなければならないと思ひますが、其れを理解しておゐでになるかどうか疑問ですから

○　セルロイド工　出井紀作

一、（一）嘗て勞働生活に經驗あり力行以て現在資本家側たる立場に居る者、（二）最近歐米の勞働狀態を視察研究し日本勞働生活に理解ある政治家、（三）法律經濟倫理哲學外國語に精通せる雄辯家、（四）年齡五十歲以下なる者、（五）勞働運動に從事しつゝある者或は關係者

二、資本家側、河合榮治郎、松田源治、藤田勇、勞働者側男子、茅原華山、加藤勘十、吉野作造博士、出井益之、同女、山川菊榮　以上の諸氏は現に主義により勞働運動に從事しつゝある人々なれば其義務及責任上、資本家と勞働者の間に在つて公正なる法規を制定する實力あるを確信す（龜戶町柳島五）

○　原田實

世界の勞働問題に通曉しその解決乃至改善に對して人道的熱情を有する人格者たるは勿論、我が國の資本家及び勞働者の實際を熟知しをるものたること。

察問にして眞に適任者と思ふものを擧げ得ざれども、安部磯雄氏をして資本家側を代表せしめては如何、氏は極めて公平なる人と信ずるが故に資本家はこれを恃んで安んずるを得べしと思ふ、この問題の解決には敢鋭を要すれども亦偏狹は禁物なり。勞働者側の代表者は是非とも實際の勞働者中にこれを求めたし、而して自らの問題はこれを自ら解決するの意氣込みを以てしたい。

○

機械工 粕谷萬平

欧米の惨たる階級争闘は實に國利を犠牲とせる爭闘である、我國民は欧米の轍を踏まず、圓滿なる解決方法を講じなければならぬ、茲に於て私は所謂勞資協同は最も我國民性の特長と欧米思想を調和し得た策であると思ふ。勞資協同とは勞働者を經營に參與せしむると、勞働者を出資者の一人たらしむるとです。謂は極端の例の様ですが今日資本家が大悟して此大英斷をなすに非ざれば到底恐る可き爭闘は避け難い此の理想を把持せる世界的知識を持つた人を適任者と認めます、資本側として安部磯雄氏勞働者側として又[illegible]山氏は第一人者でせう婦人代表としては適當なる人物を見出し得ません(市外王子町柳町三九二)

○

加藤一夫

一、何よりも多く勞働者の實情と心とを諒解して居る事。(その意味に於て純粋の勞働者に委員を得たいが、二つの要素を缺くので今は駄目でせう)二、外國語をよくし、現代思想をよくわきまへて居る事、三、資本家官憲の鼻息をうかゞはぬ事。

一、資本家は知らず、二、男子勞働者の代表者としては賀川豐彦、彼は勞働者ではないが、親ら貧民窟は住み關西友愛會の理事として勞働者の指導啓發につとめ、勞働者をよく解して居る上に、多年外國に在りて語學に巧みであり廣汎なる知識を有す。三、女子の代表者としては適當なものを見出し得ませんが、山川菊榮女史ならいゝかと思ひます。私の女子に期待するところはその思想です。

○

片上伸

第一に本人が實際の勞働者たることを必要と存じます

資本家はともかく勞働者としての代表者は勞働者のうちから物色する外あるまじく御示しの河上、安部諸氏凡て本ものにあらずと存じます

○

法學博士 福田德三

拜復、卑見無遠慮に左に開陳仕候御判讀被下度候

(一)委員たるべき人の資格

言ふまでもなく、日本現在の勞働の實際事情に通曉し、而して少くとも歐米に於ける勞働事情と勞働問題の一班に渉つて、相應の理解と修養とを有する人なるを要す。此意味に於

て机上の空論家(卽ち我々如きものを云ふ)は凡て駄目なり。又た勞働問題を政治上に利用せんとする野心家も駄目なり。却つて甚しき害を及ぼす可し。例へば後藤新平、尾崎行雄兩氏の如き日本の勞働者に取つて難有迷惑なる可し、

(二)適任者の氏名及推擧の理由

貴問にある人々は不適任と信ず。河上博士、安部教授兩君は共に言論家なり、但し安部氏は河上氏に比すれば、實際の事情少しは知り居るべしと雖も要するに五十步、百步ならん。賀川豐彥氏は此三人中にては最適任者なる可きか。但し詳しきことは知らず。尤も三氏とも顧問としては、適任ならん

婦人委員として擧げられたる人々に至つては誰人が其樣なる出放題の風評を立てたるか、實以つて驚き入るの外なし、有男女の委員下馬評を見ても、我邦に於て如何に、勞働の問題か無理解に取扱はれて居るかを、端的に示めすなり。抱腹絕倒とは此くの如き事を言ふなる可し。

貴社も隨分思ひ切つたる愚問を發せられたるものと云ふ可しさて小生の淺薄なる見聞の屆く限りにては、

(A)資本主代表者

としては鐘紡の武藤山治氏か、倉敷紡績の大原孫三郎氏か、此二人を措いて他に適任者なし。武藤氏は勞働問題の實際的施設者としては、日本一の先覺者にして、其實施の成績に就ては、種々の評ある可しと雖も、少くとも鐘紡が善意を以て、文明的施設を爲したるは、世人が未だ勞働問題に無關心なりし一昔も二昔も前の事なり。氏は又た西洋の事情にも精通し一個の人格者としての修養深し。氏なれば、各國委員の間に伍して、甚しき遜色を見ず、牧野男の如き赤耻をさらす心配は毛頭なかる可し。但し氏が應諾するや否やは疑問なれども、予としては是非氏の出馬を乞ふ外なしと信ず。氏も亦此世界勞働大憲章會議に列するを一生の名譽として起たれんことを切望す。

次は少く劣れども大原氏なり。武藤氏よりは遙かの後輩にして、西洋の事情には余り通せず、一般の修養も劣ること勿論なれども、少壯家中に人を求むれば、氏の外に無し。氏は現に倉敷紡績に於て社長と同時に自ら好んで人事課長を兼ね、之を他の使用人に任せむと云ふに見ても、其篤實、熱心を知るに足る、氏が社長就任以來、男女工の爲めに施設したる所は、大體に於て武藤氏と其揆を一にし往々其以上に出づるものあり。氏の西洋知識の不足は、河上君なり、安部君なり又は米田庄太郎君なり同行せば、十分に之を補ふを得可し、武藤氏成立せずば、補助者付きにて大原氏に出馬を乞ひたし。武藤氏なれば、補助者は不用也。

(B)政府代表者

今の處岡實君を煩す外なからん。併し同君一人にては心元なし。學者中より任命すとせば、誰人よりも、京大の戸田博士が

適任なり、も少し廣く人を求むるならば、大坂市助役の關博士宜しからん。若くは工科大學あたりに却つて適任者ある可きかと思へども、詳しきことを知らず、大河内正敏君等は適任らしく思はるれども、果して如何にや。醫科にても横手千代之助博士か石原修君かなれば適任ならん。法律經濟方面は岡實君あることとなれば、醫工學の方面の人却つて必要ならんかと思はる。

（C）勞働者代表者

甲、男

鈴木文治君にては困る、同君も要するに言論家の部類に屬する人、顧問には宜しからんも、代表者たる資格はなし、却つて賀川豊彦君の方宜しからんも、コレトテ、具體的問題の審議となれば、果して如何、先以て不適任と言ふ外なからん。實際の勞働者には、其人なしと云ふ世論には賛成し難し、通辯も付けば、顧問も行くこととなれば、必ず實際の職工を派遣す可きなり。鐵工や印刷工には、相應に人ある可し。若し如何にしても無しとなれば、工場長級の人を派遣す可し。此階級には、隨分人に乏しからざる可し。而して東京より一名、大坂より一名、就中紡績工業關係者を望む。

乙、女

貴社指名の方々は、文筆の人としては、實に立派此上なけれども、女子勞働者代表者にとは、滑稽を通り越した位の妄撰なり。一體誰人が其様なイタヅラ評を製造せしや、罪深き所業なり。コレデは牧野男の愚演說草案を笑ふ權利は民間にもなきこととなる可し。これは、紡績工場に於て、女工の取締や舍監を永く勤めた人の中より撰出す可し。先年迄鐘淵の兵庫工場の海岸寄宿舍にクリスチャンにして軍人未亡人なる一舍監あり、女工の事情に通曉し、女工の境遇に十分の理解と同情を有し居たり、其人今在りや否や（可成の年齡の人なりき）。此種類の人最も適任なる可し。而して其人は必ず若干あることと思ふ。

紡績工場は製糸工場に比すれば遙かに勝れり、女工狀態の甚しきは、製糸工場なり、殊に信州諏訪の中以下の工場並に關東各地の織物工場は實に甚し。此事情に精通せる人ならば（而して雇主側ならざることは勿論として）、最も適當なる可し。勉めて求むれば、必ず一人位は得らるゝことと思ふ。呉々も女文士の空論代表は數合せられたし。國の體面に關するは勿論日本數萬人の女工は驚き、悲しみ、而して（心あらば）憤るなる可し。此種の妄撰は、數萬の日本女工を侮辱し愚弄するものなり、其様な愚弄を敢てする人の不眞面目は、社會改良の爲めに憤慨せざるを得ざるなり。而して妄評を立てられた男女の方々は、嘸ぞ迷惑せられ居るならん。

附記　友愛會關西勞働同盟會よりは海員三十二名連署にて澁澤男（資本家）鈴木文（勞働者）兩氏を推擧し來れるも締切後なりしが爲め遺憾ながら其氏名を省略せり

生存慾の變態としての文藝

白柳秀湖

（一）　生物學より見たる文藝

文藝そのものの意義に就いては、其道に携はる人が何うなと宜しきやうに見解を下すがよい。けれども文藝も人間のする仕事である。人生、社會に於ける出來事の一つである。故に此人生、社會に於ける出來事としての文藝に對しては、別個の見解を下しても、別に罰の當る譯ではあるまい。貴重な美術品を尻拭紙として使ふのは野蠻人のことであるが、野蠻人にあらずとて、美術品を潰しに使ふ場合がないではない。戰爭や、飢饉や天變地災の甚しきに際しては、往々にして美術品が潰しに使用せられ、平凡なる人命の多數と交換せられて居る。すべて大なる飢餓、大なる動搖の前には文藝も美術もない。文藝、美術は之を社會的にいへば、人間の欲望が或る程度に充足され、人間の生活が或る程度に安定した後の産物である。玆に於いてか私は先づ人間の欲望を中心として文藝といふ生活現象を考へて見度い。

飢餓の前に文藝はない。飢餓は生物の歌よりも前に存在した。欲望は何であるか、嬰兒の生聲をあげる力、善でもない、惡でもない、無色透明の力、此力が何であるかの問題は玆に問はずとして、假に之を生存慾と稱へんか、生存慾は最初に飢を救へ、爭鬪を教へ、爭鬪によつて共同和衷の社會性を練磨した。此關係を仔細に觀察するに、慾望其ものの過程に『ウタ』があり、個

人の生涯の或る時期に『ウタ』があり、社會發達の或る時代に『ウタ』がある。けれども此三つの『ウタ』の何れもが、飢餓より以前にはなかつた。必ず慾望充足の或る過程に於いて存在した。さうして、慾望の充足と共に人間は『ウタ』をやめて、更に他の新しき活動に入つて居る。

（二）　慾望充足の喜と飽滿の愁

慾望を分つて二とする。食慾と色慾とこれである。が、色慾は食慾の充足によつて養はれるもの、自己を保存しようとする食慾から派生して、種の蕃殖を目的とするものであるから、食慾に對しては第二段の慾望に屬する。之を要するに前者は自己の保存慾であり、後者は種の保存慾である。今此二つの慾望に就いて、仔細に其發展の跡を索ぬるに、『ウタ』は必ずその初めに存在せずして慾望そのものの過程に存在する。

先づ食慾そのものの過程に就いて考へるに、極度の飢餓に『ウタ』は作はぬ。猛獸なれば恐ろしい野性を發露し爪牙を磨して山野をあさり廻る。文明人でも飢えては食を擇ばず、一切の義理、一切の人情を忘れて自己保存の途に邁進する。さうして愈々セツパ詰つては野獸と擇ばぬことになる。明末崇禎の飢饉には朋友親近互に相誘殺して其肉を爭ひ、母は幼兒を後手に縛し、之を市場に鬻いで『菜人』と云つた。我天明の飢饉にも東北の百姓は牛馬鷄犬を屠り盡し、野に草根木皮の食ふべきものなきに及んで、麥の芽を食ふの窮狀に陷つたとある。草根木皮に飢を凌いでも種麥だけは保存し、來年のことを考へて居たまでは人間道であるが、麥の芽を拔いて食ふに至つては畜生道の第一歩である。麥の芽が盡きた時には必ず崇禎の飢饉の如く人肉の爭奪が始まる。畜生道に思索なく、詩歌なきことは何人も之を知る。詩歌文藝は何うしても其慾望の半ば充足された所にある。慾望の全く充足された時に、人は一種の嚴肅な現實味を感じ、更に新しき活動の途に上る。何となれば慾望はそれ自身に飽滿性を伴ふ。他から制肘を受けずして自ら飽くを知り、節するを知る。慾望充足の後には、慾望の半ば充たされた時の喜びは消えて、一種の嚴肅な感じと共に更に新しい力が人の活動を促す如く迫るを覺える。慾望の半ば充たされた時の美妙な感じは、即ち慾望其ものの過程に於ける詩歌である。

次に色慾そのものゝ過程に於ける『ウタ』の現はれを考へて見度い。私はこれまで屢々戀は性慾の半無意識狀態であるといふことを書いた。戀は即ち性慾の詩歌である。少年時代は色慾の夜

である。テニソンの詩にあるやうに、此少年時代の夜が過ぎて、東の空にほの〴〵と黎明の光を仰ぐ頃から朝の日の出の美しいけしきを見る頃までが、唯、わけもなく美妙な感じに胸をとゞろかす初戀の時代である。朝の光が、白晝の光に還るにつれて、性慾の意識は一歩一歩明かとなり、結婚の望みを遂げ、生殖の目的を達するに及び、性慾意識はいよ〳〵明かとなる。初戀に胸をとゞろかす時代には、我戀斷じてかの卑しむべき肉體上の慾望にあらずと信じて戀を神聖化し、折にふれ事につけて心そゞろに傷む。此時代にあつては其天分により、大小の相違はあるが、何人も一度は詩人となる。田夫野人の戀にも其形跡はある。月のあかい夜、芋の葉の露にそぼぬれてうかれ歩く野良犬のやうな男も、戀なればこそ物のあはれを知る。けれども其戀が現實になつてはウタもヌタもない。野良犬はヤハリ元の野良犬である。

戀は要するに性慾の一過程である。初戀は詩であり、二度目、三度目の戀となつては一たびその正體を見屆けて居るだけに初めほどの韻律を缺く。中年の戀は甚しく散文化し、果ては文藝の領域を越えて科學の領域に入る。要するに初戀の韻律は之を永久に保持し難く、保持せんと努むるは不自然である。

（三）花に鳴く鶯水に棲む蛙

花に鳴く鶯、水に棲む蛙とは古人も隅に置けぬうまい所に眼をつけた。鶯のホーホケキョと鳴く時は鶯が春の光に照らされ、春の雨にぬれて其性慾を半ば意識した時である。ホーホケキョは鶯の戀の歌である。鶯は此美しい歌によつて其雌を呼び生殖の目的を達する。戀がいよいよ現實に入つて深山のはげしい活動となつてはもう、ホーホケキョの歌は聽くべくもない。

更に戀の遂げられた後の活動は目覺しいもので、一時はさゝ鳴の聲さへ絶える。けれども鶯の活動は歌がやんで沈默の生活に入つた時に於いて最も激烈を極める。人間が鶯の存在を忘れた時は、實に鶯の働き盛りである。さうして鶯の生涯からいへば歌の時代は短く、働きの時代は長い。

蛙の歌も同じである、花が散つて青葉に入つた初めは蛙が戀する時である。フト見れば蛙は歌の時代のみを水の上に働いて、アトは土の中に陰慘な生活を續けて居るやうであるがそれは大きな間違ひである。蛙の歌は野の水がぬるんで、蛙が性慾を半ば意識した時に始まり、蛙が戀を遂げる時に終る。蛙は歌をやめて始めてホントの生活に入る。人が蛙の存在を忘れた時は、

蛙が最も活動して居る時である。盛夏の夕ぐれ小川のほとりを散歩して、ステツキの先で浮草や、浮藻をかき分けて見ると、其陰に思ひがけもない蛙の目玉がヌツと現はれる。オヤ、蛙はまだ居るのか、花の散つた頃は前の田圃でも、裏の小池でもやかましい程に鳴き立てたが、其後、いつとはなしに歌をやめてヒツソリとしてしまつたので、忘れるともなく忘れて居たが、蛙は歌をやめて後も、ヤハリ前の田圃、裏の小池に陣取つて、一生懸命に働いて居たのである。蛙は歌をやめて始めて眞劍の生活に入る。歌の止むと同時に土の中へでも潜つてしまつたやうに思ふのは人間の勝手の解釋である。歌は一時である。生活はモツト長く且つ眞面目なものである。

以上は食慾、色慾それ自體の過程に現はれた歌の時期である。同じ法則が個人の生涯にも行はれる。次に、個人の生涯に現はれる歌の時期を考へて見度い。

(四) 少年時代から青年時代へ

人間には個性といふものがあつて、文藝上の天分の著しく厚いものと、それの甚だ薄いものとがある。けれども人間には多少とも其素質があつて、自分がそれによつて自然を觀照し、人生を解釋し、或る形式の下にそれを表現するといふことは出來ぬまでも、他の表現したものを受入れる素地は備へて居る。天才の仕事とて、鬼神の力を借りにするのではない。人間の經驗を超絶した所を取扱ふのではない。之を要するに、文藝もヤハリ人間の仕事の一つである。生活現象の一つである。して見れば、文藝も人間の他の仕事と同じく自然法の支配を受ける。

其處で文藝家が年齢の支配を受けるのは當然の事であらうと思ふ。西洋には七十、八十の高齢でローマンチツク、ムーヴメントの牛耳を執り、青年と共に觀念の世界に憧れ、綠の花を慕つて情熱に生きた詩人があるといふが、私達にはそれが果して眞實の生活であつたか何うかサツパリ分らぬ。島崎藤村氏が若い時代に詩人であり、中年にして小說家となつたのは如何にも自然であるが、是から先は大分骨が折れよう。文藝の對手は何といつても若い人である。藤村氏が詩人から小說家になつたやうに、小說家から何ものかになつては若い人の氣に入らず、到底今日の聲望を持續することはむつかしからう。さりとて五十には五十の心持ちがあり、六十には六十の心持があらう。それを矯めて若い人の氣に入るやうにして居るのは工夫であり、工夫して暮すは餘りに悲慘である。田山花袋氏が三十年に近く文壇

にその地位を持續して居るのは偉いとされて居るが。氏の仕事とて明かに年齢の支配は受けて居る。明治三十三四年頃盛に少女の初戀を描いて若い人に持て囃され、中年に入つては自然主義の水先案內として重きをなし、赤裸々な人間の姿を描寫して化石のやうな宗教家や、道學者に一泡吹かせた。花袋氏の小説の變化は、私が最初に述べた欲望發展の過程をそのまゝに具象するものである。實をいへば藤村氏にしても。花袋氏にしても此先小説をかいて生きなければならぬといふことは一種の悲慘ではないか。何故となれば、人間は或る年齢に達すると大抵小説など書いて居られなくなるものと見える。ゾラも『ルゴン、マツカール』叢書の時代にはまだ小説らしいものを書いて居たが、晩年にはそんな形式を云つて居られなくなり、死ぬ前の四部篇など、文學通から唾されるやうなものを書いて平氣で居た。トルストイでも年をとつては傳道に夢中となり、小さいパンフレツトばかりをかいて、『クロイツエル、ソナタ』や『アンナ、カレニナ』のやうな小説は書けなくなつてしまつた。水涕を垂らして尙ほ雜誌に小説をかいて居る。年はとつても名聲が衰へぬといふ。それが必ずしも進歩でない如く、逍遙が書けなくなり、露伴の書けなくなつたのが必ずしも退歩でない。

作家でさへ書けなくなる年配があるのに、作家より天分の薄い讀者としては尙更である。年齢により、時代によつて之に對する興味に相違の出來るのは當然のことである。少年時代から青年時代への過渡期は何人の心も傷み易く、多少ともすべての人が詩人的になつて居る。此時代の男女は多く文藝の心醉者である。或は文藝の心醉者たるべき醱酵素をもつて居る。さうして非常な熱心を以て作家に共鳴し、作家に引つけられる。けれども其熱心は要するに永續的のものでない。年齢の進むに從つて必ず其方向を轉じて行く。即ち作家その人の生涯にも詩人の時代があり、小説家の時代があるやうに。讀者の生涯にも詩人の時代があり、小説家の時代があり、又、科學者の時代がある最初に心醉者であり、憧憬者であり、崇拜者であつたものが、漸次批評家となつて其熱心の度を減じ、更に新しき欲望の充足に向つて猛烈なる活動を開始するに至る。之は文藝家が何と云つて怒つて見ても社會の事實である。人間生活の現象である。二十年、三十年の久しきに亙つて文壇的生命を持續する作家の偉大はいふまでもないが、彼の偉大は要するに學校の先生としての偉大である。先生は先生としての修養に全力を傾注して年をとらぬことを唯一の心掛けとして居るが、生徒は常に新し

い。常に新しい生徒を引受けて年をとらぬ先生の生活を極度に崇拜し、生徒と一處に先生をやめて自然法則に押し流されて行く先生の生活を極度に侮辱し、凌虐するのは文壇のことである。之を人間の生活現象として見れば何方にも一種の悲しみが附纒ふ。先生をやめたのでなく、自分の力の足らぬ結果先生を罷免されて尚ほ先生の生活に思切りが付かず、何處かの隅にウヂウヂとして先生らしい生活をして居るものは論外であるが、新しい慾望の刺戟を受けて猛然先生の地位を捨て、更に他の新しき興味に向つて發進するものを之と同一視するは囚はれた見方である。先生の生活に飽きて更に他の世界を開拓することの出來たものは、人間としての相當の尊敬を受け先生よりも多くの物質的報酬を受ける。之は物質界に於いて自然の法則に順應したものとして當然のことである。

（五）　國家に於ける歌の時代

個人の生涯にそれがある如く、一國一社會にもそれがある。蒙昧時代、野蠻時代は多く自然崇拜で過ぎ、文明時代に入つて私有財産が起り、國土が一定し、社會の秩序が成立つて始めて文藝が大に起る。初めは詩歌が盛であり、次に戲曲小說が行はれ。小說は次第に科學の影響を受け、科學の精神をその中に取入れて行く。中には科學其のものを取入れて文壇から異端扱ひにされるのがある。此順序は慾望發展の過程に於いて、それが半ば滿足された時の喜び、喜びが盡きて一種の愁を感じ、愁から更に新しき慾望に向つて進むのと同じである。更に個人の生涯に於いて、少年時代から青年時代への過渡期に詩歌があり、青年時代から中年時代に進むに從つて詩人が小說家となり、小說家が批評家となつて漸次人間生活の本筋に立歸つて行くのと同じである。

民族が勃然として其頭を擡げた時、國家が駸々として發展し行く時には、各國とも大小幾多の詩人が現はれて盛んに歌ふ。花の散つた頃、水田の中で蛙が鳴くのと同じで、詩人はもとより、詩人にあらざる者も歌の心持になつて居る。此時代をフト見れば民族は歌によつて代表せられ、國家の運命が歌によつて定まるやうにも見られる。殊に文藝家の眼にはさやうに映りやすい。けれども私によれば歌とて人間慾望の形をかへて現はれたものに過ぎぬ。慾望發展の過程に於ける一つの現象であつて、民族、國家の中心にはバーバリズムの時代から脈々として流れて居る多數の生存慾がある。生存慾は本筋である、文藝は一

時の花である。民族若しくは國家の發展が一段落を告げて、人が內省の時代に入つた時、詩歌は戲曲となり、小說となり、自己意識から來る新しき活動の起ると共に、更に新しき文藝の形式が生れた。

『六』實學と文藝との關係

人は天性社會的（若しくは政治的）動物であるといふは、人間の仕事の本筋は人間生活の太初から多數の生存慾を如何にして同時に發展さすべきかといふ問題の上にあることを意味する。戰爭も多數の慾望を調節發展させる仕事の一である。相互扶助も多數の慾望を調節發展させる仕事の一である。產業もそれである。政治もそれである。學問（實學）もそれである。人間の仕事の本筋は太初から今に至るまで終始一貫して續いて居る、文藝は其本筋から分れて中途に美しい花を開いた。けれども文藝とて人間の生存慾と沒交涉のものでない。根は同じものである

故に文藝が衰へたとて必ずしも其國が衰へたとは云へぬ。文藝も衰へ、實學も衰へ、政治も衰へ、產業も衰へては亡國の外ない。併し文藝が衰へても實學が盛んであれば、其國は文藝なしとて決して侮られぬ。何となれば文藝も實學も同じく人間の生存慾に其根を發して居る。亭々たる松柏の花が小さく、色の質素であるのと同じである。文學者が文藝を其國、其社會の實力、若しくは實力の表徵と思ひちがへ、文藝のない國は亡びるやうにいふのは飛んでもない思ひちがへである。人にそれ〴〵天分のある如く、一國、一社會にそれ〴〵天分がある。

國民の生存慾が文藝となつて花さくも、實學となつて根を張るも元は同じものである。英吉利はエリサベス朝の後、文藝が大に起つたけれども、其後文藝が衰へて經濟學が盛になり、實學では今日でも世界に重きをなして居る。一口に學問は獨逸であるといふが、獨逸の大學者の多くは英吉利の實學にヒントを得て、それに系統を立てた形跡がある。文藝家は英吉利の文明を呪咀して、英吉利はモウ駄目だなど云つたが、決して駄目でない。殊に今度の戰爭ではいよ〳〵英吉利の駄目でないことが分つた。

之に反對に文藝が極盛期を通過して、燗然頽唐の境に入つては往々にして國家の發展、民族の活動と相伴はぬことがある。一にも純文藝、二にも純文藝で只管に風韻とか、匂ひとかいふものを追つて行けば、結局本味を離れたア、でもない、コウでもないの四疊半式藝術となり、匂ひの高い藝術が現はるれば現

はれる程本筋の政治、産業、實學は衰微に傾き、果ては國を亡ぼして了ふことがある。山の風情も亭々たる松柏の姿勢を賞美して居る間はよいが、松茸の匂ひに限るとなつては植林の目的と背馳する。亭々たる松柏の育つ山に松茸の匂ひはない。松茸の匂ひは植林の望みの絶えた灌木交りの小松山にある。赤土の石ころ山にある。植林の望みある山には松茸が生えても匂ひが高くない。

『七』專制君主の神學、封建貴族の文藝

一國、一社會に文藝發生の時期があつた如く、人類全體にもそれがある。人類全體として之を觀察すると初めに神學が起り專制政治と相俟つて大に人間慾望の發展を制限して居た。處が一般社會生活の進歩は到底神學や、煩瑣哲學の束縛を以て制し切れず、先づ文藝運動が起つて神學や、煩瑣哲學の頑固な障壁を打破つた。けれども文藝運動の結果として現はれた人間思索の自由は、非常な勢で自然科學の發達を促し、自然科學の發達によつて促された産業方法の變化は、封建制度の根柢に大龜裂を生ぜしめ、やがては社會制度、經濟組織の大革命となつて、遂に資本主義の現代を造り出した。右の如き次第で、文藝が一歩又一歩科學の影響を受けて、其形を變へて行くといふことは爭はれぬ事實である。文藝の領域に科學若しくは科學的精神の侵入することを女房の部屋に盜賊の押入つた如く恐れる純文藝家は、いろ〳〵な小むつかしい文字と、廻りくどい理屈を揃べて文藝の解放を叫んで居るがそれは西洋の坊主が、半世紀に亘り殆ど續けさまに精神主義の復興を豫言し、科學萬能主義の行詰りを叫び、唯物論の淺薄を罵りつゝ、一歩又一歩科學に引づられて行くのと同じである。神學は最初に文藝を當面の仇敵とした。けれども科學の起るに及び、神學は文藝と妥協苟合して科學に當つて居る。神學は專制君主に利用され、文藝は封建貴族に利用され、科學も危く資本家に利用されんとしたが、資本家の下に擡頭した平民階級は今や猛然蹶起して、科學を資本家階級の手から奪はうとして居る。

さりとて文藝が人間の生活に與へた功績は認めなければならぬ。文藝は神學から人間を解放して、思索の自由を開いた。殊に文藝は人間經驗の蓄積中から人間共通の道を抽出して、之を一般に示した。所謂ヒューマニチーがそれである。此ヒューマニチーの建設によつて人間同情の範圍が擴大せられたこと、人間同情の範圍の擴大せられたことが、社會生活の進歩を促すに

與つて力あつたことは忘るべからざる文藝の功績である。豪族割據の封建制度から現代の國家組織に至り、國際聯盟の實現を見んとする今日に至るまで、人間共同生活の範圍が次第に擴大されて來たのは種々の事情によるが、文藝の打建てたヒューマニチーの力も亦著大である。

併しヒューマニチーを打建てたからとて餘り自惚れ過ぎては困る。科學はヒューマニチーを擴張して更に生物道を打建てた

「八」文藝の人間道と科學の生物道

封建貴族の利用した、文藝はヒューマニチーを建設して商工資本階級の擡頭を促したが、商工資本階級の利用した自然科學は、生物道を建設して有史以來、牛馬の如く使役されて來た第四階級に人間としての自覺を與へた。恁うなつて見ると商工資本階級にとつては、今更の如く自然科學が恨めしく、文藝が戀しくなる。文藝も科學精神の支配をうけて居る近代文藝でなく封建貴族の高い城壁から、王の權威を白眼視し、平民の生活を俯瞰した逍遙式の純文藝が戀しくなるに相違ない。生存慾の最も醇化された形を以て最上至高の藝術となす、貴族文藝が戀しくなるに相違ない。

故に於いてか聰明なる政治家は、時々思出したやうに文藝家との接近を企てる。純文藝でも尚ほ危險を感ずる場合は、更に神學者との接近を企てる。庶民階級の生存慾を轉じて美の世界に彷徨せしむることは、多數制馭の最も聰明なる方法である。物質慾を卑しみ、物質生活の改善を忘れて只管に神靈の前に拜跪し、美の世界に彷徨せしむることは天下泰平の奥の手である支配者が、餘りに此の奥の手を濫用しすぎた時、美の木味に醉れて居た民衆は、木味を離れて風韻を慕ひ、匂ひを追ひ、アでもない、コウでもないの末が爛熟頽唐の境に入つて自ら亡び且つ其國、其支配者の滅亡をも冷然として看過するに至る。

過去に於ける文藝の功績は吾々も十分に之を認める。又、現在に於ける存在も十分に之を認める。けれども將來は何うかといふことになると一寸小首を傾ける。無論、將來にも一種の文藝はあらう。けれども何人の力も、文藝の變つて行く形を制止することは出來ぬ。私は近頃深くそれを考へる。科學の影響も此處まではよいが、これから先はよろしくない。と云つた處で自然の法則には敵はぬ。或は文藝と科學とがお互に接近して其中間のものが出來るのかも知れぬ。假にそれが自然の成行とすれば、それでもよいではないか。之を要するに個人生活の發展

といふことと、社會生活の改善といふこととは人間の仕事の本筋である。文藝は其根から分れて咲いた花である。花は實となる時がある。花を何時までも花で居させようといふは無理である。

正宗白鳥氏が小説家として賣出した頃、人が氏に將來の小説は何うなるでせうときくと、氏は冷然として小説などいふものは將來無くなるだらうと答へたといふことを人傳(ひとづ)てにきいた。(或は私が誤つてきいて居るのかも知れぬ)此時私は白鳥氏の考へを面白いと思つて未だに忘れずに居る。無くなる無くならぬは別問題として、私はそれが何んな形に變つても構はぬ。眞の文藝は永久に斯くあらねばならぬとか、文藝がなければ人生は砂漠の如くとか、或は文明も末であるとかいふ説には何うしても服することが出來ぬ。

此考へは學校で教へられた所、本で讀んだ所、世間のいふ所と大分距つて居るので、久しく遠慮して居たが、思ひ切つて發表することにした。初めて書いて見たので纏まらぬ所もあり、部分的に考へを改めてよい所もあらうが問題にならぬ程の亂暴な説ではないと固く信ずる。

(大正八、六、一七)

夕立や花壇に水をやりし後　喜舟
谷底の冷たさありぬ鮓の石　仙臥
撫子に繪鉢の是非や姉妹　胡刀
腸をぬかれし鯡や竹婦人　炎天
蝙蝠は如來の前に歸りけり　斷腸花
降り止まぬ雨となりけり鮓の石　枚々
法もなし野寺の杉へ落ちし雷　花浪
ほとゝぎす杜若かくて夜明かな　桐谷
帷や帶つばくろの紺青に　光亂射
香焚くは行水すみしお僧かな　樂
伊豫の國戸立てず庄屋の幟かな　牛歩
大風のやみぬる牡丹崩れけり　不棲魚
庫裏に來て話も及ぶ毛虫かな　巨鹿
鮓の石とらんず燭の置きどころ　夏石
まひ〳〵や動くものなき山の池　鯱南洞
梅干や世々住みつきて坂の下　芋生
水替へてそゞろ淋しき金魚かな　菊樓
薫風や皆簑になる濱邊草　晨朗
うねる川こゝに迎へて晒布かな　迷堂
蝙蝠や城下裏町旅の中　東洋城

陸軍省と參謀本部の葛藤（二）

井比鴨東

排薩派の中心人物

山本失脚と共に、海軍に於ける薩閥は總潰れとなつたが、それでも、東郷、井上、伊集院の三元帥が、薩摩出なるの故を以て、まだ〱薩閥を馬鹿にすることは出來ぬ。而し海軍大臣が廣島出の加藤友三郎、軍令部長が高知出の島村速雄兩者なる以上、省內、省外の萬端の切盛は彼等の方寸にある。次官の栃內軍務の井出、人事の谷口、艦政の中野、經理の志佐、教育本部の村上、技術本部の伊藤皆閥族以外の者である。然るに陸軍では大御所の稱ある、山縣有朋を始めとして、寺內、長谷川の三巨頭悉く長州出で、長閥ならでは、夜も日も明け難い、素破らしい形勢である。陸軍大臣の田中が長州陸軍を代表せるは云はずもがなとして、軍務局での管野尙一も長閥のチヤキ〱である。巷評によれば、上原一派の排斥派は主として山梨管野等を中心とする長閥少壯連である、がその言ふ所を聽けば上原は參謀總長の勢力を擁して、薩閥の復興を企及し、町田經宇、河內禮藏、高島友武、井戸川辰三の如き一味を、籠護して陸軍を縱斷せんとの野心あるを吹聽し居るもの丶如し。而してその一派は大庭二郎、藤井幸槌、山梨半造、兒島惣二郎、寺內壽一、白川義則の徒と註せらる。寺內が內閣組織をする以前も上原を朝鮮に追放して、その後釜に寺內を据えんとの策謀を進め居たが、天候一變して寺內の總理たる榮冠を帶びるに迨んで、その話はそれ限りとなつたが、今回も彼を中央部より驅逐して思ふがまゝに長州陸軍で根抵を張らんとするの下心なるは瞭乎たる事實である。そして准長閥と目せらるゝは、關東州の立花、臺灣の明石等がそれである。唯だ明石は福岡の產で家柄もよく、手腕もあるから獨立して行ける代物であるが、最初は川上操六の眼鏡に止まつて、參謀本部に這入り、日露戰爭時代は、兒玉源太郎の知遇をうけて、瑞典、露西亞で活動し、最近に於ては、寺內の懷刀として朝鮮で活躍した關係上、長閥に深

いと云ふ丈けである。彼の空裏を極め來れば、果して山縣、寺内の頤使に甘んじて行けるか、否は疑問とせんも、上原黨に附隨するよりは、寧ろ寺内派を追ふのが順序であろふ。殊に田中が參謀總長に据るために、自分が第六師團長に追はれし結果、上原に平かでないのも事實と見られる。それかと云ふて田中に對しても然りであろふ。立花は爲人。溫厚にして、行政的手腕の認むべきものあるも、辛辣の氣に乏しきが故に、准長閥と見られつゝも、薩閥より排斥せられざるの地位に居る。

中立黨の一戸兵衛

一戸兵衛は、近代稀れに見るの好將軍である。旅順の役で乃木將軍の帷幕に參し、或は出でゝ攻城の將となり、彼の一戸砲壘を拔きし名將であるが、政治的趣味に乏しきが故に、長閥に走らず、薩派に同せず、中立不偏の城壘によつて、功利派の軍人を鼻で待遇つて居るほどの人格者である。由來、陸軍には、海軍の如く將官以上の易置を將官會議にて決定する所なく、總てが大臣、參謀總長、教育總監の三者によつて、決定さるゝのであるが、彼も、この樞機を擁して居るものゝ、三頭會議にての彼は、木偶の如く唯だ上原、田中の計策に聽くのみである。上原が教育總監たるの折は、隨分種々なる提議をなしたと聽いて居るが、彼はいつもながら、沈默の名將の型を墨守するのみである。上原が教育總監を去るの時、自らは大迫尚道を推薦したと噂されて居るが、薩派を二人置くのは偏重であると云ふので沙汰止みとなつた。何處へ行つても、薩長の權衡はあるらしいまた、長谷川が元帥になる時でも、御相伴は薩の川村であつた陸軍の武將たるものは、長閥に非ずんば、薩閥たれ、何にしてもお羨ましい限りである。若し、一戸が罷めて、町田とか、由比とかが其後任になつた曉には、上原と田中の意中にてのみで、人事を決裁することは不可能となる。デモクラシーの世の中である、大事な人材の配置を少數者で決定するのは、太だ以て宜しくない。專制の弊も閥族の弊も此處より生ずるのだ。須らく大規模の將官會議にて決定すべく、内規を變改するの要がある

不遇を嘆つ宇都宮　由比

朝鮮に追放されておる、宇都宮太郎は佐賀出身の俊材である始め川上門下と云ふので、長閥からは、いつでも白眼で睨まれて居るのだが、この男、多才、多智、よく呑み、よく談じ、英風の欽すべきものがある。決してその力量、材幹は明石に劣る

ものでないが、寺内、山縣に好くないから、中央部内でも重要視されざるは惜しき事だ。何れかと云へば、上原には近い方だが、上原——田中の鞘合時代に彼を好遇しなかつたから、今でも上原に對し、從前の如く好感情を有し居るやは疑問である。それから浦鹽の由比光衞である。土佐坊だけに少々骨が固く、傲岸にして人に下らない所があるために、新聞記者なぞには、あまり受けはよくないが、性來竹を割つたやうな男で、古武士の俤がある。よく飲み、よく泣く所案外正直である。チョト林權助に似た所がある。彼は長閥から、逆待されて居る一人で、若しその生地が、長州であるとか、薩摩であつたならば、モツト緊要な地位にあるだろふ。宇都宮、由比等中將の古參級者が現時の陸軍大臣に對して、衷心から服して居るか、曰く否。彼等は田中の今日主義を知る。人氣取政策に愛憎を盡かし居るものである。漠然として士風地を拂つて居る今日、田中が陸軍大臣の地位に居るのは、全く長閥のお蔭である。薩閥のお蔭である。と呪ひの眼を持ち、憎惡の心を有して居るのは事實であらう。同じ長閥であつても、大井成元の如きは田中を弱輩視して何等の重きを持せざるのも事實である。而して大井の如きは、上原黨ではないが、陸軍省の近時の腰の弱さに愛憎をつかし居るのも事實であらうと思はれる。かくして參謀本部派は、師團側の同情を博し、陸軍省側は原敬——内田康哉——この三者の後援の下に、いよ／＼一戰なかるべからずの處に進んで來た。

某將官の話に、山梨は上原の尤も嫌ひな男である。この男を次官に据えた田中は、從前通り上原の命を奉ぜざるを、公然と宣言したものだ。陸相が參謀總長の命を奉ずるの意義なき事ではあるが、唯だ以て晋ン兵衞大臣の意氣を計るの一資料である。果然、關東都督官制問題で、爆發の狼火は打揚げられた。

關東都督廢止問題

軍閥の畑の蹙まるのは、彼等軍人としては、決して愉快なことではない。出來るものなら、陸海軍大臣は、永遠に現役の將官たらんことを切望し、臺灣、朝鮮、關東の三都督も決して文官制度にしたくはなからう。殊に陸軍々人の意見として聞く所によれば、關東都督は、奉天、吉林、の兩將軍に對抗して、有要なる制度なるのみならず、滿蒙は陸軍々人の金城鐵壁と頼めるの地であつて、その開發武斷的勢力を張るの要素として、必然武官制でなくてはならぬのだ。加之、西伯利政府に對し、露國民に對し、武官ならでは押しが利かず、武官ならでは强硬な主張が出來ずと、觀測し居る事とて、原——田中の間に決定せる關東都督廢止說には、參謀本部内に於て强硬な反對の聲があつたそうだ。有力なる將軍が頑强にその制度の非を鳴らしたそうだ。而し、輿論を味方とする陸相の提案は、スラ／＼と解決されて好評を博するに至つた。その以前に西伯利撤兵問題でも小波瀾を惹起するに至つたのであつた。

財界閑談

△京都一流の旗亭、杉の井は突然廢業したそうだ。それは木内前知事が、アヽした破目に陥つたので、岩崎男は自分の親戚の木内がアヽしたツマを演じたから、ドノ面さげて、京都へは行けぬとのことで、その飛沫が杉の井に及んだとは、お氣の毒な譯だ。

△此程來朝した、一流の皮肉家、濠洲サンの主筆マツカレーの日本觀に曰く、日本人の食事に使用する、箸はシーザー時代そのまゝのものだ。そして一人で出來る仕事を、十人掛りで遣つて居る。器械力に依らずして、皆生血を絞つた力ばかり使用しておる。だから人口七千萬人ありとすれば、現在の日本の事業は一千萬人足らずで出來る。

△所が、近頃日本人も一人前の仕事は、一人で仕遂げやうとする、意氣が仄見えて來た。この調子で殘餘の六千萬人が、濠洲に押しかけて來た日には堪つたものぢやない。現下の日本人は流石に時間を空費するには名人だと。

△對支四國借款團は、本年中には成功するそうだ。金額は三億萬圓內外で、米國はその五分の三以上を負擔するそうな。高橋藏相に、日本の負擔額は幾千位かと聞いたら、マー金がないから米國の百分の一位ダヨと笑つて居た。

△その金額は、藏相の串談だが、幣制改革に關する、一億萬圓は全部、日本側の用意らしい。そして、從來の勢力範圍には、別段何等の變更も來すまじく、英國は西藏問題で、米國との了解があると云ふ噂。

△しかし、寺内々閣時代借款に應じた、一億二三千萬圓は、大半棒引になるらしく、そうなると吉林借款なぞは、困つたことになるらしいが、布袋藏相や、護謨外相爺は、それを何とかして生かそうと頭は鉢谷の體チヤケナ。だが、阪谷タンの顧問復活は絶體に駄目だと。タンも酷く、支那や米國から嫌はれたものだ。

△勞働者の勢力が、認識さるゝと共に、資本家側の警戒は、一通りや、二通りでないが、これと共に、隨分いかがはしい、勞働者の上前はねが現れて來たそうな。我こそ は勞働者の、第一の味方で御座いとか、未來の勞働者首領で御座いとか、暑いのに長い御託を並べ立てゝ、重役連を脅迫するものが夥しいとは、折角勞働者の風向きが、よくなりかけた矢先に茶々を入れる、憎らしい代物だ。

△勞働黨の首領なぞと云ふものは、經濟學にも、實際生活にも、深い根柢と、長い經驗のあるものでなくてはいかぬ。英國のチヨンバーンの如きは、躬ら勞働者の仲間に這入り、そして經濟學にあれ、文學書にあれ、宗教書にあれ、片つ端から讀み盡して、既に十萬册に達すとは、豪氣なものぢやないか。

△村井吉兵衛は、自分の使用人に對しては、極端に威張り散らすそうだが、何某とかの、局と結婚してからは、有頂天になつて、日本一の大貴族にでも、なつた氣でおるとの事だ、細川護立侯あたりは、侯爵と云ふものがついておるから、眞實の中流の味は了解出來ぬと、コボして居らるゝ時に、サリとはあまりに沒曉漢も太だしい。

△潤格せぬ成金、山下龜三郎は山本唯三郎と比較さるゝことが尤も嫌ねるとある。服部金太郎に、アナタの顔は、原敬さんと瓜二つだと、諂諛すれば大ニコ〳〵。



どん底の人々

―ジャック・ロンドン―

辻潤譯

はしがき

この書物の中に物語られてゐる色々な經驗は一九〇二年の夏に私の出遇つたところのものである。私は探險者に最も近い風の態度をもつて倫敦の下層界に入りこんだ。自分は見たこともない人達の教へや以前に見たことがあると云ふ人達の言葉よりも寧ろ自分の眼で目のあたり露骨にそれを確かめて見たかつたそれに、自分は以前から下層界の生活に對する或る單純な規定を自分でこしらへてゐた。つまり、精神的にも肉體的にもその生活が生々としてゐればそれは善いので、傷けられたり、萎縮してゐたり、歪んでゐたりしたらばそれは悪いのである。

この本の讀者は、自分が悪いものを澤山に見たことを容易に知ることが出來るであらう。けれど、忘れられてはならないことは、私の書いた英國の當時の狀態は『景氣のいい時』だと思はれてゐたのである。私が出遇つた飢餓と寢所の缺乏は、最も景氣のいい時でも決して、拭ひ去ることの出來ない慢性の悲慘狀態だつたのである。

その夏に續いてヒドイ冬がやつて來た。無數の失業者等が、一ダース位づゝ行列をつくつて毎日〱パンに向つて叫びながら、倫敦の市街をゾロ〱と步きまわつた。一九〇三年の正月にニウヨルクの「インデペンデント」に書いたジャスティン・マッカアシイ氏は簡潔に當時の狀態を要約してゐる。

『どこの工場も日々夜々食物と寢所とを求めて戶口に群れつどふ飢えたる群集を入れるべき場所を持たなかつた。倫敦のあらゆる陋巷の屋根裏や地下室に住む貧民達に食物を供給せんとして骨を折った悉ゆる

慈善協會も遂に成す法を知らなかつた。倫敦の樣々の場所に在る救世軍の營所も每夜襲ひ來たる大多數の失業者や、窮民に取り圍まれて、徒らに傍觀するばかりで殆んど施すべき策がなかつたのである。』

私が英國に於けるかくの如き狀態に就て與へた批評はあまりに悲觀的であるとのことである。けれど自分は、割引して考へて見ても、樂天家中の最も樂天的な人間だと云ひ得る。それに自分は人間性と云ふものを政治的集會によつてよりも寧ろ個人によつて忖度したいのである。社會は生長する、しかしながら、政治的機械は寸斷されて遂には『屑』になつてしまふ。英國人に對しても、男性、女性、健康、幸福と云ふものの存する限りは、廣々とした、微笑する將來を自分は見てゐる。けれど、現在に於てそれ等の者を虐遇する大多數の政治機械に對しては屑の山以上のなにものをも見ることは出來ない。

ジヤツク・ロンドン

第一章

降下

『だが、そんなことの出來ないと云ふことは、君だつてわかつてゐるだらう。』と友達の連中は云つた、私が倫敦のイースト・エンドへ自分を沈みこませるに就て相談を持ちかけた時に。『まあ行くなら、案内に巡査でも賴むのだな。』とかれ等は、二の次に考へなほして付け加へた、滿更、嘘でもなささうな狂人の心理的狀態に强ひて自分達を妥協させようと努めながら。

『だが、僕は巡査の御厄介にはなりたくないと思ふのさ。』と私は反對した。『僕のやつて見たいと思つてゐることは兎に角、イースト・エンドへ沒落して僕自身で色々な物を見たいのさ。僕は全體、彼處の人達がどんな風に生活してゐるか、何故、あんな處に住んでゐるのか、そして、何の爲めに生きてゐるかを知りたいと思つてゐるのさ。つまり、僕は僕自身が彼處に住んで見たいと云ふ譯さ。

『なに、君が彼處で生活する！』と皆んなは非難の表情を顏色に現はして云つた。『だつて、彼處には人間の生命が二ペンスの價打さへない處があると云ふぢやないか。』

『其處を僕は見たいと思つてゐるのさ。』と私は嘴を入れた。

『だが、駄目なことはわかつてゐる。』となほもまけずに友達は答へた。

『僕はそんなことを聴きに君達のところへやつて來たのぢやない、』と私はかれ等の呑み込みのわるいのに少しイラ〳〵しながら、ブッキラボーに答へた。『僕は此處ではストレンヂヤアなのだ。だから、先づ出かける前に、一應、君達からイースト・エンドの話をきかうと思つてやつてきた迄のことさ。』

『だが、僕等はまるでイースト・エッドのことは知らないのさ。それはどこか向ふの方にあると云ふことだけれど、』と太陽の昇るのが極く稀れにしか見られない方角を漠然と指さした。

『それなら、僕はクック會社に行くばかりだ、』と自分は宣言した。

『さうだ、』とかれ等は助かつと云はないばかりに云つた。『クックならたしかに知つてゐる筈だ。』

だが、おおクック、おおトーマス・クックアンド サン、道案内者で先導者で、世界の生ける道標で、困却してゐる旅行者には第一番の救助者のクック―最も暗黑な阿弗利加だらうが、最も奥の西藏だらうが、賴みさへすれば、なんの躊躇もせず、直ぐさま、容易に迅速にやつてくれる クックが、ラッドゲート・サァカスからホンの石を投げた程しかない 倫敦の イースト・エンドへの道を知らないとは！

『そりや、駄目でございますよ、たいていおわかりでも御座いませうが、』とクック會社の輕便課にゐる道路と賃金の人間陳列場でさう云つた。『そりや、あんまり―ヘン―あんまり奇抜過ぎます。』

『警察で御訊ねになつたらば、』と私が執拗に賴んだ時に、彼は命令的に云ひきつた。『私共では、未だ御客樣をイースト・エッドに御案内申したことはありません。そんな御註文に預かつたことはまだ一遍もございません。それにあの邊のことは少しも存じては居りませんので。』

『心配しなくつてもいい、』と、私は、彼の浴びせかける拒絶によつて事務所から追ツ拂はれることから私自身を救ひ出さうとして、遮ぎつた。『だが、君達にもやつてもらへることがあるのだ。先づ、僕がこれから何をやらうかと云ふことを理解してもらはなくつては困る。少なくとも、なにか事の起つた時に君達に僕を見覺えてゐてもらふこと位は出來るだらう。』

『ああ、わかりました！若し、あなた樣が殺されたと云ふやうな場合に、屍體の證人に私共が立つと云ふやうなことで。』

彼はさも愉快さうに、また冷膽に云ひ放つた。その瞬間、私は自分のコワ張つたズタ〳〵に切られてゐる死骸が、始終冷た

い水でじめ／＼してゐる敷石の上に横つてゐるのを見た、さうして、それを悲しさうに同時にジット覗きこみながら、それが果してあのイースト・エンドを見物したいと云つた氣狂ひ亞米利加人の死骸かどうかを見極めやうとしてゐる彼の姿を見た。

『いや、いや、』と私は答へた『「巡査」とゴダついたやうな場合に僕を証明してくれさへすればいいのだ。』私は少し激した口調で云つた。それに、私は實際、國言葉まる出しでしやべつてゐたのだ。

『それは、』と彼が云つた『事務所の方の係りです。』

『それに、まつたく先例のないことなので』と彼は辯解的に付け加へた。

事務所の男は咳拂ひをして、鼻であしらひながら、『私共では御客様に對する報告は一切しないことに致して居ります、』と說明した。

『けれど、今の場合は、御客が自分自身でその報告をしてくれろと仰言るのぢやないか』と私は言ひ張つた。

すると、彼はまた咳拂ひをしてフーンと云つた。

『勿論、』と僕は急いで先き廻りをした『僕はそれが先例のないことだと云ふことは知つてゐる、けれど！』

『先程も申しあげた通り、』と彼はまけずに續けた『まつたく先例のないことなので、御氣の毒樣ですが、私共ではあなたの御役に立つやうなことは出來さうも御座いません。』

それは兎に角、私はイースト・エンドに住んでゐる或探偵の名宛を持つて其處を出た。そして、亞米利加の領事館へ行つた。そして、此處で、とう／＼、私は用務を果すことの出來る人を見付け出した。其處では、咳拂ひも、鼻あしらひも、しかめ面も不信用も、ビックリもなかつた。第一の瞬間で、私は私自身と私の計畫とを說明した。彼はそれを當り前のこととして受け入れてくれた。次の瞬間に、彼は私の年と、丈と、重量とを尋ねて、私を見下ろした。そして、第三の瞬間に、別れの握手を取り交した時に、彼は云つた。『よろしう御座います、ジヤックさん。忘れずに、キット後見になりませう。』

私はこれでホッと息を吐いた。これで、私はやツト何人も知らないあの人間の荒野に自由に踏み込むことが出來ると思つた。ところが、スグとまた新規の厄介が起つて來た。それは、馭者の形で現はれて來た。彼は灰色の頬髭を生した一見立派な男で、なんにも云はずに、市の中を數時間、驅けづりまわつた。

『イースト・エンドまでやつてくれ、』と私は腰を下しながら、命

じた

『旦那、何處ですつて?』と彼は驚ろいて尋ねた。

『何處でもかまはないから、イースト・エンドへやつてくれ。すぐとだ』

馬車は數分間當なしに驅けづりまわつた。それから、閉口したやうに止まつた。私の頭の上の口が開いて、馭者が困惑したやうに私を覗きこんだ。

『伺ひますが、』と彼が云つた『旦那はどちらへ御出なのです?

『イースト・エンド、』と私は繰り返した。

『特別に何處ときまつてゐる譯ぢやあない。何處でもいいから、イースト・エンドへやつてくれ。』

『だが、旦那行先きは何處なのです?』

『ウルサイ!』と私は怒鳴つた。『どこでもいいからイースト・エンドだ。グヅ／＼しないでスクと行けばいいのだ!』

彼のわからなかつたのは無理もなかつた、が、彼は頭を引ッ込めて、ブツ／＼云ひながら彼の馬を走らした。

倫敦の表街(おもてどほり)ばかりでは何處を見ても、ヒドイ貧乏の光景に接することは出來ないが、どんな處からでも、一寸五分間ばかり横町に這入りさへすれば、スグと貧民窟にブツかることが出來る。けれど、今、私の馬車が走りこんでゐる處は殆んど無限に連續してゐる貧民窟なのである。街上は至る處、色々な人種で充されてゐた。丈の低い人達や、困憊した人達や、酒毒に侵された顏付をした人達が多かつた。私達は煉瓦と不潔との數哩の中を走りぬいた。四ツ辻や、横町からは煉瓦と悲惨の長い光景が閃めいた。あちこちに醉ひどれた男や女がウロつき、空氣は汚れて、その間から、色々な物音や爭ひの雜音がきこえて來た。市場には、よろ／＼した老人や婆さんが泥の中に捨てられてゐる食べ殘りの屑の中から腐つた馬鈴薯や、豆や、野菜を探し歩いてゐた、すると一方では子供達が腐爛した果實の周圍に蠅のやうに群がつて、肩を押し合ひながら、腕を延して、みんな半分は腐りかけてゐる屑を引き出しながら、その場でムシヤ／＼と食べてゐた。

途中で、私は馬車の姿を一ツも見かけなかつた。私の馬車のみがまるで他界から來た美くしい幽靈でもあるかのやうに見えた、往來の子供達は至る處で私の馬車の後を追ひ驅けた。目路の限り、其處には只だ堅い煉瓦塀と汚ない敷石と、わめき叫びつつある街々があるのみであつた。生れて初めて、私は群集の恐怖に打たれた。それは恰かも大海の恐怖の如きものであつた。

そして、どの街にも、慘憺たる群集が廣漠として惡臭を放つ大海の波の如くに搖めきながら、私の上に蓋ひかぶさつて來た。

『旦那、ステップニイです、ステップニイステーションです。』と馭者が呼んだ。

私は見まわした。それは、まつたく停車場にちがひなかつた。彼はこの荒野の中で、今迄聽いたことのある一番親しい場所に夢中で馬車を馳らしたのであつた。

『よし、』と私が云つた。

彼はなにかなしに早口で饒舌つて、彼の頭を振つた。さうして、みじめな頷付をした。

『あツしは此處はまつたくの新參で、』とハツキリ物を云はうとした。『若し、旦那がステプニイ　ステーションぢやないとおツしやれば、こんだは何處へ行つていいかまるで見當がつかないので。』

『僕の註文を君に話さう、』と私は云つた。

『君は兎に角、馬車を走らせて、どこか古着を賣つてゐる店を氣をつけて呉れ給へ。で、若し、そんな店が見つかつたら、かまわないから、その近所の横町が見つかるまで行つて、其處で止めて、僕を降してくれ給へ。』

私は、彼がそろ〳〵賃金を氣に仕始めた樣子を見てとつた。けれど、そから間もなく、彼は馬車を横町に引き入れて、古着屋が少し戻つた處にあると私に告げた。

『旦那、代を頂きたいのですが？』と彼がせがんだ。『七志六片いただきたいので』『よし、』と私は笑つた、『だが、おまへの顏を見るのもこれが最後だぜ。』

『旦那、若し代を下さらなきあ、あなたの方こそ最後ですぜ、』と彼は口答へをした。

その時に、ボロ〳〵の見物人の群集が既に馬車の周圍に簇がつた、そして、私はまた笑つて古着店の方へ引き返した。

此處で一番困難なことは古着屋に私は實際のほんとうに古着を欲しいと思つてゐるのだと云ふことを理解させることであつた。しかし、彼は新らしい變挺な上衣とズボンとを押しつける無駄な企てを繰り返した後で、古着の積み重ねを明るみへ持ち出しながら、不思議さうに私の方を眺めながら、妙なあてつけがましいことなどを口にした。これを彼は、明らかな企てをもつてしたので、それによつて、彼が、『私の御里を見すかした』と云ふことを私に知らせて、それをあばくと云ふ恐怖によつて、私を威嚇かし、私の買物の金を高く拂はせようとしたのである。

なんでも後暗いところのある人間か、海を渡つて來た高級の犯人かだと彼は見てとつたのである、いづれにしても巡査の眼をくらまさうとしてゐる人間だと。

けれど私は價段と價打の放外な差に對して彼と爭つた、さうして、とう／＼私は彼の抱いてゐる觀念に對する彼の姿を開いてやつた、そして、彼はヒドイ御客とヒドイ取り引をしなければならないやうになつた。とう／＼、私は一對の丈夫さうな、だがかなり擦り切れたズボンと、ボタンのたつた一ツ殘つてゐるジヤケツと、石炭の運搬される處に明らかに奉公したらしい粗靴と、薄い靴帶と、極めて汚ない帽子とを撰んだ。私の下着と靴下とは、だが、新らしく暖かであつた。しかし、それとても亞米利加の浮浪人が、運よくば、いつでも手に入れることの出來さうなものであつた。

『旦那は中々拔ケ目がない。』と、彼は、嘘りの御世辭をもつて云つた、私がとう／＼約束の割増拾志を手渡した時に。『旦那のズボンは誰れが買つても五志の價打はありますよ、それから、上衣や、帽子や、新しい火夫の下着やなにかは兎に角として、荷揚人足でもその靴なら二志六片は出しますよ。』

『それで、君ならイクラ出すね。』と私はだしぬけに尋ねた、『僕は兎に角、君に拾志を拂つたのだ、ところで、今スグにこれを八志で讓らうぢやないか、よし來た、さうしよう！』

けれど、彼は歯をむき出して、彼の頭を振つた、そして自分はかなり廉く買つたつもりでゐたが、古着屋はそれでもうまく儲けたのだと云ふことを氣付いて、不愉快になつた。

私は馭者と巡査とがかれ等の頭を突き合してゐるのを發見した。けれど巡査は、鋭どく私を見下し、特に私の抱へてゐた包みを検査した後で、行つてしまつた、殘された馭者は自分一人で妙にフクれてゐた。それから、彼は、私が彼に拂ふべき七志六片を拂ふまでは一歩も動かなかつた。そこで、こんだは、彼が地球の端までも御供すると云ひ出した、彼の執拗に賃銀を要求したことを盛んに辯解すると同時に、倫敦市ではかなり上等な御客をつかまへることが出來ると云ふことなどを說明しながら。

けれど、彼は結局、私を北倫敦のハイベリイ・ヱールまで乘せて行つてくれたばかりだ。其處では、私の荷物が私を待つてゐた。此處で、翌日、私は私の靴をぬいだ、(その靴の輕さと氣持よさに對する悔なしではない)、それから、私の柔かい鼠色の旅行着、車賃、私の衣物をソツクリぬいでしまつた。それから、他

の想像することの出來ない人達の衣物に私自身を適合させようとした、その人達はまつたく、商賣人から得られるなさけない小額の爲めにこれ等のボロと別れなければならなかつた程に不幸だつたのである。

私は火夫の下着の、腋の下に、金貨を縫ひ付けた。(それはたしかに萬一の場合に備へる爲めであつた、)そして、私の火夫の下着の内側へ私は自分自身を入れた。それから腰を下して、私の皮膚を柔らげ、神經を表面に癇らした靑年に向つて說敎をした。なぜなら、その下着が毛のシャツのやうに粗ツぽくゴワ〳〵してゐたから、そして、私は最も嚴格な禁慾主義者と雖も、それから後の二十四時間内に私のやつた以上の苦しみは經驗しなかつたに相異ないと信じてゐる。

その他の服裝はかなり容易く付けられた、だが、粗靴(ブローガン)だけはまつたく問題だつた。まるで木か何かで出來てゐたやうにコワ張つてゐたその靴は、私の拳で爪先の方を引き伸した後で、辛じて私の足を入れることが出來た。それから數志と、ナイフとハンケチと、茶色の紙と煙草とを私のポケットにつめこんで階段をドシ〳〵下りて、これからの私を心配してゐる友達に別れを告げた。私が入口を出る時に、『手傳(ヘルプ)』の品のいい中年の婦人は彼女の唇を抂げた笑に打ち勝つことが出來なかつた。そして無意識な同情から、咽喉のところで、それと別れたが、結局『笑ひ』とわれわれが習慣上名付けてゐる見苦しい動物的雜音をたてた。

私が通りへ出るか出ないうちに、私は私の服裝によつて影響された境遇の變化に打たれた。自分の接觸する普通人の態度からあらゆる卑屈さが消え失せた。急に!云はば目だたく間に、私はかれ等の一人になつてゐた。私の擦り切れた、穴のあいたジャケツは私の階級の表號であり、廣告でもあつた。そしてそれはまたやがてかれ等の階級でもあつた。それは私を同種類の人間にした、そして、私が今迄に受け取つた媚びるやうな、敬遠的な注意の代りに、私は今、かれ等の仲間を分け前した。薄汚ないズボンとハンケチを頸に卷きつけた男は、最早"Sir"とか"Governor"(旦那)として私を呼びかけなかつた。それは今では"Mate"であつた―そしてその言葉には、その言葉特有の美しい氣持のいい響きと、他の如何なる言葉も持つてゐない暖たかさと喜びとがあつた。Governor その言葉は支配と、力と、權威とを臭はせてゐる―それは上にゐる人間に對して下にゐる人間が拂ふ貢で、彼がホンの少し許り、重荷を輕くしたい

とふやうな望みから發せられたもので、つまり、施しを乞ふ爲めの一ツの言ひまわしに過ぎない。

　これは私に一ツの喜びを齎らした、それは私が他鄕に出てゐる普通の亞米利加人に拒まれてゐるものを私のボロ着物で經驗したと云ふことになる。私はボロ着物の御蔭でチツプの流行病を免かれ、對等の身分として色々な人間に出遇つた。否、それどころではない、その日の暮れないうちに、私はまつたく態度を一變して、最も叮嚀に或紳士に向つて、『旦那、ありがたうぞんじます、』と云つた、私はその紳士の馬を止めてやつたので、その御禮として彼は私の熱い掌に一片を落してくれたのであつた

　私の新らしい服裝によつて私の境遇に色々の變化の起つたことを自分は發見した。雜踏の巷を横切る時に、私は以前に增して、車を除けるに一層敏活でなければならないことを發見した、そして、私の生命が私の服裝に比例して安價になつたといふ感銘を著しく受けた。以前、私が巡査に道を尋ねた時には、私はいつでも、『バス（四輪馬車）ですか、ハンサム（二輪馬車）ですか？』ときかれた。けれど、今ではその間が『歩いてか、乘つてか？』になつた。また、停車場では三等の切符が、當り前のこととして手渡された。

　しかしながら、一方ではそれに對する報償があつた。私は初めて、英國の下層階級の人達と面と向き合つた、そして、かれ等が眞にどんな人達だかを知つた。ノラクラ者や勞働者達が、街の隅や、酒店で私と話をした時に、かれ等は仲間同志に話すやうに話した、そして、かれ等の話しはいかにも自然で、其處には、かれ等の話や、話し振りで私から、何物かを得ようとするやうな心持は少しもなかつた。

　そして、私がとう／＼イースト・エンドに這入りこんだ時に、私は群集の恐怖が最早私を惱まさなかつたことを發見して滿足した。私は群集の一部分になつた。廣漠とした惡臭の海が私の頭の上に押し寄せて來た。そして私は靜かにその中にもぐりこんだ、其處には何等恐るべきものがなかつた—但し火夫の下着だけは唯一の例外である。

第二章

正直ジョンニイ

　私は諸君に正直ジョンニイの名宛（アドレス）を敎へないであらう。彼が兎に角イースト・エンドの最も上品な街に住んでゐると云ふこ

とだけでまけておいてもらはう、その街は亞米利加ではずいぶんヒドイと思はれるかも知れないが、イースト・ロンドンの荒野では眞の綠地(オアシス)である。その街の四方は不潔の間屋で、横町はむさくるしい子供達によつて充されてゐるが、舗道は比較的子供が少ない—そのくせ、かれ等の遊び場所は他にはないのだけれど、—だから、なんとなく荒寥としてゐる、それに往來の人々も極めて少ない。

この街の家はみんな、他の街も悉くさうだが、その隣家と肩と肩を並べてゐる。家には各、唯だ一つの入口があるばかりで、家の廣さは十八呎位、裏には煉瓦塀でかこはれてゐる形ばかりの物置場(ヤード)がある、其處から、雨の降らない時には、石板色をした空が眺められるのである。だが、この邊はイースト・エンドでもまだ〳〵上等な場所だと云ふことを斷つて置かなければならない。この街に住んでゐる人々の或者は『奴隷』を飼つて置く程の暮しをさへしてゐる。正直ジョンニイもその一人を飼つてゐる。彼女は實に世界のこの特別な部分に於ける私の最初の知り人である。

正直ジョンニイの家へ私はやつて來た、そして、その入口にその『奴隷』が出て來た。さて、諸君、人生に於ける彼女の位置はまことに哀れむべく、侮蔑すべきであるに拘らず彼女は反いて憐憫と輕蔑とをもつて私を眺めた。彼女は私達の會話が短からんことの簡單な願ひを明らかにした。それは日曜日であつた。そして、正直ジョンニイは家にゐなかつた。そして、それが全てであつた。けれど、私はそれが全てであるかないかを論じながら、グヅ〳〵してゐたので、とう〳〵正直ジョンニイ夫人が戸口に惹きつけられた、其處で、彼女は下婢が私に注意を向ける前に戸を締めなかつたことに對して叱言を云つた。

否、正直ジョンニイ氏は家にゐなかつたばかりでなく、更に彼は日曜には何人にも遇はなかつた。それは少し困つた、と私は云つた。私は仕事を探しつつあるのか?否、まつたく反對だ。實は、彼に有利な話をする爲めにジョンニイ・アップライトに遇ひに來たのである。

すると、直に一つの變化が全ての上に現はれて來た。問題の紳士は教會に行つてゐるが、一時間かそこいらの中には歸宅するだらう、さうすれば必ず遇へると云ふことになつた。

私は内へありがたく這入つたらうか?—否夫人は、私が角の酒屋へ行つて待つてゐると云つて、彼女の招待を釣り出さうとしたにも拘らず、御入りなさいとは云はなかつた。それから、私

は、角へ行つたが、禮拜時間だと見えて、『酒店（パブ）』は閉つてゐた。なさけない霧雨が降つて來た。それで、贅澤を見合せて、近所の入口に腰をかけて待つてゐた。

すると、その戸口に例の『奴隷』が顔を顰めて、たいへん困つた樣子をして、やつて來て、奥さんが、戻つて臺所で待つてゐてもらひたいとの旨を私に告げた。

『ずいぶん澤山の人達が仕事を探しに來るものですから、』とジヨンニイ夫人は辯解らしく説明した。『ですから、私の口の利き方をわるく思はないで頂きたいのです。』

『いいえ、ちつとも、なに、少しも、』と私は差當り、私のボロを威嚴で包みながら、横柄な態度で答へた。『よくわかつてゐます。仕事を探す人達の爲めにあなたはズイブン御迷惑なさるでせう。』

『ええ、まつたくです、』と彼女は辯辨な表情のある眼付で答へた。そして、私を臺所へではなく、食堂へ案内した——それは私の立派な態度に酬ゆる恩惠だと、私は見てとつた。

この食堂は臺所と同じ高さの處にあるので其處は四呎ばかりの地下であつた。そして、白晝であるにもかかはらず、私は自分の眼を慣らす爲めにしばらく待たなければならない程に暗かつた。煤けた光りが窓から僅かばかり差し込んでゐた。その窓の上は人道と平行してゐた。そして、この光線で私は新聞の字を讀むことが出來ると云ふことを發見した。

そして、此處でジョンニイの歸りを待つてゐる間に、私は自分の使命を説明して置かう。イースト・エンドの人達と一緒に食べたり、寢たりしてゐる間に、あまり遠方でない場所に隱れ家を持ちたいと云ふのが私の願ひであつた。私は其處へ、時々驅け込んで、よい着物と清潔とがなほ存在してゐると云ふことを私自身に確かめたかつたのである。そして、またさう云ふ隱れ家に、私の郵便物を受けとり、私のノートを書き留め、そして、折々服裝を代へて文明へ顔を出したかつたのである。

けれど、これはまた一方に厄介なことでもあつた。なぜと云ふと、私の財産が安全なやうな下宿には、必ず二重生活を營む紳士を疑ふやうな主婦（かみさん）がゐるだらうし、下宿人の二重生活に頭を惱まさないやうな主婦のゐる下宿では、財産が不安なやうに思はれたからである。このディレンマを除かうと云ふのが、つまり私を正直ジョンニイの處へ連れてこさせた理由なのである三十年餘りも、イースト・エンドで勤續してゐる探偵で、船渠の重罪人によつて彼に與へられた名によつてかなり廣く知られて

ゐる彼は、私の爲めに正直な旅屋の主婦を見付けてくれるに恰好な人間であつた。そして、彼ならば、私の不思議な出入に關して主婦に妙な疑を起させずにすむと思つた。

彼の二人の娘が彼を困まらせながら教會から歸つて來る―さうして、かれ等が日曜の晴衣を着てゐるのでよけい美しく見えた。しかもそれは倫敦娘（コクニイラス）を特色付けてゐる弱々しいデリケートな可愛さであつた、そしてそれはまた、當にならない約束のやうな、或は夕燒の空から忽ちうすれゆく色のやうな美くしさでもあつた。

かれ等は大びらな好奇心をもつて私を眺めまわした。まるで、私がなにか妙な動物ででもあるかのやうに。そして、私の待つてゐる間、全然、私を無視した。それから、正直ジョンニイ彼自身が到着した、そして、私は彼と相談する爲めに二階に呼びあげられた。

『もつと聲高に話して下さい。』と彼は私の序開きの言葉を遮ぎつた。『私は悪い風邪をひいてゐるところへ持つて來て、よく聽えないときてゐるから。』

老スルース及びシヤアロック・ホルムスの面影！　私は若しかしたら、私が聲高に話してゐる報告をすつかり書きとつてゐる助手がゐるのではないかしらと思つた。そして、今日までも、私が正直ジョンニイに就て見たところでは、そして、その事柄に關して當惑したところでは、果して、彼が風邪をひいてゐたのか、隣室に助手を忍ばせて置いたものかハツキリと私の判斷をきめることは出來なかつた。だが、たつた一ツ確かな事は、私がジョンニイに、私自身及び計畫に關して色々な事實を與へたにも拘らず、彼は、その翌日私がコンヹンショナルな服裝をして、馬車で彼の街に忍びこんだまで、その判斷を延して置いた。その時、彼の挨拶は十分叮嚀であつた、そして、私は御茶に呼ばれて家族と同席するべく食堂に行つた。

『私共は、此處では至極質素です、』と彼が云つた、『で、あなたも私共の質素に御つき合下さらなければなりません。』

娘達は顏を赤くして、私に挨拶することに困惑を感じてゐた、しかも、彼はかれ等の爲めに少しもそれをやわらげやうとはしなかつた。

『ハツハツ！』と、彼は皿が鳴るまで彼の平手で食卓を敲きながら、思ふ樣高笑ひした。

『娘共は、昨日あなたがパンの屑をねだりに來たと思つたのですよ！ハツハツ！ホツホツ！』

茲に於て娘達は大に憤慨して、パチ〳〵する眼と罪あり氣な赤い頰をしながら、否定した、恰かも、ボロを着た人間の下にボロを着て歩るく必要を持たない人間を見分けることが出來るのを眞の教養の要素ででもあるかのやうに。

そして、それから、私がパンやマルマレードを食べてゐる間に、意地悪い目的の遊戯が進行した、娘達は、私が乞食とまちがへられたことを私に對する侮辱だと思ひ、親爺は、さう見誤まられることに成功したことを私の恰悧に對する最高の御世辭だと思つてゐる。その全てを私は樂しんだ、それから、パンも、マルマレードも御茶も。そして、とう〳〵正直ションニイが私に下宿を見付けてくれる時が來た、それを、彼は、五六軒とは距たつてゐない、彼自身の上品な繁華な街りに見付けてくれたので、その家は、彼自身の家に對して、云はば豌豆の隣り合せとも云ふべきものであつた。

第三章

私の下宿その他

イースト・ロンドンの立場から云へば、私が一週六志、卽ち、一弗半で借りた室は最も愉快な事件であつた。けれど、翻つて亞米利加の立場から見れば、それは設備もわるく、不愉快な小さい室であつた。その貧弱な設備に私は、普通のタイプライタア テーブルを付け加へた、それで、私は振り向くのも容易ではなかつた。私は蠕蟲的運動の一種でヤツトそれを廻はることが出來た、しかもそれをするには非常な巧妙さと沈着とが必要であつた。

私は私自身、或は寧ろ私の財産を片付けたところで、私の散歩服を着て散歩に出かけた。住居と云ふことが私の心に新らしく蘇生つてきたので、私は心の中で、自分が妻と澤山の家族を抱えてゐる貧乏な青年だと云ふことを假定して、家々を眺め始めた。

私の最初の發見は空屋が殆んどないと云ふことであつた―實際、かなりな面積の間を不規則にグル〳〵と廻つて歩いても、途に、一軒の貸家すら、見付けることが出來なかつた。つまりその邊は何處でも滿員になつてゐたのである。

家族を抱えてゐる貧乏な青年として、この最も好ましくない土地で、家と云ふものを借りることの出來ないと云ふことが明らかになつたので、私は次に、私が自分の妻や、子供や、家財を入れることの出來るやうな設備のない室を探して歩いた。室も澤山はなく、あつてもたいてい一間であつた。貧乏人の家族

なら、其處で煮炊きをしたり、寢たりするに充分だと思はれてゐたに相異ない。

ところが、一室が貧乏人の家族にとつて十分だと思はれてゐたばかりでなく、一室を借りてゐる家族がまた更に一人か二人の下宿人を置いてゐた。そして。たとへばその室が、一週、三志から六志するとすれば、その室をまた借りする下宿人は八片から一志で、其の室に寢とまりすると云ふやうな次第である。

私が探險して歩いた數萬の家には何處でも風呂桶(バスタブ)のある家は一軒もなかつた。いかにも、妻や子供の他に下宿人夫婦を置いてゐる家はあまりに廣過ぎて、とてもその中で湯をつかふことなどは思ひも及ばない營當にちがひない。たが、まだ、一方には一利一害で、シャボンの儉約が出來る。まつたくうまく出來上つてゐる。神樣は未だ天國に御出になると云ふものだ。

けれど、結局、私は室を借りずに、正直ジョンニイの街に歸つた。私の妻や、子供や、下宿人の處置は一體どうなるのか、私の心の眼が少し歪んで來た。そして、私自身の室へはスグと皆んなを取り入れることは出來なかつた。考へたばかりでもゾツとしてくる。若しこれが一週間六志で借りた室だとすると?とても耐らないーが、恰度、其處へ、私の居心地がいいかどうかと云ふやうなことを知る爲めに戶口を敲いてゐる下宿の主婦が私の疑ひを一掃してくれた。

『ええ、さうなのです、』と彼女は私の問に答へた、『この街は今では殘つてゐる最後の街なのです。他の街々も八九年前まではみんなこんな風でした、そして、住んでゐる人達もかなり上品だつたのです。けれども他から入りこんで來た人達がみんな私共の仲間を追ひ出してしまつたのです。この街に住んでゐる人達が今では殘つてゐるばかりなのです。ほんとうに恐はくなりますよ、旦那』そして、それから彼女はこの近邊の調子が低くなると同時に家賃が次第に高くなつて行つたと云ふやうな轉變の經過を說明した。

『御覽の通り、私共はゴタ〳〵一緒にゐることに慣らされてゐないのです。私共は餘裕がないと困るのです。ところが、外國の人達や下等な人達は、私共が一家族入れる處へ五六家族を引つぱり込むのです。ですから、私共よりもズツト高い家賃を拂ふことが出來るのです。ほんとうに恐ろしいことで、たつた五六年前まではこの近所はかなり奇麗に住んでゐたのですに、考へただけでもいやになりますよ。』

私は彼女を眺めた。此處に英國勞働階級の中でも最も美しい

品位を備へ、教養の種々なる美點を示してゐる婦人が、かのさまぐ〳〵なる力の下に倫敦市の東方に注ぎ込みつつあるヒユウマニテイの忌はしく腐爛せる潮によつて除々に卷き込まれつつある姿がある。銀行や、工場や、旅館や、事務所が上へ上へと昇らなければならない、そして都會の貧乏人達は一種の遊牧民である。かれ等は波の如く重なり合ひ、相互に近隣を浸しつつ、墮落させながら東方に移住する、そして、次第によき勞働階級を驅逐してその住所を奪ひ、たとへ一代の中にはむづかしいが、二代三代と經つうちに確かにかれ等を引きづり下しつつあることは明らかである。

　正直ジヨンニイの街もさうならなければならないのは單に幾月かの問題である。彼は自らそれを自覺してゐるのである。『數年の間に』と彼は云ふ『私の貸地期限がなくなる。私の家主は私共の仲間なので、この邊にある彼の借家の家賃を儲けやうとはしなかつた。それで、私共が此處に住んでゐられるのです。けれど、いつか、彼は家を賣るかも知れず、また死ぬかも知れないのだが、それは孰れにしても、私共にとつては同じ事になる譯です、若し家が高利貸のやうな人間に買はれれば、彼はキツト、あの葡萄の作つてある裏の狹い地面に汗臭い店を建て、またその室を何人かに借すと云ふやうになるにきまつてまさあ。さうなると、あなたが來たつて、正直ジヨンニイはとうに何處かへ消えてゐなくなつてますよ！』

　そして、實際、私は正直ジヨンニイと彼の善良な妻君と美くしい娘達と汚ない下女とが、他の多くの幽靈のやうに闇の中を東方に飛んで行くのを見た、さうして怪物のやうな都會がかれ等の背後から咆哮してゐるのを聽いた。

　けれど、逃れ行くのはひとりジヨンニイのみではない。遙か、遙か都會の端れに、小さい實業家や、支配人や、成功してゐる番頭などが住んでゐる。かれ等は少しばかりの花園や、運動部屋や、呼吸のつける明地のある半別莊まがひの家に住んでゐる。かれ等は誇りをもつて意氣揚々とかれ等の胸を突き出して、かれ等の逃れて來たどん底を考へて、かれ等が今では彼處に住んでゐる人々のやうでないことを思つて神に感謝する。ところがどうだらう！やがて、またかれ等の處へジヨンニイや、彼を追つ馳けて來る怪物都市がやつて來るのだ。貸家が魔法のやうに出來上り、庭園が改築され、別莊は幾個かに分けられてしまふのである。そして倫敦の暗黑の夜が脂じみた衣を着て移り住むのである。（つづく）

附記。こんだ自分はこの雜誌に"The People of the Abyss"を「どん底の人々」と題して當分連載することになつた。ジャック　ロンドンと云ふ人の名前はズイブン昔から私の耳に入つてゐた名前で、なんでも一番初めにその名を聴いたのは今から十四五年も前で、恰度、その頃、年少時代の友人で亞米利加へ二三年行つて歸つて來た男がゐて、當時、得意になつて亞米利加生活の愉快さ面白さを私に話してきかせてくれた。私もその時分はかなりな洋行熱に浮かされてゐたので、是非近い內になんとかして洋行をして見たいものだと考へて、その友達に紹介狀を書いてもらふ約束までしたことを覺えてゐる。その時、話しが偶々亞米利加の文學者のことに及んで、一番人氣のある作家は誰れかと云ふやうなことを尋ねたら、彼は頭の先きジャック　ロンドンの名を擧げた。恐らく、彼はその當時賣り出しのホヤホヤと云ふところであつたのであらう。そしてその友達はやはり小說家のオスボーンと云ふ人の家にスクール　ボーイをしてゐた關係から、一二度ロンドンの謦咳に接したこともあると云ふやうなことを話して得意になつてゐた。その他、當時の私には初耳の作家の名前などをいくつか擧げて大に感嘆かされたものであつた。實の處、私は今でもさうだが、エマアスン、ポオ、ホーソン、マアク　トウエイン位の名前か知つてはゐなかつたのである。しかし、私はその友達の文藝に對する理解をあまり尊敬してはゐなかつたし、亞米利加の人氣小說家なら、イクラ豪いと云つたところで、高が知れてゐる位に思つてジャック　ロンドンなどとまるで「米歐の英國人」と云ふやうな變な名の男は必ずクダラナイ通俗小說家であるにちがひないと知りもしないくせに內心大に輕蔑してしまつたのである。その後、折々彼の名を新聞や雜誌で耳にしたけれど、自分にとつては何等の興味もひかなかつたのである。そして、昨年、「中外」に堺さんの評判の「野性の呼聲」が載るまで私は全く彼に對して無知な人間だつたのである。若し堺さんがあの翻譯をしてくれなかつたら、僕は依然として、ジャック　ロンドンとは風馬牛の間柄であつたであらう。そして、私は「野性の呼聲」を讀みはぐつてしまつたかも知れない。實の處、僕は最初讀んだ時も、堺さんを信賴して讀み初めたのである　氏が熱心に譯讀するやうなものなら、必ず一讀の價値のあるものに相異ないと。ところが二三頁讀み初めると自分はもう作家も譯者も打ち忘れて一氣呵成に讀み終つて、そのあまりに短かいのに物足らなさを覺えた。それから、私は月々「野性の呼聲」を待遠く思ひながら、讀む毎に愈々益々興味が湧いて來て、スッカリジャック　ロンドンに感服してしまつた。そして、會ふ程の友達には必ず、一讀を促がした。私はまたやがて、完結まで待つてゐられず、とう〳〵神田の古本屋を渉獵つて原書を見付け出した。私は實に最近—去年から今年へかけて—かくの如き興味ある讀物に接したことはないのである。私は滿更、堺さんとは一面識もない間柄でもないのだから、大に翻譯の勞を多とする旨と、自分の心持を傳へたいと思つたことも

あつたが、わざ〳〵御世辭らしいことを云ふのも變だといふやうな自分のヷニテイと無精とは遂に一枚のハガキをさへ書くことを見合さしめた。しかし、幸ひこんだこの翻譯を連載するの機會に接したので、一應その當時の氣持と、氏に對する感謝の意を表して置く。この雜誌の讀者で未だ「野性の呼聲」を讀まない人は是非一讀を御勸めする。その書の「まへがき」中に氏は「著者の生涯及び著作」を簡單に紹介してゐるが、それによつて見ると、著者はこの『どん底の人々』を一番傑作であると信じてゐたらしい。しかし、元來この書は小說とは云ふものの殆んど、ロンドン自身の見聞錄に多少小說的想像を混へたものでかの「野性の呼聲」がロマンテツクであるとすれば、これはまた著しくリアリステツクなもので、若しこの書によつてのみ著者を想像するならば、蓋し亞米利加に於ける松崎天民氏であると早呑み込みをする人があつてもあながち無理はないと思ふ。けれど、この書は單なる實驗錄ではなく、やがて、また著者の現代社會制度に對する痛烈なる批評であつて氏の人道的情熱の隨處に散見してゐるのを認めることが出來る。そして、これは數千哩を距てゝゐる一異國の首都のしかも十數年以前に於ける暗黑面を寫實したものではあるが、かの異鄕のフエアリイ　テールを讀むが如く徒に恍惚とするが如き類ひのものでないことは勿論、其處に描かれてゐる事實が私共の棲息してゐる都市と何の關はりもないものであると誰れが保證し得よう。私は單にこの意味に於てもこの書を譯出することの無意義でないことを信ずる者である。

終りに私は自分の翻譯の仕方に就て一言述べて置きたい。單に書かれた物の內容を傳へる場合は別として、苟しくも文學的作物を飜譯するに當つては、出來得るだけ―即ち邦語として意味の通じる限りは―原文のスタイルを尊重して逐語譯をすることにしてゐる。この書の場合に於ても、私はやはり、出來得る限りさうしたいと思つてゐたところ、譯出するに從つてその不可能なることを悟つた。全體の調子がロンドン一流の破格である上に、恐ろしく俗語澤山でその上、貧民窟の倫敦ナマリがやたらに出てくるので實は譯者も大にメンクラツテ少なからず、安受合の愚を悔んでゐるのである。けれど東京にゐても、下町の路次を拔けて步るくことの好きな自分はロンドンの案內で倫敦の貧民窟を見物して步るくことにはかなり興味があり過ぎる方であるから、途中で閉口するやうなことはあるまいと思つてゐる。けれど、何分にも初めてで一向見當がつかないから、ズイブン感違ひをしたり袋小路に何遍も突き當つたりするかも知れないから、その邊はよろしく見逃がして置いてもらひたい。殊に報告の書きぶりは到底あの「野性の呼聲」の譯者の圓熟した筆致に遠く及ばないことを惱みとするものである。――譯者。

咬豆茶話

△牧野と衝突した、瑞西公使の本多は、愈々本月十七日を以て、横濱到着の上て、チットばかりの御不平を、母國の民衆へ告白するそうだが、霞ケ關では玉椿と稱せらるゝ、手取者であるだけ、どんな藝當が出來るか、一寸覗つて見たい氣持もするが、イヤハヤ、大抵はゴム人形の懐柔が利くだらうと、罵まれ口を叩くものもある。

△大手町邊に、納豆なる新熟語が流行して來た。納豆は腐つた豆、糸に繋がる線なる意味で、つまり、某君の腐れ縁に繋がつて、出世するポーフラ官吏のことだとは、一寸面黑い熟語だ。芋蔓の芟除せられんとする今日、形を替へて、さる腐れものゝ、流行は時節柄避病院ものだ。

△田尻北雷の、井上友一評に極めて皮肉の者て、彼を輕薄者流と遣つ付けておる。何でも米騒動の時、盛名を彼に奪はれた仇討ちらしい。井上は生前から、白河樂翁崇拜の一人で、救濟事業のことにかけては、我政治家中の一人者であつた。

△彼が年齢三十三四の頃、大道良太、久保田政周と共に、内務の三美男とか、稱せられたものであつたが、大道、久保田がデカタン黨の花形であつたものゝ、彼は、未だ、嘗つて、浮名を流すに至らなかつた。

△彼は水野錬太郎を、策士だと嫌つて居たが、水野も井上を學究として斥けて居た。床次には、敬意を表して居たが、床次の方では一向に用ゐてくれなかつた。一木ばかりは、彼を賞讃して。登用して居たので、井上も一木に對しては、感激して居たゲナ。

△旅順の權助、着任以來一向に登廳せず。毎日〳〵、腰辨當で、古戰場の物見遊山で、簿書堆積百丈と云ふ鹽梅だ。屬官連中、開いた口が、塞がらぬとの投書が舞込んだ。老いたりと雖、權助ならでは遣れぬ、味のある藝當だテ。

△ソレと違つて、滿鐵では社長の、野村が几帳面で、神經質で、舊派の改野、川上、樺山、久保等に對して、奥齒に何か挾まつた主義で行くので、近いうちに、何れ一騒動ある、雲行ぢやとの通信そのまゝ。

△憲政會では、加藤友の姑息なる。海軍擴張に對して、慊焉たらず、無暗矢鱈に海軍大臣を、毒づいておるそうだが、加藤はなか〳〵の、利巧者であるから、その手には乘らぬが、硬派の少壯軍人は、酷く友三郎の優柔不斷を憤慨しておる。

△それかあらぬか、海軍一流の論客たる、加藤寛治と、山本英輔が歐洲派遣を命ぜられた、講和會議に派遣せらるべき、この兩俊秀が、今更の特派は、随分面白い綾があるのだらう。



借家人の悲哀

生方敏郎

一

古の人は、此世を苦の世界だ、と云つた。私は必ずしも然とばかりは思はない。仲々樂しいことも有る。有頂天になるほど樂しいこともある。樂しくないまでも、苦を忘れてゐることも有る。しかし、苦を忘れてゐる間も、樂しい間も誠に短い。忘れてゐた苦しみは、いつか忽ち歸つて來る。有頂天の歡樂は夢の如く去つて、そこには哀愁の波がひた〱と寄せて來る。初め、快樂で始まつたことも、束の間に苦痛と變つてしまふ。さうだ！ 世のあらゆる快樂の中で、遂には苦痛と變らないものが、一つでも有るだらうか？

古の人が、此世は苦痛だ、と言つたのは、實際、眞理を道破したものゝ樣である。何と云ふ悲しい眞理だらう。何といふ詰らない眞理だらう。こんな眞理を發見するのは、腐つた證文を發見するのよりも一層詰らない。思想家とか哲人とか言へば、大層人聽は良いけれども、昔から思想家や哲人の爲した事業は、要するに此腐れ證

文の發見に他ならないのだ。

本當に、お釋迦さまでもキリスト樣でも、今日生きてござるなら、直接談判に及んで僞れ證文發見の罪を問うてやらうものを！ とも或時は思ふ事があるけれども、それは凡夫の淺い了見。眞理は決してミルクキヤラメルに非ず。玩具に非ず。眞理は死の如く嚴肅なのだ。之を右にも左にも動かすことは誰にも出來ない。

二

初め快樂の姿をしてゐたものが、中ごろから豹變して苦痛になる。初めの中、好きで／＼母にせがみ兄に賴んで、無理矢理にさせて貰つた少し許りの學問が、今では甚だ厄介な重荷になつてゐる。それも、お上手に時世の潮流に乘つて、工科大學か法科大學か高等商業高等工業とでもいふ樣な、卒業せぬ間に奉公口が降るほどある、派振のいゝ官立の學問でもやつて置けば宜かつたものを、誰に賴まれもしないのに、私學も私學、文學などゝ云ふ、二十世紀の文明國に於いて賄賂が一つ取れぬといふ極めて働きの無い、甚正直な、學問をやつた爲めに、十年一劍を磨くに劣らざる苦心の果が、先祖の遺した祿の簞笥の引出しの中から、例の僞つた證文を發見する位に止まつてゐる。そして、親類からは困つた男だと頭痛の種子にされ、鄕黨からは學問しても出世をしない變人と見做され、又このごろの天下の形勢から推察すると、起きることゝ勘定を拂ふことゝの遲い怠け者だ、と商人諸君から、擯斥されてゐることだらう。こんな事なら、學費だけのお金を貯蓄銀行へ預けて置けば宜かつたのだ。その中の半分だけを買喰に使つて、殘りの半分を貯蓄したとしても、今までには利に利を生んで素張しい額に達してゐたに相違ない。そして利廻りのいゝ株でも買つて置いたなら、私の親類の人々は、どんなに世間に對して幅が利いたらう？、また、あの時分には、學問といふものに値打が有つた。だから官學も私學も有りはしない。學問は學問だつたのだ。學問は、それ自らの中に權威を持つてゐた。しかるに、私がエツチラオツチラ學問の道を辿つてゐる間に、學問の相場が狂つてしまつた。もはや、今日の學問は、學問其物の中には、何等の値打も無くなつた。官立といふ裏書が附いて、初めて市場に價値を生じることに成つた。私學なんどは、古錢や瀬戸物の破片と同樣、屑屋も買つては行かない世の中と成つてしまつた。だから、私は恰度平和に成つてから鎧を買ひ込んだ成貧居士と同樣な、失敗をしたものだ、學費を元の儘のお金にして置いたなら、お金

は官金も私金も其値打に變りは無い。何處へ行つても百圓百は圓に通用する。然るに、成貧居士が錢を買ひ込んだ爲めに、甚だしい相場の下落に會ひ、今では屑屋も引取つては與れ相もないのを後悔する如く、私も可惜お金を私學の、殊に文學に代へてしまつたばつかりに、今は屑屋も相手にはしてくれ相もないのだ。

いや、愚痴のこぼし序でに、もう一つ言はせて貰はう。それは女房だ。何うも一人では淋しくつて仕樣がなかつた。家へ歸つても、誰も話し相手がない。火の無い火鉢が待つてゐる部屋へ歸つてみても、面白くない。終日働いて歸つて來たのに、誰あつて「御苦勞さま」と優しい言葉をかけてくれる人が一人も無い。だが、まあ、そんな優しい言葉をかけてくれる人が、假りに有るものと空想してみても、それが親父では面白くも何ともない。それは若い女性に限る。と友人からもすゝめられ、自分でも然う思つて女房を貰つた。然るに女房は年を取ると共に古くなる。金は銀行へ預けて置けば、年を經ると共に利子は附くけれども、古くはならない。元のまゝの金だ、折目の無い、新らしい札を受取ることが出來る。けれども、女房には折目が附く。その上、瘤が附く。瘤が、一い二う三つまで、忽ちの中に附いた。春になれば私の庭には遠山に立つ霞の樣に、襁褓が毎日棚引いてゐる。小さいのがオギヤア〳〵と泣き喚けば、中の奴さんは小便を垂れ流しそれを掻き廻して悦に入つたり、障子に穴を明けたり、茶碗を素早く見事に破したりして、金鵄勲章を與れないか？ と言つた樣な眼で母親を見上げる。一番上の太郎さんは、電車やレールや切符やパンチや鞄に至るまで、車掌さんの道具を一切蒐集し、偶ま國元の祖父さんが上京して

「坊やは好い兒だな。お前は將來屹度豪くなるぞ、その時、お前は何に成る？」

と訊けば、政事家軍人學者美術家實業家技師銀行家新聞社長、お望みのものは澤山有る可きに

「祖父さん。僕、車掌！ 車掌に成るさ！

・とは情けない。

三つの瘤は、まあ、ざつと、こんなものである。此瘤は各々毎月病氣をして、その都度貧しい親父の財布を空腹にし、お袋の神經を衰弱させる。お袋はお袋で、また一年々々年を取る。もう三四十年もしたらずゐぶん見られぬ婆さんに退化することだらう。

まづ、結婚が甘い夢に始つて、目下こんな詰らぬ狀態まで退

化したことは、此通りの次第である。

三

だが、私は、此所に結婚のグチを並べてゐる暇がない。それは私が、今それよりもモツト痛切に感じつゝめる借家人の嘆に就いて、語り度いからだ。

今日の新聞で見ると、ウラヂオストツクでは、過激派思想の盛大な爲めに、資本家は凹み、大家は小さくなつてゐる側で、借家人は頗る鼻息荒く、店賃は少しも拂はず、店立てを喰つても動かうともせず大威張でゐると書いてある。恁樣な、お芝居にでも有る樣な、又は貧乏人の夢の中にでも出て來相な事が、日本海の彼岸で行はれてゐるのに、纔か一葦帶水を隔てた日本の東京では、近頃何處を伺う歩いても斜めに張られた貸家の札を見ることが無く、一軒明けば、それこそ彈八人の引張凧といふ情態だから、此所では言ふ迄も無く、大家の方のメートルが盛んに昇る。借家人は平身低頭の極度に達し、大家殿が「風が吹きましたから一割上げます」と仰言れば「宜うございます」と答へ、「地代が上りましたから家賃を上げます」と仰言れば「ハイ御尤も」と答へ、「餘り度々上げるのもお氣の毒ですから、今度は一度に四割上げます」と大屋殿が益々強く出れば出る程、借家人は益々平身低頭せねばならず、

「オイ〳〵、ゴミ箱が一ぱいで困るならそつちの方へゴミを捨てなさいよ。そこは家の借家人の庭つゞきだから」

といふ大家の威勢に引替へて、

「オイ〳〵、大家さんの裏へ向いた方へ襁褓を乾してはいけないよ。大家さんの方から見えては悪いから」

と借家人は遠慮勝ちであらねばならぬ。ついこないだの新聞に、本郷眞砂町の非道極まる大家に對し店子が連合して裁判沙汰を開始した事が見えてゐた。そこで警視廳でも都下の大家を說諭する方針がある樣な記事も見えてゐた。全くのところ、今日ではあの位の程度に於ける強慾な大家は少しも珍らしくはない。家賃は年に何回と無く、上げて置き乍ら、屋根の洩るのも壁の落ちたのも、修繕すところは少しも修繕さない。

「僕の家は、先達てから雨が洩つて困るけれども、大家は手入れをしてくれない」

と友人がコボすから、私は

「それはまだ好い方だ。僕の家の湯殿などは月が洩るよ。何なら、一寸行つて見て來たまへ」

と答へた。湯に這入り乍ら、屋根越しに月見が出來るといふのは、桃青以上の風流かも知れない。併し私の様な凡人は、それを風流とも思はずに、却つて之を修繕さぬ人を怨じるのは、不風流の甚だしきものか？　兎も角も、之れ現代東京の借家人の活圖である。殆んど小説のやうな生活の眞相であるのだ。「狐は穴有り、空の鳥は巣有り、されど人の子は枕するところ無し」といふキリストの言葉は、目下東京借家人の屢ば發する嘆聲である。大家から出て行けかしに拔はれても、行くに所が無いのである。狐は穴あり、空の鳥は巣あり、借家人は纔に膝を容るるのところスだに、チョックラ一寸は見付からないのだ。

四

浦鹽に住んでは、大家となるのはバカげてゐる。けれども東京に住んでは借家人となるのは悲惨である。私は何うしてこんな悲惨な借家人になんぞ成つたのだらう？

私も胎からの借家人ではない。恁う見えても國にゐる時分は、大家の息子であつた。母の建てた長屋は既に業に私が十歳の大昔に於いて、他人手に渡つたけれども、それでもまだ兄も姉も大家さんである。ボロ家を持つたボロ大家さんである。然るに、私ばかり何を苦しんで借家人に成つたか？　住むべき自分の家が無いならば、その家の建てられる迄、家を持たないがいゝではないか？　何んだつて、私は借家なんかをしたのだらう？

これも、亦、私自身の過失の一つだ。結婚と同様、幸福と思つて持つた世帶が、今は苦痛に變つてしまつたのだ。

若い時分、私はＭＧの寄宿舎に滿三年を送つたが、何の位その生活は樂しかつたらう。その時分でさへ「こんなに樂しい生活が何時まで續くだらう？　之が一生の花であるかも知れないね」と友人同志談し合つたことが屢ば有つたが、全く其の通りだつた。今となつては、あの時分のあの寄宿舎生活は、まるで天國の夢の様にさへも思はれる。

それは、若い故でも有つたらう。しかし、あの寄宿舎といふものゝ空氣が、如何にも自由で活氣があつて、そこに住む友人等が單純で、常に子供らしくつて、そして屢ばエクセントリックであつたからだ。お互の理想を、夜更けるまで語り合つたり、一人で熊笹の中へこぐり込んで上帝に祈りをしたり、する様な清い樂みは格別だが、また舍監に内密でコッソリ脱け出して、自修時間に蕎麥喰ひに行つたり、青年會の祈禱會を胡麻化

して賄賂の家でひそかにコンパニーをやつたりしたデイアポリツクな快樂に至つては、天國の何處を探しても之と較ぶ可き一つを見出すことは恐らく不可能であらうとさへも思はれる。

ＷＤへ遊學する樣になつてから、又ＷＤを卒業してからも、私は親戚や友人の家に寄寓してゐたが、何れも氣樂で居心地が好かつた。勤務上の都合から、一時下宿にゐてみたが下宿だけは何う考へても芳ばしくなかつた。第一に喰物が堪らなくまづかつた。見てくれは好いが、喉へ通らぬ物が屢ばあつた。それに私は朝おそいか夕おそいか、兎に角時分時におくれることが多いために、飯も寄せ集めの二度の勤めの古飯を當てがはれることが多かつた。或る下宿屋では、月末勘定日が近づくと三日ばかり膳の上を賑はし、勘定をしてやるとまた三日ばかり膳の上を賑はした。或家は二階に軍人が陣取つてゐて騒々しくてたまらなかつた。又或下宿は支那人がゐてきたなくて閉口した。私が下宿にゐたのは前後合せて一年足らずの經驗に過ぎないが、もうあれだけで地獄の底に十年もゐたほどの苦行を積んだと思つた。そうして、再び親戚へ戻つた。

冬は暖かく夏は涼しかつた從姉の家、氣樂に朝寢をして怠けて不自由の無かつた從姉の家が、あの儘いつ迄も續いてゐたら、私の呑氣な同居生活は、もつと長く續いたに違ひなかい。しるに、その人は死んだ。伯母は歸國してしまつた。

その時、私は再び下宿屋へ下宿するか、新たに獨立して家を持つか、此二つの道が私の前に横はつてゐた。下宿屋へ行くことは、勿論厭だつた。その頃は日露戰爭前後から見れば餘程素人下宿の數は減つてゐた樣に思はれるが、それにしても、牛込小石川の奥には貸間札の貼られた家が、ずゐぶん澤山有つた。そんな家は、下宿屋より格安でない迄も、高いことは滅多にない。そして時としては、意外な景物として若い娘や水々しい後家さんがゐないとも限らない。

時にはそんなローマンチツクな空想に耽りもしたが、私は間借をする事よりも、一戸持つことに、ずつと餘計傾いてゐた。それには理由がある。もう、その頃までに私の友人は大抵妻帯して世帯持と成つてゐた。氣早い先生は子供まで持つてゐた。私のやうに他人の家に寄寓してゐるものは、私以外には殆んど一人も無いやうな勢であつた。さういふ連中は、私に會ふと

「本當に君は氣樂でいゝなあ。實際獨身者の中に限るよ。世帯苦勞なんてするものぢやないぜ」

などゝ云ふ。併し、恁う言ひ乍ら、彼等は得々としてゐるや

うに、私には見えた。そして私の獨身と私の寄寓生活とを憐むやうにさへも見えた。

いや、實際彼等は、私の獨身生活を羨むのかも知れない。併し、本當に獨身生活を渴望するものならば、彼等は早速家庭を破壞して獨身生活に戻らねばならぬ筈だ。世の獨身者は滔々として獨身生活を破つて夫婦者と化しつゝあるではないか？　彼等は卑怯者か、然らざれば虛言者である。何の必要からか？　世の夫婦者は大抵卑怯者らしく虛言家らしく振舞つてゐる。

「俺は勇敢なる獨身者でゐやう。言はんと欲するところを言ひ、爲さんと欲するところを行ふ勇者でゐやう。此腕の力で生きてゐる俺だ。誰に遠慮が要るものか？」

私は、夫婦者を見て來ると、家へ歸つてから、斯う心の中で叫んだ。

併し、家は持つてみたかつた。自分自身の家が持ちたい、といふ考へが頻りに頭を持上げて來た。他人の家にゐては、食物も自分の注文通りにばかりは行かぬ。又朝寢は自由だが、外へ遊びに出て歸る時間に制限があつたり、如何に我まゝを通すと云つても、止宿人は到底一家の戶主には及ばない。

こんな考へでゐたところへ、偶然に或る出來事が起つた。出來事と云つても、それは自分の身に罹つた事ではないが、他人の出來事に依つて、私は大に感ずるところが有つたのだ。

友人のKは財産家の子と生れ落ちた爲めに、親の死ぬ時相當の遺産を貰ひ堂々たる家を建てた。併しその建てた土地がまだ開けない郊外の畠の中で、極めて淋しかつたので、淋しがり屋の彼は、更に自分の家の周圍に貸家をも建てた。それでも、まだ彼の心は淋しいと見えて、

「僕の家は廣いのに人數が寡いから、淋しくて困る。君、僕の家へ來ないか」

と私に勸めたこともあつた。併し私は彼の家の何となく陰氣な空氣を好まなかつたし、親類にゐて我まゝに暮した方がいゝと思ひ、斷つた。

其後、WDの學生が彼の家の一間へ越して來たので、彼も悦んでゐたが、それも纔か一月か一月足らずで、その學生は出てしまつた。私は、間も無く街を歩いてゐて、ひよつこり其學生に行遇つた。

「君、もうKの家を出た相ですね、そうして今は何處にゐます？」といふと、彼は

「えゝ、あんまりバカ〳〵しいから出たのです。Kさんは、私の

事を（今度家にも書生を置くことにした）と客に話してゐるのを私は聞いたんです。下宿代を拂つてたゞ同居人といふだけなのに、書生呼ばはりをされちや、バカ〳〵しいですもの」

と荐りにKに對して憤慨した。

私は默つて別れたが、別れてから「自分も先に勸められたのだが、同居しないでよかつた」と思つた。

それから考へても、他人の家に同居なんぞするものぢやない！と其時しみ〴〵感じたのが、兎もすると心の表面へ浮んで來るのだつた。

「もう俺も三十に近い。男子三十にして家を成さないでは、何となく一人前の男らしくない。學問したと云つても、又議論ばかり達者でも、平凡人も敢てする家を持つ位のことが出來ないでは、餘り甲斐性無しだ。「酒掃應待より以て君子に至る可し」とは（程）伊川先生の言葉だ。平凡事が出來ないでは、一人前とは云はれない。」

こんな事も、時々考へた。

或日、私はY…といふ街を歩いてゐる時に、不圖こんな事を思つた。

「何の家を見ても標札が出てゐる。苟も男子たる者は、門口に於いて自己の存在を明かにしてゐる。俺にはまだ標札が無い。つまり、俺には名が無いも同様だ。名が無いといふのは存在せぬと同様だ。」

その時から、私の心の眞中に標札が陣取つてしまつた。

五

從姉は一寸病んで死んでしまつた。伯母は國へ引込んでしまつた。私は下宿屋は嫌だ。素人の家へ同居する事は、多少の好奇心をそそらないではないが、そんな遊蕩的氣分を何時まで味はうより、權威ある一家の主人と成りたかつた。

私は、家を持つことに極めた。

六

其處で私は、家を見つけて歩いた。近處に瓦斯の勸誘員で親切な人がゐて、私と一緒に方々を探し廻つてくれた。神田、麹町、牛込、小石川と云ふ方面へかけて四五日の間歩いた。その頃は今とちがつて、空家の數は隨分あつた。大きいのも、小さいのも、新らしいのも古いのも、種々なのがあつた。それですら、なか〳〵氣に入つたのはなかつた。光線の取り方が惡るかつた

り、溝はけが惡かつたり、ぢめ〳〵してゐたり、周圍が汚い貧民家であつたり、あまり奥へ引込みすぎてゐたり、便所とお勝手とが隣り合つてゐたり、間取が惡かつたり、屋根にトタン葺のところがあつたり。差配の內儀さんが邪慳な顏をしてゐたり、いろ〳〵の理由で、これはと思ふ家は容易に見當らなかつた。

勸誘員君は、大抵の家を見ると氣に入つて、「先生、これならいゝぢやありませんか。」

と云つた、だが、私は、氣のない返事をして外へ出てしまつた。

今考へて見れば、隨分家賃も安かつたものだが、獨身者が、五間も六間もある家を借りても、無用の長物のやうな氣がした。と云つて、小さな家には、きちんとした、氣に入つた家がなかつた、それに、箪笥も額も掛物も、一切の器具と裝飾品とを取り去つた、古い、がらんどうの家を見るほど、私の眼に淋しいものは無かつた。空家は凡そ如何なる空家も醜である。空家は恰も眼も鼻も無い、のつぺらぼうな顏の如きものだ。と其時私はつく〴〵感じた。

Ｚまで來て、小說家Ｏ氏の家へ寄つて、私が家を見つけてゐる話をした。そして、Ｏ氏の家を讃めた。すると、Ｏ氏は、

「では君、こゝへ越して來ないか？」

と、突飛に云ひ出した。私は驚いて、

「僕はもう、同居は御免なんだ」

「同居ぢやないよ、僕等はもう此家から越すんだから。」

「何時」

「今日越すんだ」

「何故？　こんないゝ家から出るんだ？」

「隣のＨが便所から覗くからだ。便所へ立つて、僕の家を探偵するんだ。」

Ｏ氏が眞顏になればなる程、私は可笑しくなつた。

「その位なことなら、僕には何でもない、僕は君のあとへ越して來やう」

翌日、私は勸誘員君に、荷車を引いて貰らつて、Ｏ君のあとへ越して來た。つい二三年前の明治四十年頃までは、水道や、電氣や、瓦斯は、山の手では、珍らしいものであつたのだが、もうその頃は、この私の新らしく構へた巣にさへも、電氣、瓦斯、水道が皆來てゐた。勸誘員は先づ臺所へ飛び込み、瓦斯の七輪を見て、

「はあ、もう、瓦斯が來てゐる」

と、嘆息してゐるから、私は、彼も私と同感なのだらうと思つて、

「こんな山の手までも引けましたね」

と云ふと、彼は、

「若し、これが新らしく瓦斯を引くのですと、私は社の方から歩合が貰へるのです」

勧誘員君は、此の點には失望したであらうが、然し、萬端親切に、如才なく世話してくれた。鼠入らずを始めとしてちやぶ臺やら、米櫃やら、バケツやら、薬罐やら、箒、塵取と云ふやうに、そして、世帯道具を買ひ集めて來た。そんなものが、一切合切で、十圓以内であつたかと思ふ。はつきり記憶してゐないが、意外に安かつたこと丈けはおぼえてゐる。友達は、私の轉居をきゝつけて、煙草盆だの、火箸だの、フライ鍋だのを、祝のしるしに持つて來てくれた。私は、早速、名札をあつらへて、門へ打ちつけた。

だが、こゝに困つたことは飯を焚くもののないことだ。生來無器用者の私は、自分で飯を焚くことが出來なかつた。すると、大家さんが心配して、奥さんの姪を手傳ひに寄越して呉れた。二三日すると、書生をも世話してくれた。その盜癖のある書生を出したあとへは、お隣の奥さんが、いゝ婆やを世話してくれた。かやうにして、幸に、私の家は、その留守居番を缺くことはなかつた。まだこの頃の大家さんは、時には留守番もしてくれるし、お湯のある時は呼んでくれるし、旅行すれば、お土産を、また時々は、食べ物などを持つて來て、借家人の機嫌を取つたものだ。

七

華果山の悟空は、一生の中に、水難、火難、風難等いろ／＼の難を受ける運命を持つてゐたが、我々現代に生きる細民は、また、衣難、食難、住難等を受けねばならぬ運命と見える。まだその上に、細君難、下女難等、いろ／＼の難がある。

成る程、全くの獨身者で、他人の家に寄寓してゐる頃は、これ等の難が、殆んどなかつた。職業難、從つて、金錢難と云ふことはあつても、生活難と云ふものはなかつた。小使が不足で、贅澤が出來ない位が、癪の種に過ぎなかつたので、時としては、藏書を賣飛ばして、旅行したり、外套を質に置いて、芝居見物をしたりした。旅行をするための金策、芝居を見るための質屋通ひ、それ等が、最も大きい生活苦であつたとは、今考へて見る

と寧ろ生活樂であつたらう。こゝに於てか、私にも、友人達の「獨身者の中は氣樂でいゝよ、君は羨ましいなあ」と云はれた意味が、はつきりと解つて來た。

　家を持つたとは云ひながら、獨身者では、矢張り一家の主人としての光榮を擔ふ譯には行かない。大將は大將でも、家來の數が足りない。婆や一人を家來に持つたのでは、あまり一家の主人を鼻にかける程でもない。狂言の中には、太郎冠者一人しか家來を持たぬ大名が、如何にしてか、多くの家來を持つてゐる如く裝はうとして、苦心慘憺なる滑稽を寫したものがあつたと記憶する。私の心細さも、この大名の心とよく似てゐた。家は持つても、私の家は、鳥の塒と云ふに過ぎなかつた。朝早く出て、晩おそく歸へつて來る。家の中に樂しみがなく、笑聲がなく、命がなかつた。結局、家賃を背負ふ丈けが、無駄なやうな氣がし出した。そして、この空虛な家を充たすものは、若い女より外には無いやうに、自分も感じ、他人からも云はれた。

「君の持つてるのは家だ、細君を迎へて見たまへ、其處にホームと云ふものが出來る」

　と、度々友達にもすゝめられた。

細君が來た。すると、成程、家は家庭に近くなつた。家の中に魂が這入つて來た。生き〳〵した、花々しい、併し、どこかに落ち着きのない、時々は心配になる、樂しみと苦しみとのごちやまぜのやうなものになつた。これが、つまり家庭の卵だつた。然し、同時に、これまでの家は不足になつて來た。第一、錢湯へ遠い。第二髮結へ遠い。電車へ遠い。買物が不便だ。近所の口がうるさい。大家がやかましくなつて來た。その癖、疊替へはしてくれない。さう云ふ、種々な理由のもとに、私達は、家を取替へねばならなくなつた。

八

　私と細君とは、數日間家を探し步いた。前にあげたいろ〳〵の理由もあるが、兎に角、細君に於て、轉居の第一用件とするところは、Ｚの地を離れることにある。彼女はＺの地を離れて、誰も知つてゐる人のゐない所が、望ましかつた。第二の用件としては、賑やかな所、奇麗な所、髮結や錢湯に近い、買物に便利なところが望ましかつた。私はまた、郵便局に近い所、電話を貸す家へ近い所、電車へ近い所、そして、家賃が安く、大家さんへ遠い家が望ましかつた。また閑靜なところが望ましかつた。この全く方向違ひの望みを持つ二人の意見が一致すること

は、容易ではなかつた。彼女がこれならよささうだと思ふ家は、私が極力反對し私がこれなら我慢ごろだと思ふ家は、猛烈に彼女の反對を受けた。さうして、大塚、駒込、巣鴨、本郷、小石川と探した揚句、とう〳〵四日目になつて、Sの地へ小鳥の巣を見つけた。家賃が安くて、Zの地へ遠く、また大家へ遠く、電話を貸す家へ近く、錢湯へ近く、買物をするにも近く、電車へも近い。我々は遂に、双方から妥協して、其家へ這入つた。

まだその時分、空家の數は實に多かつた。巣鴨、大塚の郊外など、多過ぎる程多かつた。氣に入つた家ではあるけれども、近所にあまり空家が多し、從つて、盜難や、火難が恐ろしいので、罷めてしまつたのもある。

今度越して來たSの地の家も、第一の不足、不足と云ふよりも、恐怖は、近所に空家の多く出來たことであつた。私達の二軒並べて建てられた家の、隣の一軒は、私達が其家へ這入つて、六ケ月して其家を出る月まで、遂に借手がつかなかつた。その奧にも空家が出來、私達の筋向にも空家が出來、井戸を一つ隔てた表通りの家も、とう〳〵空いた。二人きりの家庭で、私が外へ出るときには、この空家ばかりの中に殘される細君は、晝間でも、淋しく辛らかつた。私もまた、心もとなかつた。

その中に、五月雨が來た。表の通りは、夥しくぬかつた。この長く續いたぬかるみの道が、私には、何よりも堪へがたいものであつたが、それよりも困つたことは、溝が溢れて、流れて行かぬことだつた。あふれた溝と泥水とは、井戸の方へと流れ寄つて溜まつてゐた。

その中に、天氣のつゞく日和が來た。だが、更に困つたことには、この共同井戸へ、朝から晩まで來てゐる紺屋の職人達があつた。彼等は、温和しい男共であつたが、染料をすゝいだ、濁つた水を、井戸端へ絶間なしあけるのには避易した。その共同井戸へ汲みに來る米屋、足袋や、紺屋等、全く衞生も何にもかまはぬ人達であるのには、私もつく〴〵困つた。それに私達は新らたに生れて來る子供のために、産屋をしつらへねばならぬと云ふ必要も起つた。そこで、私達はまた轉居した。

九

其時は、私の生活狀態が少し樂になつてゐた。それ故、財力の許す限りは、生れて來る子供のために、奇麗な家へ移りたい

と思つた。その時分、家には、よぼ〳〵の婆やを雇つてゐた。婆やがよぼ〳〵であると云ふことと、井戸にこりた經驗とから、今度はどうしても、水道のある家にしてくれとは、細君の方の要求であつた。私は、今度は原稿の筆記を手傳つてくれる青年K君と共に、眞夏の日盛りを汗を、流しながら、四日も探し歩いた。淋しい郊外には懲りたので、今度は、本郷、小石川、牛込へかけて、市内のみを探して歩いた。けれど、冬とちがひ、その頃は空家がずつと減つてゐた。便利で、見所のいゝ家などは、滅多に空いてゐなかつた。探しあぐんで、空しく歸へる第四日目の夕刻に、植物園に近い、G町で、私達は、ふと見所のいゝ家を探しあてた。これは堀出し物だと思つたので、直ぐに手金を置いて、取決めて來た。間數は少なかつたが、床の間の附いた八疊は、座敷として、整つてゐた、便所も廣々として、明るく、小奇麗に、緣側は廣く、戸の開けたてもよかつた。湯殿は狹くて、用をなさなかつたが、物置もあるし、門もあるし、まだ建てゝから間のない家で、新らしく、且整つてゐた。それに、G町は、閑靜で、この家の周圍の家々は、品のいゝしもた屋で、住む人人は、會社員、役人、大學教授等、品のいゝ家庭のやうに思はれた。歸へるとき、何處からか、コロリンシヤンと、琴のおさらへをする床しい音さへ漏れて來た。

然るに、翌日になり、愈々轉居して見ると、轉居したその日から、いろ〳〵嫌なことが解つて來た。轉居の最中に、思ひも寄らぬ手傳の人足が多勢出て來た。それは、我々の轉居を嗅ぎつけて、寄つた來た、商店の御用きゝ共である。彼等は、今まで私のゐた方々の町の商人に較べて、最も口先のお世辭がよかつた。そして、ペコ〳〵してゐた。けれども、品物は、惡くて高いか、または、よくつて、法外に高かゝつた。つけかけをした。牛乳屋は幾組も殺到して來て、見本を何本も置いてせり込んだ。前から取りつけの牛乳屋があるために、私は彼等を全部斷つたが、三日も四日も押し寄せて來るので、これを追ひ拂ふのは、一通りのことではなかつた。それを押して斷つたために、私は外出して、路傍で彼等から嘲笑されたこともあつた。賣込むためには、諂ひの言葉を盡し、斷はられゝば、怨んで人に害を加へやうとする、さう云ふ商人が、この町には多かつた。乞食も隨分よく來た。乞食坊主も來た。怪しい孤兒院や、慈善會の押賣も來た。ゴミ屋は、ゴミ箱を買ふことを強請した。ゴミ箱を買はないと、何時までしても、ゴミを取りに來なかつた。その上、私の留守中に、家人を強迫してまで、ゴミ箱を賣り付けやうとした

から、私は區役所へ電話をかけて、問合せた結果、惡いゴミ屋は、處分された。このやうに乞食や、押賣りが多いのはこの一角に住む人々が、勤人であつて、留守勝ちなのによるのであらう。また、商人の言葉にへつらひが多く、暴利を貪りたがるのは、この區の奧さん達が、虚榮心強く、上品振つて、奧樣風を吹かさうとする弱點に乘じたものだらう。私が越して來た翌朝、蕎麥の切手を持つて、隣近所を挨拶して廻つたが、主人は勿論、奧樣も、家のものは顏を出さずに、たゞ下女に取次がせるのみであつた。それ故、その夕方から、お互ひに路傍で顏を合せても、挨拶をする程の關係がつかなかつた。引越蕎麥も、私の挨拶も、何のためにしたか解らぬものとなつた。蓄音機の音や琴の調べは、時々聞かれた。然し、もうそれは、私には床しい音ではなかつた。外で主人が働いてゐるのに、留守を守る奧樣や娘が怠けてゐる證據のやうに思はれて來た。

もつと嫌やなことは、私の住んでゐる家に、私達より前にゐた人々が、大家の因業なのを怨んで、轉居のあとから放火して、一度燒けたことがあり、今の家はそのあとへ建て直したものであるとの話を、街の商人から聞き込んだことだ。そればかりでなく、家その物にも缺點があつた。私が見に來たときには、夕方であつたために、その缺點が解らなかつたが、越した日に、直ぐにその缺點は暴露された。それは日當りのよくないことであつた。南東を向いた家ではあるが、直ぐ眞南に高い二階家があつて、それに日光が遮られた。赤ん坊が生れると、直ぐに襁褓の乾場に困つたことだ。また引込んだところにあるために、そして、此の窓が高く、少さく、その上、後の家の二階から覗かれぬやうに、窓に覆ひがしてあるために、風通しが非常に惡かつた。而も、意地惡いことには、その年は非常に蒸暑かつたので、我々は皆苦しんだ。

大家は、ヤソ教を看板にかけてゐる人達であつたが、確かに人から放火される位の貪慾と度胸とを持つてゐた。水道税は六ケ月分、最初の家賃と共に、前取りを要求された。

だが、何よりも私達は、洗濯した襁褓の乾きの惡いことに避易して、秋に向つて、氣候が涼しくなると共に、轉居の必要に強く迫られた。

十

子供が――而も男の兒が生れた。まだ此後續々として、子供の生れて來べき見込みがある。私は此所に初めて多くの家の子

郎黨を得るわけだ。私は最初の望み通り家庭の長として、家長の光榮と權威とを授けられる筈である。けれども多くの家の子郎黨を養ふことは、今日の如く着物が高く米が高く家賃のいよ〳〵高からんとする時代に於いては、仲々の苦痛である。私の孱腕では決して容易の事業ではない。私達の生んだ弱い子供を、丈夫に育てゝ行く爲めには、私達の生活の全部を子供本位にしなければならぬ。子供等の爲めに、私達が犧牲になる位の覺悟でかゝらねば、到底子供は育たない。

獨身者の時代にかなり呑氣とズボラとを以て通り者になつてゐた私も、もう眞面目で善良な親父さんに變らざるを得なくなつた。

兎も角も、今度の家は、私達の總ての要求を度外視して、子供の爲めに家を求めた。

その冬は、また以前にも増して空家が多かつた。大正三年の暮で、生絲は下落し、米も安くなりすぎるとかで高くなる方の調節令が出た位で、世間一般に不景氣であつた爲めもあらう。市内にさへも、空家はずゐぶん澤山有つた。私は散歩に出る毎に、探し歩いた。第一の要件は日當りの良いことであつた。第二の要件は物乾し場に使ふ空地の有ること、第三は水道の必ず有ること、第四は良い小兒科の病院に近い事等であつた。多い空家の中だけれども、そして纔かに此位の要件でも、シックリ合ふといふ家は、容易に見付からなかつた。偶ま之等の要件に叶ふ家が有ると、それは必ず古ぼけてゐた。私はそれでもしんぼうする積りであつたが、細君はまだ其處まで糠味噌女房になれなかつた。成可く綺麗な新らしい、見付きの好い家で、而かも育兒の要件を具備する家を望んでゐた。その代り細君は家賃の高いことには頓着しなかつた。否むしろ高い方を望んでゐた樣にも思はれた、私は古ぼけた家でもしんぼうするが、その代り家賃は安いほどを望んでゐた。此點では、二人の間に一致を見なかつた。そして、屢ば爭論し喧嘩もした。細君は私を「不甲斐なき良人」と思ふらしく、私は細君を「將來なき女」と心の中に悲しんだ。

ところが、一月ほどしてから、兼て頼んで置いた植木屋の老爺が、H町に一軒見付けて來た。私は早速見に行つた。部屋は五間しかないが、間取よく、使ひよく出來てゐる。日當りは言ひ分無し、庭に草木の眺めは無いが、物乾竿を立てるには十分な空地があり、水道あり、物置、湯殿あり、小兒科病院に遠からず、賃は極めて低廉だ。たゞ家の古いこと、それはまた念入り

に古かつた。大家の奥さんも「古ければこそ、お安くしてあるんです」と云つてゐたが、事實その通りであつた。私は早速取極めて、手金を置いて歸り、翌日早速越して來た。

庭へは三間もある長い棒を二本立て、頂上に金の萬力を付け綱を張つて海軍の水兵が軍艦の上でやるといふ、壯觀を極めた物乾を作つた。直に襁褓は日光に浴し風を受けて翩翻（へんぽん）としてひるがへつた。

湯殿へは、新に買ひ込んで來た風呂桶が据えられた。これで、子供を危險の多い錢湯へやらなくもいゝと、私は安心した。

だが、私一箇に取つては、不便なことが澤山有る。第一に來客を引見すべき客間が無い。第二に近所に電話を貸す家が無い。近所に電話を持つ家は有るけれども、それは西洋人の妾の家だから、如何に其妾が化七なりとは云へ、日本人の而かも男が出入することは禁物だ。自働電話は電車道に在る爲めに、ガアぐ\いふ電車の音で矢忝しくて聞き取れず。又そこの電話帳は毎も頁が千切れてゐるので、用を爲さない場合が多い。第三に郵便局に困つた。郵便局は甚だ遠い。一等近いのがＨＡＹ：：町の局だけれども、そこの局員は非常に横柄で頑迷で仕事がつかへ勝ちで始末におへない。私は一度でコリぐ\して二度と行かない。次に小石川區内で、此家へ近い局は植物園の近くに有るけれど、そこまでは數丁有る。止むを得ず、本郷Ａ町の局へ行く。此所の局は親切な人々で至極助かるが、電報は取り扱はない。電報の時は駒込の局まで行かねばならぬ。之はわづかな事の樣で、仲々不便だ。

買物をする方から云へば、此品は前のＺ町やＳ町やＧ町とは比較にならぬほど便利だ。大抵のものは表通まで出れば、求められる。此等の點、すべて私には不利であつて細君には便利なのだ。然るに、細君は家の汚く古ぼけてゐるのを見て、私が獨りぎめでＨ町の此家へ越したことを、口を極めて批難したために、越した其晩私達はかなり烈しく衝突した。此衝突は、機會有る毎に再燃した。

實際、家の古いことは非常なものだ。私が強度の近眼で見てさへ、古ぼけて見えるのだから、好い眼で見たら堪るまい。板も壁も黑く古く煤けてゐる。でも、まだ、越した當座は汚いとか古いとか黑いとかいふに過ぎなかつたが、年經るに從ひ壁は落ち柱はゆがみ屋根は洩り、閾やねだは腐つて來た。さういふことから受ける物質的損害は尠くない。雨の降る日や風の吹く日

に私達の精神上に受ける苦痛は非常なものだ。閾の減つたのや下つたのや、戸板の痛みや、瓦の缺けたのや、私が時々その修繕を申し込むと、大家の奥さんの口癖として「もう、古い家で、駄目なんですから、こわして建てなほすつもりでゐるんですの。だから、手入れをしても詰りませんけども」と言ふのだつた。唯明けて置くのならば、それも宜からうが、家賃を取つて他人に貸して置き乍ら、此様なことを云ふ。併し、さう言ひつゝも、大工を寄越して修理してくれた。だが、借家人に取つて尤も呪ふべき日が來た。

十一

大正六年の秋の暴風雨は、物價騰貴の歴史に於けるエポックメーキングの厄日だつた。晝の間から、どんより曇つて生温し、何事か變事が起るらしい豫感を人に與へたが、果して夜の十時頃から西南の風が起つた。恰度、私は二階で書き物をしてゐたが、十二時頃からは吹きまさる風のために、私のゐる所は、舟のやうに搖れ始めた。戸はガタ〳〵とわなゝき、障子はビリ〳〵と泣いた。戸袋にしまりがないと見えてバタ〳〵とあほられ、今にも持つて行かれさうに思はれた。筆を擱いて外の音に耳を欹てると、二三丁先のS伯爵邸内の大木の泣き叫ぶ音が、物凄く聞こえた。その高い塀の下に、電柱や、物干竿や、近所の庭の樹木の悲鳴が、低く哀れに聞こえた。私は興が乘つてゐたので、書き物を止める譯に行かず、それ等の物に心を亂されつゝも、とう〳〵書き上げて牀に就くと、同時に電氣が消えた。子供が眼を覺して泣きわめいた。下座敷の雨戸が風に押し倒されさうだから、之が倒れゝば家は風を孕んで天井を吹き拔かれるに決まつてゐる。そして潰れるより外はない。此家の戸はどれもこれも寄せ集めもので、閾にしつくり合ふものはなかつた。其中で一番怪しげな、座敷の前の戸に危險がないやうにと、私は起きて、闇の中で戸を押さへて、風の衰へるまで其處にゐた。

夜が明けてから見ると、庭の建仁寺垣が倒れ、庭の樹木も根こぎになつて倒れてゐた。強いには強かつたが、左程までとは思はなかつたのに、私はこの嵐の過ぎ去つたあとを見て驚いた。近所に潰れた家があると云ふことを酒屋の小僧から聞いたから、私は見に行つた。立てたばかりでまだ人の住まないその家が、粉のやうに潰れひしげてゐた。日は暮れたが電氣は來ず、瓦斯も螢のやうに暗かつた。その薄暗い明りの下で、私は夕刊を見て、更に昨夜の暴風雨の成し遂げた破壞の跡に驚いた。

災厄はこれで過ぎたと思つたのは誤りであつた。その日から野菜物が暴騰した。魚も暴騰した。材木、竹、瓦等の建築材料が前代未聞の暴騰をした。瓦が一枚八錢したと云ふ話はまだ人々の記憶に新なるところであらう。それから小豆が高くなり、搗麥が高くなり、豆腐屋までが値上をした。炭は無論冬に向つてゐたのだから一層の暴騰をした。この日から物價は互に昂騰を競ひ合うた。米價が暴騰したのは、これから見れば餘程後のことである。だが、何よりも人々に恐ろしい自覺を與へたものは借屋の問題だ。

本所深川の人々が、一散に山の手へ避難所を求めたのは世間の注意を惹いた。山の手にいつも明いてゐた家が皆塞がつた。誰からも嫌はれるやうな、何かに瑕疵を持つてゐる空家さへも塞がつた。かうなると、もう、化物屋敷も何もなかつた。空いてる家は一軒もない。

新聞は空家のないことを書き立てた。空家がないと聞くと、現在、家を持つてゐるものまでが、空家をさがし始めた。けれど。もう、行つて見ると先約がついてゐた。前には家が明けば、極く短いところでも。一週間や十日間は明いてゐる。一月、二月空いてゐるのは普通だつたらう。家が悪いのに、差配の方の鼻息が荒いのになると、半年一年空いてゐるのは珍らしくはなかつた。それが、この秋から三日と空く家はなくなつた。晝はり出された。貸家札は、夕刻にはもう剝がされた。暫すると、もう斜に貼る貸家札の必要はなくなつた。桃李不言。下自成徑。と云ふ言葉の如く、空家が出來ればそこに借手が群がつて來た。

この形勢を何時までも大家さんが知らずにゐるものではない。奥さんの顔色にも、女中の言葉にも、みんなそれが現はれて來た。もう庭先で顔を合はせても、先方からお世辭よく話しかけるやうなことは、なくなつた。

こんなことが數日續くと、ある日、大家から精進揚を少しばかり貰つた。

「この頃大家さんが無愛想になつたと思つたのは矢張りこつちのひがみだつたなあ」

と私達は安心して、暫のあひだでも先方の態度に對して不満を持つたのをすまないことをしたやうに思つた。

翌朝、大家の奥さんは子供を連れて遊びに來た。いつもは、直き歸る筈の人が、何か言ひた相にもぢもぢして何時までもゐた。併し何事も云ひ出さずに歸へつた。午後、私が外出して、

夜更けて歸宅すると、妻は私に、

「あの、此間また大家の奥さんが參りましたよ。そして垣根が壞れたり、屋根がゐたんだりしたのを、修繕しなければりやならないんですが、竹も瓦も高いし、手間も大變高いんですと。だから、二十錢家賃を上げて下さいましと云つてましたよ。」

「さうか」

と私は默つた。不愉快な感情が、薄紙を貼つたやうに胸を曇らせた。

「どうなさいます？」

「二十錢は僅だけれど、家賃の二十錢は永久のものだからなあ」

「うちなんか今まで一つとも何處もさう手入れをさせた事はないんだから、こんだの修繕位、默つてしてくれてもいゝんですけどもねえ。あの垣根は私達の來るより前に結つたものですから、もう隨分になりますものね。斷りますか？」

「併し僅かなものだからなあ、斷りにくいやなあ」

こんなことで二十錢上つた。だが、僅かその二十錢上げるのも、また大家では可成り氣兼をしてゐたやうであつた。この位な値上では、今度の修繕費を償ふのは容易のことではなからうと、あとから私は同情してゐた。その間も、物價の騰貴と、貸家の拂底とは、右に述べたやうな狀態である。

二ケ月程すると、また私の留守中に大家が値上げを申し込んで來た。その口上は、「今度、地代が上りましたから、お宅でも家賃を二圓上げて頂き度うございます」と云ふのであつた。

「二圓はちつと大きいなあ。一體幾ら地代が上つたんだらう？」

と私が獨言のやうに云ふと、妻は、

「坪一錢づゝ上つたんですと」

この家は庭から何から合せても、三十坪より多いことはない。三十坪とすれば三十錢だ。二圓と云ふのは何處から割出した勘定だらう？、さう思つたから、私は自分の方からその夜の中に掛合に行つて、結局壹圓と云ふところで折れ合つた。それでも、七十錢は大家に花を持たせた積りで、私から切出した値段であつた。

ヂリ／＼夏の日が強く照り出す頃から、米價が社會問題になる程暴騰し始めた。農商務大臣は躍起となつて、種々な法令を發し、米屋町へ高壓的威力を加へたが、何の効果も無かつた。米のために、暴徒は各地に蜂起した。だが、私の家では米の高い以上の問題があつた。それは最つと遙に高い藥を買はね

ばならぬ事情が起つた事だ。二番目の赤ン坊が重病に罹つて入院した。けれども、一週間ばかりは、病兒は生死の間を彷徨してゐた。かうなるともう、金のかゝるのも、物價の高いのも、私にとつては問題ではなかつた。否、すべての事が問題ではなかつた。たゞ、もう、子供を助けたいとの願望だけが、胸にあつた。懇意な人々は皆見舞に來てくれた。また頼まない金策までもしてくれた人々もあつた。

この最中に、隣家の大家からは、また〳〵家賃値上の要求を申し込まれた。今度は更に三圓上げたいと云ふ要求であつた。

「あんまり度々値上をするのも面倒で、お互に嫌な思をしなければなりませんから、今度は一度に澤山上げて頂き度うございます」

始めの値上は家屋の修繕費を償ふためであつた。二度目の値上げは地代値上げと、諸物價騰貴の影響のためであつた。だが、今度の値上げは先方でも、名目がなかつた。そこで、そのために「度々値上げをするのも面倒だから」と云ふ奇妙な名目が作られた。面倒ならば値上げなんどなさらなかつたら宜いでせうと、以前ならば一笑に附して仕舞ふ可き愚劣なる名目である。併しイソップ物語の狼に羊の對話の如く、強者に弱者との爭ひは、道理を以つて判斷すべき性質のものではない。強者にとつては、理由や言葉は何でもいゝのである。たゞその要求を充たすまでのお芝居に過ぎない。愈々と云ふ時には馬脚を現はしてまでも、その要求は貫徹する。

結局、その代り家に手入を十分にすると云ふ條件のもとに、大家の要求通り三圓値上げが實行された。だが、そのために修繕されたところは、二枚ばかりの雨戸と、磨滅した閾を取換へたに過ぎなかつた。何處も此處もいたみ出した。天井からは風が吹く毎に、砂を降らせた。お勝手の板は腐つてなめくじが這ひ出した。壁は剝げた。湯殿の屋根には始め雨が漏り、遂には月が漏り出した。

十二

陶淵明は五斗米のために膝を曲げぬと云つて、歸去來の辭を作り、官を辭して、田園へ歸つた。私達も歸へるべき田園があるならば、今は都會を去るべきの時かも知れない。蘇秦は我に百畝の田があつたならば遂に六國の相印を帶びる事はなかつたらうと歎息したと云ふが、私達に若し百畝の田があるならば、借家人の歎きを訴へるまでもなく、野に耕して、それこそ

悠然として、南山でも見てゐることが出來るだらうに！

十三

だが、私の友人には家を建てた人が少なくない。美術方面の人々は殊にさうだ。

「君も家を建てたらどうです？」

などと話しかけられると、力もないのにその氣になつて、家の建築を空想したりする。實際、もう私の仲間で家を建てないものは少なくなつた。現在建てゝゐない人々でも、建てる丈けの資力は持つてゐる。それを思ふと、私など島に取殘された俊寛のやうな淋しい心持がする。

まだ建てる力もないのに、

「だが君、うつかり家も建てられないよ。地面からして、確かな地主を見つけてかゝらないと、地震屋にでも逢つたら、それこそ慘めなものだからね」

と忠告してくれる人がある。

成程地震屋と云ふものがある。家がなければ家に苦しみ、家があれば地面に苦しむ。地球の地面は廣いのに、そしてトルストイの小話ではないが、人間の眞に要求する地面は、僅か六尺に過ぎないものを！、ある人々は、自分の要せざる莫大の地面を持ち、またある者はわづかに膝を容れるの地をすら持たない。人間は皆同じやうに、裸で生れて來て裸で死んで行くものなのに！

此間私のゐた學校の同窓が、年寄つた舊師のために、家を建てて贈らうと云ふ相談會を開いた。いろ／＼の動議が出た。そして結局、ミンマムを七千五百圓として集金することに決議した。だが、また先生は家ばかり貰つても却つてお困りになりはせぬかと云ふ說も出た。少し大きな家を保存して行くことは、小さな家を借りるよりも苦痛だと云ふ話も出た。

さうだとすれば、家はあつても困り、無くつても困るものだ。穴居生活の昔を想像すると、如何に氣樂なものであつたかと羨ましくも思はれる。藁小屋を作れば、藁小屋丈の苦痛が伴ひ、木造の家に住むやうになれば、またそれ丈の苦痛が伴ひ、鐵筋コンクリートの家に住むやうになれば、またそれだけの苦痛が伴ふであらう。此間渡佛したG君が道すがら、ニウヨークから、五十八階の家、ウールワース、ビルディングの繪はがきを送つて吳れた、こんな立派な建築物の中に住む人々の苦痛は何んなものだらう？。その中の柱が一本歪んでも、それを修繕するには莫大の經費を要する。到底私などの身分ではどうするこ

とも出來やしない。

私の空想は、私がこれを貰つたらどうするかと云ふ問題を提起して來た。貸事務所にでもして收益を揚げやうか？　見世物にして見料を取らうか？　然しこの建物にいたみが來たらどうするか？　それよりも、この建物を受取つた爲めに、いろ〳〵面倒な義務負擔が起つて來るだらう、いろ〳〵面倒な俗務が起つて來るだらう。

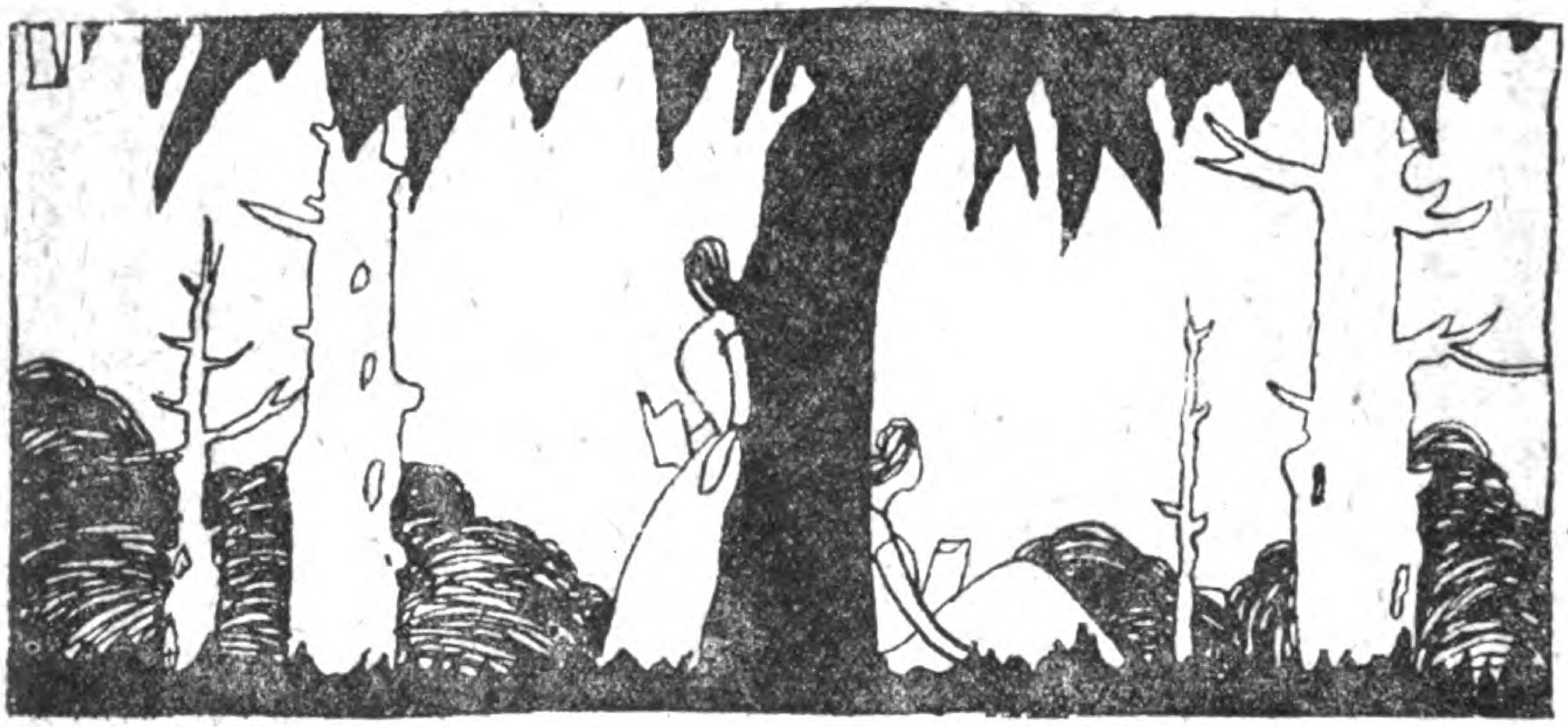
だが、こんな大きな建物を私が亞米利加から貰ふ譯はない。この心配は無用である。だが、若し日本の文明が進歩して、皆がこんな家に住むやうになつたならば、私ばかりが今の古ぼけた木造家屋に住んでゐる譯には行くまい。そしてその時の借屋人の負擔と悲しみは、今よりも更に幾倍を增すことであらう。世の中が結構づくめになればなる程、人の生活は苦くなるのだ。

十四

私は自分の生れた家を八歲の秋に追はれたが、そして又十八歲の春に自分の育つた故鄕の家をも去つて上京したが、三十年後の今日、尙ほ夢に通ふものは自分の生れた家である。自分の生れた家を中心として、私には故鄕がある。なつかしい故鄕が有る。併し父たる私が借家人である爲めに、轉々として岸を變へて歩く借家人であるために、私の子供等は憐む可き萍の生活しか知らない。彼等の生れた家は、彼等の育つ家ではない。そして彼等の生れた家も育つ家も、自分達の所有する家ではない。こんな事で、彼等に家の觀念が形造れるだらうか？　故鄕の觀念が形造れるだらうか？

埋骨豈唯墳墓地。人間到處有青山。然だ。全く其通りだ。學問修業すべき青山は、人間到るところに有る。遊覽旅行をす可き天地は、人間到るところに有る。活働金儲けをす可き男兒の舞臺は、人間到るところに有る。けれども、夜半萬里、愁人の夢を運ぶの地は、自分の生れた家を中心とする故鄕の山河の他には無い。生れた家、育つた家、自分の家、は其人の爲めには一生の夢であり詩であるのだ。他の總ての事に不幸であるにも係らず、私には此詩がある夢がある。しかるに、私の子供達は、借家人の子として都會の中に生れたばかりに、此夢も詩も其味を知らないで終うだらう。

私が借家人としての第一の悲哀は、子供に詩として夢としての家を持たせる力の無いことだ。私は餘りに自分の甲斐性無しを悲むのだ。



特種部落情話

涙の物語

河内銀二郎

一 お腹で泣いた四年間

生れたお糸は母親に似て、美しい子であつた。もつとも、父親に似ても、彼女は決して醜い筈はなかつた。何故と言つて、美男美女が多いので有名な此處の特殊部落でも、殊にお糸の兩親は、若い頃は「お雛様のめをと」と迄言はれた程の、評判者だつたからである。血族結婚の爲に、不自然に濁つた血を持つてゐるこの部落の人々は、人も知る如く、その顏立のよしあしに拘らず、皆申し合した樣に厭らしく、目を眞赤に爛らしてゐる。その中で、珍しくお糸の兩親は普通の目をしてゐただけでも、人の目をひいたに違ひない。但し、父親の方は三十を過ぎてから、やつぱり隣近所の人たちと同じ樣に、目を病ひ出しはしたが……。

そのお糸の生れたのは、山城の國のT——と言ふ、小さな所謂穢多村であつた。そこから東へ一里半ばかりのところに、國境の山々が連なつてゐる。山の彼方は近江の國である。また北へ二里行くと、大きな都がある。それは昔に名高い古の王城の地、京都の町である。

悧發なお糸は、物心がつくと共に、自分が穢多といふ卑しい生れの者である事を、知らないでゐる筈がなかつた。尋常小學校に行くやうになり、やがて段々と成長し

て行くにつれて、次第にその事がはつきりと頭の奥深く刻み込まれると共に、彼女は寢ても醒めてもその事を悲んだ。果は、自分がその一人であるといふ事さへ忘れて、穢多といふものが無性に憎らしくなつて來て、濟まない事とは思ひながらも、自分を生んでくれた父や母までを嫌ふ氣さへ起つて來るのを、どうする事も出來なかつた。

彼女は生れつき無口で、大人しくて、學校の成績なども、常に首席を占める程、よく出來た。たゞ一つ、父に似たのか、母に似たのか、或はこの部落の人々特有の性質なのか、女の子でありながら恐ろしく强情な事であつた。彼女はどんな悲しい目に遭つても、又どんな辛い目を見ても、一度も泣いた事がないと言はれてゐる。

彼女は生れて殆ど自分の村を出た事はないが、時々人の話に聞いたり、又學校の本などで讀む話と、同じ人間でありながら、自分たち穢多の事とを比べて考へて見るやうになつた。――まあ、何といふ違ひであらう！　又どうしてこんなに違ふのであらう？

あの二里南にある京都の町に、彼女は七歲か八歲の頃、唯の一度だか、父親に連れられて行つた事があつた。その時の印象を、數日の間つゞけて夜每の夢に見たほど、彼女は忘れようとして忘れる事が出來ない。自分たちの村や、家や、人と比べて、そこの、京都の町や、家や、人が彼女の幼ない目にも、何と美しく生々と映つたことであらう！………

それは夏のことであつた。けれども、そこにはお糸の村の樣に、眞黑な素裸になつて、素足で道を歩いてゐるやうな子供等は一人もなかつた。道を行く大人も子供も、男も女も、小さいお糸の目には悉く繪の樣に見えた。そこにはお糸の村の樣に、往來を歩いてゐて、すつかり裏口まで見通せる樣な家は一軒もなかつた。同じ人間の着る着物ながら、穿く下駄ながら、用ふ道具ながら、行く道ながら、住む家ながら、何といふ「彼處」と「此處」とは相違であらう。……それを思ふと、お糸の心は明けても暮れても、『京都へ行きたい、京都へ行きたい』といふ思ひで、一ぱいになるのであつた。

村はづれに出て、北の方を眺めると、恰も大きな獸でも臥てゐる樣な恰好をして、晴れた日は手に取るやうに京都の町が見える。その少し手前に、丁度その町の章か、町に導く道しるべの樣に、東寺の塔が招くが如く聳えてゐるのであつた。

けれども、當時まだお糸は年も行かず、何にも知らなかつた。

その中に、彼女は優等の一番の成績で尋常小學校を出たが、尚その上に高等小學校に行きたいと兩親に申し出た。父親はその時貧しい中から、殊に母親の激しい反對があつたにも拘らず、終にその最愛の娘の願を許したのであつた。無論、始めの間は、彼も母親と共に色々に娘を脅したり、すかしたりして、彼女の望を思ひ止まらせようとしたのであつたが、到底彼女が思ひ止まりさうにないのを見てとつて、さつぱりと男らしい決心の眉を上げて、彼女を許したのであつた。が、それに就いて、彼等の間に次の様な話があつた。

父親は言つた。――

「お糸！ わしは幾度も言つた通り、實はお前の考は何處までも止めたいのだ。お前はまだ何にも知らないのだ。が、よく考へて見ろ。自分の可愛い娘の願を、それも決して悪い事をしようと言ふのではなく、學問をしたいと言ふ、――殊に學問にかけてはお前は人並以上によく出來ると言ふ事もわしはよく知つてゐる、――それを止めようとする無慈悲な親が何處にあらう？ そこぢやテ。それを止めるといふ、しかし、その親の心をお前も少しはもう考へなければならない。子のために悪しかれと思ふ親があるものか！

「お糸！ 今度の高等學校は、お前も知つてるぢやらう、今迄と違つて、この村の中にあるのぢやないぞ。この村の中にあるのなら、わしは何にも言はずに、三度の物を二度に食ひ詰めても、お前が好きで行きたいと言ふのなら、決して悪い事ぢやないのだから、二つ返事で遣つてやる。ところが、今度の學校は他所の、立派な村にあるのぢや。而して他所の、立派な家の子達が行くのぢや。その中にお前は混るのだぞ。定めし、意地の悪い子があつて、それでなくても女といふ者は意地の悪いものだ。お前に面と向つて「穢多」と蔑ますとも、そんな事は蔭で言はれても聞えて來るものだ。何のかのと身を切る様な、辛い恐しい事を言はれるであらう。その度にお前がどんなに恥しい、辛い、悲しい思をしなければならないか、――お前はまだ何と言つても年の行かない子供だから、何も分る筈がないが、――それを思うて親たるわしは止めるのぢや、お糸！」

「でも、でも……私はそれでも、どうしても行きたい……」

と、やつぱりお糸は、少しも父の言葉を聞いてゐなかつたかの如く、未塵も揺がない堅い決心の色を顔に浮べて、斯う言ひ張るのだつた。――

「お父さん！ 私はどんな恥かしい目にあつても、辛い目にあ

つても、屹度辛抱します。屹度、屹度、どんな事があつても、みんな自分の胸ひとつに收めて、苦しい事や悲しい事を決して、決してお父さんやお母さんの耳には入れませんから。死ぬより辛い事でも屹度、屹度辛抱しますから。どうぞ、どうぞ、お父さん！……」

さうして愈よ高等小學校に通ふ事になつたお糸は、他所の見る目も痛々しい程、何事にもよく辛抱した。

「穢多だけに決して泣く事がない、强情な女だ！」などと、勘忍すれば勘忍するで、人はこんな事を言ふ。

彼女は毎日學校に通ふのに、三つの他所の村を通らねばならなかつた。そこでは雨の日も風の日も、行きにも歸りにも、「穢多の娘」と指さしして、聞えよがしに嘲られた。さういふ、穢多を嘲ける穢多よりも口さがない人々の中を、お糸は、親でなくても心ある人が見れば、涙なしには見過されぬ程、實によく辛抱した。

「男はお腹で泣くと言ひますが、お父さん、私も亦この四年が間、お腹で泣いて暮しました。」

首尾よく、矢張り優等の一番で高等小學校を卒業して、免狀を貰つて歸つて來た時、さすがのお糸も思はず張り詰めてゐた氣を弛めて、しかし顔だけには微かに笑顔を見せながら、斯う父母に言つた。お糸の目には涙はなかつた。が、その言葉を聞いた父母は涙ぐんだ。

二　綺麗な町に住みたい一心

「お父さん！」

或時お糸は何を思つたか、いつにない感情のこもつた聲で斯う呼びかけた。

「お父さん！　私たちもどうかして綺麗な村か、綺麗な町に住む樣になれないでせうか？……」

その言葉を聞いた時、父親は稍しばらく俯向いたまゝ、無言で答へなかつた。やがて彼は悲しげにため息をついて、顔を上げた。彼はぽつり〳〵と吐き出す樣に言つた。――

「わし等はもうこの樣に年もとり、また生れてこの方、この村に長い間厄介になつて住んで來たのだ。今となつては、樣々な譯もあつて、最早やどうしてもこの『わし等の土地』を離れることは出來ない。……しかし、お糸、わし等はもう老い先も短かい身ぢやが、それと違つてお前はまだ年も若く、多少の教育もあり、それに顔も姿も人並に生れて來てゐるのだ。わし等の野

途の送りさへ濟ましてくれゝば、その後はお前の甲斐性次第で、どうにでも又お前の思ふ様にならぬ事もない、何でもお前の思ふ通りにやつて見よ。だが、どうぞわし等の生きてゐる間だけは、何處へも行かずにおいてくれ。あの不孝な仙太(お糸の兄の名)の様に、わし等を見捨てないでくれ！」斯うかき口說く様に言ふ父親の言葉は、お糸がこれ迄一度も聞いた事のない程、物哀れで、取り縋る様な調子であつた。あの普段の頑固な父がどうして……とお糸が訝かつて、聞きながらも幾度も父の顏を見上げた程であつた。(作者曰く、是非お糸の兄の仙太の物語も、この中で一緒にしたかつたのであるが、その方が自然でもあつたのだが、與へられた紙數を餘りに超過する事を恐れて、こゝでは割愛する事にした。)

「ですけども」とお糸は、始め父に哀願するつもりで切り出した言葉であるが、案外にも逆さまに父に哀願されたので、今度は自分の方から言葉の調子を強くして言つた。「どうしてお父さんやお母さんと一緒に、他所へ行けないのでせうか？　どうして、私一人で行かねばならないのです、而して甲斐性次第とはどの樣な事を言ふのですか？」

「それは一寸一口には言へない。ぢやが、今にお前にも自然と分つて來る事だ。」と答へる父親の言葉は、又いつもの重々しい口調に復つた。而して彼の言葉はつゞいた。——

「ぢやが、お糸！　今はお前もさうしたいぢらしい事を言うてゐるけれど、今にその時が來たら、わし等が一緒に連れて行つてくれと賴んでも、お前が『いやだ』といふ樣になるのだ。乾度お前が『いやだ』といふ樣な時が來るのだ。わし等に早く死んでほしいと思ふ樣な時が來るのだ。又わし等が早く死んでくれてよかつたと思ふ樣な時が來るのだ！　今はわしの言ふ事がよく呑み込めまいが、今にわしの言つた事が、お前の胸にぴんと響く時が來るよ、お糸！……」

三　乙女心に都を戀ひて

斯うしてお糸は十六になつたのである。

今、このT——特殊部落の村はづれの、たつた一本の櫻の木にも、春を知らせる花が開き、村を離れて遠く野に出ると、遙かなる若草の野には、京都の町あたりから野遊びに來た都の人々の、美しい春着の袂がうららかな日の光を浴びて、陽炎のやうにゆら〳〵とするのも見られた。

「お母さん！　あの人達は一體あそこで何をしてゐるのでせ

う？」と折りから村はづれの小川で、母親と一緒に洗濯に來てゐたお糸は、遙かにそれを眺めて指さしながら、斯う母にたづねた。

「あれは京都から町の人等が草摘みに來てゐるんだよ」と母親は洗濯の手も休めず、顔も上げないで、斯う答へた。

大人も子供もうち連れて、あんな綺麗な着物を着て、その草摘みといふものをしたら、どんなに樂しからうとお糸は思つた。さすがに悧發な娘ではあるが、その草摘みといふ言葉は言はれて見ると學校の本などで聞いた事が思ひ出せるだけで、彼女は實際に一度もそんな事をした事は言ふ迄もなく、見た事もないので、夢見る様に眺め入つた。

「お母さん！」とやがて、茫然と野の方に眺め入つてゐたお糸は、突然、心持顔を赤くして母親に言つた。――

「お母さん！　私等も一寸草摘みをして見ようぢやありませんか？」

「まあ！　この子ッたら……」と母親は目を丸くして娘の顔を見守りながら言つた。「お前は氣でも狂つたんぢやないか？　わし等のやうな者がそんな事をしてどうするんだよう！」

二人ともその上何にも言はなかつた。而して母は洗濯の手を進め、娘は何もぼんやりと氣が拔けた様に、小川のほとりに立ち盡してゐた。

お糸は長い閒野の彼方を、飽かず眺め而して眺めた。うららかな春の日は彼方に草摘む人々の美しき着物を照らし、また他の若草を輝かし、而してこの貧しい、呪はれた生れの母と娘との上に光つてゐる。……

四　泣き〳〵留むる親心

その頃から、どうかして京都に行きたい、又どうかして是非行かうと言ふ心が、お糸の言葉にも行爲にも明らかに現はれるやうになつた。それは決して、あの草摘の人々の晴れやかな衣裳に魅せられたからばかりではなかつた。乙女心に、村はづれから北の方、東寺の塔の彼方に眺められる大きな都――化物のやうな大きな都――あそこに行きさへすれば、あの化物の中に混つてさへしまへば、何とか新らしい希望の日が來るかも知れない――斯う悧好な娘は思つたに違ひなかつた。以來彼女は何でもない事にもヒステリイの様にいら〳〵して、母親に毒口をきいたり、又父親に不機嫌な顔を見せたり、かと思ふと終日誰とも物を言はなかつたり、さう言ふ日が屢々あつた。そんな時、

京都の話や、また京都に行く話などが出ると、彼女の顔は忽ちに晴れやかになるのであつた。

その時分の事であつた。お糸の父がその職業上から出入する、京都堀川の皮革卸商の番頭が、或日四十がらみの何商賣をするとも附かぬ一人の男を連れて、お糸の家へ遊びに來た。此方から出かけて行つても、店の端に腰かけさせられる位で、決して上に上がる事を許されない。況して茶などを出す器は、この部落の者だけは別にされてゐる事も、お糸の父は知つてゐる。從つて、隨分長い間商業上の取引で顏を合してはゐるが、先方から此方へ尋ねて來た事は一度もなかつた。さういふ風であるから、相手の氣を汲み汲み、恐る恐る「どうぞ、お上り下さい」とお糸の父が、それも殆ど口の中で言ふと、客は思ひの外憚りなく上つてくれたのに、彼は有頂天と言つてよい程に驚き且つ喜んだのであつた。父親でさへそんな風であつたから、母親は無論のこと、お糸までも、村の人の外決して客などが來るものではないと思ひ込んでゐるので、不思議といふよりも寧ろ氣味の惡さを感じた程であつた。しかし、客は何の隔意もなささうに、やがて、これも恐る恐る、母親に命じられて、お糸が汲んで出した茶なども、憚りなく飮むのであつた。

不思議はそればかりではなかつた。嘗て一度として白い歯を見せた事のない、革屋の番頭が、その日に限つて妙に優しい口のきき方をするのに、お糸の父は更に心に驚かない譯には行かなかつた。

「この人は私の極く懇意な友達で……」と番頭は座に着くと、連れの男を主人に引合した。番頭は言葉をつゞけて、

「今日は私も一日主人から暇を貰つて、この人の家に遊びに行つたところが、二人で風流氣を起して散歩としやれたもんだ。で、この邊まで來たもんだから、ふッと用事を思ひついて、お寄りしたんだがね……」

だが、さう言つただけで、番頭は急にその用事に話を持つて行かないで、連れの男と一緒になつて、この邊は景色がいゝとか、空氣がいゝためか氣がせい〱するとか、町で見るのとは國境の山の形が大分違つて見えるとか、取止めのない、四方山話に移つて行つた。だが、主人役のお糸の父親は、嬉しさと氣味惡さとに、唯ぴよこ〱と頭を下げるばかりで、唯もう夢中であつた。

やがて、又何かの用事で客の席にお糸が出た時、番頭は連れの男に向つて、何氣ない風で、

「どうです、こゝの娘さんは、別嬪でせう?……ハヽヽヽヽ」と言つた。

さすがに年の行かないお糸は、赤くなつてその場を下つた。

「惜しいもんですな」と連れの男が言つた。

それから又双方に二言三言お糸を賞める話が出て、やがてそれに恐縮さうに話を合してゐる父親の方に向つて、番頭は改まつた様な、改まらない様な調子で、

「どうだい、藤蔵さん、」と口を切つた。「お糸さんを京都へ奉公に出す氣はないかい?……」

而して番頭の話す所に依ると、彼の連れの男の極く懇意にしてゐる家に、島原の遊女屋がある。遊女屋といふと、一寸惡い様だが、女が、殊に斯う申しちや失敬だが此方の様な女が、運を開くのには、これ程よい所はない。もつとも普通の家と違つて、外に朋輩の女郎衆も多勢居ることではあり、殊には客商賣のことだから、一段と氣骨も折れようが、此方の様な女が身分を隱すのにこれ程屈強な所はない。それに、お前さんにも一時に多少纏まつた金も手に這入り、又どんな拍子で、數多い客のことだし、娘御のあの縹緻だから、身分のよい、金持に身請されないものでもない。それにしても、斯ういふ村からたゞ無暗に出て行つたとて、恥かしい目を見るばかりだから、若しさう言ふ望なら、宜しい、自分の家から自分の娘といふ名儀にして、そしてこの人に世話をして貰つてやらう——斯う言ふのである。

後で思ふと、先に番頭が「用事」と言つたのは、この事に違ひなかつたのだが、番頭の話が餘り巧みであつたので、その時はそれとは氣が付かなかつた。番頭と話を合はして、連れの男も面白可笑しく、それに合槌を打つた。そして又いつの間にか話を四方山の事に戻して、それからは四方山話の中にもちよいちよい先の話を混ぜはしたが、結局何といふ事もなく、ふと立寄つた様な顏をして、客は歸つて行つた。

お糸は始めの中こそ、恥かしさに顏を赤くして、次の間の隅に引込んでゐたが、やがて高鳴る胸を抑え抑え、隣室の話を一言も聞き洩らすまいと努め始めた。客の歸つて行く時、彼女は送つて出なかつたが、心では村はづれ迄も、出來る事ならそのまゝ京都へ迄も、從いて行きたいと思つた。

その日から、二三日、四五日の間も、お糸は家の人たち（と言つても、父と母とだけだが）とは言葉も交さず、笑ひ顏も見せず、終日溜息ばかりついて、考へ込んでゐる風であつた。お糸

はその小さい胸の中で、あれこれと、色々に考へまどふのであつた。――今このまゝ思ひ切つて京都へ行つてしまつたなら、親子はそのまゝ永劫に別れて又會ふ時がないかも知れない。それは言ふ迄もなく悲しい。と言つて、又一方から考へると、今この機會を外したなら、いつの時又お糸はあの長い間望んでゐた「都の人間らしい生活」に這入れるか分らない。恐らくこれを逃がしてしまつたなら、又ともうこんな機會は永久に來ないと思はれた。嘗て彼女の父が、「甲斐性次第」と言つて、それは何の事ですと聞いた事がある。それを今お糸は思ひ出した。さうだ、甲斐性次第で、どの樣なよい運が向くかも知れない。――あれこれと、色々と思ひ廻らした末、遂にお糸はどうしてもこの機會に京都に出ようと決心した。

その夜、お糸は思ひ切つて、その決心の程を兩親に話した、彼等は思はず聲を立てた程に吃驚した。母親はもう始めから老いの目に涙を浮べた。

「何といふ事を言ふのぢや！」と、いつもに似ず父親は聲を震はせて言ひ放つた。けれども始め勢よく言つた彼の聲は、次第に顫へを帶びて行つた。

「お糸！　お前も亦、あの不孝な兄の仙太の樣に、この年とつた親を捨てて行かうと言ふのか！　この親を、この年とつた親を……」斯う言つたまゝ、暫く父は次の言葉がつゞけられないと言ふ風で、數分間の沈默があつた。やがて、再び父親は口を開いた。

「お前は女郎屋と言ふものは、どんなものだか知つてゐるか？　女郎屋どころか、都會といふとこはどんな所だか知つてゐるか？　都會といふものは、田舍の、殊にわし等の樣な世間を狹く渡らねばならぬ身の上の者には、目の玉の飛び出る程恐しい所なのだ。田舍の高等小學校へ通ふ樣な譯には行かないぞ！…お前はまだ何にも知るまいが、殊にその町の女郎屋などと言ふものは、口喧ましい、意地の惡い女郎たちが澤山にゐて、泣くに泣かれぬ程な苛め方をするものだ。……斯う言つたとて、お前には仲々分るまい。が、兎に角、お前は此處を一旦踏み出したら、もうわし達には會へないのだぞ。そして此處では思ひもつかない樣な苦勞が彼處では待つてゐるのだぞ。お糸！　それでも未だお前には『此處』より『彼處』の方がよいのか？　町に出て散々な目に合つて歸つて來る。その時分はもうわし達は土の下にゐて、『可哀さうに！』と言つて迎へてやる譯には行かない。その時はもう此處でも誰も相手にしてくれる者はない。そ

んな事になつたら、お糸、お前はどうするつもりぢや？　首を縊つて死ぬ外はないぞ！……しかし、無理はない……」

頑固な父親は先程から泣きながら斯う言つてゐたのだつた。お糸は彼の悲しげな、或時は苦しげな顔を度々見た。けれども彼の涙を見たのは今が始めてであつた。父親はこの時握り拳で目に溜つた涙を拂つた。母親は無論始めから泣きつゞけであつた。父はそして言葉をつゞけた。

「無理はない！　わしも、お糸よ、お前の親父も亦若い時お前と同じ心で、どんなにこの境遇を出ようとして苦んだかも知れない。而して一度は此處を出た事もあるのぢや。お前には仙太の外にもう一人兄があつたのぢや。それはお前も仙太も生れぬ先の事で、わしは散々血を吐く樣な苦勞をした擧句に、その子まで殺されて、――さうぢや、殺されたやうなものぢや、――そして追ひ出されて、死ぬより辛い思をして此處へ歸つて來たのぢや！　お糸、どうしたつて、麥は畑のもの、稻は田のものだ。やつぱり元の所へ歸つて來たのぢや！……」（作者曰く、この父親の過去の物語も、お糸の兄の仙太の話と共に、この中でしたかつたのであるが、與へられた紙數を餘りに超過する事を恐れて、こゝでは割愛する事にした。共にこのお糸の物語以上に哀れ深いものであるから、又の機會を得て綴る事があらう。）

けれども一圖に自分の事を思ひ詰めてゐるお糸には、この哀れな、又不思議な父親の話も、まるで耳には這入らなかつた。

「これはみな運の廻り合せと言ふものだよ、お糸」と、その時まで泣きつゞけてゐた母親も、涙の中から斯う口を挾んだ。「わし等の樣な卑しい身分に生れ合したとて、今日を滿足に暮して行けば、それに越した事はないのぢや。どんなに立派な身分に生れたとて、金持になつたからとて、滿足するといふ事がなければ、それこそ不仕合せといふものだよ、お糸。身に適はぬ望を起すものではない。」

「お糸！」と父はまた言つた。「もう何にも言はない。わし等二人の願ひぢや。どうぞわし等の目の玉の黒い中だけは、わし等と一緒にゐてくれ。たゞ親等二人と子一人の家で、そのたつた一人の子に行かれた後の、年寄つたわし等二人のことを思つて、何も言はない、それ迄家にゐてくれ！

お糸はやつぱり默つてゐた。しかしいつもの激しい、强情な樣子ばかりがはつきりと現はれるばかりであつた。「子の心を知る」父親は、その上押して何も言はなかつた。彼はもう涙もこぼさなかつた。そしてたゞ溜息をついた。母親も唯默つて、涙をふきふき、溜息をついてゐた。

五　行け！無理もないと泣く親心

たうとうお糸は京都へ行くことになつた。さう話が定るまでに、いつか革屋の番頭に連れられて遊びに來た男は、二三度もお糸の家へ一人でやつて來て、物馴れた話方でお糸の心をそそつて行つた。長年の苦勞で、片意地な迄に鍛へ上げられてゐるお糸の父は、決して彼の言葉に動かされはしなかつたが、肝心のお糸が心を決めてゐたので、話は忽ちに進行してしまつたのだつた。彼は京都の公周旋業者なのである。

或日、その周旋人が迎へに來た。それは櫻の散りかゝる頃であつた。村はづれの、いつかお糸がそこに立つて、草摘みに來てゐる都の人々に見惚れた、小川に架けられた石橋の所まで、哀れな彼女の父と母とは見送つて行つた。

「さあ、もう此處で別れとしよう。何處まで送つて行つたつて、名殘が盡きんのぢやから……」

斯う父親は男らしく決心した樣子で、その石橋に來た時、しかし沈んだ聲で言つた。

「お糸、お糸！身體を大事にして……」と言つたまゝ、母親は泣いて言葉をつゞけられなかつた。

その職業上、長年の間幾度となくさういふ光景に接し馴れてゐる周旋人も、さすがに三人の者の心の中を思ひやつて、何と慰める言葉も知らなかつた。言ふ迄もなく、斯ういふ部落の娘でさへなければ、たとへ身を賣つたとて、親も稀には會ひに行けようし、又娘も年季を濟ますなり、客に引かされた時は、再び親の家に歸る事が出來るけれども、この場合は親と子との永久の生き別れに違ひなかつた。周旋人は唯金儲けといふ上から思ひついて、特殊部落の娘を取扱はうと考へたのは、極めて最近の事だつたのだ。彼はそこでさういふ人達に密接の關係のある革屋の番頭に十分な心附けをして、遂に斯ういふ運びに迄至つたのであつた。（後年この周旋人の話に、『いづれは罪深い職業ですが、穢多の娘だけはいくら金が欲しくなつても、あれ一度で私は手を引きました』と言つた程である。）

さうしてお糸親子と周旋人と、四人の者は長い間無言のまゝで、その石橋の上に、動かずに立つてゐた。お糸の俯向いた目は、小川の緩い流れを見てゐた。穩かな春の日は、小川の水の上に落ちて、碎けて而して光つて流れた。

「さあ、行きませう……」と公周旋人は、稍々しばらくしてから、漸く思ひ切つた樣に顏を上げて、斯う促した。

「お糸、お糸！……」と母親は狂氣した樣に、夢中になつてお糸の傍に走り寄つた。而して離れ難なさうに、しつかりと娘の手をとつた。

「お糸！」とこの時父親は、さすがに淚だけは隱して、父親らしい口調で口を開いた、「お糸！ もう斯うなつたら、わしは決してお前を叱りはしない。わしはお前を止めはしない……」

こゝで彼は大きな溜息をついて、それで溢れさうになる淚を止めるらしく、一寸言葉を切つた。さて又つゞけた。

「お糸！ わしはお前を叱るどころか、止めるどころか、お前の心の中を察して、今ぢやから言ふが、無理もないと思うてゐる。まつたく、無理はない！ 穢多に生れたと言ふだけで、まだ年も行かないのに、普通の人の一生の中にする十倍も二十倍も、お前もどんなに辛い思や、恥かしい思をしたことぢやらう！ これからも、村にゐれば村にゐるで、又町へ出れば町へ出るで、——町へ出れば今迄の又十倍も百倍も——色々な苦勞をするであらう。それでも、出來る事なら、さぞ眞人間になりたいと言ふ思で、胸が一ぱいであらう。

「さあ、行け、お糸！ わしは思ひ切つた。わし等は別れともない。だがわし等はお前が今日突然に死んだ者と思ひあきらめよう。お糸、わしは生きてゐるうちは朝晩お天道樣に、死んだら佛樣になつて、祈つてやるぞ。行け！ それだけの決心があるのぢやから、屹度思が遂げられるだらう。だから、この石橋を向ふへ渡つたら、もう父さんや母さんの事はさつぱりと忘れてしまへ。自分の生れた家や村の事もさつぱりと忘れてしまへ。而してどんな事があつても、決して自分の身分を明してはならんぞ。一度自分の身分を明したが最後、その時は今迄の苦勞が、斯うしてこんな辛い別れをした苦勞も何もかも、すつかり水の泡になる時だと言ふ事を忘れるな！ 而して先方へ行つたら、みなの言ふ事をよく聞いて、どのお客にもどのお客にも丁寧にして、その中でもこの人と思ふ人を殊に大事にするのだぞ、どの人がどんな身分の人か、どの人が賴りになる人かと言ふ事は、だん／＼と馴れるうちには分つてくるわ。そして『この人』と思ふ人が目付かつたら、その人に賴んで嫁にして貰ふんだ。……

「今夜はこの方の家に泊めて貰ふんだ。その道で堀川の茶屋の旦那の所へ寄るだらうから、旦那にもよくお禮を言ひな。旦那の家へも連れて行つて貰ふだらうから、よく覺えておきな。あの旦那が今日から表向きお前のお父さんといふ事になつて貰

ふんだ。だから旦那の家がお前の家といふ事になるんだ。もし他人(ひと)に聞かれて、どうしても言はなければならぬ時にはさう言ふんだぞ。分つたか、お糸、分つたか、お糸！……

「いくらお前が不孝だとて、親といふ者は馬鹿なもんぢや。親といふ者は子供に殺されても可哀くてならんのぢや。お前の不孝する心根を察して、いぢらしい氣がするのぢや。だから、決してわし等はお前の爲に惡いようにと祈りはしない。お糸、今云つた事をよく覺えておいて、出世してくれ。しかし、悲しい事には自分の出世を親に見せる事も出來ねば、また親も子の出世を見る事が出來ない。と言つて、何もかもみんな約束事だ。さあ、お糸、これが別れぢや！……」

斯う言ひ終ると、父親は涙を抑えながら、

「さあ、歸らう」と泣き頻る母親を娘から引き離して、「何分よろしく、お頼み申します」と周旋人に挨拶して、歸途に就いた。

お糸は終始の父の言葉を、默つて俯向いて聞いてゐた。けれども、彼女は一滴の涙も出さなかつた。

斯うして哀れな親子の者は永久に別れたのである。

六　近江の旦那に見染められ

それから二年の月日が經つた。遊女になつたお糸が十八の年の秋のことである。遂に彼女の日頃の思の達する時が來たのである。その年の夏の始め頃から、彼女が勤めをしてゐた京の島原のS——樓に來始めて、來ると必ず彼女を相方にして遊ぶ客があつた。その男が彼女を引かす事になつたのである、年は三十前後で、色の淺黑い、厭味のない好男子で、その服裝や遊び振りから推して、相當に豐かな資産家の息子だらうと見られた。

無論、客のみならず、S——樓でもお糸の素情を知る者は一人もなかつた。生れ附の縹緻の上に、更に廓の水で磨きをかけられた彼女は、島原中でも、五本の指に折られる程の評判者であつた。それに近頃の遊女としては、珍しい程、一通り以上の讀み書きが出來るといふ事も、彼女の名聲を高くした。唯一つ、強ひて缺點として擧げると、彼女自身窃かに全力を盡したにも拘らず、割合に愛嬌に乏しいといふ事であつた。

さて、夏の始めから彼女に通ひ始めた好男子の客は、さういふ種類の客と違つて、無暗な流連をしたり、だらしなく續けて

登樓するといふ樣な事はなかつた。彼が彼女に言ふ所に依ると、彼は隣り國江州の物持の息子で、當時見物と、別に大した病氣といふ程でもないが、保養とを兼ねて、京都に來てゐるといふのであつた。京都は親類の家にでも滯在して居らるゝのかと聞くと、否、旅籠にゐるのだとの事であつた。

その客に、お糸は彼が通ひ始めてから三ケ月と經たない秋の始めに、前にも言つた樣に、引かされる事になつたのである。彼女に取つて何といふ幸福であらう。前にも言つた通り、當時既に廓中での可成りな人氣者であつただけに、朋輩の嫉妬が彼女の周圍に向けられてゐて、どうかして彼女の評判を落さうと、その缺點をつけ覗はれてゐた。その中で彼女の最も恐れたのは、外の女郎衆と違つて、彼女が一度も親から手紙を貰つた事がないといふ事、親が京の、而も島原からさして遠くはない堀川にゐるといふのに、まだ一度も尋ねて來た事がないといふ事などであつた、お糸はそれに對して、自分は始終手紙を出すが、親は無筆者で、不性者だから返事を寄遣さないのだとか、この近年商業上で失敗して、その爲に寸暇もないが、今に尋ねて來るだらうなどと、その時をごまかしてゐた。或は、彼女がその時引かされなくて、もう三ケ月もS――樓に勤めをつゞけてゐたら、どんな事で身分が知れなかつたとも限らない。それを思へば、悧好な彼女は今はもう引かされる相手を選んでゐる暇さへないと迄思つた程であつた。自分の素情がこゝで目附けられる程なら、いつそ今迄の自分の苦勞がすつかり水の泡になつてもかまはない、自分と同じ素情の男にでも、一刻も早く引かされたいとまで思つた位だつた。それが、金持の、美男の、而も男はまだ獨身で、彼女を國に連れて歸つて正妻にしようと言ふのである。

斯うして、お糸は大枚の金をその人に出して貰つて、立派に引祝をして、或日その人に連れられて、近江の國なる新夫の家へと行く事になつたのであつた。

それはまだ今日ほど汽車の便利の行屆いてゐなかつた頃の事である。夏の始めから夫の滯在してゐたといふ七條の旅籠――それは無論可成り立派な家であつた――に三日程お糸も泊つて、夫に連れられて、國への土産物を買ひ旁々、京の見物をざつと濟ました後、或朝早く、夜の引き明け頃に宿を立つた。二人の樂しい新夫婦は、晝ごろに逢坂山の峠にさしかゝつた。これは人も知る如く、山城と近江との國境になつてゐる山々の一つにある峠で、お糸の生れて而して育つた村から見える山であ

る。

山の中の秋は、平野から思ふと、驚かれる程深かつた。滿目の山々は黄色く痩せて、落葉が足の下にかさ／＼と鳴つた。旅するには誠によい時であつた。殊に二人にとつては、これ程樂しい旅はない筈であつた。何となら、お糸にとつては、これが長い間の思を遂げる旅の門出でなければならない。而して又かの江州の金持の息子にとつては、これが京の島原の五本の指に數へられた、美しい女人を、自分一人の嫁に貰つて、それを連れてわが國へと歸る旅の道中である。

それだのに、二人は何となくこの二三日の浮々した調子に引きかへて、澁り勝に、とぼ／＼と歩くのであつた。言葉少なく、それどころか、二人はともするとそつと溜息さへ洩らすのであつた。空は晴れ、風はなく、山路は沁み込むやうに靜かだつた。その時、ふと、峠の中程に來た時、夫なる江州の金持は立ち止つて、堅く何事をか決心した樣に、お糸の手を取つた。そして、小さな併し底力のある聲で、

「お糸！」と言つた。

お糸はその時はツとして、何か非常な事が起る前兆ででもあるかのやうに思つて、驚いて立ち止つた。而して取られたまゝの手を放さうともせずに、ぢつと窺ふ樣に男の顏を見上げた。

「まあ」と言つて、相手は唾を呑み込むやうな風で、「歩きながら話をしよう」斯う言つて、彼は靜かに落葉を踏みながら歩いた、そして言葉をつゞけた。

「お糸！……」そして長い間言葉が切れてから、「お糸！お前は不思議な緣で、斯うして俺と夫婦にはなつたけれど……お糸！　お前は本當にこの先長く飽きないで俺と連れ添うてくれるか？」

「まあ、どの樣な事かと思つたら、」とお糸は仲々驚きを輕くした風で、「勿體ない！　何の私が不服を言ひませう？」數多い人の中から『この人』と思つて夫としたあなたです。私はあなたとならばこの先どの樣な苦勞でもするつもりでございます。あなたこそ、どうぞいつ迄も私をお見捨て遊ばさぬやうに、くれ／＼もお願ひでございます。」

何を言ひ出されることかと、胸を轟かしたお糸は、この夫の言葉を聞いて、少しは胸を撫で下ろして、斯う言つたのであつた。

すると、夫なる金持の息子は、尚も言葉をつゞけて、「そんならお糸、假令へどんな事があつても、屹度愛想をつかさないで

ゐてくれるか？」と駄目を押す様に言つた。

お糸は又少し不安になつたが、「乾度、何の嘘などを申しませう？」

「私が、そんなら盗人でもか？」

「えゝ、もうこの上は、夫と定めたあなたですもの、盗人でも何でもかまひません。仕様がございません！」斯うお糸は答へたもの丶、何だか急に夫が恐ろしい身分の人の様に思はれて、着物の上まで胸の動悸が傳はるのを覚えた。

けれども、男は何も恐れる様な、恐ろしい身分の人らしくなく、その證據に、何とも言へぬ悲しげな顔をして、「お糸、そんなら言ふけどね、お糸……」と言ひにくさうに口ごもりながら、「お糸！　お前……お前、吃驚してはいけないよ。俺の家は金持だ。それは嘘ではない。これからそこへ行くのだから、行つて見れば分る事だ。また盗人でもない。それも嘘ではない。けれども貧乏人よりも、盗人よりも、もつと、もつと悪いものぢや。……お糸、私は……私は、お糸、私は新平民なのだ！……」

彼は漸くの思で胸の中に積り積つた雲霧を吹き拂つたといふ様に、斯う言つて立ち止つた。お糸もそれと共に、手を取られたまゝ立ち止つたが、驚くかと思ひの外、突然夫の胸に顔を當てゝ、さめ〴〵と泣き出した。泣きながら、その時、お糸は二年前に別れてから、忘れるともなく忘れてゐた、故郷の父母の事をはつきりと思ひ浮べた。子供の頃、自分の村から東寺の塔を眺め眺めした事や、始めてあの堀川の革屋の番頭が周旋人を連れてやつて來た時の事や、さては最後に父母と村はづれの石橋の上で、別れた時の有様など——それからそれと色々の思出が、古い言葉だが走馬燈のやうに、心の目に次々と浮んで來た。そして尚も夫の胸に顔を當てゝ、彼女はさめ〴〵と泣きつゞけた、相手の夫も、まるで力といふものが身體中から抜けて、なくなつてしまつたかの様に、默つてぼんやりと立ち止つたまゝであつた。二人の上には山の木の葉が降りかゝり、そこに聞えるものは、梢に鳴く小鳥の聲と、お糸の泣きじやくる聲だけであつた。

七　夫と頼む男も穢多

「お糸！」と暫くして、夫は稍々力を回復した様に、元氣を附けて言つた。「どうしてお前はそのやうに泣くのだ？　お前は子供の時から、どんな悲しい目にあつても、泣いた事がないと當

ゝ言つてゐたではないか？　それをそのやうに泣く所を見ると、やつぱり俺が厭になつたのか？　俺の樣な斯ういふ卑しい身分の者と緣を結んだのが情ないのか？　お糸、默つて泣いてゐるばかりでは分らない。それをはつきりと言つてくれ。俺も男だ。お前がそれ程厭なのなら、すつぱりとあきらめて、このまゝ淸く別れてもよい！」

この時、始めてお糸は夫の胸から離れて、しかし尙泣きながら、顏に袂を當てたまゝ、斯う言つたのである。

「私はあなたの仰るやうな、そんな事が悲しいのではございません。……今となつては私も申し上げます。私の家は京都の堀川ではなうて、實は京都から二里も離れた在所にあるのでございます。……」

そしてお糸は涙の目を上げて、遙かな日の下にある山城の國の、自分の生れた村と思はれるあたりを指さした。そして彼女は尙泣きじやくる聲と共に言つた。

「聞いて下さい！……この世の中に親ほど有難いものはありません。實は私は今から二年前に、どうぞ自分たちの息のある間は家にゐてくれと泣いて賴んだ、たより少い兩親を振り捨てゝ、家を出たものですが……

「聞いて下さい……私の樣な不孝な娘をも、親は村はづれ迄送つて來てくれまして、お前の不孝をする心根を察して、いぢらしい氣がする。決してわし等はお前の爲に惡いようにと祈りはしない。どうぞ出世してくれ、蔭ながら祈つてゐるぞ！』斯う言つて、然しその代り一旦自分の家を出た上は、どんな事があつても身分を明すな、と申し渡されました。けれども私は今、この恩愛深い父の戒めを破らねばなりません。あなた！　私も……私も……實はその同じ穢多なのです！

「私が始めて京都に行きたいと申しました時、母は老いの目に涙を流して、『身にかなはぬ望を起すものではない』と止めました。『わし等二人の目の玉の黑いうちだけは、どうぞ賴むから、わし等と一緒にゐてくれ』と、父は自分の子に頭を下げて申しました。年寄つた親々に、それ程までに悲しい思をさせて、私は唯一心不亂に普通の人間にならうと思つたのです。そして親はまたその不孝な子の願の叶ふやうにと、蔭で祈つてもくれましたであらうに……。あなた！　母の言つた通りこれも皆『運の廻り合せ』です。仕方がございません。これも皆、先の世からの約束事でせう……お父さん！　お母さん！……」

斯う言つて、お糸は始ど生れて始めての涙を流しながら、山一つ越えたらもう見られない、山城の國なる自分の生れて而して育つた村と思へるあたりに向つて、いつ止む時もないと言ふ樣に、さめざめと泣きつゞけた。それを聞きつゝ、近江の金持の穢多の息子も、慰める言葉なく、亦さめざめと泣きつゞけた。

（終）

文藝漫語

■現代文壇の耆宿、永井荷風氏は、先年、大久保なる親譲りの宏邸を、些の未練氣もなく賣飛ばして、今では二千四百圓で買取つた、築地代地河岸の僑居に、悠々自適の風流生活を營んで御座る■此の家はもと待合だつたとかで、何から何まで小じんまりと完備して居て、所謂完全なる形式美の中にデカダンの詩境を開拓しようと云ふ、氏の粹文學には持つて來いの場所柄である、殊に其の周圍は一體に藝者家町の事とて、氏の深刻なる文明批評の對象として、亦頗る妙と謂はねばならぬ■荷風氏は此の僑居に在つて、婆やさんを相手に獨り佗しく暮して居るが、自儘氣儘の氏の事とて朝も存外遲く、午前中の大抵の用事は、枕頭にしつらへたる電鈴を押して辨じると云つた有樣■當今では朝、眼を醒ますと、先づ床の中で五六の新聞に目を透し、それから衣服を着換へて、春陽堂から屆けて來る『荷風全集』の校正を看、やがて朝飯とも晝飯ともつかぬ食事を濟まして、清元のお稽古に出懸けるのが、其の日其の日の日課だと云ふ■先年、布川靜淵と云ふ男に、獨逸書の飜譯嫌疑か何かで、小つぴどく其の罪狀を糺彈された、法學博士の松崎藏之助氏は、その後猛烈な神經衰弱に罹り、啻に著作の出來なくなつた許りか、今では凡ての記憶を喪つて仕舞ふ程の重症に陷つたので、博士の知友は同氏の爲に大いに心配して居る相だ■デモクラ屋の一人として昨今噂さに上つて居る室伏高信氏は、又同時に尾崎愕堂の附馬としても知られて居るが、此人存外の新らしがり屋と見えて、最近生れた女の子に、中世紀の模範的女性の名を採つて、「クララ」と命名した、所が此の屆を受附けた役場の戶籍吏、人の好ささうな顔を突き出して、「一體、これはラの字が一つ多くありませんか？」■「夢の世界」の六月號に、田中鼎一と云ふ匿名で、『五十萬圓の筆禍事件』と題する記事を書いたのは、堺枯川氏のいたづらだと云ふ噂だが、事實は知らぬ、材料はもとより賣文社側から漏れたものであらうが、それにしても福田徳三博士を槍玉に上げたあたりは、いくら覆面とは云ひ乍ら、堺氏の藥籠としては少し藥が利き過ぎてるやうでもある■匿名と云へば「朝日新聞」で、いの一番に「伯林入り」を試みた鐵血生と云ふ匿名氏は、戰爭中瑞西にごろごろしてゐた、社會主義者の守田有秋氏な相だ、隣接の地であるとは云へ、兎に角「フランクフルタア・ツアイトウング」の社長を介して、日本文の通信を托した功績だけは認めざあるまい■然かし乍ら「朝日新聞」で、此の鐵血生の守田有秋氏より、更にヨリ偉大なる殊勳を建てたのは、和蘭の邊陲を獵つてゐた特派員の鈴木文四郎氏であらう、カイザアとのインタアヴヰウは果さなかつたが、獨逸皇太子の手輪を獲たのはお手柄であつた、從つて社内でも鈴木特派員の殊勳は、皆から羨やましがられてゐるとの事である■淺草の地廻りで小說家と戯曲家とを兼ねた久保田万太郎氏は、今回新派俳優喜多村緑郎氏夫妻の媒酌で、親友大庭惣太郎氏の義妹と名稱る、京子さんと云ふ娘と結婚したが、一說には此の京子さんと云ふのは、淺草公園で鳴らした藝者梅香の妹分に當る、同じく藝妓の今龍だと云ふ噂も行はれて居る■所で此の大場惣太郎氏と云ふのが、又、文壇には久保田氏程知られて居ないが、然かし或る意味に於ては忘れられてならない經歷を有つた人だと云ふ、それは何故かと云ふに、大場氏は嘗て岡田八千代女史の意中の人だつたからである。八千代女史が嘗て伊達蟲子と名稱つた頃、大場氏と能く方々遊び歩いたもので、其の度毎に岡田三郎助氏は蒼い顔をして、池の端邊りに自棄酒を飲みに出懸けたものな相だ■過般、片上伸、前田晁、生方敏郎、白石實三氏等が、熱海の別墅に坪内逍遙博士を訪問し、旅の一夜を同地の或る宿屋に過ごした、何でも其の晩は旅の鬱さ晴らしに散々無駄話をやつて遲く床に就いたが、翌朝起きて見ると、其中の一人の床だけが馬鹿に取亂してあつて、お剩けに薄汚い六尺褌が床から閾際まで引摺られてゐる、誰彼と詮議をしてみたら、それは大正の綠面と云はれた生方貪郎イヤ敏郎氏のであつたゲナ。



へんな原稿

(戰ひにゆく前)

武者小路實篤

一

私は今度戰爭にゆく、戰爭にゆきたくつてゆくのではないことは誰も知つてゐる。何の爲にゆくかは誰も知らない。或國の內亂(?)を靜めにゆくのか。ある思想の傳染を防止しにゆくのかそれは知らない。ともかく、ゆくことになつた。あたしは生きて歸るつもりでゐる。しかし死ぬかも知れない。それで私はこんなものをかいて見ることにした。お暇の時よんで見てほしい。私は今少し頭がわるい。しかし今かゝないともうかく時はないかも知れない。私はどうせこの世に自分の名をほりつけておくことは出來ない人間だらう。だがともかく何かかいておきたい。この心理は人間ならわかるわけだ。

二

私は自分の死のことを考へる。

ともかく今死んではたまらない。しかし死はいつでもくる權利をもつてゐる。人はそれをこばむことは出來ない。

死神、そんなものがゐるかゐないか知らない。いや、居ないにきまつてゐる。だが死を死神がつかさどつてゐると假りにする。死神はいつでも訪れたい人を訪れる。

「今晩は」

「誰だ」

「私で御座い」

かう云つて死に神はのこ〳〵入つてくる。もう助からない。

死ぬと云ふことはなんだ。

死ぬと云ふことはもう死なゝいでいゝことだ。鐵砲の丸よ、俺をよけて通れ、大砲の丸のかけらよ、俺をよけて通れ、敵よ、俺をよけて通れ。俺は死にたくないものだ。

なぜ死にたくないのだ。

まだ生きたことがないからだ。本當に生きたことがなくつて死ぬのは不合理だ。

本當に生きたら、本當に死んでやる。俺は本當に生きて見たいのだ。

「君は生きて見たくないか」

「同感」

「死にたくはないだらう」

「同感」

「一つ平和にくらさうぢやないか」
「同感」
「だが自分は戰爭にゆかねばならぬ」
「同感」

三

「わが愛する女よ」
「君に愛する女がゐるのか」
「まあ默つてゐてくれ玉へ。世界は廣い、何處かにゐる」
「まだ見つからないのか」
「わが愛する女よ、早く出て來い。そして俺が死んだら泣いてくれ」
「あはゝ」
「俺が生きてゐたら迎ひに來てくれ」
「戰場には烟草と菓子を送れ。あはゝ」

四

「俺の內の偉大なるものよ。この瞬間にことごとくあらはれよ。この筆によつて。」
「待つた。雛の牝よ。明日はお前をひねりつぶす。今晩の內に一生の卵をうんでしまへ」

五

「せつかちな主人よ。私は一日に一つの卵がうめない。私は死ぬまでにこの世に六百六十六卵をうみたい。だからそれまで生かしておいてくれ」

「蟲のいゝことを云ふな」

「どつちがあなたの爲になる」

「そんなことを考へては戰爭は出來ぬわ」

六

「ともかく俺は日本に生れた、一兵卒で死ぬのには少し惜しい人間だと自分では思つてゐる。如何」

「惜しくはないね」

「私は今、日本にとつて最大名譽な發明をしつゝあるものだ。もう三年」

「誰もあてにはしない」

「俺は生きて歸るぞ」

「生きて歸れ。誰も生きて歸るに不服はない。するだけのことをしさへすれば」

「死んで歸れば誰か不服云つてくれるか」

「死んで歸れば幽靈だ。皆怖がるだけだ。不服云ふものはありはしない」

「勿體ないと思ふものはないな」

「勿論」

七

「俺は生きて歸りたいよ」
「無理はない」
「本當にさう思つてくれるか」
「一寸さう思ふだけだ」

八

「自分に兩親のないことは仕合せだ」。
兄弟がたつた一人で、
その兄は俺を愛してゐないことも仕合せだ。
天下で俺の死ぬことを心配してゐるのは俺一人だ。だから俺はなほ心配する」
「御勝手に」

九

孔子の奴は、天、我を殺さずと云つたさうだ。俺はまだそんなことは云へない。第一そんなことを本氣で云ふ奴の氣持もわからない。

しかしさう云ふ確信が本當につかめれば大したものだ。

十

俺は死んでも天道是か非かとは云はない。
人間は馬鹿だなーと思ふだけだ。

十一

ともかく俺のやうな有望な人間はこの世にさう滅多にゐるものではない。日本には人物が少なすぎる。人間は少し多すぎるやうだが、
俺の身がはりにたつ奴はないか。人類の爲に。ないな。怒るな、怒るな今のは冗談だ。
君達も偉い、偉い。

十二

之は內證だが俺はもつと偉いだけだ。

十三

「こんなことをかいて何にゝなるか」
「かゝないで何にゝなる」

「かいても始まらない」
「かゝないでも始まらない。だがもつと有益なことをかくか」

十四

「ね君。俺は死なゝいものだよ」
「なぜ」
「だと、いゝと云ふのだ。僕は國家の爲、同胞の爲め、人道の爲め、眞理の爲め、平和の爲め、戰爭にゆくのなら、俺だつてもつと勇敢なのだ」

十五

俺は彼女の爲ならよろこんで戰ふよ。しかし彼女もゐないのだから仕方がない。居たら俺が戰爭にゆくのをよろこぶか。

十六

俺を臆病ものと云ふものよ。
もつと〳〵人道の爲め、眞理のため、正義のため、世界同胞の爲の戰爭を始めろ、さうすれば俺もゆくぞ、威張つて、
「兄弟行かう、行かう。之も人間の爲だ。」

その時は鐵砲も輕いぞ。いゝ戰爭をしないで、臆病もの呼ばはりは少し虫がいゝ。ねー、君、
「同感だらう」
「同感」

十七

「行かなければならなければ行くさ」
「死なゝければならなければ死ぬさ」
「しかしよろこんでとはゆかない。よろこばないのは損だが、よろこべないだけが人間たる處だからね」

十八

「俺を命令するものは俺よりも賢い人間であれよ。俺の生命をあづかるものは、俺よりも俺の生命を大事にするものであれよ」

十九

[illegible]死ぬ時は本當の神の命令でないと困るね」

二十

トラ、、、。どうでも勝手にしろ。
俺が生きて歸らねば損するのはお前さんだ。
俺ではない。
俺は死ねば同じことだ。
ね、同じことだ。
よろこんで死ねるのが、よろこんで死ねないだけだ。
隨分ちがうかね。
トラ、、、。どうでも勝手にしろ。

二十一

生れたら、生れたゞけのことをしてゆきたいのが本當ではないか。その本當のことが出來ないのは、
殘念なことではないか。
「殘念」

二十二

「死なゝければいゝぢやないか」

死なゝければいゝさ。しかし死なゝいつもりで戰爭にゆく人間は、利口かね。死なゝいために戰爭にゆく？」

「それなら君は死にゝゆくのかい。戰爭は死ぬ爲にゆくものではないよ」

「そんなら生きる爲にか」

「さうぢやない。御國の爲だ。異敵のあなどりを受けないためだ」

「さうだつたな。しかしその爲には生きるのか、死ぬのか。御國の爲なら、俺は自分のもつてゐる一番貴いものを生かす爲に、生きてゐる必要がある。さうぢやないか」

「知らぬが佛」

二十三

「ある人があることを發明しかけて戰爭に行つてゐる内に、他の人が同じ發明をしてしまつた　さうだね」

「どつちでも人類にとつては同じことだ」

「しかし當人には隨分ちがうよ」

二十四

「この世に生れたと云ふことは下らぬことか、この世の爲に働くと云ふことは下らぬことか。正しいと云ふことは下らぬことか。自分を生かすと云ふことは下らぬことか。自分の確信のもとに生きる、自分

のよしと思ふことをする、皆下らぬことか。それならば俺は無意味な外交的戰爭に加はつて、善良な人間をもうち殺し、かう云ふ、下らぬ人生から消えうせろ。そして自分の殺される時、ありがたう、之で下らぬ人生からのがれることが出來る。しかし俺の内にある生命はさうは云はないのだ。自分の信ずるやうに生かしてくれ、生かしてくれと云ふのだ。俺の死の恐怖は生にしがみつかうとするのだ。俺は生てゐたいのだ。無理はないだらう」

「無理はない」

「同感だらう」

「同感」

二十五

戰爭をすると段々殺伐になり、殘酷に人間を殺すのが平氣になる。殘酷さは段々ましてゆくものと聞いてゐる。困るのは殺される方だ。殺されるのに段々馴れてしまいには殘酷に殺されることに快感を感じることが出來ないのが心のこりだ。

「君は何人人を殺した」

「八人」

「君は何度殺された」

「八度」

二十六

自分は小供の時、遊就館にゆくのがこわかつた。其處には臺灣征伐の畫があつた。それを見るのがこわかつた。其處には又いろ〳〵の無氣味な武器があつた。それで殺される人のことを思ふとたまらなかつた。

自分は小供の時、七つ八つの時、十五六の漁師の子供が喧嘩して、モリで太股をつかれてヒーヒー泣いてゐるのを見てぞつとしたことがあつた。モリが肉に喰ひこんでとらうと思つてもとれない、もぎ取らうとする度に、何とも云へない聲を出す。血がそこから流れ出てゐる。正視するに耐えない。遊就館の武器にはもつともつと恐ろしいのがあつた。野獸を殺すのにも慘酷すぎる。だから人間を殺すのに用ゆる。殺されるのに用ひられるものはたまらない。

二十七

戰爭に行つて、その國の政治よりも、もつと立派な政治を行ひ、もつと人間の心の美しさを發揮する。そんなことの出來るものは帝王の素質のあるもの。しかしさう云ふことの出來るものは至つて稀だ。

二十八

自分の國の人間でも機會が許せば人は慘酷に殺すことの出來るものだ、まして他國人、敵には用捨はない。用捨すれば損すると思つてゐる。

損とは何ぞや、
百人生きても一錢損したことを損したと云ふ。
得とは何ぞや、
百人死んでも一坪の土地を得る、之得したと云ふ。

二十九

盗賊の曰く
「俺はお前の家に入る爲には百日の苦心をし、指にこれだけの傷をした。俺はそれだけの報酬を得なければならない」
「それは御尤だがもう少し報酬をまけてくれ」

三十

巡査を一年やとうよりは、盗賊に一年に一度見舞はれた方がやすあがりだ。
かくて巡査の月給はへらされる。

三十一

話はそれても、時間はたつ。
自分が日本を去るに望んでいゝたいことは、人々よ賢くなれと云ふことだ。

損をしたくないのはいゝが、一錢おしんで百圓を失なうなと云ふのだ。蝦で鯛をつるのはいゝが、鯛で蝦をつるなと云ふのだ。人間で金を釣るなと云ふのだ。人間が主人だぞ。今の世の中では金が主人かも知れないが、それはまちがつてゐる。第二の王政復興が必要だ。それは人間が主になり、金が臣下になることだ。

精神で物質を釣るなよ。元を忘れるなよ。元を忘れぬ贅澤は美でありうるが、元を忘れた贅澤は精神をにごらす贅肉だ。

自己の精神をとぢこめる籠を黄金でつくるものよ。お前は馬鹿だ。

三十二

器械は器械だ、人間ではない。

人間は人間だ、器械ではない。

器械はたかい。人間はやすい。

人間は簡單に生れる。器械は容易に出來ない。

人間は動力が少量だ。器械は動力が多い。

しかし人間は人間だぞ。器械ではない。

人間を尊敬せよ。器械は要するに器械ぢやないか。精神も、魂も、根性も持つてゐない。

それをもつてゐない所がいゝ所と云ふものよ。お前は罰あたりだ。お前こそ器械の奴隷に生れついたやすつぽい人間だ。

自分が器械の主人であるが故に、他人の器械の奴隷であることを冷靜に、得意に見てゐられるものがあれば、お前は思ひやりのない人間だぞ。革命をうむ產婆だぞ。

三十三

ともかく人間は目ざめて來た。人間が殺しあふ爲に使ふあらゆる精神と物質の半分を、人間を生かす爲につかつたら、人間の文明はどの位すゝむか知れない。それに氣がつき出して來た。本當にそれが氣がつけば、世の中はひつくり返るのだ。思想を恐れることはない。

一番本當の生活するものは、人間の傲りを感じる。更に下等に生活しやうと骨折るものが出ても、それは恐れる必要はない。

三十四

一番いゝ人間がよろこべる世界一番いゝ世界だ。泥棒や人殺しや、成金のよろこべる世界は一番よくない世界だ。

「戰爭がすんだら困る。いや困らない物價は當分さがるまい」そんなことを云つてゐる人間が威張つてゐる世界はいゝ世界でせうか。

「戰爭で同胞が苦しんでゐる。早く戰爭をやめて樂させたい」。そんなことを考へる政治家を僞善者ときめこんで笑つてすませるより他仕方がない世界はいゝ世界でせうか。惡い世界と思ふ人は手をあげなさい。

諸君は若いから手をあげるのです。年とると手をあげたことを忘れますよ。注意なさい。

三十五

思想を恐れるものは自分の不正を示す。

より光の弱いものはあたりを照すわけにはゆかぬ。より温くないものはあたりをあたゝめるわけにはゆかぬ。

思想を恐れない爲には自分を一番、正しくし、そして賢くせよ。あたりの思想は反對に影響を受けても、影響しては來ない。

三十六

誰が最も賣國奴だ。

それは國民をして國を愛することが出來ないやうに國をキタナクするものだ。

三十七

秀吉が朝鮮征伐、征伐はおかしい、朝鮮侵略の時に、慘酷なことゝ不德なことをしたのが、朝鮮を併合した今、一番わざわいしてゐると聞いた。あの時、日本人の美しい處を發揮しつくしたら朝鮮人は日本人のいゝ處を知つて好意をもつたらう。しかしいゝ處許りを發揮して戰爭は出來るか知らん。

人間の美しい處、貴い處、愛を生かして戰爭は出來るものか知らん。

考へるだけが馬鹿氣てゐるのかも知れないが、そんな戰爭が出來るものゝ氣になつてゐる人が多いので、ついそんな氣が傳染してくる。

三十八

人間は實に一寸した處で卑しくもなり、貴くもなる。實に一寸した處で。

戰爭をするのでも實に一寸した處で戰爭をする。自分は戰爭のこと許りを書かうとは思つてゐないのだが。

人間は愛しながら憎み、憎みながら愛したがつてゐる。右手をふり上げながら左手をさし出してゐる。

「俺の名譽を傷つけないでくれ、さうすれば仲よしになつてやる。」

たゞ慾の深い人間だけ、人間らしさを慾に賣つてしまう。

右の手をふり上げて、左の手で何かぬすめるものはぬすもうとする、いや他人をけしかけて喧嘩さしておいて自分はぬすむことを專門にする。他人同士仲のいゝのを喜ばない。人間の弱點を利用して得をしやうとする。さう云ふ人間の慾の爲に俺の一命をすてるには俺の一命は少し貴すぎる。

三十九

俺だつて人間の死ぬものだと云ふことは知つてゐる。たゞ生きてゐる間、出來るだけ貴く生きて、死ぬ時は出來るだけ滿足して死にたいと思ふだけだ。

貴く生きることを邪魔し、滿足して死ぬ事を許さない國家は人心をつなぎとめることの出來ない國家

だ。

用心しろ！

四十

悪いことをするものは金をやつて自分のわるいことを知つてゐるものに口どめをする。或はおどしつけて口どめをする。しかし自分の悪いと云ふことを知つてしまつた者の知つたことをうちけすことは出來ない。其處がこわい處だ。

早く白狀して悪い處はなほす方がいゝ。後悔したものを追窮するもの程、世にいやなものはない。もうとり消すことの出來ない過去のことを執念深かくせめるもの程、にくむべきものはない。

「悪いことをした」

「なぜそんな悪いことをした」

「わるかつた」

「悪るいことを知つてゐてなぜそんなことをした」

「許してくれ」

「なぜそんなことをした」

「もうしないやうに注意する」

「なぜそんなことをしてくれた」

「糞喰へ」

四十一

鼠をおいつめて、鼠が逃げ道がないので死にもの狂ひで猫にとびかゝつた、猫は生意氣だと云つて怒つたとする。

怒つた猫が是か、とびかゝつた鼠が非か。兩方是か。

いや怒つた猫が憎らしい。それは慘酷と云ふものだ。

世の中に罪を犯させるやうにぬけ目なく注意して、他に出處がないやうにして、罪を犯したと云つて責める人がある。責めるものが慘酷だ。

今の世は正しいことをすることを出來ないやうに人民どもをおいこんでしまつてゐる。正しいことをのぞむ人民はつい、猫にとびかゝる。

爲政者よ、注意をしろよ。

窮鼠がいつのまにか窮虎にならないとは限らないのだ。

四十二

生きる道を先づあたへて、
しかるのちおもむろにせめよ。
だが狡猾さを其處に出されてはたまらない。
其處にはたゞ正義と、神意を知る堅さとを顯はせよ。

四十三

俺は正直に云ふ。

俺は人類に向つての遺言を書きたいと思つてゐる。

だがまだ實力が足りないので困つてゐる。

六十迄生かしてくれ、七十迄、八十迄、九十迄、九十迄生きたら俺は神の如き人間になれさうな氣がする。

四十四

人類よ、もつと人類のことを自覺せよ。

つまらぬことで生命(いのち)のやりとりはいらぬもの。もつと相互に調和出來ないものか、お互が自己を生かし切ることによつて世界を一つの大音樂にせよ、すべての音を、よろこびをもて生かして、しかも全體を人類を讃美する曲たらしめよ。

人類を悲劇から遠ざからしめよ。そして最も深き讃美の合奏たらしめよ。

四十五

經濟とは人間と物質との關係、人は經濟のみにて生きるべからず。經濟はその分を守れ、なるべく賢く守れ！　それ以下のことについて人類の律法の光りを何處までもしみ込ませよ。しかしそれ以上のこ

とに經濟に口をひらかしめるな。

人間を經濟問題だけで解決しやうとするのは人間を侮辱したものだ。又經濟の關係だけで、人類の歴史をある處まで領解することが出來るのは人類がまだ十分に進步してゐないことを示す。

人間はカイザルのもの以上だ。又パン以上のものだ。卽ち經濟以上のものだ。

四十六

經濟以上に多くの人間が出られないのは、人間がまだ人間になり切れないからだ。人間社會がまだ人間社會になり切れないからだ。精神が生き切る餘裕がないからだ。

經濟許りに人間が支配されてゐる間、我は人間として生きることを恥ぢる。

それ以上の力をまるで知らないもの、お前は人間か。

四十七

しかし人間にパンが必要なやうに經濟も必要だ。必要すぎる、この小さい世界に多くの人間、それも中々狡猾な、安逸と快樂をほつする人間の多い間。兄弟のパンを平氣でとり上げられる人間のゐる間なほ。

だが經濟だけで人間のすべてを解決しやうとするものは人間を侮辱したものだ。

文明をして經濟問題以上に高くのぼらしめよ。各人をしてパンの問題を忘れさせよ。其處までゆかなければ、噓だ。噓だ。

四十八

夜はふけて來た。
人々は今、何をしてゐる。安眠してゐるものには、お目出度う。
苦しんでゐる人には。安樂になるやうに。
戀人のことを考へてゐる人には、幸福を。
あそんでゐるものには。あそべ。
深いことを考へてゐるものには。祝福を。
戰ひにゆくものには。生きて歸れ。
生れるものには。幸あれ。
死んでゆくものには。おゝ平和あれ。

四十九

夜はふけてゆく、
人々よ。清ふねむれ、
幸福を夢みよ。
俺の心の内にある寶よ、
あふれ出でよ。

五十

夜はふけてゆく、
安眠出來るものは仕合せだ。
俺は安眠する暇もない。ひそかに死の用意をしてをかねばならぬ。人はいつ死ぬかわからぬもの。だが戰爭にゆかずにすむものよ。
俺はお前が羨やましい。人類の文明に役立たしめ戰爭に出ることを俺は名譽とは思へぬものだ。思へぬことを恥とは思はぬ。むしろ人間らしいことゝ思ふ。
おゝ戰爭にゆかねことを人間として恥ぢねばならぬ戰爭。さう云ふ戰爭(があらば)にゆくものは仕合せだ。總身に勇氣がみなぎるだらうから。

五十一

經濟以上の戰爭、資本家の利益以上の戰爭、人間が人間たる爲の戰爭。さう云ふ戰爭があれば、自分は戰爭をする以上の人間ではあるが、人間に生れた義務としてもう少しは勇んで戰爭にゆくだらう。少くも戰爭にゆくことを甘じるやうに骨折るだらう。

五十二

戰爭の話はやめやう。しかし今の樣子では戰爭は當分人間世界から消えうせてはゆかぬ。

ともかく利己心の戰爭、戰爭をして得をしやうとするものは愚か人だ。戰爭をすれば、する程、人々は戰爭を嫌ひ、戰爭の起る元因に疑ひをはさみ、社會の不合理を辛棒したくなくなる。人命が輕くなり、平和を亂すことがなんでもなくなるに從つて、人々が殺伐になるに從つて、戰爭で得したものは國民の憎惡を心のうちに受けなければならない。

國民の憎惡に適する力は眞理によるものより他に與へられてはゐない。いかに圖々しいものも國民の憎惡には敵することは出來ない。國民の憎惡には敵することは出來ない。國民の憎惡に敵しないものは國民に媚びねばならない。

日淸戰爭、日露戰爭は國民の方を先づさわがせて、政府は仕方がなしに國民の意志に從つたやうな顔して、まだ進歩しない國民の心に媚びた。今度のは國民が夢中になれない内にまだ機が熟さない内に、始めた。だから國民は冷淡だ。段々國民は戰爭に夢中にはなれなくなる。日本に外國人が攻め込めば別だが。

おいゝ、自國に外國人がせめ込むことは考へてもぞつとする。從つて他國にせめ込むのはいゝこととは思へない。他國にせめ込んでおいて、厚意をもたれやうとするのは蟲がいゝ。

五十三

人間は早く戰爭より超越しなければならない。戰爭は人間のまだ十分に發達してゐないことを示す。

五十四

我々は人類の歴史が、我々の時代に於て一大變化することを豫知してゐる。人類はやつと御成人になつた。こゝで一奮發されることを信じる。

四海同胞、

兄弟は手をたづさへ、お互に讃美すべきものを讃美すべき時が來た。兄弟同士毛嫌ひするな。人間の内にはへんなものがゐる。黨派心だ。

角力で云ふと、「東」が好きだと「西」が嫌ひになる。獨逸が好きだと英國が嫌ひになり、英國が好きになると獨逸が嫌ひになる。けちな根性だ。遊びならそれも面白い。しかしそれで眞理をまげたり、事實をまげたり、美點を認めないやうにしたりするのは氣がよわい。

どつちにも人類に大事な美點をもつてゐる。その美點を日本はまだ本當には生かしてゐない。美點はあるのだ。日本人は健全で、平和を愛し、正しきものに從ふ心をもち、我執がなく、俠氣があり、善良さがある。そして中々頭がよく働き、賢い。本氣さもあり、自由で、とらはれた處がない。外國人にさう云つたらおどろくだらう。日本人はまだ日本人のいゝ處を世界的には生かし切つてゐない。浮世繪や、藝者や、軍人で日本を代表されるのは少し閉口だ。

五十五

日本人に必要なものは根氣さと、大きさと、深さと、重さだ。

五十六

自分はもう五十年生きてゐたい。すれば日本人にお目にかゝることが出來るだらう。
自分もその一人になりたい。
俺を見ろ、俺は日本人だ。どうだ矢張り大した人間、本當の人間、人類になくて叶はぬ一方の代表者であらうがな。

五十七

人間は如何に生くべきか。
人間は如何にして死にうちかつか。
如何にして不幸な人間を幸福にすることが出來るか。
資本家と勞働者の垣を如何にとるべきか、
外國人同士如何にして兄弟となりうるか。
人心の利慾と憎惡をあほらずに、社會の不正を如何になほすべきか。
何ものも恐れない正しさの上に立つにはどうしたらいゝか。
それを何處までも考へる時間がほしい。
ともかく人間のうちには他人の幸福よりも、不幸をよろこぶ本能がある。他人を賞めるよりも惡口を云ふことをよろこぶ本能がある。感謝の種をまくよりは憎惡の種をまくことをよろこぶ本能がある。

他人の悪を誇張しないとおさまらない本能もある。随分世の中にはおつちよこちよいと、胸がわるくなる人間がゐる。殊に金があつて、自分の悪趣味を何處迄も出す餘裕のあるものには、鼻つまみが多い。しかし知れたものだ。何か生意氣なことや、強がりや、威張りを云つた處が知れたものだ。悪魔までに誇張して考へるものは勿體ない。もつと下らぬ、もつと簡單な、もつとお人よしだ。

社會が要求すればどんなにでもかはる。あまり誇張して考へないがいゝ。しかし意氣地がなく、どつちにでもかわれる人間だけに反つて始末のわるいこともある。

社會の空氣、社會の要求、それを正しくすることが必要だ。

五十八

だから悪趣味の流行、悪藝術は善人の嫌はれる處だ。悪思想も恐ろしい。それに勝つたのは正しきものを、ちやんと存在させるより仕方がない。人は生々しないと、つい悪趣味で自分をつついて瞬間に生きてよろこぶ。退屈な時は碌なことは考へない。生々して働くものには悪趣味はよりつかない。

悪趣味は閑人から生れる。いゝ閑人はいゝ趣味のものをうむ。しかし生々した働き人の愛するものは生々した燃えた、正義のうちをつらぬいてゐるもの許りだ。

「矢でも鐵砲でも來い、俺はゆく處にはゆく、ゆかない處にはゆかない。」

「だが戰爭にはゆくのだらう」

「行くよ、すべてのことは死んでは出來ない。戰爭にゆかない爲に死ぬ、俺の生命はもう少し貴い、戰爭に行つて死ぬ、おゝ俺の生命は遙かに貴い。だが死ぬときまつてはゐない。俺は生きて歸るつもりだ」

五十九

「死んでもいゝ俺はゆく、」そんな氣になれたら大したものだ。馬鹿な人間はすぐそんな氣になるかも知れない。だが俺位の人間にそんな氣を起させる仕事があつたら、その仕事は大した仕事だ。

俺は釋迦のことを子供だましの筆でかいたうすつぺらな本でよんだ時、次の文句に出あつた時は涙ぐんだ。今でもその時のことを忘れない。

手ぢかに本があるからぬきがきして見やう。

「佛さま、私はこれから暫くお暇を頂いて、ユルナの國へ敎へを傳へに行きたいと思ひます」

「さうか、それは結構だ、然し富樓那（フルナ）よ、ユルナの人々は亂暴で、罵つたり、惡口を云つたりするさうだよ、それでも行くのか」

「佛さま、彼の國の人々がどんなに罵りましても、惡口申しましても、私は這ふ思つて居ります、ユルナの人は賢いから口で罵つても手や石で打つことはあるまい、それに比ぶればまだ何でもありません」

「いや〳〵若し手や石で亂暴したらどうする」

「手や石で打たれましても、まだ刃や杖では殺しますまいと思ひます」

「富樓那よ、それでも刄や杖で殺しに來たらどうするか」

「いや佛さま、御心配下さいますな、私は決してユルナの人を怨みません、彼等はまだ私を殺すやうな

事は致しますまい」

「いよ／＼お前を殺した時にはどうするか」

「その時でも決して怨みません、私を教の犠牲として、彼の國の人がお浄土に導いてくれたと思ひます」

「お前はよく佛の道を心得てゐる、その覺悟なら行つて教へを說いて來い」

釋迦にかう云はれゝばフルナでなくも決心してユルナの國にゆくであらう。かく決心してゆける者は仕合だ。

それにくらべて俺達の行くのは何と云ふ見おめなことであらう。行きたくつて行くのではない、自分から云ひ出してゆくのではない。そして行くことを心配してくれるものはない。

「行け、いやでもゆけ、負傷するのが、なんだ、死ぬのがなんだ行け、行かぬとは云はさぬぞ、死ぬのがいやとは云はさぬぞ、それでも云ふなら云つて見ろ、たゞはおかないぞ。死ぬのがこわければゆけ」

俺の意志は何處に生きるのだ、何處にも生かされはしない。ゆくと云ふことに俺の意志は爪のあか程も認められない。それでも人間か。フルナよ、お前は仕合ものだ。教の爲に自ら進んでゆく、自分でゆく、それなのを釋迦のやうな人から至れり盡せりのいたはりをされてゆく。フルナよお前は仕合せものだ。

「それでもゆくのか」

「それでも參ります」

フルナよお前は自分の決心でゆく、自分の美しさと貴さを生かしてゆく、そしてそれを信じてもらつ

てゆく。

俺は自分の決心でなくゆく、しかも蟲けらのやうにあつかはれてゆく。

フルナよ。お前は仕合せものだ。

六十

この氣持のわからぬもの、お前は經濟學者、人間を侮辱するもの。

六十一

人間を侮辱するもの、汝から生るゝものは、人間を卑しくする。卑しくされて生きてゐるには俺は高貴な心の所有者、

俺は死んでもいゝ、自分の內の高貴なものを生かし切ることが出來れば、自分の內にある光が、かゞやき出ることが出來れば。

「すべてが金だ、すべてが境遇だ、すべてが社會だ。お前自身は浮草だ。」そんなことと云はれて、「本當だ。」なぞと思つてやる程、俺は自己のないものではない。

俺は俺であらしめよ。俺は俺の行爲の責任者、俺の行爲の主人、俺の思想の泉、俺の言葉の源。俺から出るものには俺の神經と息と血が通つてゐる。それをいくら無視されても、俺は俺だ、お前ではない。

俺の內から輝き出るものは、金、境遇、社會からぢやない。もつと人類の內をつらぬいてゐる精神からだ。

フルナよ。お前は仕合せものだ。
そして俺は佛陀の前に頭をさげ、よくあなたのやうな人がこの世にゐて下さいましたと感謝する。

六十二

俺は近代では、いくら背きかけても、矢張りトルストイが好きだ。あいつの良心と本氣さと心の動かし方には感動させられる。本當の正直な人間だ。
ある馬鹿經濟學者はトルストイの云つたことを根據のない寢言だと云つた。
恥ぢよ、恥ぢよ。そんなことを云ふのを恥ぢよ。お前はあまりに經濟學者かも知れないが、それだけ人間から遠ざかつたことに氣がつけ、そして赧然とせよ。それが出來なければ救はれない。人間の本心から出る言葉が、空だ。そんなことを云ふのは人間を侮辱したものだぞ。
トルストイは俺の恩師だ。俺を目ざましてくれた人間だ。その力は强く、世界の底をゆり動かしてゐる。暴動となつて顯はれるには深すぎる。肉眼では見へない、お前の目では見へない所で働いてゐる。

六十三

俺は誰でも眞心を本當に生かしたものゝ味方だ。眞心の味方だ。「俺のうしろには人類の眞心がちやんとひかへてゐる」。さう自覺をもつて云へる人間になりたい。
俺は發明もする。しかしそれは武器ぢやない。すべての人間を奴隷狀態から解放するのに少しでも役立つものだ。

何にを俺は發明しやうとしてゐる。それは今云ひたくない。ともかく俺は眞の人間がよろこんでくれることより他のことはしたくないものだ。

六十四

地平線以下の問題として經濟を研究してくれる人、俺はお前に感謝するぞ。
しかし地平線以上の問題になつたら、經濟の問題はなくつて、精神の問題だ。
今の世はまだ地平線以下にゐる。經濟が威張るのは仕方がないが、俺は地平線に頭をくつつけるだけでは滿足が出來ないのだ。地平線を足の裏でふんで自由に歩くことが出來るので人間だ。
人間が人間になり切らない爲に起るいろ〳〵の問題を解決するものとして經濟學者は分に安じろ。
人間の人間たる所を尊敬するのを忘れたる、お前は學にもつとも不忠實なものだ。
軍人はつい戰ひを好み、醫者はつい病人を好み、僧侶はつい人の死ぬのを待つ。世の中に貧乏人がなくなつたら經濟學者は任務を大半果したことになり、同時に威張れなくなる。學に忠實なるものよ、分を知れ。

六十五

俺はついわき道に入りたがる。
俺は經濟學者の惡口を云はうと思つて筆をとつたのではない。
俺はパンの問題の無視されないことをよろこぶものだ。しかし人間がパンだけで生きるものとつい思

ひたがる者を見ると、
人間侮辱者呼ばはりがしたくなる。
人類の内で、最も美しい、最も崇高な人間が、
「人はパンのみにて生きるべからず」と云つたのは本當だ。自分はあまり今の世界では人間が侮辱されすぎてゐると思ふものだ。
自分は人間を尊敬させたくつて筆をとつたのだが、今の空氣は人間を尊敬さす爲に胸一杯吸ひ込むと妙に勇氣を失なはす力をもつてゐる。人間を侮辱するバイキンが空氣に滿々してゐるやうな氣がする。
「さうは思はないか」
「さうも思はないね」

六十六

「人間は多すぎる。人間の生命はやすい。人間は亂造されてゐる。人間はどうせ死ぬものだ。人間は虫けらと同じだ。」
かう思つてゐる人に云ふ。
「それなら君はなんだ。殺されてもいゝか、ひどい目にあつてもいゝか、いやな目にあつてもいゝか。馬鹿ものゝ奴隷になつてもいゝか。自由を失なつてもいゝか。自己を殺してもいゝか。御無理御尤で、朝から晩まですごしてもいゝか。この唐變ボクー

六十七

俺は人間だ。だから人間を馬鹿にしてもらつては困る。兄弟を人間あつかいせざるものは自分の人間と人間の俺がよろこべるやうに兄弟をあつかつてくれ。

云ふことを忘却してゐるものだ。

お前は人間だぞ、人間を侮辱するものはお前自身を侮辱するものだ。人間を殺すものは自分を殺す特権を他人に與へるものだ。

自分が侮辱されることを嫌ふものは人間の侮辱されることを嫌はなければならない。そして自分の殺されることの嫌ひなものは人間を殺すことに反對しなければならない。

六十八

人間はどんなに殺してもいゝものだ。人間はどんなひどい目にあはせてもいゝものだ。人間はそれに苦情は云へないのだ。

さうなると人間が大へん安ぽくなり、人間に生れたことが、ごみために落つたやうになる。人間の生命を大事にした話、人間を大事にした話、そんな話をきくと實にうれしくなる。「君は嬉しくはならないか、なつたら少し人間を大事にすることを皆にたのもうぢやないか。一緒に」

六十九

この世界でラヂュムを見出すことは容易ではない。しかしこの世界にラヂュムはある。
人間の心のうちには貴いものを見出すことは實に困難かも知れない。
しかしそれだけ、貴いものにふれるのは嬉しい。似而非ものは閉口だが。

七十

釋迦や、耶蘇のやうな人は億萬人に一人もゐまい。だがゐた。嘗つて地上にゐた。我々はその心に今もふれられ、ふれるとついありがたくなる、どうしてこんなに美しい心の人がゐてくれたのだらうとたのもしくなる。

今でも人間が本氣になり、本當に人間の爲を考へ、その爲に一生を捧げたら、大したことは出來るのだ。たゞさう云ふ本氣な人が滅多に出ないだけだ。しかし時々は出る。しかし不純なものが入りたがる。不純なものが入つたら、そして不純なものが入ることに神經質でなくなつたら、その人は既に神の如き力を失なつたのだ。

惡行はすくわれる、悔ひ改めいゝから、しかし善行にかくれた惡心はなほ恐ろしい。それは魂をくさらすから。

七十一

俺は何をかいてゐるのだ。俺のかきたいものとちがうものをかいてゐる氣がする。
俺のかきたいものは何か。

俺も知らない。たゞ知つてゐるのは、人間を尊敬してくれ、人命を尊敬してくれ、人間に生れて來たことを恥かしくないことにしてくれ。人間を人間の奴隷にするのはよくないが、殊に器械の奴隷、慾心の奴隷、モンマンの奴隷にするのはいけない。

「私は人間だ、人間並にあつかつてくれ」

俺は人間のすべきことゝ自ら思ふことはする、しないのを恥ぢる。人間は食はなければならないものであり、着なければならないものであり、家に住まねばならぬものである。それ等は懐手をしてゐては出來ない。野の百合や、空とぶ鳥は、懐手をしてゐるかも知れぬ、鳥は巣をつくる時もあるが。しかし蟻や蜂と來ては人間以上にも働いてゐる。鳥は鳥、虫は虫、蟻は蟻で、人間は人間だ。

ともかく自分は懐手をしてのこ〳〵してゐたいと云ふのではない。人間は助けあつて生きなければならないことを知つてゐる。人間は働かなければならないことも知つてゐる。自分で人間の一人として自分のすべきことはよろこんでする。人間の爲に要求されゝば、そして自分でなければと云ふ仕事があればよろこんでする。傲りを厭じてする。いざと云ふ時には死んでもする。しかし二束三文にあつかわれて死ぬのはどう考へても自分をつくつたものにたいしてすまぬ。それも仕方がない時があるかも知れぬ。今その時であらうか。その時であらうか。少し考へてほしい。

七十二

ある仕事は自ら進んで行きたがるものにさせる、なるべく自發的にさせろ、そして人數が足りない時たのんで歩け、それでも駄目なら、かう云へ。

「すまないが、お氣の毒だが行つてくれ、くぢが君にあたつたのだから、人間の知慧できめたのではないから。」

七十三

我々は生殖力を失なつた勞働蜂ではない、勿論雄蜂でも、女王蜂でもない。我々は人間であつて、一々頭をもつてゐる。自分の意見、自分の意志、自分の希望をもつてゐる。それをあまり無視してもらいたくないのだ。

それをあまり無視すると、反動が起る、それは人間を侮辱したことになるから。

「人間、一人々々に頭があるのが不都合だ。」

「そんなことを云ふ人間に頭のあるのがなほ不都合だ」

「頭のない人間が出來たらなほ不都合だ」

七十四

ともかく我々をして自發的であらしめよ。

人間であらしめよ。我々を命令する能力のあるものは我々よりももつと人間である人に限らしめよ。その人の前には頭が上がり、その人の云ふこと、行ふことが一々合點がゆき、自分よりよく考へてゐると思ふ人でないと、中々自分の運命をたくすことが出來ないのが人間だ。

人間をつかうにムチ許りでする流義はもうすたれたのだ。甚だ殘念だが、天保錢になつたのだ。通用

し兼ねる時代が世界的に來たのだ。甚だ困る。私も順從な人間でありたいことは山々だ。そしてなんでも甘じて命ぜられた通り行ふのが一番正しく、一番名譽なことゝ思ひたいのは山々だ。だがそれがもう出來なくなつてゐるのだ。

お互に困りものだ「お互にどうにかしなければね」

七十五

不平家にはなりたくないが、頭をこつかれて許りも居たくない。

「蝸牛、角だせ、槍だせ、目玉だせ」

と云つて小供が蝸牛の目玉を出すとは突つく、あのやうに自己を出す度に突つかれてはたまらない。

七十六

人間が人間の手でつくられたら。カイゼルが人間の改良種をつくつたら。軍國主義に理想的な改良人間が出來るかも知れない。さう云ふ人間をつくられて、世界が征伏されたとしたら、人間は呪ふべき哉。人間に面白い處がなくなり、味もそつけもなくなり、軍服通りの人間が出來たら、そしてそれが武力をもつて世界を征伐したとしたら、人間に生れたことは何を意味する。

たまらない、たまらない。

その時は人間の滅亡する時だ。改良人間製造局、そんなものが出來たら、俺も燒打に出かけるぞ。呵々。

しかし笑ひ事ではない。似而非科學者の怪物の頭にはそんなことが實現されたらさぞよからうと思つてゐる頭もあるのだ。ロシャの何處かではもうそろ／＼手はじめをしたさうだ。しかしそう云ふ人間をつくるものよ。つくつた曉はお前はそれの奴隷にならねばならぬ。味も、そつけもない。器械のやうに冷酷で、命令者の命令の善惡は考へず、死ぬこと、殺すことは何とも思はず、云はれた通り、ちやん／＼と行ふ。

思つてもたまらぬ。

滋養分のエッキスを食つて、衣服をつくるのに便利の爲に長さも大さも均一にされた人間が、無表情な、無味干燥な、均一顏して、同じ恰好して歩いてゐる。男も女も。そしてその他の人間は出來るだけ排斥する。名前のかはりに番號がつく。

「おい、三萬三千六百六號君」

「なんだ、六萬六千三百三號君」

言葉も文切りがたで、冗談一つ云はない。

さう云ふ人間を見たら、俺は人間の爲に泣くことも、笑ふことも、怒ることも出來ずに、氣ぬけして、氣が遠くなつて、ぶつたほれるだらう。人間の今迄の結婚もよくない、金が巾をきかせすぎてゐる。之からはもつと戀が巾をきかせるであらう。

矢張りお互に自由意志で。其處にその人々の價値が顯はれる。

七十七

こんなことをかいてゐるけれど俺は何となく淋しい。

俺は日本を去つたら、もう日本に歸らぬかも知れぬ。そして言葉のわからぬ、殺氣だつた男になぶり殺しされるかも知れない。

知れないことを考へると切りがない。

ありうべきことを考へては切りがない。

その時最上に自己を生かせるだけの用意が出來てゐればいゝが、自分にはまだその用意は出來てゐない。自分はともかく自分の室を愛し、自分の机を愛し、靜かにものを考へながら、あの川岸を一人で歩くのを愛してゐる。堤にこしかけながら考へるともなく考へてゐるのが好きだ。其處へ子供が來、男や女が通る、皆日本人なのもなつかしい。皆善良さうで、ゆつくり歩いて居る。

俺のゐる町は人口五六萬の町だが、靜かな處だ。自分は平和を愛することでは誰にもまけぬ、そして一人になりたい時のよくある男だ。その俺が戰爭にゆく。思つても似合ない。嘘らしいことだが、本當だから仕方がない。

俺は今の世に戰爭がなくならないのは當然だと思ふ。今の人間では犧牲者を出すのは仕方がない。それが他人にあたつてゐた間呑氣にしてゐたのだから、自分にあたつても苦情は云へぬかも知れない。しかし前から不服は不服だつたのだ。人間を輕く見るのを得意にしてゐる氣がして仕方がないのだ。同じく戰爭をするのでも、もう少し人間を重く見てもいゝはづの氣がするのだ。それに戰爭するならなぜもつと堂々としないのだ。堂々と出來ないのならなぜ戰爭をするのだ。正義や人道の爲に日本人は戰爭をしないことを正直だと云つて誇りにしてゐる。それならばどう云ふ利益の爲に戰爭するのか。それを合

點がゆく迄說明してほしい。合點がゆけば俺もよろこんでゆく。合點のゆくものだけつれて行つたらどうなのだ。この世に生れて、一度死ぬともう生きられない人間の生命をあつかうのだ、合點がゆき、成佛の出來るものだけつれて行つたらいゝだらう。それで出來ないやうな戰爭ならしないがいゝのだ。ともかくもう少し頭をよくして、無理がない、まちがいのないことをしてほしいものだ。

しかしそんなことは求める方が無理かも知れない。それならせめて不服をもつことだけは許してほしい。其處が人間らしい。いゝ處なのだ。「わかつたかな」。

「わからぬ——」。

七十八

こんなことをかくと心細くなる。自分はこの世に心細くなりに來たのではない。

自分は少しでもすきまがあつたら自分を生かし切りたい人間だ。自分の笛を吹かうとするものだ。少しでも自由な時を與へよ。

自分の足跡をこの世にきざみこむ爲に。

七十九

人類よ、人類よ、お前は今、何を考へてゐるのか。今のやうなありさまでいゝと思つてゐるのか。尤、お前の寵兒は何處かで靜かに、お前の言葉をきゝ、お前の爲に働いてゐるのかも知れない。お前はさはがしいことはすきではない。お前は滅多に表面にはういては來ない、お前はかげにかくれてゐる。太洋の

底のやうにお前は表面の波には顯はれて來ない。
お前は生長してゐるが、お前は考へてゐるが、お前は欲してゐるが、お前は沈默してゐる。お前は何事が來てもおどろかず、何事が去つてもおどろかない。キリストが二十九で死んだとしてもおどろかなければ、惡人がなが生きしてもおどろかない。善人亡び、惡人榮えてもおどろかない。それは木の葉が一秒間餘計に枝にしがみついてゐたにすぎない。お前はあまりにおちつき、あまりに怒らない。お前はあまりに大きく、氣がながい。百年はお前にとつて一年にすぎない。太陽の廻りを一ぺん地球がまわるのはお前にとつては一日よりながくはないかも知れない。ともかくお前は氣がながい。
もうそろそろ目ざめてもいゝ時のやうな氣がするがね。

八十

俺はどうすればいゝのだ。俺は何をかけば一番いゝのだ。人類よ、そつと敎へてくれ。俺はもう再び筆をとる時が來ないのかも知れない。そんなことはお前にとつては何んでもないかも知れないが、俺をあはれんでくれ。
時は段々たつて來た。夜は白みかけた。九時の汽車で師匠のある處にゆかねばならない。
そんなことはお前のせいではないな。お前の爲ならよろこんでゆくよ。いくら俺でもお前の爲ならよろこんでゆく。
お前は俺の主人だからね。お前の爲に役立つことを俺は一生の願ひにしてゐるのだからね。今度の戰爭はお前の爲になるかね。なりはしまい。なるはずがない。だから俺も二の足をふんでゐるのだよ。無

理はないだらう。
お前の爲にならないことに、命をポン〳〵捨てゝよろこぶわけにはゆかないからね。
お前の爲なら死ぬよ。よろこんで死ぬよ。少くも死ぬのを名譽にするね。
お前の意志をつたへる爲に。お前の意志をこの世に生かす爲になら、俺の命なんか惜しくはないよ。
惜しかつたら恥だ。

八十一

お前の意志はある所まではわかつてゐる。
兄弟殺しあふことはお前は嫌ひだね。人間を器械の奴隷にすることも、金の奴隷にすることも、人間の奴隷にすることもお前は嫌ひだね。さうだらう。

八十二

それからお前は兄弟を餓えさしたり、兄弟をいぢめたりすることも嫌ひだらう。兄弟助けあふことが好きだらう。お前はよき父で、よき母だね。嚴しい點は父の如く、優しいことは母のやうだね。だれか親が子の仲のわるいのをよろこぶものがあらう。利益の爲に兄弟喧嘩をするのを見て淺ましい氣がするだらう。人情にかはりはないね。いくら大きくつても、いくら子供が多くつても。
仲よくして、よろこびあい、ゆづりあい、たすけあい、慰めあい、働きあい、感謝しあふ。
さうすればお前はよろこんでくれるね。默つてゐても。一體お前は默りすぎる。

ちつと大きな聲で怒鳴つたらいゝだらう。私がかわりに怒鳴つてあげようか。まだ力がなさすぎるね。力が出來ねばかはつて怒鳴つてあげるよ。

「汝の敵を愛せよ」

「汝の敵の内の人間を愛せよ、皆人間だよ。異心をもつた、優しい人間だ。怒りつぽいが涙もろい人間だよ。邪道に入りたがるが、すぐ泣いて正道に入りたがる人間だよ。それを敵にするのは敵にさせるのだ。敵になるやうにけしかけるのだ。仲よくするやうにしろよ。一寸した處で仲よくなるのだよ」

どうも少し權威がないね。

其處へゆくと、あいつ達は偉い。本當に權威がある。

あいつ達はお前の意志をつたへたのだらう。あいつ達は本當に偉いからね。

八十三

時間よ。お前の足は早すぎる。もう少し待つてくれよ。私は人類の言葉をゆつくり聞きたいのだよ。

雖めがないたな。あの聲をきくのは好きだつたが今日だけはいやに人の心をせきたゝせる、太陽よ。

いや地球よ、少しころがるのをのろくしてくれよ。それの出來ないのも無理はないが。

どんな恐ろしいことが起つても、うれしいことが起つても、その度に歩みをおそくも、早くもしない處、其處にお前の偉大さがあるのだからね。俺も、それにあやかりたいよ。

八十四

おゝ人類よ。もう少しお前の意志をめぐらしてくれ。さうか、お前も今に起き上るか。今のまゝでは少しはがゆいからね。わかり切つたことがわからないのだからね。

人間は皆勞働しなければならない。一方に圖拔けた人だけは自分の天職を果さなければならない。それがお前の爲になるからね。

銃をもつて立つ人間よりも、愛を以つて立つ人間が多くなり。人類の爲め、人間の爲め、正義の爲めに働く人間が多くなり、人々は協力してその方に自發的に進んでゆき、金を所有し過ぎることは不名譽になり、金で買つてはならないものは賣らなくつても、食つてはゆけるやうになり、金に媚び、金に自己を賣ることはこの上なく不名譽になる。人々は兄弟姉妹、他人を輕んじることは人間を輕じる事、人間を輕じることは自己を輕じること、自己を重じたきものは人間を重じ、人間を重じることは他人を重じることであることを人々は本當に知る時がくる。人々はその爲に協力して頭をつかい、その爲に協力して立つ、その時は人類、お前も立つのだね。そして始めて全身を顯はすのだね。

人類萬歲！

八十五

國と國との爭ひは兄弟と兄弟の爭ひ、

國と國とは仲よくしなければならない時が來る。國と國との爭ひが不自然になり、なぜそんなことをしたのだらうと云ふ時がくる。

互に助けあい、おぎないあい、心配しあふ時がくる、きつとくる。來ないのは嘘だと云ふことを俺達は心の底から感じてゐる。この感じがまちがつてゐて、天保錢の考が本當だとは斷じて思へぬ。時は働き、人類は生長し、新な日は既に高山の頂を照らし出した。

それなのに俺はゆく。舊い日の幻からまだ目覺めぬ人々の生み出した運命にかられてゆく。

俺は萬一死んでも東の空を見つめて叫ぶ。

とう〳〵お前は來たね、俺はお前を見て死ねるのだね。

新しき日萬歲！

お前が世界を照らすことを信じることの出來るその萬歲、

お前は私の兄弟だよ。何處の國にゐても。お互に死しあつても、お互に言葉は通じなくとも。

兄弟姉妹、互に銃をもつかはりに花たばを持ち、殺しあふかはりに抱きあい、憎むかはりに愛し、お互に缺點を數へ上げるかはりに、長所をかぞへ上げ、輕蔑するかはりに尊敬し、復讐するかはりに許しあい、恨むかはりに感謝しあふ、裏を出すかはりに表を出さう。

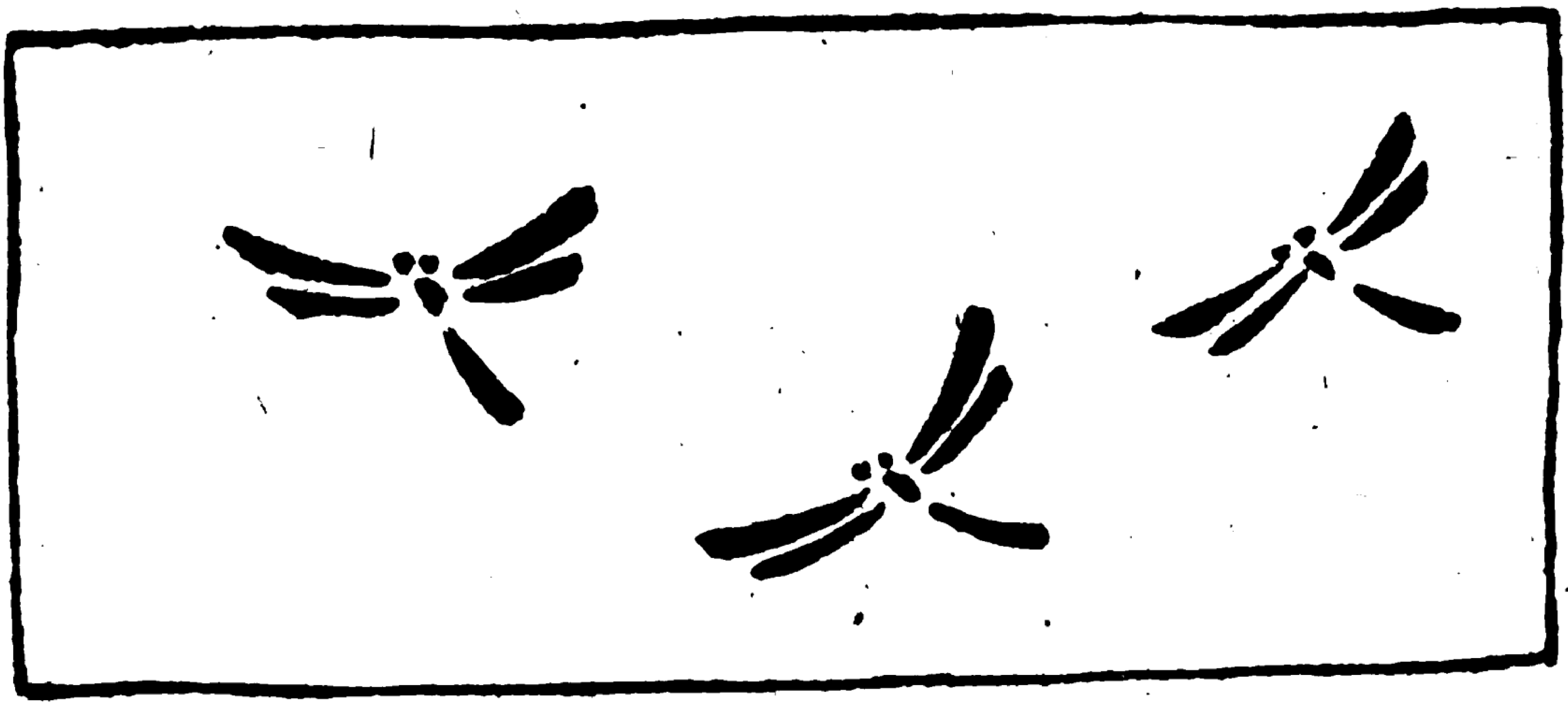
兄弟姉妹、お互に歡迎しあい、人間の名によつてお互に助けあい、一緒におどろう。

その時はお前も、俺も嬉し涙を流して、新しき神に感謝しないわけにはゆかないだらう。

新しき神、萬歲！

鷄はなく、あたりは白んだ、牛乳配達の車の音がひゞく。人類よ、この小さき俺をお前のよろこびの爲に役立してくれ。お願ひだ。

そして私を再びこの家に歸らしてくれ、この机の前に。たのむ。（一九、六、一一）



愛國者

上司小劍

一

——月——日。自分は妙な人の訪問を受けた。名刺に「岩角吉時」とあるのは、覺えのない名であつたが、其の肩書に、「愛國者」としてあるのも變であつた。「何ういふ御用でございますか。初めての方には、どなたかの紹介でもないとお目にかゝらないことにして居りますが。」と取次ぎのものに言はせると、取次ぎは笑ひながら、更に一枚の名刺を持つて來た。それには「愛國者岩角吉時事一名桐ヶ谷武三郎」としてある。桐ヶ谷武三郎——聞いたやうな名だな。と自分は暫らく考へてゐた。

あゝ分つた。それは自分の跛足從姉の夫である。久しく會はなかつたが、何うしてゐたか。と急に懷かしい思ひもしないではなかつた。

兎に角客間に通させておいて、會つて見た。自ら「愛國者」と名乘る人の顏を見たいといふ好奇心も、少しは手傳つてゐたのである。

客間へ入つて見ると、愛國者は紋付の羽織の背中の紋を見せて、出された麻の座蒲團は敷かないで、其の傍にキチンと坐つてゐた。もう夏ではあるが、薄羽織に透いて、下の白地の單衣が見えるのは、何んだか寒さうであつた。

丁寧過ぎるほど丁寧な挨拶をした愛國者は、鐵扇とも見ゆるほどの、黒い骨の大きな扇子を半ば開いて、靜かに使ひながら、

「相變らずお若いな、あなたは。……人魚でも喰べて居られるかなア。」と、眞顔で言つた。自分はまたこの男が、ドカリと年を取つて、其の萎びた顔や姿から、昔しの面影を掬ひ取るのに骨の折れるのを覺えてゐたのである。

自分がこの男を初めて見たのは、小學校の五年生頃のことである。田舍の大きな家で、昔し流鏑馬の騎手が佩びた太刀を拔いて、振り廻はしながら遊んでゐるところへ、突然夫婦連れの客があつた。流鏑馬の騎手の太刀の鞘は嚴めしく長いが、中身は二尺にも足らぬ竹光代りの鈍刀であつた。其の赤錆のやうに錆びたのを、荒砥でごし／＼研いで、漸く光るだけにしたのが、自分の幼い頃の何よりの手遊品であつた。孟宗の籔へ入つて、人間の脊長ほどに伸びた筍に斬り付けると、スパリ／＼と心持ちよく行く。銘刀の切れ味のやうな冴えを感ずるのである。

其の頃も丁度、筍が若竹にならうとする時で、手遊品の銘刀を試めすのに恰好な柔かいのが、孟宗籔にぬう／＼と伸びてゐた。それを斬り棄てに行かうとして、拔き身を振り廻はしつゝ、内玄關まで出た時、夫婦連れの客が入つて來て、土間に立つたのである。女の方が先づニヤリと笑つたのをよく見ると、二年ばかり前まで自分の家へ小間使代りに來てゐた跛足從姉の桃子であつた。それが郷里へ歸つて聟養

子を貰つたとは、子供の耳へも入つてゐたが、其の披露かたがた夫婦連れでやつて來たのだと考へるまでには、まだ少し距離のある幼心であつた。寂しい田舍の大きな家、それも父だけで母のない家へ、客のあるといふことは、自分に取つて、何よりも嬉しいことであつた。殊に夫婦連れの泊り客の來たことには、言ひ知れぬ悅びを覺えて、もう藪へ筍を斬りに行くことなぞは止めて了つた。

「太刀を持つて、遊んでゐられる。男ましうて結構なことです。刀には大和魂が籠つてゐますから。……」

座敷へ二人並んだ夫婦の、男の方はこんなことを言つて、庭の芝生で芝居に見る梅王丸のやうなことをして遊んでゐた自分を見ながら言つた。荒砥で研ぎ光らした大和魂が自分の腰にあるのを嬉しいと思つた。——

この二十餘年も前の折の面影をば、今の愛國者の老ひ朽ちかけた顏から見出すのは、なかなか難かしいことであつた。それで追想は自然と其の次ぎの記憶に移つて行く。

この男はよく絽の羽織を着る時分にやつて來るといふことを考へないではゐられなかつた。さうして愛國といふことゝ薄いペラペラの絽の羽織のことゝを、ごちやごちやにて想つてみたりする。其の次ぎにこの男の來たのは、今から十年ほど前、自分が芝公園の畔の或る家に座敷借りをしてゐる時であつた。矢張り白地の單衣の上へ燈籠のやうな黑絽紋付の羽織を引ッかけて、この男は訪ねて來た。この時にもこの男のことを思ひ出すのに、可なり骨が折れたが、それでも、この折はこの男がまださう老ひ朽ちてもゐなかつたから、子供の時流鏑馬の騎手の太刀を振り廻はしながら見た際の面影がだいぶ殘つてゐた。

「桃子も亡くなりましてなア。」と言つて、この男は、この時めそ〳〵と泣いた。

「さうですか。」と、自分は無理にも驚愕の表情をして見せたが、其の實跛足從姉といふ血縁の關係はあつても、幼い時きりに、物心覺えてから一度も會つたことのない女性の死に對しては、新聞紙上の死亡廣告を見る以上の感愴は起らなかつた。

「御通知を出さうにも、御住所が分らないものですから。……」と、この時この男は詫びるやうに言つた。絽の羽織に初夏の風が冷たく吹いてゐた。

「田舍教師をしてゐましても、一向早や芽が出ませんし、日本國民と生れた甲斐には、是非一度都で花を咲かしたいと思つて、上京したんですが、駄目でした。……尤もなア桃子は、あなたも御存じでせうが、若い時から畫が上手でして、其の方で立身したい希望でな、佐田白雲といふ先生に弟子入りして、近いうちにはなア、文展へも入選になる積りでしたが、脚氣をやりましてなア、コロリとまゐりましたわい。」と言つて、この男はホロリと一滴、熱い涙を白地の單衣の膝に落した。

「あゝア、何んたら言ふたなア。……咽喉まで出てゝ思ひ出せん。……」と、其の時この男が四苦八苦の體で顏を顰めつゝ考へてゐたのは、桃子を葬つた墓地の名であつた。

「あのそら、本郷の通りを何處までも眞ッ直ぐに行つた、……」と、また暫らく考へあぐんでゐるのが氣の毒で、自分は、

「染井ぢやありませんか。」と言ふと、この男はさながら氣付け藥を服まされた時のやうな顏をして、「さう〳〵、染井、染井。……」と、早口に言つた。——

其の時の面影が、十年後の今日、ひどく老ひ朽ちた顏の何處かに殘つてゐる。けれども十年一昔しと

言つたとて、自分は僅か十年の間にこれほど老いた人を今まで見たことがないと思つた。この染井の話のあつた時の記憶がなかつたら、兎ても流鏑馬の騎手の太刀の時の記憶から直ぐに、この男を思ひ出すことは出來ない。言はゞ記憶の中繼ぎのやうになつて、染井の話が自分の頭にあつた。

二

白地の單衣に、螢籠のやうな絽の羽織が、この男の制服のやうにさへ思はれる。それはもとより十年前のもの、或は二十餘年前のものと同じではよもあるまいが、しかし物持ちのよい男らしいから、事によると同じものかも知れない。……などと、自分は下らないことを考へてゐた。

『あなたは、愛國者といふことをしてるんですか。今は、……』と、自分は彼の男の持つて來た名刺をひねくりながら言つた。

『……といふことをしてるといふ譯でもありませんが、……』と、彼の男は稍暫らく考へた末に、『わたしも隨分、いろ／＼のことをやりました。』と言つて、また暫らく俯向いて考へ込んでゐた。其の眼の色が少し尋常でないのを、其の時自分は見て取つた。

母方の祖母の話に聞いてゐたが、この男の祖父は大阪のお城與力といふものを勤めてゐた。麻裃のまゝ八疊の座敷の眞ん中へ仰向けに寐轉がつて、中身の怪しい大小も何も放り出したなりに、『食はず貧樂、寐るが果報か。』と言つてゐたことがよくあつたさうな。

食はず貧樂と言つても、與力は二百俵取りで、つまり八十石の收入だから、貧しいなりにも衣食に困るといふことはなかつた。それに上から頂く邸地が六百坪ほどあつて、家も可なりに廣かつた。たゞ天

滿與力と違つて、お城與力には役德といふものが殆んどまるでなかつた。それをこの男の祖父は始終口惜しがつてゐた。

「何んだ陪臣が。……」

紀州田邊の城主安藤帶刀とかいふ人が、行列を立てゝ通ると、この男の祖父は無理に卑しむやうな眼でそれを見て、かう言つてゐたさうな。二百俵でも與力は直參、三萬五千石でも安藤は陪臣だといふ氣位を見せても、四邊の人は承知しなかつた。御三家の臣は陪臣にして陪臣にあらずとか、安藤樣は立派なお大名ぢやとか、聞えよがしに言つた。

「食はず貧樂、寐るが果報か。」と、かういふ時、この男の祖父は、邸へ歸るなり、直ぐ寐轉んで言つた。

何うもこの祖父に、あの男は生寫しぢや、と自分の祖母はよく言つてゐた。

其の頃の芝居小屋には、與力の役棧敷といふものがあつて、平常は戸が締めて錠をおろしてある。其の鍵を與力の月番が預つて、芝居見物に行きたいものは、月番で日が重ならないやうにして、鍵を廻はす。この男の祖父はさして芝居が好きでもなかつたけれど、自分の祖母は芝居を一月見ないと病氣になるといふほどであつたから、よくこの役棧敷へ連れて行つて貰つたさうな。

實に、下へも置かぬ待遇とはこんなものを言ふのであらうと思つたと、祖母はよく言つてゐた。今時の祝儀をはずんでの好遇なんぞは、底が見えてゐて、詰まらない。このお役棧敷で受ける好遇の心地好さは、今考へてみても五體がぞく／＼する。

「それを考へると、今の芝居は見に行く氣がせん。」と、祖母は死ぬまで昔しを懷かしんでゐた。

或る時、この役棧敷での芝居見物に、祖母の特に註文した菓子を持つて來なかつたさうで、翌日直ぐに其の芝居の表方の一人が、この男の祖父の邸へ呼び出された。朝七つ時に來いと言つて、それが來ると、今御用中だと稱して、祖父は奥に寐轉んでゐる。腰掛けも何もない土間へ待たしたまゝ、芝居者には煙草の火一つやらないでおく。正午になつても、八つになつても何んの沙汰もしない。其の芝居者が若し催促でもすると、御用中だ控へろ、と頭ごなしに若黨が叱り付ける。暮れ六つの鐘が鳴つても、矢張り沙汰をしない。

祖母が隙間から窃と覗いて見ると、芝居者も心得たもので、蹲踞んだまゝ四邊に氣を配つて、懐中から出した燒き握飯を窃と頰張つてゐたさうな。

夜の更けかゝる頃、頭取りや表方が總出で謝罪に來る。其の時眼の玉の飛び出るほど叱り付けて、以後を戒めた末、漸く歸してやるのだが、「これだけを考へても、昔しの世の中は便利に出けてゐた。」と祖母はよく言つてゐた。

それで寒い時にお役棧敷へ見物に行つたのと、時候のよい頃に行つたのとでは、何うしても待遇が違う。寒い時の方がよく氣を附けるのは、罷り間違つて、邸へ一日呼び出しッ放しにされても、時候のよい時ならまだ辛抱もしよいが、寒い時は實にたまらないからであるさうな。「時候がこんなことに關係したんやもん、昔しは世の中が好かつた。」と、祖母は頻りに其の頃を戀しがつてゐた。

この男の祖父は、或る年の正月、禮に出た時、麻裃の姿で、横堀川へ身を投げて死んだ。其の前から少し氣が狂れてはゐたやうであつたが、座敷牢へ入れるほどではなかつた。機嫌よく年禮に出て、其の歸りに平氣でサッさと地面を行くやうにしながら、横堀へ落ちて了つた。少しも入水とか投身とかい

ふ風の豫覺がなかつたから、供に立つた若黨もつひ抱き止めることが出來なかつたといふ。
「あの男の家は發狂筋ぢや。」と、祖母がよく言つてゐたのを、自分は今變な眼の色をしてゐるこの男を前にして、不圖考へたのである。

三

「わたしの愛國は、世間の愛國と少し違ひます。」と言ひ〱、この男は妙に慄へる手先きを動かして、傍に置いた古風なズックの鞄をパチ〱音さして開くと、内部から油染みたブリキ製の文字焼きの道具のやうなものと、三角形の大きな焼き團子のやうなものと、黒い味噌を入れた瓶と、一束の印刷物とを取り出して前に置き並べつゝ、「えへん」と一つ仔細らしい咳をした。
「えへん。」また一つ咳をしてから、この男は、「これが愛國の結晶です。」と言つて、其の三角の焼團子のやうなものを、あまり綺麗でない手で摘み上げ、これもあまり綺麗でない黒錆のナイフで、瓶の中の鐵火味噌を焼團子にコテ〱と塗り付け、自分の眼の前にぬッと突き出して、
「さア、これを一つ喰べて下さい。」と押し付けるやうに言つた。
何うしようかと、自分は其の時思つた。兎ても其の汚ならしい焼團子のやうなものを食つてみる氣にはなれないから、「僕は一切間食をしません。」と、人並み外れて間食の好きなものが、今も家人の茶とゝもに運び出した小倉羊羹の一片を逸早く摘んだことも忘れて言ふと、この愛國者は、
「いや、いや、これは間食に喰べても決してわるくはありません。」と、無理に勸めた。
「でも、決して間食をしない習慣になつてゐますから、後で夕飯の時に頂きます。」と、自分は苦しさう

にして言つた。愛國者は笑ひながら首を振つて、
『これを一つ喰べて貰はんと話が出來ません。是非一つ半分でもよいから、喰べて下さい。』と、其の燒團子を自分の鼻の先きへまで押し出した。

かういふ時に、其の無禮を怒ることの出來ないのが、自分の氣の弱さである。さうして厭やなものを澁々受け取つて口へ入れてから、其の味のことを思ふよりも、これは正しく自分がこの愛國者に負けたのだと、口惜しくなつてたまらなかつた。

燒團子は一寸下手に出來上つたパンの味がした。鐵火味噌の氣味わるい色と、其の鹽辛いのとに弱つた。

『何うです、それがわたしの忠君團子、……一名愛國パンです。團子とパンを折衷した風味は何とも言へますまい。』と、愛國者は自分が殆んど眼を白黒にして呑み込んだ燒團子が、咽喉から食道へ、それから胃へと、だん／＼に下がつて行くのを透視でもするやうに見詰めながら、儼然として言つた。これが先妻桃子の訃を泣きながら自分に傳へた男と同じものであらうとは、何うしても思はれぬほどの强さがあつた。

『わたしの愛國は、そんな、朝鮮を何うしようとか、支那で何んだとかいふやうな、有り觸れた愛國ではないのです。山東に於ける日本の權利が何うだとか、勝手な理屈を附けて力味返る愛國と、わたしの愛國とは、まるで質が違ひます。』と、愛國者の眼の色は、いよ／＼變に光つて來た。

『わたしも桃子が死んでから、いろ／＼苦勞しましたわい。夜學の塾を開いたこともありますし、蓄音器にゴムの管の幾つも附いたのを持つて、緣日や祭りの夜店に出たこともありますし、また教師も長い

ことしましたが、國民に生れた以上、愛國の爲めに働かなければならんと決心して、發明したのが、この愛國パンです。……これが……」と、粕の內部にまだドッサリ入つてゐる三角の燒團子を一つ摘み上げて、「……愛國心の結晶です。これを三食に一度喰べると、食費が一割五分減じます。若し二食だけこれにすると、食費が三割減じます。三食ともこれにしたら、食費は約半減します。それに滋養は十分なり、胃腸には良し、調製に時間を費さず、こんなよいものはない。日本人が皆愛國者になつて、常にこの愛國パンを用ゐたら、陸軍を今日の二倍にして、海軍を五倍にすることが出來ます。……何んとえらいものぢやありませんか。」と、愛國者はいつの間にか腕まくりをしてゐた。

「詰まり、まづいものを喰べて、兵隊を殖やさうといふんですな。そいつは御免だ。……芝居小屋でも建てようといふのなら、僕も一食ぐらゐそれにしてもいゝが。」と、自分は言ふことがないので、こんなことを言つた。

「いやア、あはゝゝゝ。」と、愛國者は奇體な笑ひかたをして、語りつゞけた。

『この愛國パンをお喰べなさい。それからこの愛國味噌、これをこのパンに塗ると、風味絕倫で、お腹の底までが愛國心に充ちます。……芝居小屋、……芝居小屋を建てるのも結構ぢや。この愛國パンで幾らも建ちます。芝居は勸善懲惡で、多くの人に道德の耳學問をさせ、目の正月をさせる。それやなか〳〵結構なもんぢや。勸善懲惡は詰まり愛國心です。愛國パンです。……この愛國パンを喰べないと、眞に芝居が解らない。……これからわたしも國食改良會といふものを拵へて、其の會長になり、各方面の名士を入會させるつもりです。あなたにも其の節は是非理事になつて頂きたい。」と、ベラ〳〵喋舌り立てた。

「あなたの家は、昔し與力だッたんですッてね、大阪で。……」と、自分は一寸愛國者の言葉に合の手を入れて訊いてみた。

「與力同心、……左樣、よい名ですなア。力を與にし、心を同ふす。えらいもんぢや、與力は馬に乘る身分ぢやから、一騎二騎といふ。二百俵でなア。同心は十石三人扶持、一日に米が一升五合と、一年十石です。……しかしこの愛國パンは別に米で拵へるのぢやない。そら米でもよいが、麥でも粟でも豆でも、穀類でさへあれば何でも出來る。そこで食費半減で、陸軍二倍、海軍五倍、……結構なもんぢや。さアさ召し上れ、召し上れ。代は見てのお戻りぢや。」と、愛國者は俄かに今までとは別な黃色い聲を出した。

四

「なかく其のパンは、燒くのが難かしさうでございますね。」と、茶を淹れかへに來た妻は、自分の目配ばせで制止するのに氣が附かないで、愛想よくさういふと、愛國者は操り人形のやうに振り向いて、「これは奥さん。……いやパンの製法は極く簡單です、これを七輪の上へ載せて燒くんです。」と、最初に鞄から出して傍に置いてあつたあの油染みたブリキ製のものを、貢物でも奉るやうに高く捧げた。

「さうでございますか、……これへ粉の溶いて粘つたのを入れてね。」と、妻は人の好さゝうな顏をして、其のブリキ製の圓形な文字燒器のやうなものを手に取つて見た。

「燒きかたは簡單ですが、秘法になつてゐましてね、傳授料を貰はんと敎へません。……一子相傳の秘法です。」と、愛國者は少しく開き直つた。

「それぢや多くの人に實行させることが出來ませんな。愛國心に授業料が要るやうでは。……」と、自分が横合ひから口を出すと、愛國者は屹となつて、

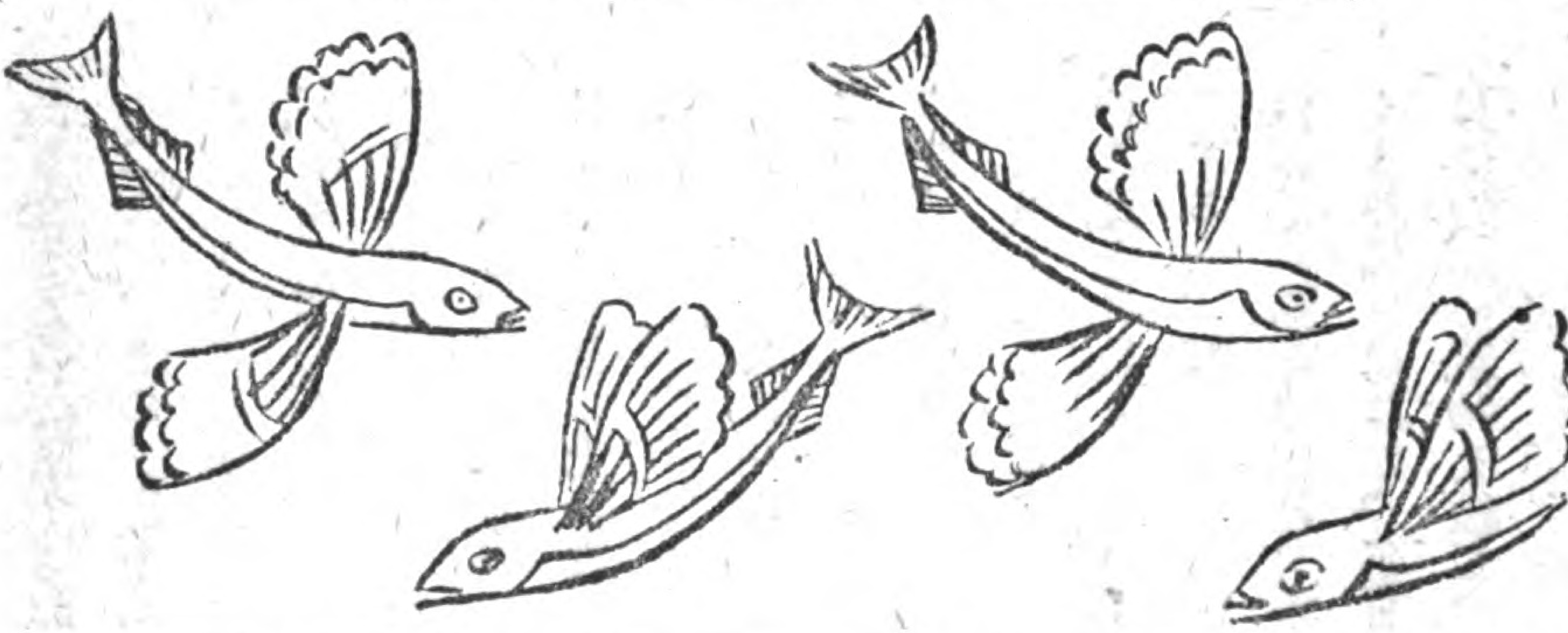
「いや、いや、傳授料と言つても、僅か五十錢です。……五十錢と、他人には口外せんといふ誓書を一枚取つて敎へるんです。」と、言葉に說敎のやうな節を附けて言つた。

「兎に角日本六千萬か八千萬か知らないが、多くの人にやらせなけれやならんことだから、他人には口外しない誓書を取つても、結局は皆んなに敎へることにならなけれや、何んにもならんが、それをあなた一人で傳授するといふのは大變ですね。」と、自分はつひ言はなくてもよいことを言つてみた。

「秘法を漏らしても、日本人同志なら、そら構ひません。……けども外國人に敎へられると、一大事ですからなア。それで誓書を取ります。……ちやんと血判をさしてなア。」と、愛國者は重々しい調子で言つたが、ふいッと思ひ立つやうに、氣を變へて、

「奥さん、……あなたには傳授料無しに敎へませう。別室へござれ。」と、いきなり妻の手を握つた。

──一九一九、六、一七──



先に行つた友達

小川未明

寂しい田舍町の角の處に、一軒の鼈甲屋があつた。村の人や町の人はさう呼んでゐた。けれど、ほんたうの鼈甲などは稀で、牛の角や、馬の爪などで、田舍の女や、娘達を相手の櫛や、笄を造つてゐるのだ。

この前をHとBとは竝んで、話しながら學校へ通つた。この二人の少年は決して性格が同じといふのではなかつた。互に親しくはしてゐたが、頭の中の考へは異つてゐた。

二人は、よくこの鼈甲屋の店頭を通る時に其處にはよく肥つた脊の低い圓顏の男が、黄銅の縁の大きな眼鏡をかけて、短い筒袖の着物を被て兩方の膝頭を出しながら仕事臺に向つて、テンカン、テンカンと鐵槌を叩いてゐるのを見た。

燕が往來の上を掠めて、中空を飛び、時にこの男が仕事をしてゐる頭の上の天井張の處まで軒下をくゞり込んで來て出て行つた。夏になると、朝早くから日の光りは、町の中に射してゐて、二人が路を歩いて遠ざ

かるまでこの店頭から起るテンカン、テンカンといふ音は聞えて來た。

二人は、この一度も話をしたことのない、鼈甲屋の主人になんで、これだけでは憎愛の念を抱くことがあらう。寧ろ學校に行つてゐて、授業時間などに、早く家に歸つて遊びたいなどゝ思ふ時、町の光景が眼先に浮んで、同時にこの男の仕事をしてゐる姿が眼に見えて、この町にはなくてはならぬものゝやうな氣がしたのであつた。

町から、村に出る路には、路の兩側に處々樹木があつて、其等は田舍の澄んだ靑い空に聳えてゐた。日に細かな葉の光つた柳の木もあれば、また、風に吹かれて地の上に鼠色の影を落してゐる杉の木もあつた。

Hは、永久に其の一本の杉の木を忘れることが出來ない。杉の木は、たゞ一本ぎりしかなかつたのでない。七八本もつゞいて並木をなしてゐたけれど、忘られないのは、其の中のあまり太くない下枝の上つた、而して、あんまり高くない杉の木であつた。

どうしてこんなに委しく、其の木を記憶にとゞめて置いたか？　あの日曜日の朝、HとBは、其の他の友達と共にこの路の上で遊んでゐた。

すると、町の方から人が叫んで驅けて來るので、其の方を向くと、クロといふ黑色の宿無し犬が一疋の赤毛の猫を追驅けて來たのだ。其の後から大聲で犬にケシをかけながら走つて來たのはHもBにも全く意外に思はれた、毎日學校の行き歸りに見る鼈甲屋の脊の低い肥つた男であつた。

男は短かい着物を被て、草履を穿いてゐた。而して常のやうに黃銅の緣の眼鏡をかけてゐた。

「オイ、逃すな、逃すな」と、男は彼方から叫んだ。

何か面白い出來事の起るのを心に待つてゐた、すべての少年等はすぐに雷同をして、犬にケシをかけると共に石を拾つて猫の行手を遮つた。宿無し犬のクロが、みんなからこんなに囃し立てられたことはこれまでになかつたらう。

犬は得意になつて益々猫を追窮した。赤猫は少年等に行手を遮られてゐるので、止むを得ず傍にあつた杉の木に驅け上つた。もつと其處には大きい高い杉の木があつたにかゝはらず、まごついてゐる猫は、一番低い木に上つてしまつた。けれど赤猫は完全に犬から脱れ得られた。クロは木の根を啣んで牙を鳴らして、上を仰いで頻りに吼えつゞけたけれど役に立たなかつた。犬の黄色な尖つた歯は大きな口から外に露はれて、敵に對する限りない憤怒の情を現はしてゐた。猫はしつかりと枝につかまつて下を見てゐた。少年は猫を目かけて石を投げた。猫は身を竦めて少しの油斷もなかつた。而して、石が危ふく身に當らうとして枝に刎ね返ると、猫は悲痛な聲を出して怨みがましく人間を睨んだ。

鼈甲屋の主人は、やつと此處まで追ひ付いた。而して、何か深い恨みが猫にでもあるかのやうに見上げて、

「あんな處へ上つてしまやがつた。太い奴だ」と、息を切らしながら言つて、足許の石を拾つて木の上へ投げ付けた。

やはり、其の石も猫には當らなかつたが、猫の啼く悲しさうな聲は聞えた。

「まつてゐれ、猫を逃しては駄目だぞ。皆な番をして逃がさんやうにしてゐれ」と、男は言つて、町の

方へ走つて行つた。

男のゐなくなつた留守に、少年等は猫に向つて小止もなく石を投げた。一、二、三と合圖に皆なが一齊に猫を的つて投げた石の中で一つはたしかに猫に當つたと見えて、猫は苦しさうな叫びを上げた。而して、更に一段上の枝に移つた。もう其れより上には、しがみ付くやうな枝がなかつた。

犬は聲を涸して、この騷ぎの間上を向いて吼えつゞけてゐた。日頃から、こんなに強いまた執念深い性質の犬でないことはHにもBにも心の中で思はれた。其とも強いのであるが、宿無しのために一時意氣地なくなつてゐたのだらうかといふ疑ひが呼び起された。其れ程犬の元氣は凄まじかつた。

二人は、猫が好きでなかつたが――小さな可愛らしい、白と黒の斑のやうなのは別として、こんなこうのひねた狐のやうな猫は――而して、人に懷く犬は好きであつたが、この場合、澤山の味方を持つ犬より、誰も味方とならない猫に對して、多少可哀さうな感じがなかつたのでないが、まだ猫を助けてやらうといふ積極的の氣持にはなれなかつた。猫も憎かつたのであるが、また異つた意味で犬も憎かつた。

「犬と猫と、どちらが喧嘩をしたら強いだらうか」と他の子供等は言つてゐた。

「其れは犬が強いさ」

「實際は猫の方が強い、眼を引掻いたり、耳を引掻いたりするからね」

「人間が、かまはんければ、猫の方が強いかも知れない。而して、クロは、あの猫に負けてしまふかも知れない」と、一人の少年は言つた。其の少年は、この時犬に向つて、更にケシをかけたので、犬はま

た背中の毛を逆立に後足で土を蹴返しながら上を向いて吼え立てた。

「まだ、猫は木の上にゐるか」と、町の方から叫きながら、鼈甲屋の主人は走つて來た。見ると、彼は三間もありさうな竹竿を提げてやつて來た。

「まだゐるよ」と、二三の少年は口を揃へて答へた。其れを見て、Bは笑つてゐた。けれどHは默つてゐた。

Hは刹那に、これを見て他の少年のやうに面白がることが出來なかつた。「もう駄目だ」といふ、一種の不安が猫の身の上について感じられると、興味はだん／＼褪めて行つて、言ひ表はし難い苛酷な感じと恐怖が心を捕へかけた。

男が竿を持つて來るのを見ると、少年は一層面白がつて騒ぎ立てた。而して、この結果は何うならうと顔には、それ／＼緊張の色が漲つた。

竿は充分猫のゐる處までとゞいた。男が竿を立て直して、其れを持ち返へすのを眤と見てゐた猫は、耳許まで裂けるやうな赤い口を開けて、竿の尖を睨んで牙を露き鳴らし始めた。

此時、男は竿で猫を突き落さうとした。すると猫は一本の前足を上げて烈しく抵抗した。たゞ其れは一本に過ぎなかつたけれど、凄まじい形相は流石に下に立つて竿を握つてゐる男の心を脅かした。刹那に、男は惡いことを自分はなしつゝあると自覺したと見えて、ちよつと躊躇した。けれど直にこの猫が魚を盗んだり、金魚を食べたりしたことを思ひ出すと許されないといふ殘忍な氣持が起つた。

「畜生、この泥棒猫め」と、男は忌々しさうに罵りさま、鋭く猫の體を處嫌はずに突き立てた。線のやう

な柔かな毛が空から降つて來た。猫は木の上で苦しさうに悲鳴を上げた。けれどしつかりと落ちないやうに梢にしがみ付いてゐた。

Hはもう前から其れを見てゐるに堪へられなかつた。ずつと後の方に退つて、成たけ遠くから其の有様を眺めてゐた。中には笑つたり、しやべつたりして男の傍に立て見てゐる者も隨分あつたやうだ。宿無し犬のクロは、折々やるせなさゝうに悲痛な聲を絞つて、上を向いて低く、高く、長く吼いた。「あんなに高い處に敵がゐるんでは、俺は何うすることも出來ない。早く下に落してもらひたい」と、人間に訴へてゐるやうに聞えた。

Bも、男の傍に立つて、笑ひながら、猫の苦しむのを、まだ幾分面白がつて眺めてゐる者の一人であつた。

「こん畜生！　まだ落ちねえか」と、此時、鋭く男が突き出した竿の尖は、猫の眼に當つた。而して、意外にも血が迸り出た。

「眼に當つた！」と、大きな聲で叫んだ者があつた。其れはBであつた。

猫の眼は血のために眞赤になつて、片眼が外に飛び出したかと思はれた。而して、鮮紅な血は流がれて口許を染め、胸を染めて木の上に滴つた。

見てゐる者は、皆默つてしまつた。男は尙ほ其れだけでは止めなかつた。寧ろ止められなかつたといふのが至當であらう。

「こん畜生」

もう一度、男が突くと、猫は懸命で梢にしがみ付かうとしたが、遂に力が盡きて、眼が昏んで來たと見えて、空しく爪を枝に立て損ねて地上に轉げ落ちた。

同時に其處では、犬の叫び聲と猫の悲鳴とがつゞいて起つた。悶絶する呻きと、骨を嚙み碎いてゐる嚙き聲とが聞かれた。少年等は、こんなにクロの怒つた樣子を見たことがない。しかし何のために、そんなに怒らなければならぬのか、單に犬と猫とが仲のよくないためであるか。曾て皆はこれ程犬が酷たらしく猫に嚙み付いて喰ひ殺す有樣を見たことがなかつたらう。

猫はもう犬に向つて抵抗するだけの力がなかつた。其れにかゝはらず、犬は猫に嚙み付いてゐて、いつまでも其れを放さなかつた。其のうちに猫は全く動かなくなつてしまつた。やつと犬が見放して猫の體を離した時は、牙は赤く染つて、口の周圍には生々しい血が付いてゐた。其れは殺された猫の血であると思はれると、一層傷ましさが感じられた。

猫が死んだのを見屆けると、犬は喜びよりは、寧ろ限りない淋しさを感じた如くに、低く悲しげに吼え立てた。

鼈甲屋の主人は、これを見て痙攣的に笑つた。Hは遠くからこの男の横顏を見詰て、この殘忍な行爲を敢てしたのに對して甚しき憎しみを覺えた。Bはと見ると、いつしか彼の顏色も靑晒めて、鋭く光つた眼はぢつと男の顏を睨んでゐた。其れでHには、女の心持も察することが出來た。

男は猫の死體を下げて、河の方へ行つた。他の子供等は、其の後からついて行つたが、HとBは行かなかつた。二人は默つて其の方を見送つてゐた。

Ｈはこれまで、動物の殺されるのを見たことが二度あつた。其の一度は屠牛場で、やはり其處で人間の殘酷な行爲を見た。しかし、これ程ではなかつたやうだ。彼は、猫の眼を突かれた時の光景が後で犬に嚙み殺される時よりは一層慘たらしかつたのを感じた。

「可哀さうだつたね」

Ｈはかう言つて、Ｂがこの事件に對して、どんな感想を抱いてゐるか知りたかつた。

Ｂは話をする時には、常に笑顏をするのが例であつた。けれど、此時、彼は笑はずに、

「彼奴は甚いことをする奴だ。僕は見てゐて、憎くなつた。其れに、いつかクロを苛めてやらうよ」と、Ｂは答へた。

Ｈは、鼈甲屋の主人に對して、自分もＢと同感であるのを嬉しく思つた。クロも憎かつたが其れ程ではなかつた。

「あの男をいぢめてやりたいね」とＨは言つた。而して、自分に力があつたら、思ひきりあの男をひどい目に遇はしてやりたいといふやうな氣持がした。

「君に、そんなことが出來るかい」と、Ｂはいつものやうに笑つて言つた、其れは、ちよつと冷笑したやうに聞えた。

かうした冷笑と皮肉とはＢには、何でもなく出來たが氣の弱いＨにはどうしても其のことは出來なかつた。自分に出來なかつたばかりでなく、友達から冷笑されたり、皮肉を言はれると顏を赤くした程であつた。

やゝしばらくしてから、

「君は、どうすれば、あの男をいぢめることが出來ると思ふかい」と、Hは顏を上げて、きつとBの口のあたりを見詰ながら問ひ返した。

「それは何うにでも出來るさ。感じたことをある機會に發表すれば、反響がある。今、僕等はあの男に勝つだけの腕力はないさ。けれど思想ならあるぢやないか」と、Bは落付いて答へた。

Hは友の怜悧なのを深く心で感じた。

「其れは出來る」と、Hは友の前にうなづいて言つた。

明る日から、二人は、また學校へ連立つて通つた。町を通る時に、鼈甲屋を覗いた。すると其處には黄銅の縁の眼鏡をかけた、肥つた男が仕事臺に向つて、テンカン、テンカンと鐵槌で叩きながら働いてゐた。傍の焜爐には青白い炭火が燃えてゐた。

もう二人は、虚心でこの店の前を通つてこの男を見ることが出來なかつた。期せずして、二人の燃えるやうな瞳は、このふて〳〵しい男の横顏を見詰ながら過ぎた。

數日の後に、學校で同窓會が開かれた。意見のある者、感想のある者は、演壇に立つて述べるのが例である。

この日、Hは皆なに促されて演壇に立つた。學生等は彼の言ふことを聽くべく耳を傾けた。一時廣い控場が寂然とした。Hの論題は、「弱き者を援けよ」と言ふのであつた。彼は日常この世の中には、幾何兇暴な力の前に、正義や、人情が蹂躙されつゝあるかを語つた。而して、畢竟、弱い者は、其れを訴へる

處がなく默々として永久に去つてしまはなければならないのは何たる痛ましいことでないかと語つた。

而してHは、先日鼈甲屋の主人が、猫を虐殺した事實を物語つた。これはたしかに罪惡である。殘忍であると言つた。けれど、哀れな、孤獨な猫は默々として死んで行かなければならない。かういふ例は恐らく人間同志に於ても澤山見られるだらう。而して、これは決して正しいことゝは言へない。吾等が永遠の戰ひといふのは即ちこれであると結んだ。

其時、拍手は急霰の如く響いた。後で受持の教師は「大變に好かつた」と言つて褒めた。

Hは自分の席に戻らうとした時に、親しいBだけが手も叩かず、一向其の演説には感心したらしい様子もなく、皮肉な冷たい笑を顔に浮べてゐるのを見て、何となく張合の拔けた氣持がした。Hはたとへこんなに多くの人々から賞讚を博しなくとも、獨りBが手を叩いてくれたなら、どんなに自分は滿足するだらうと思つたのであつた。

彼は、Bと顔を合はしたら、Bが何といつて、自分の演説に對して批評をするか聞かうと思つてゐた。二人は學校から歸る時に、いつしよになつた。而して、いつもの如く町を通つて行つた。

「君は言ふことゝ矛盾してゐるぢやないか。弱い者を援けなければならんといひながら、なぜ此間、猫が殺されるのを默つて見てゐたのだい。あの時、何とも君は言はなかつたぢやないか」と、Bは歩きながらHに言つた。

かうBが詰るのを聞くと、Hは心持顔を赤くした。

「だつて何うも出來なかつたぢやないか」と、其時のことを考へながらHが答へた。

「今だつて、君は、正義のために、其の男を何うしやうともしないだらう。彼處で、其の男のことを例に出して言つたつて、誰のことだか分りやしない。あの男に少しの痛痒も與へやしない。あの男に對する正當の復讐にならないぢやないか」と、Bは言つた。

「僕は、あの男だけを責める氣になれないよ。皆ながあゝした殘忍性は持つてゐるんだからね」と、Hは答へた。

Hは、かう答へながら、この點が二人の常に相違する性格に原因するのだと考へた。

「ぢや、永遠の戰だなんて、誰と戰ふことなんだか分らないね」と、Bは顏に冷笑を浮べた。

「其れは横暴な者との戰でもあるが、一つは人間の心の中の善と惡の戰と言ふことが出來る」と、Hが答へた。

「僕は、そんな平凡な議論は嫌いだ」と、Bが嘲笑した。

「何が平凡だい」

「だつて、平凡ぢやないかね」

「其れは、君と僕との性格の相違ぢやないか。僕は、また君のやうな極端な議論には、同感が出來ないよ」と、Hは我慢がし切れなくなつて言つた。

「其れではいゝよ、互に信ずる所をやればいゝのだ」と、Bは言つて皮肉に笑つた。

「さうだ。君は批評をせずに、自分でやつたらいゝぢやないか」と、Hは言つた。

けれど、これに對してBは答へなかつた。

二三日すると、町で發刊する新聞の寄書欄に、「殺す者を憎む」といふ題で、一篇の感想文が載つてゐた。而して、其の作者はBであつた。

Hは、「あの事を書いたのだな」と思つて、直に新聞を取上げて讀んで見ると、あの時のことが其儘寫されてゐるばかりでなく、鼈甲屋の主人まで、誰にも其の者だといふことが明かに分るやうに書かれてゐた。而して、其の殘忍を敢てしたものは、毎日學校へ行く時分に、店頭を通つて見る鼈甲屋の主人であるといふことを皆なに知らせやうとしたのが、寧ろこの作を書いた動機になつてゐることが分るのであつた。

「これでは、平常からBがあの男に怨みを持つてゐるやうにしか取れない。きつと知らぬ人はさう思ふだらう」と、Hは其時感じたのであつたが、また、Bが堂々と名を署して、事實を回避せずに書いた大膽さを深く感ぜずにはゐられなかつた。「やはり、自分は臆病だ。しかしこんなことを書いたら後で、きつと自分は氣持がよくないだらう」と、Hはまた思つた。

ある日、Bは慨然として、顏を赤くしながらHに語つた。

「今日學校でF先生に叱られたよ。此間新聞に「殺す者を憎む」といふのを出したので、あれを讀んだが、あまりに露骨過ぎる。あれでは人身攻撃だ。なぜ事實をもつと美化して書かないかと言ふのだらう、だから、僕は美化とはどんなことですか。何のために嘘を書かなければならんのですか。私は實感を書いたのです。面白いとか美しいとか、いふものを始めから書く考へはなかつたのですと言つた。するとFの奴め　お前には藝術といふものが分らないと言ひやがつた、もつと文章を學んだなら分るなん

て」

「人間は藝術より貴いものを持つてゐる。たゞ藝術の形を借りて其れを發表するだけだ。先生の藝術に對する考へ方は古いやうですと言ふと、Fは怖しい眼付をして僕を睨んだよ。お前は生意氣なことをいふが、人生なんて分るか。雜誌の上で知つた知識が何になると聲を震はして言つた。見たまへ、これから僕の作文の點はきつと丙か丁しかくれないから」

「僕も、あれを讀んだ時、少し露骨に書き過ぎたといふ感じがしたが、回避しない君の大膽な態度に深く感心したのだ」と、Hは言つた。

すると、これを聞いてゐた、Bの顏には、いつもの冷笑が浮んだ。

「僕は、文章をうまく書くとか、快感を人に與へるやうに書くとか考へてゐたのでない。あるまじきことを訴へたのだ。要するに、猫に代つて復讐してやらうと思つたのだ」

Bは袂から煙草を出した。すべて學生は禁煙されてゐるにかゝはらず、悠々と青い煙を口から吐いて、もう今迄の話は忘れてしまつたやうに、別の話を始めた。

猫を嚙み殺した、宿無し犬のクロにもさう長くは經たずに悲しい時はやつて來た。猫を殺した當座は、少年等から新しい興味がこの年老つた犬に向けられて、クロ、クロと呼ばれたりしたけれど、直に飽きられて、顧みられなくなつてしまつた。別に苛めるものもなかつたけれど、特別に可愛がつてくれるものもなかつた。

犬は寂しい、單調な日を二たび送ることになつた。ある時は子供等のゐる處へやつて來た。而して、

誰か頭を撫てくれるものもあるかと尾を振つて、皆なの顔を一人、一人注意深い眼付をして眺めまわした。而して、誰もかまつてくれぬと、いつしか悄然として何處にか行つてしまつた。ある時は、家々の勝手許を覗いて、何も悪いことをしないのに叱られたり、水をかけられたりして、つまらなさうに立去る姿を見たこともあつた。

しかるに、いつ何處から悪い病氣を感染して來たものか、さなきだに年を老つて大分光澤の失せて、白毛の混つてゐた黒い毛が抜け始めた。而して、脊筋は地肌が露はれて松脂の固りのやうに腫物が出來て、たへず白い膿が流れてゐた。其れはだん／＼悪くなるばかりであつた。しまひには顔の形まで變つてしまつて、猿の顔でも見るやうであつた。

「あ、汚ない、クロが來た。傍に寄ると病氣がうつるよ」と、少年等は、クロが姿を見せると言つた。其頃から犬は、姿を見られると誰からでも擲る眞似をして威されたり、さもなければ石を投げ付けられたりするやうになつた。

「クロに石を投げてやれ」と、少年等はかう言つて、てんでに石を拾つて投げ付けた。もう誰も犬をやさしい聲で呼ばなくなつた。食べる物をくれる人もなくなつてしまつた。毎日クロは埃溜をあさつて飢を忍んでゐた。而して、何處かで、クロと自分の名を言つてゐる聲を聞くと、彼は不安と恐怖に戦いて其の方を見た。昔は自分の名を言はれるのを聞くと、なつかしげに其の方を見たものだ。而して、其處に人が立つてゐると直に走つて行つた。皆なはやさしく頭を撫てくれた。何たる相違であらう。

且は、犬の眼が、だん／＼人々から虐げられるにつれて、やさしみが無なり、凄い光りを帶びて物怖

をするやうに、非常に神經質になつたのを悟つた。けれど、尙ほ稀に昔の如く尾を振つて傍に寄つて來ることがある。Hは其時、醜汚な態から甚しい不快を感じずにはゐられない。而して、觸られるのを怖れて身を避けた。犬は、自身の病氣が、どれ程人間に惡感を與へるかを知る筈がなかつた、だから、急に人間が自分を敵の如く扱れるのを不思議に思つてゐた。Hが叱らないのに安心したやうに、もつと近く寄つて來る。此時、Hにはこの犬の心持がよく理解されたけれど、默つてゐる譯には行かなかつた。彼は手を擧げて近付かうとする犬を打つ眞似して言つた。

「畜生、あつちへ行け」

其の聲は、極めて小さく、低かつた。しかし怜悧な動物は、はつきりと聞き取つた。「やはりこの人も俺を嫌つてゐるか」かう思ふと犬は不意に立止つて、怨めしさうに白眼で、ちよつとHの顏を見たが、悄然として尾を垂れて彼方に路の上を去つてしまつた。

犬の後姿を見送りながら、Hは心で何となく可哀さうなことをしたと思つた。しかし、この場合仕方がないといふやうにも思はれたのである。

ある時、HはBに向つて、

「B君、クロは大變にみぢめになつたね。いつか猫を喰ひ殺したが、あの時分はクロは得意だつたのだよ。人間だつてやはりこんなものだらうね」と、言つた。

「クロは死んでしまつた方がいゝんだ。其の方がいくら幸福か知れないさ。人間なら自殺をするんだらうがね」と、Bは答へた。

「しかし、あんなになつても生きてゐる方が幸福なんだらう。死んだら、もはや何にもないぢやないか」と、Hは言つた。

「どうせ助かりつこはないものなら、運命の手に最後まで委して置くのは慘酷だよ。早く死んで苦痛から脫れるのだ、いくら幸福か知れない」

「生きてゐる上は、苦痛ばかりぢやないだらう」と、Hが言つた。

「どんな幸福があると思ふね」

「まだ癒らんとも限らない。人間にしても、獸物にしてもみんな未來に對して希望を持たないものはない筈だ」

「ぢや君は、あの犬を救つてやる氣かい」

「僕には、そんなことが出來ない」

「ぢや、苛酷な運命に委して置きながら、まだ幸福なことがあるだらうといふのだね」と、Bが言つた。

「まだ分らないぢやないか。助かるかも知れないから」と、Hが答へた。

「僕は君のやうな人道主義者を心から憎むよ。飯も與へないで、お前は生きてゐるから有がたく思はなければならないといふと同じことだ。殺すか、救つてやるかするのが人道主義者だらう。殺すといふことは、いかなる場合に於ても罪惡であるといふことが出來ない。既に致命傷を負つて苦しんでゐる者が、一日生き延びたからとて何の幸福があらう。寧ろ早く苦痛を去つてやつた方がいゝ譯だ。

「人間でも、やはりさうだといふのかね」と、Hは問ふた。

「さうだ」と、Bは答へた。
「だから、君はクロを殺してやつた方が、この儘にして置くより愛のある仕方だといふんだね」
「人間なら自殺をすることが出來る。消極的にでも運命に反抗することの出來るのは人間ばかりだ。他の動物には其れが出來ないから、可哀さうなんだ」
「僕は、いくらなんでも殺すことが出來ない。人間にそんな權利がない筈だから」と、Hは激した調子で言つた。
Bは、これに答へなかつた。たゞ默つて顏に冷笑を浮べてゐた。

ある日、二人は往來で出遇つた。
「僕は、クロを殺して來た」と、Bが言つた。
「嘘だらう」
「ほんたうだ。橋の上から、突き落したんだ」
「容易に君に殺されるものか」と、Hは其れを信じなかつた。
「よぼ〳〵になつてよく歩けないんぢやないか。頸に繩を付けて引摺つて行つた。さあ、お前は早く死んだ方が樂になつていゝのだからと言つて、橋の上から突き落さうとすると、ぢつと白眼で僕の顏を見たよ。其時、僕は、いつか猫をこの犬が喰ひ殺した光景を眼に描いたのだ。而して一思ひに押すと、水の中に落ちて、ブク〳〵と泡が立つて其儘沈んでしまつた」と、Bが語つた。

「嘘だ。嘘だ。其れは嘘だ。病氣に罹つてゐるものを、なんでそんな酷たらしいことが出來るものか」と、Hは叫んだ。

「H君、嘘だと思ふなら河へいつしよに行つて見たまへ」と、Bが言つた。

二人は河邊へ行つて見た。橋から下に一丁ばかりの岸に、河柳の蔭の處にクロの死骸は頸に荒繩を結び付けたまゝ堅くなつて浮いてゐた。

これを見ると、Hの顏は火のやうに赤くなつて、狂はしさうにBの腕を摑んだ。

「B君、今日限り僕は君と絶交する」

Hの眼からは、熱い涙が流れた。其の聲は制し切れない息急しさのために、震へてゐた。

其れから、二人は、もう今迄のやうに親しい友達でなかつた。また、半年と經たないうちに、Bは學校を退いて何處にか、彼の家族と共に移つてしまつた。Bの一家は、この土地の生れでなかつた。彼の父親は、他處から轉勤してこの土地に來たのであるが、また他國に轉勤して行つたのである。

十年の月日は過ぎた。現在、Hは東京に住んでゐた。彼は妻を迎へた。新進作家兼批評家として、彼の聲名は漸く世間に知られて來た。彼は人道主義者として、新理想主義者として當時彼の文壇からは見做されてゐた。

彼は、尚ほ少年時代に親しかつたBを忘れることが出來なかつた。あの後、Bは何うしたらう。あの男は、俺と性格は異つてゐたが、しつかりしたところがあつた、俺よりは、いくら思想が徹底してゐたか知れない。其の俺が、かうして兎に角世間に知られるやうになつたのに、Bは何處に何うしてゐるだら

うかと思つた。

結婚してから既に久しかつた彼は、よく思ひ出して、其の妻に向つて、

「俺の子供の時分に、Bといふ偉い奴があつた。あの男などは、俺よりも先に世間に知られてゐなければならぬ筈の男だつた。頭がよくて、あの頃でさへ、可なりしつかりとした思想を持つてゐた。世の中といふものは不思議なものだ。よく其の男のことが思ひ出される」と、言つた。

「ほんたうに、どうなさつたでせう。きつといんまに分りますよ」

「あの男のことだから、日本にゐないのかも知れない」

「さうかも、分りませんわね」

Hの妻は、屢々、其の男のことを彼から聞かされた。

一九一六年も暮れやうとする十二月のことであつた。思ひがけもなく、某雜誌社氣付として差出されたBからの手紙をHは受取つたのである。

Hは早速表記のBがゐる所を見やうとした。しかし、其れは書いてなかつた。止むを得ず消印を見ると臺北となつてゐた。すると、この手紙は臺灣で出されたものであつた。中を開けて見ると其の後の久闊が叙してあつた。

次に、讀んで行くと、

「自分は漂浪の身の上である。處を定めない。其の間にも、及ぶ限り君の書いたものは讀んでゐる。君に對する世間の評判のいゝのは何よりも喜ばしいことだ。たしかに君は人道主義者であり、理想主義者

であるやうに考へられる。けれど、人生には、君の思ひも寄らない生活があることは事實だ。しかも其れが生活でないとは何んで言へやう。たとへば、無智矛盾、無反省の人間にも、美しい生活があることがある。常に自省反省を叫ぶ君はどう考へる。藝術よりも生活其のものが根本だ。文學でない、政治でない、哲學でない、たゞ生活――人間のほんたうの生活に觸れよ。而して、其れを理解せよ。僕などは、遂に何もなさずに終るつまらぬ人間に過ぎない。けれど、せめて一日でもほんたうの生活がしたいと思つてゐる。こゝに僕の主義がある。同時に僕の實行がある」

こんな一節が、其の手紙の中に書いてあつた。

讀み終つたHは、手紙を卷いて、最後に妻の處へ持つて行つた。彼は、心の激動を押へることが出來なかつたからだ。而して、妻に訴へて――何事に於ても、常に彼の同情者である――慰めてもらひたかつたからである。

敏捷な彼女は、夫の眼付や、表情で大體其の心持を理解した、而して、Bの手紙を手に受取つて、

「何を書いて寄來したの、あなたからたび〳〵この人のことを聞いてゐたから、大抵分つてゐるけれど、皮肉を書いて寄來したんでせう……」

から言ひながら、彼女は其の手紙を讀んで行つた。

Hは傍に立つて、ぢつと彼女の眼の色を眺めてゐた。「妻も、きつとこの手紙を讀んだらBの言ふことに同感するにちがひない」と、彼は心の中で思つた。

妻の眼には、だん〳〵呼び醒されつゝある理性の閃きが認められた。嚴肅な思想に刺戟されて眼の表

情が智的に變つて、光りを增しつゝある。

けれど、妻は其の手紙を全く讀み終ると、平常の柔和な眼付に返つた。

「やはりこの人よりか、あなたの方が偉いと妾はさう思ひますわ。この人は、立派なことをいつたつて、まだ形に現はしてゐないでせう。こんなことを言つて寄來すより、自分で書くなり、運動を起した方がいゝと思ふわ」

「お前は、ほんたうにさう思つてゐるか」

「えゝ、さう思つてよ」と、彼女は言つた。

「あゝ、生なか頭の中にある少しばかりの文學や、哲學が俺の考への邪魔をしてゐるのだ。善とか、惡とかいふことを誰がきめたのだ。而して、誰が其の口眞似をして醜いとも思はないのだ。小供の時分から臆病な俺は、自分で、ほんたうの生活を築くことだ出來なかつた。たとへ、今日まではかうして、周圍の人間とは妥協をしなくても、外國のある作家や、哲學者と妥協して來た」

「心から、ほんたうに同感したのなら、決して雷同や、妥協ぢやありませんでせう」

「其れは、すべての生活を知つてから後のことだ。Bがいふとほりだ。いろ〳〵な人間の生活があるが、なんでそれが皆なほんたうの人生ではないと言ふことが出來やう。考へて見れば俺なども、さうであらうが、いまだ人生に對する確信がないうちに、早くも人生觀を標榜して、呼號するなどは滑稽の至りだ」と、Hは自分を冷笑した。

妻は、これを聞いたけれど、もはや、何も言ふことが出來なかつた、しばらく二人の間には沈默がつ

づいた。

冬が過ぎて春となつた。慌しく花は散つてしまつて、天地はいつしか憂欝な濃綠の頃となつた。Hは無事に日を送つてゐた。毎年この頃になると、彼は何よりも神經衰弱に襲はれるのである。

夜、眠られぬまゝに獨り起きて、二階の欄干に身を凭せ、茫然として、黒色の夜を見詰てゐた。既に夜半であつて、四邊は寂然としてゐる。たゞ木の影や、町の建物が、音もなく闇の裡に浮き出て見えた。遠くの空で、かすれたやうに汽笛の聲が聞える。ちやうど牡丹の咲く頃であつた。支那の詩を思ひ出すと何となく身は遠い昔の詩句の人であつて、夜中に燭を取つて明日にも風雨を慮りながら牡丹の花を看てゐると、櫓聲の過るのが櫛比した建物の間から聞えて來るやうな心地がした。

Hは、いろ〳〵の人々のことを思ひ出した。また歸らぬ日のことを眼に描いて、空想に耽るうちに、何處か都會を離れて旅をしたいなどゝ思つた。

風のある日の暮方であつたが、彼は勞働者や、下級な官吏などのよく集る酒場に入つて酒を飲んでゐた。而して、いゝ加減に酔つて好い氣持になつたのであつた。ふと其時頭を上げて、あちらの卓を見ると、勞働者ともつかず、また官吏ともつかず、洋服を着た男が誰か知らぬ二人連の男と笑ひながら酒を飲んでゐた。其れが、どうしてもBに似てゐたのである。

「あれはBだ。よくBに似てゐる。十年以上も逢はないのだが、昔のBと少しも變らない。どうして、こんな處に來てゐるんだらう。其れとも他人の空似であらうか」

かうHは思つて、其の方を見てゐた。Bに似た男は帽子を眼深に被つてゐるので、顔を上げて傍の連の

男に話する時でなければ、其顔が分らない。Bに似た男は絶えず笑ひながら話をしてゐる。其の様子がBそつくりである。たま〳〵、顔を上げて、此方を見たがHを知らないのか、其れとも氣付かなかつたのか其儘、眼を他の方へ外らしてしまつた。

「人違ひだらうか」

Hは、獨語を洩らしながら、いつまでも彼方を見てゐたが、其のうちに頭の中にいろ〳〵の空想が湧いて下を向いて考へ込んでゐた。

暫らく經つてから顏を上げて、其の方を見ると、もう、其の人達は見えなかつた。いつの間にか此處から去つたのである。たゞ、先刻まで、彼等が向つてゐた卓の上には皿や、コップや、空になつた罎などが散亂してゐるのが眼に映つた。

Bに似た男を見てから、Hの心は壓されるやうな氣持がした。而して、體を鞭で鋭く打たれるやうな氣持がした。

「Bは、この東京に來てゐるのでないか」と、Hは途を歩きながら思つた。

彼は、舊友のBに遇ひたいといふ心もあつた。同時に、彼に遇つたなら、これまでの自信が跡形もなく彼によつて打壞されるやうな不安が感じられた。

Hは、家に歸つた。妻に向つて、酒場でBによく似た人を見たが、彼でなからうかと語つた。

「いつか臺北からお手紙をお寄來しになつたのでせう。其れは人違ひだと思ひますわ。若し、東京へお出になれば、きつと私共の處へお寄りなさるでせう」

「いや、Bかも知れない。其のうちに訪ねて來るかも知れない、と、Hは言つた。
「ほんたうにどんな人でせうね、妻、其の方に一度お目にかゝつて見たい氣がするわ」
「お前のやうな人間は、すぐにBの思想に感化されるよ」
Hは、何となく、Bがもし此家を訪ねて來ることがあるとしたら、自分等の生活にある動搖が生ずるやうな怖しさが漠然として感じられた。
「そんなに魅力のある方なの」と、妻は、好奇心に輝いた美しい眼を向けた。
「僕でさへ、あの男のことを考へると壓される氣持がする」
「ほんたうに、どんな方でせう」と、彼女は重ねて言つた。
「きつと、其の内にやつて來るだらう」
かうHは言つた。彼はこの時、イプセンの作に出て來る不思議な男の影を幻に描いてゐたのであつた。
「どうして、この頃僕は足許に暗い穴のやうなものが、時々無駄眼に見えるのだらう。而して、不意に其の中に陷ちさうな氣がして、背筋に冷水をかけられたやうに、惡感を感じて、冷汗が脇の下から流れるのだらう」と、やゝしばらくしてからHが言つた。
妻は、ぢつと彼の顏付を眺めてゐたが、「神經衰弱に罹つてゐらつしやるのです。ちつと旅行でもなさつてはよくありませんか」と、彼女は言つた。
もう、其の日は暮方であつた。彼は俯向いて默つてゐた。窓の外には眠氣の醒めさうに青々とした木々の小枝が風に動いてゐた。
Hは旅に出て、旣に數日を過した。
彼は、小高い丘の上に立つてゐた。下には藁葺の家が點々と見えて、畑には桐の花が咲いてゐた。丘

に聳えて二本の松の木は亭々として眞晝の日の光りを浴びてゐる。

白い雲が、彼方の野原の上を飛んで行つた。百姓は田に圃に働いてゐる。あたりには一本の烟突すらなく、空の色は澄み切つてゐた。彼は、この景色を見てゐるうちに、都會の生活を思ひ出さずにはゐられなかつた。

此の、のんびりとした自然と、其處に出て働く人々と較べる時、都會の生活は何うであらう。彼等は碌々太陽の光りを浴びることが出來ない。高い建物の陰は、終日日光を仰ぐことがない。また、新鮮の空氣を其處に遊んでゐる子供等は呼吸することが出來ない。常に、空の色は煤煙のために濁らされて草木の葉は雨の降つた後でゝもなければ、生々として風に吹かれて躍るのを見ない。

其處には、嫉妬、陷阱、競爭がさながら渦卷きの如くなつて行はれてゐる。彼等は既に疲れ切つてゐる。狂つてゐる。而して、自分の健康を犧牲にし、小供の生命を犧牲にしてまで、尙ほこの不自然な生活をつゞけやうとしてゐる。

「なんで、其處から離れて、よりよい生活を營むことが出來ないのだらう」

「なぜ、自分は、其處にかぢりついてゐなければならぬのか」

彼は、さま〳〵なことを思つた。

晩方になると、宿屋の二階から、暮れて行く田圃の景色を眺める。彼は彼方の森陰から洩れる燈火を見た。馬を引いて家に歸る百姓の影を見た。また、早くも店頭の戸を閉して、眠りに就く用意にかゝる小さな町の人々を見た。

無智といふ言葉が、すべて彼等の上に付けられ、よく言ひ現はすであらう。彼等は藝術を知らない。政治を知らない。最近の其他の科學について知らないだらう。もとよりトルストイを知らない。カール

マルクスを知らない。

其れを知らないことが、人間本然の生活にとつて何であらうか？。彼等は、政治や、文學を知らないけれど、快樂を經驗し、時には幸福であり、本能の滿足がある。其處に地上の喜びと、悲しみとはほんたうの生活が見られるのである。

Hは思つた。然るに自分には、生活が分つてゐるだらうか、自分の周圍にゐる多くの智識階級は、果してこの無智な人々の生活だにも、ほんたうの生活に觸れてゐるだらうか。小說で見たさま〴〵な人間の生活や、文學史や、哲學史を通じて見た人生は、抑も、誰の見た人生であり、生活であつたらうか。

Hは、心の空虛に堪へられなかつた、其ればかりでない、自由な生活を創める上に、いろ〳〵な邪魔物を頭の中から破壞してしまはなければならぬと考へた。

「留守に、Bはたづねて來なかつたか」

旅行地から二たび東京に歸り、家に着いた彼は、出迎へた妻の顏を見ると、直にかう言つて問いた。

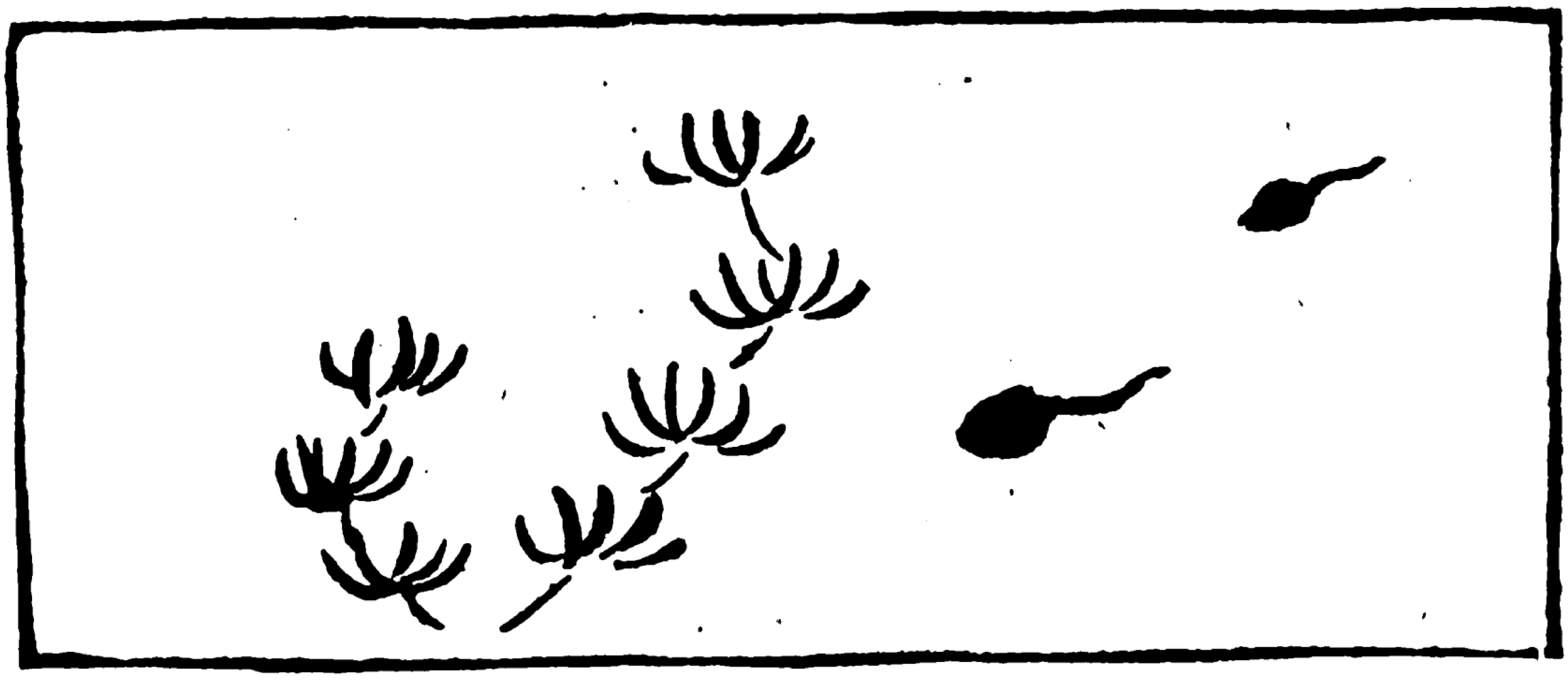
「いゝえ、ゐらつしやいはしませんよ」と、彼女は唐突になんでそんなことを聞くかといはぬばかりの顏付をして答へた。

數日の後であつた。Hは机に向つて、ある雜誌のために論文を書いてゐた。

其處へ、知らぬ人からはがきがとゞいた。差出し地は大連である。「B氏事當地病院にて療養の處、去る×日遂に死去致し候に付き此段お知らせ申上げ候」と、其れには書いてあつた。

Hは、茫然自失した。眞に青天の霹靂であつた。

――一九一九、五作――



悲喜劇

職業紹介所（壹幕）

中村吉藏

登場人物

田口一郎（老人）　村井つる（老女）

丸木要（片手の男）　磯原久（紹介所主任）

栗岡助造（職工）　徳田よし子（女事務員）

おたつ（その妻）

場　所

職業紹介所の應接所

上手は鼠色の壁、片隅に二階への段梯子の上り口が見えてゐる、下手に片寄つて下半部と板部で圍つた事務室、正面に出入の玻璃戸口があつて、廣い土間の一隅には、古びたベンチが据えてある、室内はガランとして灰色の空氣がそこらに立こめてゐる、(主任と女事務員とは、卓に向つて、事務を執つてゐる、電話の鈴がしきりに鳴る、德田は起上つて、受話器を耳へ當てる)

德田「ハイ、ハイ……お女中ですか？……何うも此の節は至つて拂底で、何方様(どちらさま)でもお困りのやうでございますね……お婆さんなら、時偶(ときたま)、口を探してくれつて云つて來るのもございますけれども……お若いの？ホ、、、、、差當つては一寸と心當りがございませんが何んなら御處を聞かせて置いて戴いたら、此方からお知らせいたしませう……ハ、さうですか、……では左様なら」

磯原「相不變、女中の御用かね？方々で大分困つてると見えるな、口入屋を探しあぐねて此處へまで駄目を押しに來るんだから……、何しろ斯う世間の景氣が善くて空(あ)いた場所なら禿頭(はげあたま)へでも工場を押建てやうといふ勢ぢや、女の子と來ちや引張り凧さ、今に女中奉公なんかする者はなくなるだらう」

德田「全く然うですわねえ、女中奉公なんかしてるより、女工稼の方がよつ程(ほど)お給金も善(い)いでせうし、それにあゝして勞働問題なんかやかましくなつて來てるんですから、待遇も段々よくなつて行きませうしね」

磯原（苦笑）「德田さんも勞働問題を研究してるんですか？イヤ、世の中は何うも恐ろしくなるね、……それも然うでせうな、世間は黄金の洪水だといふに、お腹一ぱい食べられないで、職業の口をさがしに此處へまぐれ込んで來る者が相不變種切れにならないんだからね、ある所にはある、ない所にはない、これぢや何時迄經(た)つても同じ事だてハ、、、」

德田「ですが、こんな景氣の好(い)い時に、職業の口の見附からないつていふ人は餘つ程並外れがしてるんですわね」

磯原（制するやうに）「シッ、聞えますよ……兎に角藥にで

もつかまろうといふ可愛さうな人たち許りですよ、黄金の洪水の底の方へ溺れ死にしかゝつてるんだからね」

（入口から田口一郎が、破れ腐つた麥わら帽子、汗と垢とで縞目も何も分らなくなつた、處々、襤褸の下つた、單衣に、よれ〳〵の帶をしめひよろ〳〵と入つて來る）

田口「一寸とお尋ねしますが、何か私に向くやうな仕事の口はありますまいか？お世話が願へれば仕合せですが……」

德田「然うですね、……名前と住所を聽かせて下さい」

田口（自ら嘲るやうな笑）「ハヽヽ別に定つた住所はありませんわい、お見かけの通り宿無しの天竺浪人でな、斯うして二本の足で私の立つてる處が、まァ私の住所でせうな」

德田「でも本籍地はあるでせう？何處の產れですか？それから名前は？」

田口「そりやア產れ故鄕はあるにはありますが、今の私の身分では一寸口へ出すのもお耻かしいやうでな…」

德田（少し焦々として）「それから聞かせて貰はなけやお世話も何も出來ないぢやァありませんか？」

田口「イヤ、職業の口さへありや本籍も名前も云つて了ひますが、その口がありますかいな、名前の云ひ損では、赤耻の上塗ですからな」

德田（獨語くやうに）「分らない人ねえ……本籍地と名前から聞かせて貰はなけや此方が困るぢやァありませんか？」

田口「それさへ云つたら乾度御世話を、して下さるんでせうな、それに間違ひありませんか？」

磯原（額を、出して）「それを聞いたからて、世間へ吹聽する譯でも何んでもありませんから、心配せんで云つて下さい、唯、書き留めて置く丈です……德田さん、その帳簿を見て下さい、この方に向くやうな口はなかつたかな？」

田口（一禮して）「何うもとんだ御厄介を相かけますな、……實は私は岡山縣福山在のさる鄕士の家に產れたものですが、何しろ國を出てからもう四十年の餘にもな

りましてな、本籍地もあちこち移り通しですから申上げた處で仕方がありますまい、名前は田口一郎文久二年生れです」

磯原「併し最近には何處にお住ひでしたか、それを云つて下さい？」

田口（苦笑しながら頭を撫廻して）「最近と申しますと……實はこの半月餘りは、板橋の木賃宿に轉つて居りましたが、屋根代が少々滯つたといふので、今朝とう〳〵追ひ出されましてな……イヤ、何うもその宿の婆め因業な奴で、義理も法もありませんわい、長い間帳附をしてやり、いろんな面倒な世話許やいてやりましたのに、四五日前に泊り込んだ色の生つ白い浪花節語りが、チヨツと色眼を遣ふと、直もうそれに引つかゝつて了ひやがつて、その奴の云ふ成り次第、私を眼の仇にし出しましてな……」

磯原「その以前の御住所は？」

田口「その以前は區役所の代書人もやりました、小使をやつた事もございます、それからお耻しい次第ですが困りぬいて葬儀社の人足にも傭はれて行きましたし、あの廣告屋のサンド、ウヰッチ、マンとか云ふ眞似までやらされました、いやもつと酷い事もやりましたがね人間何うも落ち目になると仕方がありませんでな…尤もこれで若い時は地方の稅務署の署長さんを勤めた經歷もあります、勲八等まで頂いて、おまけに恩給が附いてたのですがねその後、舊藩家の家從に取立てられましてな、お上にも信用がありましたのに、つい酒の上で面白半分花牌がるたを引いたのを日常から嫉んでる奴等の爲めに密告されましてな、何うも酷い目に逢ひました、もう年齡は取つてるしそうなると宛で羽根を毟つて全裸體で押ぽり出されたやうなもんですよ、自棄になつて飲む打つ、愈々うだつは上りません、地上許り這ひづり廻つて、とう〳〵泥溝の中へ打落つて了つたんです……尤もこの頃は生まじめにやつて居りますがな」

磯原「御家族はないんですね？」

田口「家内は七八年前に、亡つて了ひました、…娘も二

人ありましたが、二人とも死んで了ひました……イヤ私も寧そ歿はつて了やア厄介はないんですが、生憎まだ業が盡きんと見えましてなハヽヽヽヽ」

徳田「年の老つた方の口は、生憎ありませんわ、……唯、こゝに別莊番つていふ申込が附いてゐますが、もう二月も前の事つたし、それに老年の夫婦者でなくちやいけないていふんですからね」

磯原「アヽ、あの青木子爵家の別莊番　房州のだつたね、夫婦者つていふのぢや一寸と困るね」

田口「別莊番なんか難有いですな、何卒そこへお世話が願へないものでせうか？」

磯原「夫婦者ていふ御註文だからむつかしいね」

（此時、胡麻鹽交りの髪毛を小さい丸髷に結つた、五十歳前後の村井つる、古ぼけた信玄袋を片手に、破れた蝙蝠傘を持添えて額の汗を拭き〳〵入つて來る）

村井「今日は……又舞ひ戻つて參りました、折角御心配かけたんでございますが、何うも私には辛棒が出來かねましてね……」

磯原「アヽ村井さんか？一週間續かなかつたなハヽヽ」

（と苦笑）

村井「イヤ、支那の學生の賄ひ方なんか、とても私なんかには勤まりませんよ、臺所中もう眞黑に豚の油でくすぶり返つて、あの匂ひを嗅いだ丈でも胸がムカ〳〵して來ますからね、それに貴方、コテ〳〵塗り立てたお白粉の化物のやうな若い女が入りびたりで、一晩中、キヤツ〳〵、ロク〳〵騷ぎ立てるんだから、眠られないぢアありませんか、もう眞平、眞平……」

（と手を振つて見せる）

磯原「そりやア困つたね、子供のある家は忌だといふんだし、井戸水では御免だといふし、村井さんはなか〳〵贅澤屋だから」

村井「これでも貴方、落ぶれてこそ居れ、元は官吏の奥さんですもの、樂は出來なくても、さう苦しい目は見たくありませんからね」

田口「私の方の口が直ぐ見附からんとすりや、此所へ泊めては戴けますかな」

磯原「日日を限つて、お泊めする事は出來ます」
田口「然うですか？尤も斯うして待つてゐる中に、口が出來んとも限りませんな……何うしたものかな」—（云ひ／＼ベンチの方へ行つて、袂からバットを取出して、マッチを擦付ける）
村井「何か私に向きさうな善い口はありませんか？」
磯原「ハヽヽヽ、樂の出來さうな口は一寸と見附かりさうもないね、……夫婦者の別莊番つていふのが一つ申込があるが、村井さんは獨身者だしね」
村井「別莊番？そりやア善ささうだね、獨身者だつて構はんでせう？何處です」
磯原「麹町の華族さんだ……尤も別莊は房州の海岸だが、獨身者ぢや落第だね」
村井「然うか知ら……つまらないな」
（電話がしきりにかゝつてゐる、穂田が事務員がそれを磯原主任へ取ついでゐる）
（村井は煙管を、出して、煙草をつめながら）
村井「一つ、火を貸して貰ひませう」
田口「サア／＼何卒……」
村井「汝さん、バットなんか吸うて、なか／＼贅澤ですね」
田口「ハヽヽヽ、私の今の身分ぢやア、チト贅澤かも知れませんな、だが、まア煙草を吸ふ位が樂みで、生きてゐるやうなもんですよ、それからまア、寢て夢を見る、夢の中ぢやいろんな面白い事が出來ますからこれも一つの樂みでさアね」
村井（しみ／＼感じたやうに）「嘘もありやせんね、こんな所の御厄介になるやうぢや、いつそ人間を廢業しちやつた方が氣が利いてるかも知れませんからね、」
田口「イヤ私も元はヒョイ／＼そんな氣を起しましたがね、貧乏や苦勞もしつゞけると、慢性病になりましてな、一通りの辛い事や苦しい事ぢやもう應えなくなりますよ、私なんか大分體に鞭ダコが出來たんでせうハヽヽヽ」
村井「汝さんはなか／＼面白い事を云ひますね元は身分があつた人でせうね？」
田口「今、聞きや汝さんも官吏の奥さんだつて云ふぢや

ありませんか、お耻かしい次第だが、私もこれで判任官の古手でね、勳八等を頂戴した事もありますよ、今ぢや斯うしてのら犬のやうに、うろ〱仕事の口をさがし歩いちやゐますが、もう力業は出來ないしする氣もなし、何處か樂隱居の口でもあつてくれると善いと思ひましてなア、、、、、」

村井「へエ、勳八等の判任官……然うですか？實は十年前に亡くなつた私の連合ひも判任官だつたのですよ、然う云へば何處か貴方に似た處があります、口髭の工合なんか……この信玄袋の中に、寫眞が入つてゐます、御目にかけませう」（取出して見せる）

田口「ハア……なか〱お立派な方ですね……信玄袋にもいろ〱着物が入つてるやうですし、貴方は一廉の財產家ですよ」

村井「今ぢやこれ丈が私の財產です、大したもんでせう……これでも貴方、お嫁に來た時分には、簞笥の一棹もあつたんですがね……」

田口「イヤ、あら簞笥も何も入りませんよ、今にみゝずのお嫁に行く番が廻つて來ますからねハ、、、、」

村井「そりや然うね……家の人がもつと永く生きてゝくれたら、同じ苦勞しても又樂みがあるんでせうがね、死んぢまつちやつまらない」

田口「汝さんも折々思ひ出すでせうね、……無理はない」（と相手の顏をしみ〲見る）

村井（睦を見合せてゐたが、急にニッコリ笑つて）「樂隱居の口つて、貴方、さう云ひましたね？」

田口（も微笑）「何うですな？　別莊番にでも行く氣はありませんか？」

村井「獨身者ぢやアいけないんですつて？」

田口（膝を乘り出すやうにして）「そこが御相談もんですよ…お互ひに獨身者ぢやア落第でせう、世間にや引越し女房つていふ奴もありますから可笑しかありませんぜ？茶呑友達になりませうか？」

村井「然うですねえ……同じ苦勞しても二人なら又樂みも出來ませうがね」

田口「煙草を吸ふより外に、又一つ樂みが殖えやうてい

ふもんですよ、まア一つ、バットでもお吸ひなさい」
（と一本さし出して、マッチを附けてやる）
村井「難有う……でもあんまり年が老り過ぎてゐますし
ね……」
田口「私がもつと若いといゝっていふんですか?」
村井「否え、お互ひに、年が老り過ぎてるといふんです
よ」
田口「でも、汝さんは色つやが善い、年よりは若く見え
ますよ」
村井「さうでせうか……皆さんがさう云つてます、汝
さんは、その肋骨が出過ぎてゐて、何んだか痛さう
ぢやありませんか?」
田口「これでもまだ氣は若いつもりですよ」
村井「氣許り若くてもね……同じ事なら年ももつと若
いといゝんですが……」
（此時、筒袖を着た、片手のない、中年の職人風の男、丸木要が
入つて來る）
丸木「一寸と伺ひますが、何處か工場で私を使つてくれ
る口はないもんでせうか?」
磯原「工場なら、口はいくらでもある筈だが……汝さん、
今まで何處で働いてたんだね?」
丸木「實は、池袋の綿絲工場で稼いでたんですがね、チ
ヨッとした油斷で調べ革へ捲き込まれちやつて、負
傷をしたもんだから、そこが勤まらなくなつちやつ
たんでさア」
磯原「はア、負傷をした?……それはとんだ災難に逢つ
たもんだね」
丸木「災難つて云やア災難だが、これが貴方、戰爭へ出
て腕一本取られちやつたんなら、年金附の勳章もの
でさアね、處が工場ぢやア然う行きませんや、僅か
許りの涙金で、おさらばと來たんですからね」
磯原「ぢやア片腕無くしたんだね?」
丸木「へゝゝゝ、しかも右の利腕をやられちやつたんで
さアね、仲間の奴らア、とんだ左甚五郎が出來たつ
て洒落を云つてますさア、此方やそんな洒落處ぢやアあ
りませんや、干死しちやならないと思ふ一心で、左

の手一本で提灯を張つたり、團扇を張つたり、ケチな手仕事を習ひ始めて、この頃漸つと一人前になりかけたんですがね、運の悪い時は悪いもんで、仕事の手傳ひやら飯焚きやらしてくれてた、お母が急に病附いて、もう何うにも斯うにもあがきが附かなくなつちやつたんでさア」

磯原「はア、そりやア何も氣の毒だね、だが左の腕一本ぢや、何處の工場へ行つても使つてくれはすまい、それに折角覺えた手仕事があるのならその方を一生懸命にやつたが善いぢやないか？それで生活が立たん事もないだらう」

丸木「處が病人まで抱え込んぢやとてもやり切れませんや、それに飯を焚いてくれる者もゐないんだからこいつが一番苦になりますさア、いつそお母を養育院へでもたゝき込んで私は何處かの工場へ夜番にでも住み込まうかと思ひ立ちましてな、それで斯うして伺つたんです」

磯原「工場の夜番？……そんな口がありましたかな？」

徳田（帳簿を繰つて見て）「一寸と今、ありませんわ」

（この間、丸木の話に、次第に耳を傾けて來た村井つゝ、起上つて傍へ寄つて）

村井「汝さん、飯を焚く世話位なら、私が行つて上げても善ござんすよ」

丸木（ぢろぢろと見ながら）「汝さんがですか？……でも、給金を拂へる身分でもありませんし、それに口が又一つ殖えちや、愈々困つちまひますさア」

村井「汝さんも何うせお嫁を貰ふのぢやアありませんかい？何時まで一人でもゐられやすまいし、それに片手ぢや嘸不自由だらうと思うて、私も話を聞いてつい氣の毒になつたもんだから、飯焚になら行つて上げても善いと云ふんですよ」

丸木「難有う……御親切は難有いんだが、嫁の娘のと、贅澤ゥ云つてくれる身分ぢやアありませんや、自分の體の仕末から先へ附けてからでなけりやなりませんからね」

村井（笑顔で）「汝さん、そこがまだ若いんだよ、夫婦つて

云ふと一人が苦勞して一人が樂をするやうに思ふから間違ふさ、二人で苦勞して、二人で樂をすりやいゝぢやアないかね？汝さんさうした不自由な片腕で、手職まで覺込んだつていふその心掛が私はいかにも賴もしいから、何處かで稼ぎ人の嫁さんを見附けて上げやうていふんですよ」

丸木（笑顏になつて）「何うも御親切に……成る程それもさうかな、稼いでくれる女房なら貰つても損はありませんな、だが、私のやうな片輪者の家へそうした嫁が來てくれるか何うだか？」

村井「オイ、ソレと急には見附かりませんよ、でも破れ鍋にとぢ蓋つてな、さう心配したものでもない恰度似合つたのを私がその中に取狩つて上げませう、少し位、年が行過ぎてゐてもそれ位は辛棒しなさいよ汝さんの家は何處ですかい？」

丸木「この裏の、むきみ家の二階を借りて住んでるんだがね、まるで豚小屋でさ」

村井「何んなら、私がチョッと行つて、見て置きませう飯ぐらゐは何時でも焚いて上げますよ」

田口（堪へかねたやうに、村井つるの袖を引張つて）「オイ汝さん、別莊番の方の話は何うしたんだい？」

村井「汝はあんまり年が老り過ぎてゐてヂヽむさいからな」

田口「婆の癖しやがつて、この色情狂」

村井「汝こそ棺桶へ片足突込んでる癖に、私を口說きにかゝつたぢやアないか恥ッさらし」

田口「何方が恥つさらしだい、人のバットを二本も只呑みしやがつて、泥棒め」

村井「何が泥棒だい、呑んでくれつて云ふから呑んでやつたんだ、難有いと思ふがいゝさ」

田口「まだ減らず口を叩きやがるか、この白骨め、へし折つてくれるぞ」（と打かゝる、丸木が遮る）

田口「手を放せ、この靑二才め、放さんか」

丸木「年甲斐もない、喧嘩なんかしなさんな」

村井「眞實に、年甲斐もない、馬鹿な爺さんだ」

田口「この靑二才め、邪魔をするとその殘つた腕までも

ぎ取つてやるぞ」

丸木「何を、生意氣ぬかすんだ、默つて聞いてりやい丶氣になりやがつて、減らず口を叩きやがる、腕は一本でもな、貴樣なんかの芋殼のやうな手とは違ふぞ」

磯原「ア丶、いけない〳〵、此處で毆り合ひなんかやられちや困る、皆、出て行つて貰はふ」

村井「ソラ、叱られた、老爺さんが惡いんだよ」

田口「汝が餘計な口を利くからだ」

村井「勳八等が泣きますよ、氣を附けるが善い」

田口「判任官の寫眞が泣いてるだらう、も一度、出して見な」

磯原「靜かにして貰はふ、こ丶は喧嘩口論する場所ぢやアない」

（乳吞兒を抱へた廿一二の、女おたつ、亂れた鬢を掻き上げながらあたふたと駈込んで來る）

おたつ「お願ひいたします、お願ひいたします、何處か女中奉公する口はございませんか？今夜からでも上りたいんですが？」

磯原「女中奉公かな？それはいくらでも口はあるが、併し、その乳吞兒は何うしますか？それを抱へて住み込まうて云ふんかね？」

おたつ「ハイ、これを放す譯には參りません、この子を手放す程なら、寧そ一緒に路傍へのたれ死した方が增しでございます」

（眼頭ににじむ淚を拭いてゐる）

磯原「さア、子供附きの女中奉公といふのは一寸と厄介だね？」

おたつ「實は何でございます、私の亭主ていふのは、そこらの工場の職工でございますが、この頃收入りが善いので飮んだり、遊んだり、惡い癖が附きましてね、その揚句が貴方、何處かの女に引か丶つてとう〳〵それを家へ連れ込まうていふんでございますよ、私はもう愛想も小想も盡きて了ひました、寧そ死んで了ふかとも思ひましたが、この子の可愛さに引かされて、そんな眞似も出來ませんし、何處かへ御奉公でもしてこれを育て丶やりたいが一心で、お願

に出たのでございます、そんな口は見附かりますまひいか？」

磯原(言葉さらに)「それは何うもお氣の毒だが、子供まで引取つてくれる奉公口といふのは、一寸と、その六ッかしいですな」

おたつ「今夜から寢る所もありません、食べる的もないんですからね、困つて了ひました」

磯原「泊めるには泊めて上げますがね、こゝは養育院とは違つて、お二人を養うて上げる譯には行かないんです、その御亭主を何んとか說諭して貰ふて、丸く納まるやうな事になればいゝんだがね」

徳田「眞實に、お氣の毒ね……、勞働者にお金が廻り過ぎても、矢張、悲劇が起るんですね」

磯原(獨語するやうに)「何方にしても、苦勞の種は盡きないんだ……兎に角、汝さんの姓名と住所とを聞かせて貰ひませう」

おたつ「私はこの裏町の七十番地の三號、栗岡たつ……(云ひかけて、ヒステリカルに泣厄りして)イヤ、もう私は栗岡ぢやアありませんわ、あんな男子の處へなんかもう決して歸つちや行きません……私は今日から宿無しになつちやつたんだ……でもこの坊やは離しやしないから……」

丸木(傍へ近寄つて)「オオ、可愛い子だね……汝さんはもうその御亭主の處へは決して歸らない氣かね？」

おたつ「死んでも歸る氣はありませんわ」

村井「汝さんのやうな年の若い、綺麗な女房を、そんなひどい目に逢はすなんて、眞實に男は惡性もんだよ」

田口(ヂロヂロ覗んで)「何に、云つてやがるんだい」

丸木(暫らく考込んでゐたが)「子供附きの奉公口はチヨツと見附かるまいね、私も傍で聞いてちや默つても居られなくなつたで、さし出口を利くやうだが、汝さんさへ構はなけりや私の家へ來て飯焚をしちや貰へまいかね？豚小屋のやうな汚い處だが、屋根代が要るぢやアなし、粥腹で辛棒する氣なら、何うか斯うかあがきが附かん事もありますまいよ、その中、善い奉公口でも見附けたらその方へ行く事にしちや何

うだらう？」

おたつ「御親切に、難有うございます……何方へ御住居でございますか？」

丸木「ついその近所でさア……思ひ切つて、むさくろしい處だから、驚いちやいけねへがねハヽヽヽ

村井「私がチョッと智慧を附けてやつたら、もう人の女房を拾ろひにかゝつてらア、まア呆れた男子だよ」

田口「矢張、婆さんより若いのが善いに定つてる、腕無し野郎でも油斷はならないハヽヽヽ」

おたつ「貴方さへ御迷惑でなけりや、何卒御厄介願ます」

丸木「迷惑も何もありやアしません、折角、飯炊きを探がしに來てた處だつたからね」

村井「嘘吐き……オイ、汝さん、私の方の談は何うしてくれるんだ、（狙ひすがる）私が先口ぢアないか？」

丸木「イヤ、折角だが、汝さんのお世話にならないでも私が自分で勝手に見附けたから、これで一元氣出して稼いで見ませうよ」

村井「この片輪者め」

丸木「何んだ、この百鳴り婆、すつ込んでろ……」

田口「ざまア見やがれッ」

村井「この嫁泥棒、今に首つ玉へ繩が附くから、覺えてろ」

磯原「こゝで騷がれちや困る、皆出て行つて貰はう、出て行つて貰はう……」

丸木「さア行きませう、」

おたつ「では御厄介になりませう、」（行きかゝると、突然入口から、青服を着た三十歳前後の職工風の男、栗岡助造が入つて來る）

栗岡「オイ、汝何うしたんだい？留守の間に逃げ出しやがつて……こゝらをウロ／＼してたといふから探しに來たんだ、さア一緒に己と歸れッ／＼」

おたつ「私や死んでも歸らないよ、あんな女なんか引張り込まうて薄情者の處へ二度と再び歸るもんか？」

栗岡「まだ引張り込んでる譯ぢやねへぢやないか？汝が本氣で飛出すつていふんなら、己だつても一度考へ直して見ねへぢやならないんだ、氣が早過ぎらアな」

おたつ「虐め殺されない中にと思つて、逃げ出したんだよ、もう汝さんなんかの世話になりやしない」
丸木「實はこれから、私の家へ連れて行くて事に話が定まつたんでさア、飯焚をして貰ふてえんでね」
栗岡（ヂロリと睨んで）「この男子は何んだい？おたつ、汝は私の眼を偸んで媾曳でもしてたんぢやねへかい？」
おたつ「馬鹿々々しい、汝さんぢやアあるまいし、今こゝで初めて逢つた他人樣が、亭主の汝よりも親切に云つて下さるんだ」
栗岡「汝はさうした間抜だから、留守の間に餓鬼を抱へて逃げ出したりなんかしやがるんだ、さア己と一緒に歸んな、餓鬼が可哀さうだ」
おたつ「この子が可愛いから、私は抱いて逃げ出したんだよ、繼母の手にかゝつて、酷い目に逢はされるかと思ふと、もう頭が燃えるやうになつちやつたからね」
栗岡「己ア道樂こそすれ、子供の可愛さの分らねへ男子ぢやアねへよ、其奴まで浚つて行かれちやア全く腑拔のやうになつちまわアな」
おたつ「この子を渡せて云つても渡すもんか？」
栗岡「文句は云はねへで一緒に歸つてくんな……己が惡かつたら謝りでもするよ」
おたつ「本氣で云つてるんかね？」
栗岡「己アチョイ〳〵浮氣はするけれど、心から汝を憎んぢやアゐねへんだよ、それが汝には分らねへかい？」
おたつ「だつて、昨夜もさん〳〵打つたり、擲いたりなんかしたぢやアないか？」
栗岡「あれやア全く酒の上の事ぢやアねへか？……己が惡かつたよ」
おたつ「あの女の方は何うしてくれるんだね？」
栗岡「まア、まア、家へ歸つてゆつくり話さう、さア、その坊主は己が抱いてやる……さア行かう、行かう」
おたつ「抱くんならしつかり抱いてやつておくれよ、落しちや忌だよ」
栗岡「馬鹿ア云つてらア、財布は落してもこの可愛い奴を落して堪るもんかい、さア行かう」

おたつ「おやア行きませう……何うもとんだ御厄介かけました」

丸木「人をかつぎやがつたな？」

おたつ「何うもいろ〱御親切に仰つて下さつて、有難うございますが、斯うして迎ひにまで來てくれましたから、兎に角一應歸る事にします、あの方が御飯焚きに行くとか云つてますから何卒よろしいやうに願ひます」

栗岡「さア行から〱」（おたつを押すやうにして、出て行く）

丸木「畜生めッ」

村井「ハヽヽヽそら見た事かだ？……何うだね、私が飯焚に行つて上げやうか？」

丸木「一昨日お出でだ……何アに、今に又夫婦喧嘩をやつて飛び出すだらう。後を尾けてやらう」（急いでかけ行く）

田口「ハヽヽハヽそら見た事かだ？」

村井「野呂間許りそろつてらア、忌になつちまふなア」

磯原「徳田さん、もう時刻だから徐々退にしませう」

徳田「ハイ……あそこの人等は泊めて貰ふつもりでせうか？」

磯原「イヤ、今に外からも歸つて來るでせうし、かれこれ滿員だから斷る事にしませう」

徳田「隨分騒々しい人等です事ね……ぢやア私はこれで失禮します」

磯原「さア何卒……」

（徳田女事務員退場、磯原主任はそこらの卓の周圍を片附けにかゝる）

（ベンチに依つて睨み合つてゐた二人の男女はやがて互に物を云ひかけては、急に口を緘んでゐたが、やがて田口の方がニヤ〱笑ひだして）

田口「とう〱二人丈けが賣殘りになつたね」

村井（獨語くやうに）「アヽ、ア、年は老りたくないもんだ……」

田口「何うもこれ許りは仕方がないさ、金持でも貧乏人でも、年を老るのと、死ぬのと丈は天道様に依估ヒイキの沙汰があつたていふ事は聞かないからな」

村井「さうすると、矢張若い者は若い者同士、老人は老人同士寄り合ふやうに出來てるのかな」

田口「何うだね？縁を戻して茶呑友達になる氣はないかな？」

村井「別莊番の口でもさがすか？」

田口「房州の海岸の別莊へ新婚旅行は洒落れてるぢやアないか？汝さんあの海岸の好い景色は知つてるかね？富士山が宛で紫の朝顔でも咲いたやうに空の中にぼんやり霞んで見えてさ、海の色と云つたら、一面に青明礬を溶かし込んだやうに冴え切つてゐてさ、その上へ浮いてる白い水禽はまア銀象嵌だな、陸には又大粒の甘い枇杷の實が鈴なりになつて、ちりめん皺のよつた西瓜やらすべ／＼した大水瓜が砂地へ枕をならべたやうに轉げ出してゐるしさ、鼻を刺すやうな薫の高い白百合も咲いてりや、眞紅な耕げしの花畑も列んでるし、この塵埃溜のやうな東京のドン底からあそこへ出かけて行つたら、救世軍のお說敎で聞くエデンの花園とやらへ生れ變れたやうなもんだよ、私も若い時には一度も二度も遊びに行つたもんさ、何うだね、一つ、口をかけて見やうか？」

村井「然うさね、あんた職工風情とは違つて、お互ひに身分も釣り合つてるしさ、汝さんのその髭の工合も亡くなつた私の亭主が思ひ出されるし、……夫婦になつても誰も笑やアすまいね」

田口「笑ふ奴には勝手に笑はせて置くさ、……それよりかその別莊の裏手には屹度茂つた松林があらアね、二人で松葉掻きに出かけると、そこらで白鶺鴒や頰白が囀つてやうぢやないか？さアざアざアと松風の音がする、謠曲の一くさりも唸り出したくならアね、これでも昔は寶生流になか／＼凝つたもんでな、殿樣の御前で謠つた覺えもあるからな」

村井「さうなると二人は樂隱居だね」

田口「あんまり苦勞がつゞき過ぎたから、これから少しは樂な夢でも見て死なうよ、」

村井「よし、さう決めませう、ぢやア二人でこれからその華族さんの家へ行くとしませうか？」

田口「善は急げだ、直ぐこれから出かけやう」

村井「ぢやア然うしませう……、あの一寸と伺ひますが、

夫婦者の別莊番の口つていふのは、麹町の何處でしたつけね？」

磯原（面倒臭さそうに）「八丁目の靑木子爵家つていやア直ぐ分るよ……だが、もう大分日數が經つてるから、明いてるか何うか請合はれはしないよ、それに夫婦者といふ條件附だしな」

田口（笑顔で）「私等は茶呑友達になりましたでな、その別莊番には持つて來いでございませう、貴方からもさう御口添がして戴き度うございますな」

磯原（苦笑）「さうお手輕な出來合ひ夫婦なんか、此所で口添えは困るよ、此所の信用に係るからね」

村井「出來合ひが惡けりやア、貴方、媒酌人になつて下さりや善いぢやアありませんか？」

磯原「こゝでは職業の紹介はするが、結婚の媒介をする所ぢやアないからな、一體こゝで出來合ひ夫婦なんて、怪しからんよ」

田口「ぢやアまア此方で直接に先樣へ行つて掛合ひまう、なア、婆さん、然うせうよ」

村井「それが面倒がなくて善いでせう、ぢやアそろ／＼出かけませうか？」

田口「ア、然うせう……まアこゝでお祝ひに一服か」（バットを取だして、マッチを擦り）「婆さん汝も一つやんな」

村井「難有う（田口、マッチを擦つて火をつけてやる）……さう／＼。汝さん、こゝに羽織があるよ、亡くなつた亭主のかたみだが汝に着せて上げらア、華族さんへ御目見えだし、服裝もいるからね」（云ひ／＼信玄袋から、古びた、紋付の絽の羽織を取だして、着せる）

田口「聟引出か、難有い／＼、矢張持つべきものは女房だハヽヽヽ」

村井「それからこゝに帽子もあるよ、それはあんまり破れてるからね」（汚れたナポレオン帽をだしてやる）

田口「これはごう氣だ……立派な樂隱居が出來たぞ、古いのは打ちやつて置かう、誰か拾つて冠るだらう」

村井「そりやア無駄目な事つた、私が收つて置くよ、又何かの用に立つからね」（信玄袋へ入れる）

田口「所帶持が善いな、ハヽヽヽ」

村井「ぢやア出かけませう」

田口「その信玄袋は私が持つて上げやうよ」

村井「濟まないねえ」

田口「他人行儀はいらないや、……何うも御厄介かけました、難有うございます」

村井「何うもいろ／＼御世話になりました又その中、御禮に上りますから」

田口「又、房州の方へ御出かけになりましたらお遊びにお寄り下さいまし、……この御恩は忘れません、ハイ、左様なら」

村井「御機嫌よう」

(二人はいそ／＼として、夕陽の赤るい戸外へ、出て行く)

磯原(後影を見送つてゐたが羨ぐましい氣持で)「何卒、その口が外れなけや善いがなア」

(カーテン)



母の立ち場

岩野泡鳴

一

「…………………」

あね娘のお花が丁度取つて三十歳になつた年の七月、いよ〳〵兼てからのいひ名づけの男と共に家を持つことになつて、その奉公さきから歸つて來たが、五年間もこちらが待たせてあつたその望みの叶ふわけであるから、そのいろ〳〵な用意の爲めにいそいそしてゐるのは無理もなかつた。男の工藤さんが用達しに出た留守を、ちよッと茶のまへ落ち付いて、こちらとさし向ひに長火鉢のそばへ坐わつて、一服しながら、

「おッ母さんには、子供の時はいぢめられましたが、今度と云ふ今度こそはありがたいと思ふ、わ——大相お世話になりまして」と云つた

「いぢめられたッて?」母はちよッと不思議なので聽きとがめた。「おッ母さんは少しもお前さんたちをいぢめたことアありやしないぢやないの?」

「そりやア、おかッちやんはさうでしたでしようけれど——」

「…………………………」こちらはこの子がまたその妹に對するひがみ根性を起してゐるのかと取れたので、一層こと葉やわらかに、「お前さんをだッて——？」

「だッて」と、お花はそのいもうとにもよく似た長おもての上品な顔をかしげて、而もこの年をして、もう、よせばいいのに、見ッともないと云つてやりたいほどあまへたやうすで、目を細くして口に笑みを漏らしながら、『亡くなつたお父アんがさう云つてた、わよ。』

「そりやア——」こちらはこれッ切り暫らく物が云へなかつた。其の娘の云つたことがよく當つてるからではなく、却つて當つてゐないところに、自分や自分の子のこれまでにとほつて來た別々な苦勢が思ひ出せたからである。苦勢は娘もして來ただらうが、こちらが自分の惡い亭主の爲めにした苦勢と來ては、並み大抵ではなかつた。が、そんなことは今の今まで辛抱して、成るべく娘どもにはおくびにも出さないやうにしてゐた。自分がこのやうな下品な商買をやり初めたのもその爲めなら、自分が三十二の時にお花をその父の方へ附けて、こちらはおかつと共に籍を別にしたのもその爲めだ。そしてお花が十一の時にその父が牢で亡くなつたので、またかの女を引き取ることにした。それが年ごろになつてからとだッても、これまでになるまでの五年間と云ふものは、自分が工藤さんをその老いぼれた母と共にうちへ置いて、その日常を監督しながら。一家の主人になれる時を見きはめてからのこちらが許した祝言であつた。そのあひだのことで、娘が何を取り立ててさう云つてるか分らないので、込み上げて來た胸の中を無理に押さへて、わざとにも笑つて見せながら、「一體、お前さんはお父アんが何を云つたと云ふ

の？」

「おこつちやアいやよ――もう、とツくに濟んでしまつたことですから、ね」と、お花は少し舌をもつれさせて、火鉢のふちへかた肱を押し付けながら前置きのやうなことを云つた。

「…………………」こちらは笑ひをつゞけてたが、とツくに濟んでしまつたことと云へば、自分の亭主がまだ生きてた時のことだらうかと思つた。

「それ」と、いよ〳〵云ひにくさうにして、「おツ母さんはあたしをひどいお米屋へ奉公にやつたでしよう？」

「…………………」果してさうであつたので、「そりやア、おツ母さんがやつたのぢやアありません。お父アんがやつたのだよ。」

「さう？」なほ疑はしさうにして、「だッても、あたしが牢へ尋ねて行つた時、お父アんが「お前のお袋が薄情なので、お前もお父アんもこんなに苦勞するのだ」と云はれたのをおぼえてます、わ。」

「隨分うそ付きだ、わ、ね！」

「どうして？」

「ぢやア」と、こちらは娘を見つめて、「お父アんがなぜあんなにたび〳〵牢へ這入つたのか、さうしてとう〳〵おしまひの牢で死んでしまつたか、お前さんにやアまだ分つてゐないの、ね？」

「そりやア――何度うかがつてもおツ母さんは今までちッとも話して呉れないんだもの！」こちらを見返しながら、少しまを置いて、「おツ母さんに可愛がられて來たおかッちやんだッて、これだけは矢ッ張り知らないやうすだ、わ。」

「おかつだけをあたしが可愛がつたと云ふのアおよしよ」と、こちらはこんな時だゝ云はねばかりにいましめてやつて、「云つてわりいことアおかつにだッて云やアしないよ。」

「ぢやア、後生ですから今さかして頂戴よ——おかッちやんとこッそり相談して見てもこれだけはさッぱり分らなかつたんだもの。」

「…………………」こちらが思ひやつて見ると、それも尤もであつたらう、不斷は死んだ父、生きてる母と兩方へひとりびとりに味かたが分れて、一方が父の死にひがむと、他方が母の愛を自慢するなどのやうすは、ちやんとこちらも想像がついてゐないことはなかつた。で、お花が暫らくうちへ來ることが遠のくと、おかつが横濱の奉公さきから遊びに來た時によく云つて、そのあねの機嫌をもうかがはせにやつた。また、あねが深川からたま／＼やつて來ると、時には親のところへ來る足でいもうとの方をも尋ねてやれと云つて聽かせた。そしてきやうだい同士がふたりッ切りで落ち會ふと、矢ッ張り血を分けてるものだけに、おのづから父のことをも一緒に思ひ出して、いろんな不思議に行き詰つてたのかと思ふと、まことにいぢらしくもあつた。それに免じても、またお花があすからいよ／＼別に家を持つと云ふ一ときまりをしほにしても、けふは一つ、今まで秘密にしてゐた自分の所天のことをお花に洗ひざらひ云つてしまはうと決心した。さうすれば、おかつの方へは云はないでもいつかしら傳はるだらうと考へながら、「お前さんはお父アんがよくごまかしのにせ札を澤山重ねて、その上のを一枚ほんとうのにしてゐたのをおぼえてゐやしない？」

「おぼえてます、わ。たしか一度見たッ切りですが、「お父アん、それをどうするの」と聽いたら、「手めへらの知つたことぢやアねい」ッて云ひました、わ——まだあたしがお米屋へ奉公に行く前だッた、わ。」

「お前さんも馬鹿な子ぢやァなかつたから直ぐそれに氣が付いたんだ、わ、ね、——あれが、ほら、詐欺賭博のたねだッたんだよ。」

「へい」と、娘は胸をそらせてその上半身を火鉢からあとの方へ引いた。それから、またその半身をこちらへ近よせて、今度は少し聲をひそめて、「ぢやア、人があたし達に聽かせてィたんはほんとのことだッたの、ね——うちのお父アさんだけは、まさか、自分から進んでそんなわりいことをしたとはうそでみんな無實の罪だと思つてましたに！」

「無實どころか、ね」と、こちらはここへ力を入れた。「然し、それがみんな、お前さん、いつも人の儲けになつてしまつて、あのお父アんと來ちやア、人にばかりうわまへをはねられて、うちへ持つて來るおたからはほんのぽッちりで——それも亦もと手だッてそとへ持つて出ちまうから、このあたしにやアこれがあたしの小使ひだッてこれんばかりも呉れやしなかつた。そりやア、あの死んだお父アんはお人よしでもあつただらうけれど、——わりいことにだッて人のかしらに立つならまだしも、情けないことにやア、いつもただ人の手さきに使はれてゐたのだから、ろくな儲けもしないくせに、そりやア、ね、擧げられる時にやァ自分ばかり擧げられて、肝腎のうまい露を吸つてたものァいつも警察の手を知らぬ顔の半兵衞さんで、ね。」

「隨分だ、わ、ねー」娘は自分で泣き出しさうな顔つきになつてゐたのを斯う云つて僅かに引き立てた。

「…………」こちらはかの女の頰ッぺたまでが燃え立つたやうに赤くなつたのを見た。多分、その父の愚かさとその愚かさを出しにした人々の行ひと二つながらに對していきどほりをおぼえたので

あらう。さすが、江戸ッ兒同士の血を受けたものはあると私かに頼母しかつた。そしてこちらもいよ〳〵娘に對する親子の遠慮と云ふものを取り去る氣になつて、「だッて、お父アんが間拔けだから、仕かたがなかつたのだよ。」

「仕かたがなかつたッて」と、娘は今度はまたこちらへ當るやうに、「おッ母さんがしッかり云つてやめさせることはできなかつたの?」

「それが、ね、お前さん、江戸ッ兒のできそくなひによくあるやつ、さ、ね。」斯う一方でうち明けながらも、こちらはそのできそくなひ男の、而も本氣になつてちやんとすれば、小意氣で樣子がよかつた昔のそのいなせな姿をあり〳〵と自分の目の前に浮べながら、心が見えるものなら、娘に向つてお前の亭主になる人のやうな律義一方の野暮くさい男ではなかつたのを見せてやりたかつた。

二

今は髮結ひのお柳で原町界隈をとほつてるかの女が、お花の父のところへかた付いて行つたのは、決してそんな下品と思へるやうな商買をする女としてではなかつた。神田に有名なかな物屋の娘としてだそして立派な仲うどが立つて、向ふ島の植半で正式な見合ひもした。こちらはあの人ならいいと云つたし、向ふもそれでよかつた。そして一緒に家を持つてからも、初めのうちは江戸ッ兒同士としてまことに樂しく面白かつた。

日本橋の主人すぢからのれんを分けて貰つて、淺草へ袋物屋の店をひらき立てであつたけれども、こちらの所天としての渠は財布やたばこ入れを造るにも仕事の手がよく利いてると云はれたし、またその

賣り込みもじようずであつた。そのうちにお花が生れる、おかつが生れる。人の手も入用になつて、暮し向きが大きくなつた割り合ひには、この商買が繁昌して行かなかつた。いや、巻きたばこを多く吸ひ、洋服の方が便利だと云ふ世の中になつて來ては、意氣な財布やたばこ入れなどを珍重しなくなつた爲めか、どこの店だッて、こんな品はうまく行かなくなつたのである。然し、野暮に落ちないだけの律義を重んじ、多少世間の流行をあしらつて行けば、さう馬鹿にしたものでもなかつた。

「ところで、ね、お前さん、ちよいとしたはづみでだよ――魔がさすと云ふのはあんなことを云ふのだらうが、ね」と云つて、こちらは娘に云つて聽かせたのであるが、――或晩、おたなから一度歸つて來なかつたことがある。またおかねもないのにお女郎買ひにでも行つたのかと思つてると、却つて、何でも二十圓か三十圓のお札を持つて、翌々日の朝の九時頃に歸つて來た。そして奥へ這入つて來るが早いか、

「おい、そんなにふくれッつらなんかしねいで、これを見ろよ」と云つてそのお札をばらばらッとこちらのむッつりとして坐わつてる膝もとへ投げた。

「あら、まア、どうしたの?」ちよッと嬉しかつたので、顏をやわらげて、そのわけを知りたかつた。

「うめいことを敎へて貰つたのでい、もう、まじめな仕事なんかしたくもねいや!」

「…………」それが詐欺賭博であつたのだ。それからと云ふもの、うちをそとに遊び出して、それが毎日のおまんまよりも好きになつた。こちらが何と云つても聽かないで、五圓札や十圓札をたッた一枚うへに置いた胡麻化しの束をもとにして、上野へ下りる田舍ものなどを怪しい宿屋へ引ッ込んでその持つてるかねをみんな巻き上げるそのおさき棒に使はれた。そしてとう／＼擧げられて最初の牢へ

這入つた。

「ぢやア」と、娘は聲をふるはせて來た、「お母さんもお父アんの爲めにや隨分苦勞したのだ、わ、ね。」

「人並みの苦勞ぢやアなかつたのだよ。」何だッて、その留守をどうにかかうにかして續けてゐたのに渠が牢から出て來ると、少しも店を持ち直させようともしなかつた。そしてまた同じ惡いことに耽つて自分自身の小使ひぐらゐは儲けて來ても、また刑事とか云ふもの——ほん物かどうか分らなかつた——が每々やつて來て、袖のしたを取つて行くから、結局は何にもならなかつた。そしてそのあとは店の賣り上げをせびつて行つた。そんなことをいつまでやつてゐても詰らないにきまつたから、何度もはたから注意した。が、うか〳〵として承知しなかつたうちに、渠はまた擧げられた。

かの女は二名の兒をかかへて、もう、仕かたがないので、店をしまひ、近處の狹い橫丁に家を借りてそんな髮結の看板を出した。そしてあね娘を學校へ送りながら、所天が再び牢から出て來たら、今度こそは懲りごりして改心するだらうと思ひもし、望みもした。

「ぢやア、あの時お父アんが遠いところへ行つてるのだと云つてたのもみんなうそだッた、わ、ね！」

娘の聲はますく〳〵うるんで來た。

「まさか、子どもにその親が牢へ行つてるとア云へないぢやアないの？」そして二度目に出て來たものが今度はまたすッかり世のいはゆる「髮結の亭主」になつてしまつた。男はその女房に喰はせて貰ふのが當り前だと云つた風で、每日のらくらして、矢ッ張り、賭博を忘れなかつた。だから、お花の九つの時に、思ひ切つてふたりの子どもをひとりづつ分け合ひ、あね娘は自然の道理上父のあとをつがせることにして、こちらはいもうと娘と共に籍を別にした。そしてこんな悶着のあとをこちらの商買上の競爭

が多い淺草にゐたくなかつたので、二度目の引ッ越し先きなる下谷の方へ來た。

「そりやア、ね、死んだお父アんは腕もよし、賣り込みもじようずだッておたなから隨分惜しまれたんだけど、――さうなつちやアあたしも仕かたがなかつたぢやないの？　それにしたッても、ね、子どもに對してえこ引い氣なんぞアなかつたのだよ――可哀さうだとア思へ、さ！」

「ほんとに、ね！」

『そのうちに、御覽！』こちらもいつとはなしに娘のやうすに引きこまれて、聲をふるはせてゐた。「また擧げられたぢやアないか、ね？――それでも、少しやアまだ性根が殘つてたと見えて、子どもに對してきまりが惡かつたのだらうよ、お前さんに向つてこッちを薄情だなんて云つて、さ。」

「あたし、知らなかつたのだもの！」娘はとう／＼はや口に泣き出してしまつた。そして折角今度新らしく拵らへてやつた銘仙の不斷着の袖を兩方ともかたみに目に持つて行つて、そのあとから、あとから出るらしい涙をふきつつ、しやくり上げながら、「あたしが――惡かつた――ので――ございます何にも――知らないで――おッ母さんを――ばかり――恨んで！」

「なに、ね、お前さんがお父アんを牢へ尋ねたとすりやア、まだたッた十一の時だッたから――」こちらも矢ッ張り向ふの顏が見えなくなつて來たので、ふと、襦袢のたもとを探したが、ひとへ物の時節だからそれがないのに氣が付いた。そして急いで鼻がみを出して先づ鼻をかみ、そのついでのやうにして目をもふいた。そして考へて見ると、その年にお花の父が牢死したので、かの女をその人情知らずの米屋からこちらへ引き取つたのである。あの米屋でぶたれたり、こき使はれたりしたと云ふのをみんな母のせいだと云はれてゐたのでは、子供のことだから、それをそッくり信じてこちらを恨んだのも尤もで

あつたらう。思へば、そんなことのせいでもあつたらうが、この娘はうちにゐても強情で向ふ見ずで、お掃除や勝手向きのことはしろと云つてもなか／＼しないで、何かと云ふとその母やいもうとに喰つてかかつた。そしておしまひにはよくすねてしまつた。ゐの五黄(ごわう)は生まれ星がつよくッて、是(ぜ)が非(ひ)でも押しとほさうとするとはよく云つたものであつた。然し、――「つき日の立つのァ早いもので」と、やッともとの聲に立ち返つたが、その早いつき日のうちに、また、ふたりの娘を自分ひとりの腕で年ごろまで育てたり、それから奉公にやつても間違ひのないやうにかげながら主人に頼んだり監督したりして娘どもにはまだ云へない多くの心配や苦勞をして來た。そしてまた下谷の方では自分の商買が餘り古くなつて、はやらなくなつたので、數へて見ると、丁度六年まへからこの小石川の原町へ來て、競爭者の少いあひだに手をひろげたが、この頃ではまたここでもふる株になり過ぎて來たことをも考へた。そして一方の壁に添つて、うへの神棚の下で、簞笥の上に在るお廚子(ずし)の中には、自分のたッた一囘持つた所天(をつと)の位牌を娘が奉公さきからひまを取ると同時にこないだから持つて來てあるのをまた少からずなつかしく思ひ出しながら、「もう、お父(とつ)アんが死んでから二十年――お前さんは三十になつたし、おかつは二十七。」

「さうだ、わ、ね――もう。」娘もやッと涙のかわいた顏を擧げた。「その長いあいだ、罪もないおッ母さんを恨んでて――あたしはなんて馬鹿でしよう？」

「…………」こちらは、もう、それには氣をかけなかつた。「おかつは妹のくせにあねより早く旦那を持つた代(かは)りにやア、實は、この頃さきと別れたいと云つて來てイるんだよ――こッちからはまだどうとも返事はしてやらないが、ね。」

「そりやア――おかッちやんがあたしにやア、もう、せんから云つてたことだ、わ。」
「さうかい？」こちらはこの娘がいもうとのことに就いて母よりもさきに知つてるのを得意さうにしてゐるのに對してちよッと意外をおぼえた。同時に、さう云ふ身のうへの大切なことを先づ親に相談しないで、どいつもこいつもなぜぼんやり默つてゐたのだらうと云ふ不平がむら／＼と起つた。
「どうも、聽いて見ると、旦那がけちんぼうでうまく行かないやうすだ、わ」と云ふお花に向つて、こちらはこの不平をもらすつもりで、
「お前さんもお前さんぢやアないか、ね、さう云ふことを聽いてながら、早く親に知らせないで？」
「だッて、おッ母さんにやア――心配するからまだ知らせたくないッて云つてたから、ね。それをとう／＼云つてよこしたのはよく／＼になつたんだ、わ。」
「…………」さう聽いて見ると、別に親として何も云ふことはなかつた。寧ろきやうだい同士が――兎角、別々な親のことから折り合ひがよくないと見えながらも――さう、いつのまにか打ち解けて語り合ふほど親しんでゐたのを結構だと思へた。そしてあね娘はあね娘だけのことがあると頼母しくなつて、「して見ると、矢ッ張り」と、一段かの女の方へその機嫌を取る爲めに聲を低めて行つて、「くッ付き合ひはいけない、ね――お負けにお目かけさんだから、ね。」
「そりやア、おかッちやんは早まつたんだもの！」
「…………」こちらが見ると、お花の俄かに思ひあがつたやうな云ひぶりには、また、憎いほどそのいもうとに對するきつ／＼しさがあつた。が、それをこちらは持ち前の病氣の爲めだと見てゐるのである。子宮内膜炎とかが久しくつづいてゐるので、その爲めにからだばかりでなく、その心までが

始終いら〳〵して、われにもないきついことを云ふかと思へば、俄かにまたそのいもうとよりも意久地なく、めそ〳〵泣き出す。こちらはその度々のことに面倒くさいのを知つてるので、大抵の場合は成るべく當らず觸らずにしてゐる。

「あたしのいひ名づけができて、それがおッ母さんと一緒に住むことになると、もう、直ぐあたしがおかッちやんに代つておッ母さんのあとを取るものと邪推したんだもの。」

「そんなことはありやアしないぢやアないの？あたしはよくおかつにもわけを云つて聽かせたから――ねえさんを見込んでお嫁に貰ひたいと云ふ人ができたが、どんな人物だか見きはめを付けるあひだ、おッ母さんが預つて一緒に住んで見るのだからッて？」

「だッて、おかッちやんにやア分らなかつたのだ、わ。ねえさんも男にくッ付き合つたのだから、あたいだッてもそんなのを見付けてもかまはないなんて云つてよこして。あたしの事情はおッ母さんが御承知の通りだのに。」

「お前さんのことは知つてますが、ね、おかつがお前さんにそんなことを云つてよこしたとア――」

と、こちらはとぼけてゐた。

「知らないことがあるもんですか、あたしがおかッちやんの手紙のをどし文句まで見せたぢやアありませんか、おッ母さんはいつもあたしの云つたことは氣にとめて呉れないんだから？」

「…………」氣にとめないどころではない。いや、とめ過ぎるほどである。が、母として見れば、どうせ同じ腹から出たものが、あねとしてさういもうとのことを一々やき〳〵と取り上げるにも及ぶまいと思へたのだ。

三

五年間もその好いた男をその母に預かられて、母の許しが出るまでを待つことにし、奉公さきから時々うちまで逢ひに來ても、お互ひに若い男と女とのうやまひ合つた話を取りかはした末、一度だッてとまりもしないで歸つて行くあね娘の辛抱づよさ、奥ゆかしさを、母はわが子ながら私かに感心してとほした。それに比べると、あねにあらぬ濡れ衣をきせても、自分が母の愛におぼれて勝手な眞似を急いだいもうと娘は、殆どかたなしのみだら者であらう。

けれども、そのおかつはこちらがまた自分のあと取りとして可愛がつて來たものである。あと取りだとは云ひながら、さうだ、自分の暮し向きの不如意やよその行儀見習ひやの爲めに、可哀さうにも、十七の時から、横濱へ、これも矢張り料理屋へやられた。そして初めのうちは、こちらの仕つけがやかましいので間違ひもなかつた。

『然し、もと／＼みだらな女にできてるんだらう』と叱り付けたことがあるほど、母の許しも得ないで、而もあまりわけもなく、今の旦那の云ふことを聽いて神奈川へ家を持つことになつた。それを一度はいましめて置かなければ氣がすまないので呼び寄せたのだが、その時、丁度あね娘も呼ばないのに來合はせてゐた。かの女は工藤に會ひたかつたのだらうし、こちらも渠を預り立てでまだ珍らしかつた。で、渠とお花とのあひだを尋常の話がうまく行くやうに努めた。

『おッ母さんはあたいばかり叱つて、――ぢやア、ねえさんはどうです、ね？』

『馬鹿云へ！』これは確かにえこ引い氣のないところであつた。『ねえさんは、ね、あたしが仲に立つて

まだいひ名づけができたばかりだよ。』

『かげで――分るもんですか？』

『お前さんぢやアあるまいし』と、この時、お花も溜らなくなつたかして口を出した。

『…………』こちらはそんなことでのきやうだい喧嘩は殊に見ッともないと思つたので、『もう、やめろ――どいつもこいつも勝手な熱ばかり吹きやアがつて』と云ひながら、そのそばにおとなしく坐わつてたお花のいひ名づけに笑ひを向けた。すると、工藤さんはした手からだが皆の仲を取るやうにして、

『然し、まア、おかッちやんはねえさんよりも先きへ家を持つことができたのアえらいのですよ。』

『そんなことが――えらいもんですか？』

『然し、わッしなどを御覧なさい。まだ塗師屋の小僧も同様で、やッと家を持つかねを拵らへてますところでげす、ぜ。これならいいと、おッ母さんのお許しがでるのアまだまだいつのことだか分りません。』

『そりやア、ねえさんの好き勝手からですから、ね！』

『何を云ふ、おかつ！』こちらはかの女の不しつけをまた叱つて、皆が行儀を正しくしてゐるあひだにあつて、かの女だけが兎角するとかた手を少し後ろへ突いて、膝をくづしさうになるのを注意した。が、おかつのやうな、どちらかと云へば、おめかけ肌か、ばくれん女になりさうなものには、工藤のやうな律義一天張りの男は馬鹿に見えるのも尤もで――神奈川に圍はれるやうになつたのは却つてそのがらに似合つてゐるのだらうと、口にはそれと出さなかつたけれども、私かにこちらの心ではあきらめた。

今、それを思ひ出して、お花に、「おかつが初めてお召しをぞべらぞべらと着て來てから、もう、三年――いや、四年目ぢやアないの？」

「さうだ、わ、ね、もう、――工藤さんがおッ母さんと一緒に住んでから、五年目ですもの。」

「おかつにも子供ができないとすりやア、お前さんにやアなほ更らだよ――よく療治をさせて貰はないぢやア。」

「さうかも知れません、ね。」斯う答へたお花は、それでも、ちよッと顏を赤くした。いよ〳〵結婚のできたのを嬉しく思ひ出したのであらう。

「…………」こちらはそれもさう喜んで貰はないでは詰らないのである。工藤にはこの五年のあひだにやッとのことで正味六十圓を溜めさせた。それへ、お花の貯金九十圓と、お花の所有物の一部分を質に入れさせた三十圓と、都合百二十圓を足した。この總計百八十圓を資本として、いよ〳〵あすから指ヶ谷の電車通りへ塗師屋をひらかせることになつたのだが、その所帶道具類はすべて母が渡してやつた――あり合はせの物に新らしく買つたのを足して。

「いろ〳〵おッ母さんにやア御厄介をかけまして」と、かの女はありがた涙をこぼしたが、その時こちらも一緒に泣かずにはゐられなかつた――工藤さんの手まへもあつたけれども。と云ふのは、子供が大きくなるに從つて、ます〳〵可愛くなつて、たとへこれまでもよそにゐたのであるけれども、そしてその男は知つて長らくうちにゐたのだが、いざ、その男に渡すのだと思ふと、惜しいやうな、寂しくなるやうな氣がして溜らなかつた。が、お花のゐ慣れたところがところだけに、こまかい所帶のことなどにまだまだ氣が付かないやうすを見ると、まだ、この上にも、いつまで親の厄介になつて來るかも知れ

なかつた。
『おッ母さんなどは、もう、お前さんの年には――とッくにお父アんと別れてゐたから、ね――立派に一本立ちでゐたッたよ。お前さんもそれを思へば、いつまでも親に厄介はかけられるものだと思はないで、もッとしッかりしないぢやア。』
『そりやア、おッ母さん』と、お花はこちらと工藤とを見比べながら答へた、『もう、これからウッちやつて置いて御覧なさいよ――いまにおッ母さんをらくにしてあげますから、ね。』
『…………』三十にもなつては、もう、むろんのことでなければならないが――と、こちらはその時思つた。今、丁度誰れもゐないのを幸ひに、『お前さんにも子供ができれば早く納まるのだが、ね――おかつは早く產まないから仲がうまく行かないのだらうよ。今どきの若いものはどうしてさう子宮病なんかになるのだらうか、ね？　たしかに不養生をしてひえるんだらうよ。』
『あたし達にやア確かにさうでしようよ――だッて、寒中の寒い時だッておかまひなしですから、ね、お客さんのお膳やお銚子を持つてはしごのあがり下りばかりにだッても腰が氷のやうになつてしまひます、わ。』
『氣を付けて中將湯でも飲んでゐなさいよ、冬ひえるものは夏になつても矢ッぱしひえるんだから、ね。』
『さう、ね。』
『…………』こちらが娘を見ると、かの女はまた目をしよぼ付かせてゐた。また向ふを泣かせてそのもらひ泣きをしたくもなかつたので、話をおかつの身の上に轉じて、『あれもどうせ駄目なものな

ら、もう、工藤さんもゐなくなるのだし、こッちへ引き取つてしまつてもいいのだが、ね。」
『どうせ駄目でしよう。可哀さうだから、引き取つておやんなさいよ。』
『さうだ、ね。』考へて見ると、ずッと以前一度引き取つたあね娘をまたそとへ出すとなると、今度はまた假りにでもよそへ出してあるいもうとの方を引き取らねばならぬわけだ。そのあひだにおよそ十九年を過ぎてしまつた。『數へて見て御覧よ、淺草に九年、下谷に五年、この原町にまた五年として見りやア――但し、さうきッぱりとは行つてゐないんだが、ね――兎に角、世間のことア先づ五年一と昔で變はつて行くから、ね。かみいのやうな商賣でも、これはあたしに腕がないせいかも知れないが、そりやア、ね、いい加減になると、お客さまがたの方から飽きが來るものだが、夫婦だッてさうだよ。おッ母さんのやうに、ふたアりも子供があつて別れるのアよく／＼のことだが、ね、早く子でもできないぢやア、もう、二三年目から夫婦同士にでたくが起るのア當り前で――お前さんだけは、然し、こッちの目がね通りさうならせたくないのだから、ね。』
『あたしは工藤さんとアどうあつても辛抱致します、わ。』
『そのつもりで頼むよ。』こちらはおかつをいよ／＼引き取らねばならぬ上に、また折角かた付けるお花に同じやうなことがあつてはと云ふことが心配になつてゐた。

四

工藤がお花と共に指ヶ谷町に塗師屋の店を持つたし、渠と一緒にゐた老母も新夫婦の邪魔にならない爲め淺草にゐる渠のあねの方へ行つたしして、かみ結ひの家は僅かに當の母ばかりになつてしまつた。

他の人がゐた時には得意さきへ出ても行つたけれども、今度は戸を締めて出るのが臆劫になつた。殊に、夏のあひだは朝ッぱらから、この狭いたッたふたまの家でも明けッ放すと涼しくッて、客を坐わらせる玄關の窓からは酒井さまのお屋敷の高い庭木が見え、奥の坐敷からはうらに隣りの成り金さんの山が樹木を繁らして見えた。

一段落が附いたのだと思ふと、何だかがッかりして俄かに年がいくつか寄つたやうな氣もした。が、それでもまだ次ぎから次ぎへと來る客があとを絶えた時など、三人もごちや／＼と住んでゐたのよりも、たッた獨りの方がのんびりして氣苦勞はなかつた。ちよッと長ぎせるで一服しながら、自分の手で自分が澁茶一杯を飲む度にも、氣がすッきりするのであつた。

ぽんと、きせるを火鉢のふちへはたいても、その音が指ヶ谷へも神奈川へも響いて行くやうに思へて、母としては今やふたりの娘の無事を祈るより外に樂しみはなかつた。これまでにあつたいろ／＼なきやうだい喧嘩を思ひ出しても、尤もな道理も兩方にあり、無理なこともまた兩方にあつた。いつもその仲を取つてこちらはその兩方の云ひぶんを立てるやうにして來た。

そしてそれ以上のことは神さまに頼むより仕かたがないので、うちの神だなやお墓どころの荒神へはいつもおみきやお燈明を絶やさないやうにしてゐる。お厨子の方には、然し、左ほど信心がなかつた。と云ふのは、自分は所天と離婚して以來、自分の里へは歸らないでその分家にして貰つたので、先祖代々のお位牌と云つては、自分のもまた所天の方のもなかつた。して見ると、自分には、お厨子に小さい阿彌陀さまが這入つてゐても、ほんの、ただ飾りにしか思へなかつた。

所天の方のは、そのあとを繼ぐことになつてゐる──そして今回工藤を養子にしたところの──

お花が持つてゐるので、奉公さきからいよ〳〵引き上げて來てゐたあひだは、それをお厨子に入れてあつた。そのあひだは久しぶりで亡き所天にも會ふやうな氣がして、兎に角それをほんとうにも拜むだ。が、今はまたそのほんとうの物をお花が持つて行つてしまつた。

『おッ母さんにやアお氣の毒ですが、ね、あたしも拜む物がなけりやア困りますから、ね』と云たッつけ。

「…………」さうだ、あの子も小いうちから苦勞した爲めに、そのお父アんのお位牌を手放さないで信心ぶかいのを御主人も信用してゐて呉れてゐたのであつた。こちらのこころ寂しいことなどは、あの子の爲めには、辛抱してやらねばならぬのである。

それは七月からのことであつたが、その前から旦那と母とのあひだにいろんなかけ合ひを進めてゐたおかつが、いよ〳〵十月になつて、迎へに來いと云ふ電報をよこした。そして迎へに行くと、旦那と奇麗に手を切つて母と共に歸つて來た。

『あたい、ね』と、これはまだ京濱電車に乘つてた時のことだが、旦那と切れたのを悲しんでるやうすもしないでほほゑみながら、『矢ッぱしおッ母さんのあとを繼ぐにやアをんな髮いになりたい、わ。これから、おッ母さんのした梳きにして頂戴、ね。』

『ああ。おッ母さんも、ね、さうするより仕かたがないと思つたのだよ。』

『さうでしよう』と、おかつもあまへた時にする通りまた目を細くしてこちらの顏をのぞき込みながら、こちらの思つたことを云ひ當てたのを喜んでるらしかつた。『あたいだッて、少しやつてりやア、おッ母さんのうへへは出られないまでも、わ。ねえさんのやうにこれを

全く嫌ひぢやアないのだから、ね。」

「…………」こちらはおかつが會ふと直ぐまた許にまでもそのあねを押しのけるやうにするのを、そこにはゐないあねに對しても氣の毒に思つた。が、いもうと娘の年が行つてる割りにはいまだにあどけないところがあるのも亦可愛かつた。ただこの子の一番缺けてると思へるところを注意させる爲め斯う告げた、「ほん氣でやつてれば、ね。」

「ほん氣でやる、わ！」からだをゆすりながら、かの女はまた斯う答へた。初めは何だか不平らしく口をとんがらかせたが、直ぐにこ付いて一層その顏を突きだして來て、あくどく念を押した、「した梳きにして頂戴、ね。」

「ああ」と、ただすげなく答へて置くより仕がたがなかつた。娘がこんな年をしてなほ母にあまへてゐるのを、あたりの客どもが頻りに見つめてゐたのに氣が付いたからである。

あねの結婚祝ひには母がいもうとにも命じて旦那の身ぶん相當の贈り物をさせて置いたのだが、斯うして歸つて來たしるしにも多少の物を携へて工藤の店へは初めての見舞ひに行かせた。あねが結婚以來例の病氣の段々ひどくなつた爲めに寢てゐることは、こちらには、その前から分つてゐたのだ。

すると、おかつは見舞ひから歸つて來て、

「あのねえさんの顏いろツたらない、ね。あれぢやアにイさんが可哀さうだ――まるで土左衛門も同樣だ、わ」と云つた。

「馬鹿をお云ひでない！」この子の思ひ切つたことを云ふ惡いくせはいつものことだが、若しあの病癖持ちのあねに聽えたら、またほん氣になつてどんなにおこり出すか分らないではないか？それに、この

子だッても、これまでに子供ができないとすれば、矢ッ張り、あねと同樣な故障が多少でもあるに違ひなかつた。神奈川の旦那としッくり行かなかつたのも、ひよッとすると、その爲めだらうと思つたからこそ引き取つてもやつたのだ。いろけと云ふ物がなくなつたものに取つては、わが子のことを想像して見ても若いものが何だかきたならしくッて溜らなかつた。『人のことをかれこれ云ふよりやア、ね』と、つい、こちらはおこつてしまつて、『お前さんがそんなことにならないやうに氣を付けるがいい！』

「ふん！」娘は鼻で笑つたが、それをこちらもまさか親に向けたのではないと信じたので、向けられたあね娘の肩を持つてやるつもりで、

「人がここにゐないからッて、さう馬鹿にするものぢやアありませんよ！」

「だッて、あたしやアねえさんのやうにをんなの隱しごとなんかして來ませんでしたから、ね。」

「隱しごと――？」ふと、こちらは行き詰つたのである。これはそも／＼何を意味したのであらうか？人めを忍んで暫らくのあひだでも男に逢つてゐたことを云ふのなら、あねよりも却つてそんなことを云ふいもうとの方がさうであつた。如何に不正直なものでも、自分の耻ぢになるやうなことを自分で云つて人に押し付けることはなからう――結局、ばれた時は矢張り自分の惡くちになつてしまうから。して見ると、うん、あれか――きッと――確かに――？こちらの顏までが思はず赤くなつたかのやうにのぼせて來たが、そんなことをあねがいもうとに敎へたのか知らん？　それとも、いもうとがほんの、ただ、自分の想像で云つてるのか？　それにしても、また妹がそんな想像を心にゑがくには――？母としては迷はないでは、また怒らないではゐられなかつた。そんなことを云ひ合ふやうな子には育てなかつたつもりだが、どいつもこいつも仕かたがなくなつてゐたのかと思ふと、苟しくも、先づ、その下品

なことを口に出した娘を叱らないではゐられなかつた。それでも、實際に何をさしてゐるとは見せないで、『何を證據にそんなことを云つてるんだ、ね？』

『ねえさんがいつか云つたてことがありますよ。』

『なんだね、見ッともない！』こちらの權幕には娘も横を向いて默つてしまつた。

あまりにけがらはしいので、火鉢のそばを立つて行つて臺どころの棚から火うち石を取り出し、神だなや部屋べやを切り火をして淸めたのである。

それで氣が濟んだのでもとへ返り、娘と別な話をしようと思つたが、かの女はまだ何だか不平さうであつた。

『何だッてそんなにむッつりしてイるんだ、ね？』

『だッて』と、かの女はやッとまた口をひらいて、『おッ母さんはうちの道具をあんなにねえさんに分けただやアありませんか？』

『…………』うん、そんなことをおこつてゐたのか？ この娘も矢張りけち臭い根性があるのだらうが、けち臭いと云へば、あねの方がどんなにさうだか知れやアしない。子供の時からいもうとの物をせびり取つたり、こッそり盗んで喧嘩になつたりもしたが、今度だッて、實は、隨分それからそれとねだられたのだが、目出たい時のことでもあるから、さういやな顔を見せなかつただけのことだ。兎に角、そんなことをおかつがおこつてるなら、入らざらんことは省いて早くはッきりとさう云へばよかつた。さうすれば、きたならしい話なんかは抜きにして、直ぐ申しひらきをしてやつたものをと思ふと、その申しひらきが時をはづれてしまつたやうにも見えた。で、くど／＼しいことは云はないで、ただ、

「そんなけち臭いことはお云ひでない」と云つてのけた。

「だツて――」と云つて娘もただこれツ切りにしてしまつた。

「…………」氣ままな子ではあるけれども、今度引き取られると直ぐこの家を自分の物に思つてるのが、却つて可愛く頼母しくないこともなかつた。

兼てから客の髮を見せたり、結はせたりしたこともあるので、おかつにはした梳きぐらゐのところ得は前以つて備はつてゐた。

母はまた獨りの時には出るのを臆劫がつたけれども、今度は相手を得たので、そして時節も戸障子を成るべく締めさせるやうになつたので、ふたりで留守の締まりをしてまたお得意さきをまわる氣になつた。得意をまわらないで客を待つばかりでは、どうしてもいいうちの奥さまやお孃さまは扱へないのだ。

そしていいうちをまわるには、おかつを――器量がよく生まれた子だけに――成るべく上品な風や言葉使ひをさせるやうに云ひ付けた。すると或お屋敷の旦那などは、奥さまのおぐしができ上る頃にそれを見に來て、

「かみいさんはいい娘を持つてるぢやアないか、おれに一つ世話をさせて呉れないか、ね」と、こちらに言葉をかけた。

「旦那さまは御冗談ばツかし！」娘がさきへまわつて行つて、もう、ここにゐなかつたからいいやうなものの、かの女のゐる前ではそんなことを云つて貰ひたくなかつた。が、商買がら、むきにおこりもできないので、毛すぢ立てて奥さまの髮をふツくらかき出しながら、ただ角立たないやうに答へた、「あれは

うちの婿取りでございますので、身ぶん相應の相手がございましたら、――どうか――お世話――願ひます。」

「上品で、なか〳〵器量もいい娘さんですから、ね」と、奥さまもでき上つた髮を合せ鏡に寫しながら云つて吳れた。

娘にはあさ黃のこまかい立てじま銘仙の絆纏を買つてやつて、髮を梳くに便利の爲め、袖をきりりとしたもじり鐵砲にして着せてあつた。

五

「少しかね切れがよくッて、うわッつらで如才のない人なら、ざらにあります、わ。おかッちやんはまだ苦勞が足りないから、そんなのに引ッかかつたんでしようよ。」お花は以前に斯う云つてたことがある。「あたしは少しやア頓馬な男でも律義なのを一生のつれ合ひにした方がいいの」と云つて、かの女は工藤を見込み、工藤はまたかの女の入り婿になつたのだ。

が、互ひに待ちに待つた結婚であつたからでもあらう、その情愛が俄かに激しくぶつかり合ひをしたのであることは、母もかげながら知つてゐた。果して家を持つが早いか、その爲めにお花はその持病がひどくなつて、とこに就きッ切りになつたのだ。そして何度もこちらから見舞ひに行つてやつた末、それとなくうち明けられるところでは、男の律義と云ふことは少しも病氣を直す藥りにはならなかつた。

「そんなことをしてイちやア、ずん〳〵ひどくなるばかしぢやアないか、ね？」

「だッて、仕かたがありませんもの――」

「馬鹿々々しい！工藤さんも少しやァその女房の末ずゑのことを思つて呉れたらいゝのに！」斯う低いけれども、つよい聲で母はいきどほつた。工藤は店の方へ出てゐたので、渠には聽えないと安心してだ。土左衛門のやうだと云つたいもうと娘の惡くちも、實に、尤もなところがないではなかつた。

暫らく引き分けて置く方が工藤にも娘の爲めにもお互にいゝだらうと思つたので、母は無理に當分のあひだ娘をうちへ來させて、保養させることにした。そして電車には乘れないだらうと云ふので、そろそろと人力に乘せて——それも人目をさけて、夜——うちへ引き込んだ。そしてうら椽に添つた障子ぎはへ床を取つて、天照太神宮と書いた軸のかかつた床の間の方をまくらにして寢させた。

十月の末のことで——もう、近所あたりから聽えて來るすがれた蟲のねにも熟した秋の夜の趣きがしんみりと響いてゐた。

「どこかにいゝ聲で蟲が鳴いてゐます、ね」と、お花は天井へあふ向いたまゝ誰れにともなく云つた。

「もう、秋も更けて來たから、ね。」母が斯う受けてやつた。

「…………」おかつは、どう思つたのか、こちらが前にして坐わつてる火鉢の猫板のうへにあつた一輪ざしの黄いの小菊を手に取るが早いか、あねの枕もとへ持つて行つて、「ねえさんおはなでも供へてあげますよ」と云つて、それをそこに置いた。

「さう。」あねはちよッと顏をそらせてまくら元を見たが、それッきり默つてしまつた。しく〳〵泣いてゐるのであつた。

「…………」また初まつたのかと、こちらはわざとうッちやつて置いた。人のよく云ふヒステリなのだらうから、泣くだけ泣いてしまへば氣がすむものと考へた。さうかと云つて、またあねのその

様子を、——こちらと火鉢をさし挾んで正面に坐わつて、横向きに、——意地わるさうに見てゐるおかつを私かに憎らしかつた。

「ねえさんは自分でもいいことをしてゐながら、泣くにやア當らない、わ。」

「默れ！」こちらはいもうと娘のはしたなさを叱つた。

「…………」あねは一層こらへ切れなくなつたやうにくるりとうつ伏しになつたかと見ると、かけてある蒲團にまで浪を打たせて居たが、自分の押へた口にわッとそのむせび泣きを破裂させた。

「およしよ、見ッともない！」

「…………」なほむせんでゐるのが苦しさうなので、特別に何か急病でも出たのかと思へて、

「どうしたと云ふんだ、ね」と叱りながらも、枕もとへ行つて見た。

すると、あねはすすり上げながら、

「だッて——おかッちやんは——あたしを——もう——死(し)びと扱ひに——して！」

「馬鹿！」こちらはあねの蒲團へかけてた兩手を引ッ込めた。「子供ぢやアあるまいし！」

「冗談に云つたのだよ！」おかつはただ笑つてゐた。

「冗談にだッて何(なん)だッて、病人をいぢめるやうなことアお前さんもおひかへよ！」

「はいはい。」親やあねを馬鹿にしたやうな返事をしてから、獨り言のやうにむづかつて、「ねえさんはひがみがつよいんだもの！」

「…………」實際にそんなところがあねにはあるのだ。けれども、「かッちやんなずの子、にしんの子」などと云つて、小い時に、あねがよその子供と一緒になつていもうとを泣かせてゐたのを思ふ

と、今ぢやア五分五分だ。

兎に角、その明くる日から、工藤の店には御はんをたくものがなくなつたわけだから、母はいもうと娘に命じて朝、ひる、晩と時を見計つて、三度の世話をして來させることにした。

すると、茶目のおかつは盛り立てのお椀を工藤さんの見てゐないうちにこツそり口へ當てて見たとかでその爲めに口のまわりへ圓くうるしのかぶれができた。

「馬鹿だ、ねい、まるで喰はん喰はんの繪のやうぢやないか、ね？」

「…………」三疊のすがた見へ行つて、おかつは自分の顏を寫して見て、「成るほど、ね！あたい、當分、そとへ出るのアいやだ、わ。」

「…………」これにはお花も聽いてて枕のうへで吹き出した。

「お前さんが勝手にしたことだ。」母もからかひ半分に斯う云つて、した梳きに出るのだけはやめさせてやつたけれども、工藤さんの世話は矢張り三度ともやらせにやつた。

そのうちに十二月に這入つた。そして歳の暮れが近づくと塗師屋の商買も多少急がしくなるし、お正月の用意もしなければなるまいしするので、大分によくなつたと云ふお花を再び歸してやつた。

さうなると、おかつはさう度々向ふへ行くには及ばないのだのに、今度は母に隱れて行つてたかして、あねから苦情が來た。

「おかツちやんをさう度々來させて下さるな」と云ふ。

「ねえさんのところだから、見舞ひがてらに行つてやつたんだのに、隨分現金だ、わ」と、おかつは怒つたのである。「病氣の時は人をさんざん使つて置いて、直ると直ぐそんな薄情なことを云つて！」

『だッて、ね、お前さんも當分行かない方がいいよ。親切を盡すのアこッちのことで、その親切を恩に着ると着ないとア向ふの勝手だから、ね』斯う云つて、母もあね娘のぶつきら棒の通知を少し不愉快に感じた。が、また考へて見ると、あのいら〳〵した心でふとしたことを種に工藤とおかつとのあひだを疑ひ初めたのではないのか知らんとも見た。さうでなければ、今が今までうちにごろッちやらして保養を受けてゐながら、俄かにさう恩知らずのわけを云はないでおかつの行くのをさしとめる筈がなかつた。果してさうなら、何かの思ひ違ひに相違なかつたらう、うちのおかつに限つてあねの亭主を寢取るやうな、そんな不埒なことはしまいし、――殊に、工藤のやうな律義ものをかの女は好かないたちだから。

『あんなけち臭いところなんか、もう、たとへ呼びに來たッて、二度と行つてやるもんか！』

『さう、さ、それがいいよ、ねえさんはあんなたちだから、ね。少しうッちやつて置いて、自分の氣がすむやうにさせてやる方がいいんだよ。』そのうちにはおのづから奇麗にことが分つて、向ふからまたあたまを下げて來るだらうと思へた。

六

すると、歳が明けて、正月も四日になつた日の午後二時半頃、工藤さんが顏を眞ッ青にして息をせいせい切らしながら母のところへ飛び込んで來た。

『お、おッ母さん、ゐ、ゐますか？』

『ど、どうしたと云ふんです、ね、その苦しさうなやうすは？』こちらは客の髮を結つてたので、成る

べくさう見せないやうに努めたが、きッとお花とのあひだに事件が起つたものと感づかれた。そしてその場に、お花の萎れによこした通知のことが思ひ合はせられた。おかつが不埒にも、矢ッ張り、さうであつたのか知らんと考へると、お客さまの前では話し合へぬことであつた。『まア、奥へ行つてなさいよ』と、渠に命じた。そして奥にゐるおかつをこちらへ呼んで、髪の道具をわざと何を取れ、かを出せと云つて引きつけて置いた。が、こちらはもつとひを結はへる手もとがわく〳〵してよくきまり兼た。

またあとへ來たお客さまをこれからよんどころない用があるからと云つて斷わつた。そしておかつと共に工藤の前へ出た。

『お、お花が殺すと云つて、で、出齒をふりまはすのです！』

『おほかたそんなことだらうと思つた。』

『馬鹿なねえさんだ、ね！』

『お前さんは默つて！』こちらは娘を叱り付けて置いて、『どうしたッてそんなことを！』

『わッしがおかッちやんとくッ付いてると云ひますのです。』

『誰れからそんなことが知れたんでしよう？』ちよッと斯う云つて息をついだ。

『そ、それが』と、工藤はまだ苦しさうにして、『近處のものがお花にしやべつたとかで——わッしとおかッちやんが一緒に夜、ぶらついてたッて。』

『…………？……』こちらはまだ息を休めてゐた。

『おッ母さんにやアすまないと思ひましたが、とう〳〵組みうちになりまして、さうしてお花が負けると出齒を取り出しました——殺してやるッて。』

『……………』組みうちして女が負けるのは當も前だ。が、出齒を持ち出したからッて、それをもぎ取ることもできないで驅け出して來た男の意久地なさが思へた。『直ぐ取り上げてしまやアいいぢやアありませんか？』

『それが大變な權幕でげして――――血相を變へまして。』

『…………』變へたッて、變へなくッたッて――然し、また一方には、わが子ながらにそのいら〳〵した心を突き詰めたおそろしい姿が芝居にでも見るやうに想像された。困つたことができたとは思ひながら、何とかふりさばかなければならないので、先づ工藤にかまをかけて、『一緒にあるいたてとは――きやうだいのことだから構はないだらうが――ほんとうにあつたことだか、どうだか？』

『いえ、確かにございません。』

『ない？』また娘の方に向つて、『おかつとしちやア、どうだ、え？』

『ありません、ね。』

『ぢやア、ねえさんに向つても確かにさう云ひ切れるか、え、？』

『云ひ切れますとも！』

『…………』それならそれで、お花の方を叱つて、兎に角それから氣を落ち付けさせさへすればいいのだらうと考へられた。『ぢやア、ねえさんを呼んで來な』と、おかつに云ひ渡したのである。

おかつは呼びに行つたが、やがて眞ッ赤になつて、ぷり〳〵しながら歸つて來た。その注進を聽いて見ると、

『こんちは、ねえさん。』いもうとが先づあがつて行かうとした。すると、あねはいきなり、

「何の爲めにうせやがつた」と云つた。

「あたいは」と、それでも素直に答へたさうだ、「おッ母さんの云ひつけをねえさんに申し上げに來たのだ、わ。」

「手めへなんぞア來なくツてもいい！手めへのやうないぬ畜生は、な、きやうだいでもなんでもねいや！とッととうせアがれ！」

あねのこの惡口をいもうとがあんまりそッくりとその場で聽いた通りにらしく述べ立てたので、工藤はまだ心配さうな顔でだが吹き出した。母もちよッとそれに釣られて笑みを漏らしたが、直ぐまじめになつて、

「それだけしッかり云はれるにやア、お前さんたちが何かその證據を握られてるんぢやアないか、えッ？」

「そんなことアございません。」

「くやしいッ」と云つて、おかつはその袖を以つて自分の顔をおほひながら母のそばへ泣き伏してしまつた。そしてしやくり上げながら、「どうせいぬ畜生なら――いぬ畜生の――やうに――して――見せてやる！」

「馬鹿云へ！」大きな一と言でこちらは娘を叱り付けた。「うそにでもそんな疑ひを受けた以上は、ね、その疑ひの解けるやうにするのが人間だよ！」

「御もつともです。」

「おッ母さんはまだねえさんの肩を持つてても、ね」と、娘は直ぐけろりとしてそのからだを起して、『行つて御覽なさいよ、あのざまを――呆れちまひます、わ――ただおいおい泣いてて。」

「…………………」泣くのはあれの病氣ではないか？然し、これも、もう、いい加減に泣き飽きて氣がすんだ頃だらうと思つたので、母は工藤をつれてその店まで出かけて行つた。もう、電氣がついてたが、行つて見ると、お花のそばにはお隣りのきぐすり屋の夫婦が來てゐた。見ッともないではないか、餘りにおい／＼泣いてたので、棄てても置けずに、隣りの義理として慰めに這入つて來て與れたのだらうが？かの女の母としては、穴へでも入りたい氣がして、こちらは先づこの人達に何とかその挨拶をしなければならなかつた。が、娘の眼を泣き脹らして、眞ッ青な顔をしてゐるのを見ると、可哀さうにも、胸が迫つて來て、暫らく言葉が出なかつた――惡い病氣だとは考へながらも。

「まだ病氣あがりのおかみさんだア、ね、工藤さん」と、きぐすり屋が先づ口を出した、「もッとよくしておやんなせいよ、可哀さうぢやアないか？」

「へい、どうもすみません――御心配をかけまして。」

「おッ母さんは」と、今度は娘がこちらへ突ッかかつて來た、「なぜあのいぬ畜生をつれて來ないんです？」

「だッて――」こちらはわざと落ち付きを見せて、「お前さんが來るなと云つたさうぢやアないの？」

「知れたこッた――人間でもねいことをしやアがつて！」

「ぢやア、あいつはどけものにして置いても話は分りますよ。――一體」と、娘をあたまから押しつけるやうに、「お前さんには思ひ違ひがありやアしないか、え？」

「ありません！」お花はこちらの仕向けた話をとぼけるやうに云ひ切つて、わざとらしく横を向いた。そしてその上品な顔が高い鼻にまで凄みを見せてゐた。

「だッて、あたしは改めてお前さんに聽きたいんだが、ね、この男はわけもなく女に手を出すやうな人物であつたか、え？」

「…………」娘はなほ横を向いてゐて、返事をしなかつた。

「この男に限つちやアそんなことアありません」と云つて、やッと隣りの夫婦へこちらの如才のない顏を向けた。そして先づ心配をかけたお禮を述べてから、この婿は多少野暮であるとは云はれてゐるが律義は缺かさない男で、こちらは五年間もそばに置いてためして見たが、そのあひだ、ただの一度だッてもまだ自分と結婚しない娘の前で膝を一つ崩したことがなかつたことを語つた。

「さうでげしよう、な、わッしらも工藤さんに限りそんなことアあるまいと思つてました。」

「だから」と、こちらはなほさう云つた方へ向つてだが、實は、娘を納得させるつもりで、「たとへうちのおかつにやアそんな氣まぐれがないとは受け合はれないとしても、工藤に限つちやア決して氣まぐれなんか起す男ぢやアありません。」

「さうでしよう。まア、工藤さん、君も男だ、手荒いことアしねいで――まア――」こんなことを云つて、きぐすり屋はそのかみさんと一緒に歸つて行つた。

それを送り出してから、母はまたもとの奧へ立ち戻らうとする時、店のお盃やお椀が――工藤の身がはりになつたのであらう――毀われてちらかつてるのに氣が付いた。それから、ふりまわしたと云ふ出齒はと見ると、奧の居間と臺どころとのあひだの敷居の上に横たはつてゐた。工藤がさッきからこの方を見い見いおづ〱したのは、この爲めだらうと分つた。で、それを默つてひろひ上げてから、

「一體、そんな風情でこんな物を持ち出すやつがありますか――箱屋殺しの芝居ぢやアあるまいし

？」斯う低い聲でだが怒鳴りながら、それを流しもとの鮑丁さしへ持つて行つた。それから、また、もとの坐に戻つて娘と婿とを一と渡り睨み付けたが、男の方は殊勝さうに下をばかり向いてるに反して、娘がじろりとこちらを見たのを見て取つて、先づ、それへ口をひらいた。「おかつは以後決してこゝへはよこさないやうにしますが、ね、お前さんもいくら病氣のせいだッて、見ッともないから、少しやア氣を付けて泣いたりわめいたりするのアよすがいい、ね。」

『あたしやア、もう、死んだ方がましだ、わ！』

「また泣くのか、えッ？」

「おれが惡かつた。これから、おッ母さんに對してもすまないから、お互ひにおだやかにしよう。」

「さう云ふお前さんだが、ね――」こちらは工藤に向つてゐ直つた。「自分の女房のいもうとだからッて、そとをなんかつれて歩いちやア疑はれるにきまつてますよ。」

「そんなことア致しません。」

「正直に云つて御覽！うそを云つたッて、どうせあとでばれてしまうんだから、ね。」

「決してそんなことはございません――御恩を受けましたおッ母さんに誓つても。」

「ぢやア分りました。然し、今一度念の爲め申しますが、ね、一度だッておかつと一緒になんか歩いちやア困ります。』

「へい、決して！」

「…………………」これだけ念を押し、これだけ誓はせて置いたら、もう、あとはふたりの勝手にさせていいと思つたので、無挨拶に立ちあがつてだが、命令でもするつもりで、「もう、今夜は店をしまつて

早く休むがいいよ」と云つた。

「…………」娘は目だけで見送つたが、まだその涙がかはいてゐなかつたのをこちらはあとまでも思ひ出せた。

七

うるしのかぶれが直つてからは、おかつをまたした梳きに出してゐたのだが、二三日を見てゐると、どうもその様子が少し怪しかつた。

『おかッちやんは話して見るとなか／＼快活さうです、ね』と、お得意さきの若い奥さまなどからよく云はれてゐた子だ。それがこの頃では頻りに何か物を考へ込むやうになつた。ひとりで窓によつてぼんやりしてゐるのはまだしもだが、お客さまのあたまのうへで髪を梳くその手をやすめてゐて、母に叱られることもできた。

『…………』まさか、親でも、お前は男が戀しいのかとはあけすけに云はれないので、『この頃、お前さんは何か考へごとでもあるの』と尋ねて見た。『した梳きがいやならいやでいいから、また何かお前さんのする仕事を考へてやるよ。』

「いいえ、おッ母さん、あたいにやアこの仕事が好きで、面白いんだもの！」

『ぢやア、もッと本氣になればいいぢやアないの？お前さんはうちの大切なあと取りだから、ね、これからはうか／＼へたな男なんかにだまされちやアいけない、わ、よ。』

「そんなことア、おッ母さん！」

『だツて』と、少し立ち入つて、『意久地のない塗師屋なんかと疑ひを受けるやうぢやァ――?』

『そりやア、ねえさんのひがみですもの。』

『…………』さうだ、向ふのお花にも例のゐの五黄から、これと思ひ込むと、そのひがみをでも無理に押しとほす強情さはあるのである。だから、『そんなことなら、まだしもだが、ね』と云つて、こちらが考へて見ると、若し果してただそんなことであつたとすれば、人の云つたことはうそであつたのだらうが、それでも、江戸ッ兒の意地として、――これは決していい意地ではないが、――あねにいぬ畜生と云はれたくやしさから、いもうとがさう云はれるならいッそのこと向ふの亭主をほん氣に奪つて取つて見ようと云ふ氣を起してゐないとも限らない。現に、くやし泣きをした時に、いぬ畜生ならいぬ畜生になつて見せると云つて、母に叱られた。初めはほんたうにさうでなかつたのだが、あとでさう云ふ氣を起したかも知れない。さうしてそのいら／＼とつもる思ひがおしまひにはあねの亭主に對する實際の戀になつて來たのかも。兎に角、それから、また二三日をそれとなく注意して見てゐた。

すると、娘が手の明いた時を見てはよくそとへ出たがるので、その度毎にこわい顏をして見せてゐたが、一度はわざと時間をきめて出してやつた。ところが果してその時間通りには歸つて來なかつた。それでも、惡い顏は見せないで、

『どこへ行つてたの』と尋ねると、娘はにこ／＼しながら、

『それを買つて來たんですが、ね』と、黒地にこごめ櫻の刺繍をした半襟を出して見せた。そして、途中で○○の奧さまに出逢つて立ち話をしてゐたのだ、わ。早く歸らうと思つても、あのかたがなか／＼話をやめないんだもの。』

「…………………」あの人とは、近ごろこちらの商賣がたきの方へばかり行つてて、少しもうちへは髮を結ひに來なくなつた婦人だ。そんなものと立ち話なんか長々とする必要もない筈だが――。それに、買つて來たと云ふのはちよッと見ても四五圓はするしろ物だ。そんな物を買ふ小使ひ錢を娘も持つてゐないことはなからうけれども、多少はそのあねに似てけちんぼうなところのある娘が、母にちッともねだりもしないで、自分で買つて來たと云ふのも不審の一つであつた。ひよッとすると、買つて呉れたものがあるのではないかと感づかれたので、試みに、一度うちを明けて見る氣になつた。乃ち、あらかじめその前夜、娘を湯に行かせる前に、

「お母さんは、ね、あすはお客さまの頼みで金のかんざしの足をつけて貰ひに淺草の加賀屋へ行かなけりやアならないが、ね、ついでにまげの新がたも見せて貰ひたいし、また久し振りのことだから、話も長くなるだらうから、多分、歸りは夜の十一時頃になるかも知れないよ」と云つて置いた。それは一月九日のことであつたが、いよ〳〵十日になると午後二時頃から外出した。そしてその通り淺草へ行くことは行つたが、丁度九時に歸宅して見ると、案にたがはず、男が來てゐた。

「お母さんですの?――隨分早かつたの、ね!」斯う無邪氣さうに云つてから迎へに出た娘のあとには、玄關のまと奥とのふすまも明いてて、電氣を長火鉢のうへの方へいつも引ッ張つてあるその下で、こちらがゐれば娘の坐になるところに、工藤がこちら向きに坐わつてるのが見えた。

して見ると、こちらの留守の坐は娘が占めてゐたのだらうが、それは主人がはりになつてたのだとすれば、左ほど惡くも思へなかつた。が、前以つて疑ひを持つてたことがいよ〳〵てッきりその疑ひ通りに突きとめられたのにむら〳〵と燃え立つた自分の心には、若いものふたりが示めし合はせて自分の留守

に天照太神さまのお前をけがしたとばかり思へた。そして信心の前には自分の娘や養子の遠慮えしやくはなかつた。神のまのあたりで示めし合せごとなどするものは、すべて自分にはけがれた物であつた。そして同時に、また自分のかかる潔癖性にも自分の昔、男を知つてた時の思ひ出がありくと浮んで來て、いやなにほひがしてゐないかとまで自分の鼻のさきに注意を向けながら、今や自分の亭主か女房かを寢取られたのを見付けた時のやうな寂しさとねたましさとを感じてゐた。一度はひやりと水をあびせかけられたやうな氣がした。が、これがその寂しさとねたましさとの爲めに燃え立つて行つて、からだぢうにあついく熱までもおぼえたのである。

娘は母の顔をちよツとさきまり惡さうに見た切りで、母の足もとへ、いつも云はれてゐる通りに坐わると同時に、

「おかいんなさい」と云つてうやくしく兩手を突いた。

「…………」こちらは自分がけふ結つてやつたいてふ返しが――思ひ做しか――もう、少しつぶれてゐるらしいのを、うへからしり目にかけて、挨拶も返さないで玄關をあがつて行つた。そして向ふの工藤に向つて、「お前さんが來てゐたのか、え?」

「へい。」工藤もその以前からこちらの方をぬすみ見て當惑してゐるやうすであつたのが、この時、おづおづ坐蒲團を引きさがつて、「お歸り」と云つた。

「…………」こちらは神だなにお燈明があがつてるのを見て多少の滿足をおぼえたが、今夜に限つては、渠が不斷の義理がたいふる舞ひを憎らしかつた。この男も相變らず世間一般の人のやうにとほり一遍の義理や律義の皮をかぶつてゐたのであつて、その化けの皮を割り合ひに長いあいだ見せなが

つたのは、ほんの、氣がよわかつた爲めに過ぎないのだらうと思へば、こちらがそんな男を信用してあね娘の養子にしたのも、あねのかはりにいもうとを以つて渠の世話をさせたのも、今更らくやしくて溜らなかつた。で、さうとは見せないが、但し坐蒲團に直れとはこと更らに云つてもやらないでゐた。

「ちよッとおかどを通りましたので、おッ母さんの御機嫌をうかがひにお立ち寄り致しましたのでげすが――」

「あア、よく來て呉れました、ね」と、うはのそらで返事をした。別にふさはしい挨拶を思ひ付かなかつたからである。こちらは直ぐ横の方へ向いて長ぎせるのけむりを吹いた。そして罪もない火鉢のふちへそのきせるを叩き付けて、すひがらをはたき落した。それから、「おかつ!」つんけんした言葉で娘に云ひ付けた、「お隣りのお医屋さんの旦那にちよいと來てお貰ひ!」

「…………」おかつは返事なしにだが、直ぐ出て行つた。云はれたことをぐづぐづしてゐるのは、母の不斷に好(この)まないところであるをよく知つてるからであつたらう。

「お前さんは、然し」と、こちらはお医屋さんを待ち切れなくなつて工藤に思ひ切つての言葉を向けた、「今、あたしに會はせる顔があると思ひますか?」

「別に――わりい――ことを――してゐたんぢやア――」ぽつりぽつりと言葉を切つて、こちらのやうすを伺ひながらだ。

「今更らいい、わりいを云ふんぢやアありません!」こちらは渠を睨み付けて、「何と云つた、え、お前さんは以前に? おかつと一緒にやアぶら付かないッて云つたぢやアないか、ね?」

「ですから、ぶら付いたことアごぜいませんが――」

『そんならなぜ』と、こちらの問ひは向ふのびく／＼してゐるのにおッかぶさつて行つて、『あたしの留守にあがり込んだりしてゐます、ね？あたしがゐないと聴けば、『ぢやアまた』ッて、さッさと歸つてしまうのがほんたうぢやァありませんか？』

『…………』工藤はしたを向いて默り込んでしまつた。そしてこの詫びはとても叶はないと思つたのであらう、俄かに氣を變へたやうになつて、こちらへは手ごたへのうすい返事をした。『如何にもわッしがおゆう／＼不都合な思ひちげひを致しました。就いては、隨分御恩になつたおッ母さんにやアすみませんが、斯う云ふことにふつつかなわッしでげすから、以後お目にかかりません。』

『あア、かからないなら、かからないでもいいよ。』こちらも、だから、つい、賣り言葉に買ひ言葉となつた。

そこへおかつが獨りで

『おう、寒い！寒い』と云つてかけ込んで來た。つゞいてまたおほ屋の旦那が來た。

『…………』こちらは然しこの時には、もう、何の爲めにおほ屋さんなどを呼ばせたのか自分ながら分らなくなつてゐた。自分は寒いそとから歸つて來て、突然にのぼせたので、ちよッとまご付いておほ屋さんにでもさばきを附けて貰つたらばと思つたのだ。が、工藤とさし向ひで言葉をかはしたので大抵の見當が附いてしまつた。手ッ取り早く云へば、つまり、おかつと一緒に出奔するか、さなくば、おかつをも、またいやになつたお花をも棄てて、自分はかりで姿を隱すかのことに決心したのだらうと思つた。

そて、おほ屋さんへはそれとなく工藤をこのことに就いていましめて貰ふやうなことばかり云つて、そ

れだけで歸つて貰つた。

　すると、工藤もそのあとで歸り支度になつて、こちらが少しでも改心したかと思ひのほか――矢ッ張り、

『おッ母さんにやアすみませんが』を繰り返し、涙をまで浮べながら、「以後、それぢやアお目にかかりませんから――おからだをお大切に」と云つた。

『…………』こちらもそぞろに悲しみをさそはれたが、そのあひだに渠がその目でおかつにちよッと合ひ圖らしいことをしたので、それが最も癪にさわつてぐッと氣を持ち直すことができた。そしてわざと見送りに出もしなかつたので、娘も母のそばに坐わつてるままただもじ〳〵してゐるばかりであつた。なに、くそッ！この子さへ押へてゐればと思ひながら、暫らくは親子互ひに默り合つてゐたが、また一服のけむりを吹いてから、「お前さんにやア、ね、わりい魔が憑いてるんだよ。」

「…………」娘はじろりとこちらを見たが、また、したを向いてしまつた。が、惡魔と云はれたのをおそろしかつたのか、ぞッと身の毛のよだつやうすをした。

「……………」戀は然し素直なのでも魔に落ち易いものではなからうか？まして、この不義なのでは？締め切つた部屋をいやなにほひがまだ殘つてはしないかと、私かにまた自分の鼻で探つて見ると、それとは違つて、鼠の小便くさいのがしてゐる。今度の炭が惡いのであらう。やがて『戸じまりをして來な』と、娘に早くちの言葉を投げ付けると同時に、こちらも然し立ちあがつて、また火うち石を出して來た。そして部屋ぢうをかち〳〵と淸めまわつた。そのうちに娘が玄關の方から戻つて來たので、その正面からかの女のあたまへも切り火をかけた。何の意味だかは、この時、云はないでも分つてると思

つてだ。

八

すると、その翌日、乃ち、十一日の午前十一時頃、工藤のお隣りのきぐすり屋さんがやつて來て呉れての注進によると、工藤がお花を湯にやつたあとで、かの女の衣物をすべて質屋へ運んで行つた。

「…………」それをそばで聽いてたおかつは、横を向いてにツこりした。が、こちらはそれを見付けて、わが子ながら憎々しかつた。

「わざ／＼御親切にお知らせ下すツて、まことにありがたうございます。そのつもりであたしも氣を付けますから」と云つて、きぐすり屋を歸した。果して出奔をもうち合はせてゐたのであつたのだらう。こちらは工藤とおかつとをいま／＼しくなつただけ、それだけ病身なお花が可哀さうで溜らなくなつた。そしてかの女が前におかつをさう度々よこして呉れるなと云つて來たのも尤もであつたと思ひ出された。

おかつをさへしツかりつかまへてゐれば、やがて向ふから何とかばれて來るだらうと考へたので、ただそればかりをこころ待ちに待つてゐた。當分は仕事に出まいと、ゆふべから決心したのも、つまり、それが爲めであつたのだから。

すると、午後の二時になつて、おかつは

「おッ母さん、あたい、ちよいとお湯に行つて來たいんだ、わ」と云つた。その許しを乞ひ具合ひが不斷の無邪氣なうや／＼しさとは違つて、どことなくおど／＼、わさ／＼してゐるやうすなので、而も亦

その目に涙をまで浮べてゐるので、こちらはてッきりこれがうち合せになつてる時間だらうと氣が付いた。

「お湯に行くのもいいが、ね――」こえだと云はぬばかりにこちらの腹をきめて、火鉢のそばからかの女の顔を横向きに見上げて、「お前さんはほかに何か間違つた考へをしちやアゐないか、え？このおッ母さんの目にやア、ね、どうも、どこかそこいらでお前さんを迎へに來た男が旅支度でぶらついてるやうに見えるが、ね？」

「…………………」娘はしやぼん箱を手ぬぐひにくるんだのを持つて、玄關のまと奥とのあひだの敷居の上にこちらを向いて立つてゐたが、ばら／＼と涙をその足もとへ落した。

「おッ母さんの顔をこれで見納めにするッてんなら仕かたがないが、ね――」斯う少し皮肉に出たつもりだが、それでも自分ながら見納めと云ふ言葉にあまりの悲しさをおぼえて胸が詰つて來た。けれども、今、親として弱みを見せるところではなかつたので、無理にこわい顔に言葉だけを和らげて、「先づその男をつれて來て御覽、この場合、誰れであつてもかまやアしないから。」

「はい」と、娘は素直に返事して、持つてる物を敷居のはじに置いた。そしてそとへ出て行つた。

「…………………」こちらはかの女がそれッ切り歸つて來ないものならそれまでだともあきらめてたが、あのやうすではまさかと云ふ望みがあつた。

こんなことにもかの女は素直であつた――やがて、酒井さまの横手の道からでもあらう、三十分ばかりして、工藤をつれて歸つて來た。が、渠をしも座の方へ坐わらせ、自分はそのかみへ坐わつてこちらへ一緒に向ひながらも、恥かしいのか、下を向いて物を云はなかつた。

「どうもすみません、こんな風になりまして」と、工藤がやッともみ手をしながら口を切つた。そのかたわらには、今度わざ／＼買つたらしい旅かばんを置いてあつた。

「お前さんは一體――」こちらは渠を睨み付けて「こッちをあまいと思つて馬鹿にしてイる、ね？」

「いゝえ、どう致しまして――そんな、もつていないことは！」

「お花が病氣になつたッてうッちやるなら、この子をもそんなときやアまたさうするつもりだらう？」こちらは、この野暮律義の男にかかつてはおかつも――うまずめであるだけに――亦あねのやうにならないとは受け合へなかつた。

「飛んでもないことを！」

「お前さんは、ね、これで二度あたしに對して約束を破つたんだよ。それに、お花の衣物なんか質に入れて！三度目にまた破るかどうか、今一度おかつから手を引いて、獨りでお花のところへお歸り！」

「へい、承知致しました。」

「…………」たわいのない男だと思はれた。つよく出れば、こちらの負けると負けないとは別なことにしても、どうしてもおかつと一緒になりたいと云ふことはできやうに――ほんの、ただ、女にちよツかいを出すことをいつのまにか覺えやアがつて！

かばんを明けさせて見ると――おかつに着せる爲めか、それともまた旅で困つたら賣り拂ふつもりか――お花の、こちらもおぼえがある縮緬の衣物に赤地の長襦袢が這入つてゐた。そのほかには、しやぼんや齒みがき粉や手ぬぐひのやうな、けち臭い物で――それに、馬鹿々々しいことには、さくら紙ばかりがどッさり仕入れてあつた。横ッつらを一つ喰らはせてやりたいほど癪にもさわつたが、親なが

らまた私かに恥かしい氣もして、そんな物をすべてそ知らぬふりでもとの通りにさせた。それから、渠の持つてゐる金を調べると、これもたッた四十五圓しかなかつた。

「馬鹿々々しい！」それにはこちらもおもて立つた苦情が云へた。「これッぽッちで何がどこでできると思ふ？」

「五十圓工面致しましたのですが、そのうちから五圓は、もう、このかばんに使ひまして——」

「………………」まア、そんなところで喰ひとめることができただけでも仕合はせであると思へた。

「その五圓と利子とはあたしが出してあげるから、早く歸つて質物を出すがいい、ね。さうしてお花にやア、よんどころないことでお前さんの衣物を無斷で借りたが、もう、入らないことになつたからこの通り返すと云ひな。」

「どうも——！——こッちの不埒をお見のがし下すつて——……ぎやくに、またお世話を受けましちやア！」これも意久地なく涙をこぼして、手の甲でそれを押しぬぐつてた。

「いいから、直ぐ歸つてさうしな！」こちらはこれでお花に對して義理が立ち、工藤にも二度と再びかけ落ちなんかする氣を起させはしまいと考へた。

工藤が恐縮して、またかばんをさげて歸つたあとで、

「わッ」と泣き伏してしまつたのは、おかつであつた。「死んでしまう！死んでしまう！馬鹿を見たのアあたいばッかしだもの！」

「それが馬鹿だい！おやきやうだいに不孝ものめが——親を棄てて、あねの亭主とかけ落ちしてどうすると云ふんだ！」一度はあらはに云つてやらうと思つてたことを、やッと、今云へたので、多少こちら

の氣がせい〱した。如何に可愛い娘にだッて、さう〱あまく見られたくはなかつた。

「…………」娘は何も云ひ返しをしなかつた。そしてその涙がかわくと、默つて晩の御はんの用意に取りかかつた。

十二日に何か向ふから沙汰がありはしないかと待つてゐたが、別に何もなかつたので、多分うまく納まつたのだらうと喜んだ。で、十三日になつてこちらから行つて見ると、塗師(ぬし)屋の店は戸をしめたままになつて、お花だけが目を泣き張らして、奥でただ考へごとをしてゐた。

「工藤はどうした、え？」

「おッ母さんに合はせる顏がないッてッて、きのふからあたしを逃げて、どッかへ行つてます。多分あたしの衣物を質入れしたかねて、あのいぬ畜生と出奔でもしようとしたんでしよう。」

「そんなことアないが、ね」と、こちらはとぼけて見せた。「何か儲けぐちのことがあつてお前さんの衣物を質入れしたと云ふから、そりやアよくないッてッて、あたしが利子を出してやつて直ぐ受け出させるやうにしたんだ、わ。」

「そんなこッたら」と、娘はこちらへ突ッかかるやうに、『大きなかばんなんか買つてどうします！』

「そりやア、ちよッとその爲めに旅へでも出なけりやアならなくなつてたんだらうよ。」

「おッ母さんはまだあのいぬ畜生の肩を持つんですか？――つれて來て御覽なさい、あいつをも喰ひ付いてやるから！」

「…………」こちらには、工藤のゐないのも亦そのきつい女房が喰ひ付いたり引ッかいたりするのを逃げてるのだと分つたので、もう、どうせこの家は納まるまいと思ひながら、『何もさうおかつは

かしを惡く云はないだッて——？」
「ぢやア、これでもあたしがわりいッて？」
「いいえ、お前さんのことぢやアないが、ね、工藤が何もお前さんの物をまげたりしないだッても——
——」斯う云つて、少し娘の機嫌を取り直した。
そして聽いて見ると、質物は兎に角そッくり出してゐとへ返つてゐた。が、娘は
「あんな人につれ添つてたッて、末の見込みがない、わ」と云つた。
「…………」もう、本人があきらめたと云ふなら、こちらにはそれにも異存はなかつた。いよいよ全く自分らの目がねが間違つてゐたのだから仕かたがない。あれだけ、こちらは義理と人情とを含めてあとの爲めをも思つてやつたのに。渠が亭主としての權威を以つてあたまから一つ怒鳴り付けて女房の心を押しつけてしまふ甲斐性もなく、まだそんなことを云つて逃げまはつてゐるやうな男なら、その女房の親としても愛相が盡きるばかりであつた。
で、娘とその荷物とはすべて取りまとめて、その晩にこちらへ引き取ることにした。
「いぬ畜生、こッちのしやぶりかすでも嘗めに行け！」お花はこの晩初めていもうとを見た時にそれに向つて怒鳴つた。
「…………」おかつは、然し、その方をちよッとじろりと見た切りで、小さくなつて、なんにも答へなかつた、もちろん、答へるすべもなかつたのだらう。
「あたしが目の黑いあひだは、ね、おかつにだッて二度と再びあねに義理のわりいやうなことアさせやアしないや、ね。」これはお花に向つてぢかに云つたのだが、おかつにもそのつもりにならせる爲めの意味

が籠つてゐた。が、こちらはこの娘ふたりがもとの仲いい時に語り合つたらしい下だらぬ話や、ふたりとも子のないたちなのやを思ひ出して見ると、そんなことを云つたり云はれたりしてゐるのを實にいやアなやうな、また馬鹿々々しいやうな氣がしたのである。

九

そのまた翌日の十四日には、おかつの拵らへた朝はんを熱いおみおつけで娘同士はただにらみ合つて喰べた。

それには、いもうとがそのみなもとを作つたのであるから、あねに於いて少しも惡いと云へることはなかつた。そこはこちらも十分にも察してやつたが、お花は食事をすませると直ぐ、もとの主人のうちへまた奉公をつづけるつもりで出かけたのだ。こちらもとめはしなかつたが、折角ゆふべから持つて來てうちのおづしへ再び納めたその父のお位牌をまた持ち出して行つたので、何だか矢ッ張りもと〱通り頼母しくない子のやうに思へた。お花が今度工藤を見棄てたのと同樣に、こちらが昔自分の亭主を思ひ切つたのが、いまだに祟りをしてゐるやうで――。さうだ、それがいろ〱戀に於いていま〱しいきやうだいのいさかひになつてるのかも知れなかつた。

母がさう云ふことを考へてのむしやくしやがうちに殘つてる娘に向けられたのであつた。

「その顏を御覽、自分でわりいことをするもんだから！二度とアおッ母さんも承知しないよ。」

「夜ッぴて朝まで眠られなかつたんだ、わ。」斯う、娘は青い顏で不平さうに云つた。

「どうしたッて？」

『だッて』と、然し、少しは口のさきへにこ付きをとがらせて、『ねえさんにやみくもに殺されやアしないかと思つて！』

『馬鹿だ、ねい』と、こちらもこわい顔はしながら少し笑ひを見せた。殺す、殺さぬと云ふやうなことが、苟しくもきやうだいのあひだで、うそにも、どこから考へ出せるのだらうとも思はれた。

こんなことの爲めに怠つてた仕事を十五日と十六日とは腕によりをかけて取り返した。が、十七日は髮結ひの休みであつたので、お花を深川へ見舞ひに行つてやつた。

すると、また例の病氣になつたとかで、女中部屋に引き籠つて寢てゐた。そしておもちやのやうな小いおづしを――可哀さうに、人のうちだから、別にちやんと飾つて置くところもないのだらう――自分の枕もとへ立ててあつた。

『斯う云ふところアお前さんは感心だよ。おかつと來ちやア、自分の死んだお父アんのことなんぞアこれッぽッちも思つてやしないんだから、ね。』人さし指を出してその先きの方へ親指を持つて行つた。

『そりやア、おッ母さんがついてるからです、わ。』

『…………』こちらはさう云はれると、折角賞めてやるのをあだにして、當てこすりを報いられたやうに思へて、ちよッと言葉が行き詰つた。この子は病氣の度每にひがみとひねくれとが增して行くやうであつた。『何も――あたしやアおかつだッて、お前さんだッて、えこ引い氣はないつもりだが、ね』と、もう、何度も娘にかたみがはりのやうに云つて聽かせて來た意味をまたここにも繰り返さないではゐられなかつた。そして斯うしてゐては主人にもすまないわけだらうから、また病氣のよくなるまでうちへ來てゐるやうにお花に勸めて見た。それには暫らくだッて、こちらの所天（をつと）の位牌をうちに

置いて拜んで見たい心も這入つてゐた。

が、お花は主人に氣がねしながらもなか〳〵承知しなかつた。そして、「あんな犬畜生のゐるところなんかへ死んでも行くもんか」と云つた。

「…………」こちらは自分のうちを娘に惡口されながらも、それは尤もだと思はれた。

それに、御主人は元からのことで、割り合によくして吳れるさうだし。親切なお客さまのうちには、今回のことにただからだと荷物とを引き取つて來たばかりでは馬鹿だ。少くとも、店を持つ時に出したかねを公正證書にさせて段々に取り返すがいい。ほかに口の聽き手がなければ、おれが行つてやるとまで云つて吳れる人もあるとのこと。

して見ると、そんなお客さまの親切やら、御主人の御恩に免じても、證書のことなどうツかりしてゐたこちらは、あねをこんな目に會はせたいもうとの親として、二つにはまた死んだ父のお位牌をお花と共にこんなところへまで付かせるに至つたおかつの母として、安閑とはしてゐられないやうないきどほりを覺えた。で、うちへ歸つて來るが早いか、まだ坐わりもしないうちにおかつに向つて、

「お前さんのゐる爲めに、ね、お花は可哀さうに病氣で寢てゐてもうちへは歸らないと云つてるんだよ！」そしてあね娘が御主人や朋輩には——歸つて來れば、しないでもいいところの——氣がねばかりをしてゐることが語られた。

「あたいの爲めにさうねえさんがお困りですなら——」

「困るのァ當り前だよ！」

「ぢやア、出て行つてやる、わ！」

「さう、さ、出て行け！」斯う、時のはづみが叫ばせた。苟しくも母たる者に向つての憎まれ口をほざいたのだと受け取れたからである。心のいきどほりがそツくりそとへまで出てしまつたのだ。『お前さんのやうな、ね、おやきやうだいに不孝ものはとツとと出て行きな！』思はず二度、言葉につれてたたみにかた足を足ぶみまでして見せた。それから、よそ行き姿のままで火鉢のそばへ坐わつたが、二度とかの女に言葉をかける氣が出なかつた。實際に、母親として一方の娘の苦しみを見てゐながら、他方を無事に自分のそばへ置いて置いちやア、まこ引い氣の沙汰だと云はれても仕かたがない。それを自分は好まなかつた。

『……………』おかつは玄關のまに坐わり込んで暫らくうなだれてゐたらしかつたが、こちらの部屋の敷居ぎはに手を突いて、『ぢやア、おツ母さん、ながながお世話になりました。この御恩――は――死んでも忘れません！』

『……………』反對の方を向いてこちらは返事もしてやらなかつたが、娘のおしまひの言葉がはやロになつたのは涙を呑み込んだのであると察してやると、いぢらしくもあつた。けれども、『出て行つてやる』と云つたにくて口に對して一旦『出て行け』と命じた以上、結局、このあとへあね娘を呼んでやればよかつた。直ぐ手紙をお花に書いて、おかつを追ひ出してしまつたから早く歸つて來いと云つてやつた。

その夜十一時頃になつて、工藤の方からの使ひとして老母がやつて來た。男ひとりになつたので淺草から再びこの母を呼び返したらしいのだ。

『おかツちやんがおツ母さんに追ひ出されて、行くところがないと云つて來ましたので、うちへ預つて

あります。どうか御安心を——』

『…………………』何が安心だ、娘が追ひ出されるわけとなつたうちでその娘を預つたッて？　義理としてもそんな預かりかたができよう筈はなかつた。が、出て行けと云つた以上、もう、どうでも勝手だと云ふつもりで、そッけなく、ただ『さうですか』と答へてやつた。

ところが、それをいいしほにしておかつは工藤へずる〳〵べッたりになるつもりらしく見えたうへに、お花からは二三日たつて返事が來たが、歸りたくない、それに病氣がいい方だからとあつた。母はあぶ蜂取らずの馬鹿を見たやうにおぼえて、これからまた獨りぼッちで暮すのかと思ふと、俄かに寂しくもあり、がッかりもした。

一〇

深川の方ではくやしまぎれに相變らずみんなにしやべり散らすかして、お客としてお花をおだてる辯護士もあり、三百もあるやうすで——そのうちの誰れかのおごりでだらうが、或日、かの女は歌舞伎座から使ひをよこし、お客さまの御好意だから、都合がよければ直ぐ來いとあつた。嬉しくもないことはなかつたけれども、まだこんな事件のあつた當座でもあり、仕事もしッかりやらなければならなかつたので、

「殘念だが、けふは行かれません」と返事した。

そのうち、お花は三百らしいのを二名もつれてやつて來た。そしていよ〳〵指ヶ谷に公正證書を書かせるから、明後日正午を期して、芝の區裁判所まで、母と母のおほ屋さんとが證人に立つて工藤とおか

つとをつれて來いと云ふのであつた。

それはこちらもこころ好く引き受けたが、客どもに馳走を出した代金を置いて行かないで、

「これはあたしのおごりですが、ね、立て替へといて頂戴、ね」と云はれたには、またお花のけちな手かと思へた。が、これもかの女の機嫌を取り戻す爲めとすれば、こちらに少しも異存はなかつた。

お花の三百が呉れぐれも明後日の正午を念押して歸つたその翌日、丁度、おかつもその家を出てから初めてやつて來た。

「おッ母さん」と、玄關の土間から呼んで、「おそうざいができましたから、持つてまゐりました。」

「…………」こちらはかの女のおづ／＼とふるえた聲を聽いても、可愛さよりも憎々しさの方が勝つてゐたので、返事もしてやらなかつた。

娘はこそ／＼とあがつて臺どころへ行き、戸棚を明けて、どんぶりか何かの音をさせた。多分、それへ持つて來たものを明けてたのだらう。やがて、明いてたふすまの敷居ぎはにこちらを向いて坐わつて、話をしかけたさうにしてもぢ／＼してゐたが、こちらが少しも相手にしなかつたので、

「ぢやア、またまゐります」と云つて、立ちかけた。

「ぢやア、ね、」と、やッと母の聲が出せたのである。「お花がゆふべ三百をつれて來て、ね、お前さん達を裁判にかけるか、それとも公正證書にさせて、出したおかねだけはきッと取つて見せると云つてるんだから、ね、工藤にさう云つてお呉れ。裁判なんかへかけて貰ふまでもなく、どうせ返してやらないぢやアすまないおかねだから、おとなしく證書を書くがいいと、ね。」

「はい、歸つたらさう申します。」

「…………」こちらは、こないだの始末をあねにまだ云つてないが、あれを知られちやアこの上にもまたどんなにおこるか分らないと妹を威し付けて、そちらの不始末の爲めに今度おほ屋さんと一緒に證人なんかになることを小言まじりに云つて聽かせた。そして印形を持つて出るのを忘れてはならぬこと、あすの時間を間違へてはいけないことを告げた。

その翌日の二十四日は大寒の三日目であつたが、こちらはおほ屋さんともうち合はせをして時間の來るのを待つてゐると、何のことだ！十一時頃になつて、工藤の老母がおかつの手紙を持つて來た。そして、

「今日はあたしは少し加減が惡く、主人はおたなへでき上つた仕事を持つて行きました留守ですから、行けません。また明日は土曜日、明後日は日曜ですから、二十七日にして下さい」とあつた。

「…………」これはてツきり徒らに日を延ばす手ぢやアないかと思はれたので、こちらは老母を歸すと直ぐおほ屋の旦那にこのわけを話し、自分は兎に角指ケ谷へ行つて來るが、いよ／＼延びるならその足で裁判所の方へ出て、待ちぼけしてゐるものにそのよしを知らせるし、若し工藤らも行くとなれば今一度歸つて來るからと云ひ置いて、指ケ谷へ向つた。途中でまだぐづ／＼歩いてる老母に出逢つたが、うるさいので言葉もかけてやらなかつた。

そして行つて見ると、果して工藤は店にゐて、

「おツ母さんですか」と驚いた。

「…………」こちらはあがり込みもしないで、あがりぐちの土間に突ッ立つたまま、怒鳴るやうに云つた。『お前さんは！　お前さんは！　うそを云つて、いよ／＼裁判になつてもかまはないんだ、

ね――人が爲めを思つてあんなに云つてきかせたのに？』きのふのことを思ひ出して、奥にゐる娘をしり目にかけてだ。

「どうもすみません。實は、おかッちやんが少し加減がわりいッてんでげして――」

「…………」それはうそでもないらしかつた。ちよッと睨らんだところで見ても、おかつは火鉢に向つて中腰になつてくすりをせんじてゐるやうすであつた。中將湯か何かのにほひがしてゐた。どうせまた確かにお花の二の前になつてしまうのだらうと思ひながら、おかつがまア上れと云ふのには返事もしないで、『ぢやア二十七日にやアきッとか、え』と念を押した。

「へい、二十七日にやア間違ひなく。」

「ぢやア、これから直ぐ向ふへ知らせに行つてやらないぢやアいけませんから、ね」と云つてそこの土間を出てしまつた。向ふが待ち遠がつてるだらうと思ふと氣がせいて、電車のうへも用意して來たほどさう寒くなかつた。

こよみを見るとこの日の星もよくなかつた。が、あれほどに云つて置いたのだから、今度こそ間違ひはなからうと安心して二十七日にはこちらはこちらで別々に裁判所へ行つて見た。すると矢ッ張り、工藤とおかつとは時間を三時まで待つてもやつて來なかつた。

「おッ母さん、こりやアどうしても訴訟にするより仕かたがないです」と、お花がはの男が云つた。

「今一度待つていただきましよう。あたしは直ぐこれから行つてうんと叱り付けますから。」お湯屋さんに無駄あしさせただけに對してもこちらは承知できなかつた。指ヶ谷へ來た時は、もう、電氣が付いてゐたが、案内も乞はないで、づか〳〵奥へとほるが早いか、そこに相變らずくすりのコップを口へ運ん

てたおかつの、誰れに結つて貰つたとも分らない丸髷をいきなり取ッつかまへて、ぐいとかの女を引き倒した。それから、矢ッ張り髷をつかんだまゝ、『このいぬ畜生』と云つては左りへ引ッ張り、『このすべたそんな』と云つては右に引き、『ばいた！　亂痴氣！うそつき！あね不孝！おや不孝！』あらゆる惡口と卑しめの言葉とを以つて成敗した。

「…………」娘は髮を握られて引きづられながらも、張り合ひのないほど手むかひせず、少しも音を立てなかつた。すると、

「まア、そんなに手荒いことは」と云つて、老母がとめに來た。こちらはそれに向つて、

「あなたも一體何ですか？　歲は何の爲めに取るのです？　あたしから見りやアまた二十も年うへなせに、若いものがいぬ畜生の眞似をしてゐるのを、そばにゐて默つて許して置くとアどうしたんです？」

「つい、氣が付きませんでして――」

「それほど老いぼれてりやア、こッちのすることにやアかまはないで置いて貰ひましよう！」斯うまで思ひ切つて云へたに就けては、今ひとりの相手にもぶつかりたかつたのだが、その相手がどこにも見えなかつたので、なほ老母に、『息子をよこしもしないで――ただ逃げまわらせてばかし！』

「おたなへまゐりましたんでございますが――」

「おたなへなんかいつだッて行けます」と云ひ放つて、いきどほりの目をまた娘の方へ向けた。

「…………」娘はこちらの手を離れると、押し付けられたあたまをぐちや〳〵になつた髷と共に前方へ垂らしたまゝ、橫向きの腰のあたりから疊へひらたくねぢれたかみ半身をひろげた兩肱と兩手

とで以つて起し初めた。そして段々とこちらへ向いて擧げて來たその化粧がほを見ると、くツきりした鼻すぢで以つて分たれる兩方の目つきにも頰の色にも、こちらを恨むと云はんよりも却つて許しを十分に乞ふやうな意味を見せてゐた。それが可哀さうにも見えると、今出した腕の力によつてかの女の髮がすツかり拔けなかつたのを不思議に思へた。が、工藤の老母をも叱り付けたその勢ひがまだ〱殘つてゐたので、娘の顏を穴の明くほど瞰み付けて、

『かさねがさね親の顏に耻ぢを塗り付けやアがつて！今夜はお前さんの不斷おろそかにしてゐるお父アんに成り代つて成敗してやるんだ！』實際に、お父アんのたましひでも乘り移つてゐなかつたら、こんな、云はば、生まれて初めての亂暴などはする筈がなかつた。息ぐるしい程むねがどき〱するのを押し靜めようとすると、太い膝を揃へてちやんと坐わつてる自分の手も指もぶる〱顫えてゐるのに氣がついた。

『おツ母――さんの――爲めなら、どうなつても――お恨み申しません！』娘は俄かにすすり泣きになつて、そのまま倒れ伏してしまつた。

『わたしも申しわけがありませんから、あす早く淺草へ歸ります』と、老母が云つた時には、こちらもあふれ出ようとするむせびを無理に押さへてゐた。

二

あまり亂暴したのを返り見ると、自分の娘にだツて少しきまりが惡いので、二十五日になつて、自分の代理としておほ屋さんに工藤のところへかけ合ひに行つて貰つた。それが歸つて來ての話によると、

工藤も今度こそはさう〳〵逃げてもゐられないと見たのだらう、確かにあすの十二時を以つて裁判所へ出ることに約束した。が、そのついでに、

「おッ母さんのやりかたも少しひどいぢやァございませんか」と恨んださうだ。「なんぼ親はその娘の身を自由にしてもいいからッて申せ、その朝、もやうによりやァ裁判所へも行かせようッて結はせた髮を握つて引きずりまわすとァ、髮いの命利にも關しましようッて。」

「…………」今ではそれを後悔してゐないでもないが、こちらをさうおこらせたには、無斷でまた出頭しなかつたのが惡いではないか？

「あたしは別におッ母さんの愛におぼれてゐたわけでもありませんが、ね」と、おかつはおかつで云つたさうだ。「ねえさんとは違つて、おッ母さんのあと取りにもなつてますし、ね、また子供の時からずッと一緒にゐましたし、それで今度のことだッて――たとへあたしが惡かつたにしても、ね――つまり、おッ母さんはあたしの味かただと思つてましたんですよ。」

「…………」それも、尤もでないことはなかつた。が、事件が事件だけに、お花の方へも義理は立てなければならなかつたのだ。

「工藤さんも、成らうことならおッ母さんをも一緒に引き取らうッて云つて呉れてるんですのに――」

「…………」そんなことは、然し、金輪際できるものか？　それほどの親切だから、こころざしとしては喜んで受けるが、お花の手まへもあることだ！　それをおい、それと承知するやうな母ではない。「あたしやァ、これから石にかじり付いても、娘なんぞにやァ手よらないでやつて行きます、わ」と、おほ屋さんに答へた。

「御尤もです。それにやア、お前さんに獨りで喰つて行ける腕があるからだらうが、ね。」

「腕なんか一本や二本切られちまつても」と、笑ひにまぎらして話をおしまひにしてしまつた。そしてこのことを深川まで知らせに行つたのである。おほ屋さんには

「電話ででも分ることだ」と云はれたけれどもぢかに逢つてお花を少しでも喜ばせてやりたかつた。然し

「とう／＼あの畜生を髷をつかんで引きずりまわしたんだよ」と云つた時には、あの場に於けるやうな意氣込みのなかつたのは勿論、この言葉に當前含まれる筈のいきどほりも隨分少くなつてゐた。だから、お花の答へとして、

「いゝ氣味だが、それでもまだ／＼足りやアしない、わ」とあつたのを、

「だッて、まア――」と云つて打ち消してしまひたかつた。

公正證書の手續きは、それでも無事に、一月二十七日の午後すんでしまつた。にらみ合ひながらも、お花がはが何ごとにも意張つてゐたのに比べては、工藤とおかつとは可哀さうなほどおとなしかつた。

「さア、これで大丈夫、大丈夫！」斯う、お花は自分の三百からできた證書を渡された時にわざとらしく叫んだ。そしてその證書で自分の亭主を取られたことを承知してしまつたわけになるのをも知つてか、知らないでか、如何にも勝ち誇つたやうすで引き上げて行つたのが、こちらにはおろかのやうに見えた。「一杯どッかで飲みましようか、ね」と云はれたのをも、こちらはおかつやおほ屋さんの手まへを思つて、それとなく斷わつた。

さうかと云つて、歸り道や電車をこちらはおかつとも一緒になりながら、かの女へも亦話をしかける氣にはなれなかつたのである。

＊　＊　＊

二月に這入つてから、早々、お花はまた別なをとこ客を二名つれてやつて來た。そしてこないだのお禮を云ひたいからと云つて、大屋の旦那をも招いた。さう云ふ飲み喰ひの費用を凡てまた母に拂はせた。『今度拂ひますよ』が幾度かさなつて行くのか分らない。そんなことなら、いッそのこと、來て呉れない方がましであつた。以前にはおかつの方を目かけ肌だと思つたが、この頃では、却つてお花がさうした女であるやうに分つて來た。

そんなあね娘に比べると、矢ッ張り、いもうと娘の方がどれだけ可愛いか知れなかつた。

『あたいはねえさんよりやァ家庭的、ね、髮も結へるし、お勝手のことも好きだし』と、よく云つてゐたッけが――。それがあんなひどい目に會はせられたのを恨みもしないで、相變らずおそうざいなどを持つて來て呉れる。

『…………』こちらは、然し、まだ心が解けないので、話を仕かけてやつたことがない。

『おッ母さん、すみませんが、けふ、髮をちよいと結つていただけますまいか？』斯うおそるおそる云つて、もつとひや髮の道具をまで自分で自分のところから持つて來られると、まんざら結つてやらないわけにも行かない。

『…………』これを掴んで、可哀さうにも引きずりまわしたんだと思ひながらも、矢ッ張り、こちらは無言の業だ。面と向つて顏を見合はせるのをすらわざとにも避けるところから、たま〳〵髮いの鏡を仲立ちとして顏が出くわしても、おもて向き何だか氣恥かしくッて、直ぐ目をそらせてしまうが、心では、この無言のかつゑと寂しさとの爲めに、自分の喉まではぐびりと込み上げて來るものがあつても、それを涙とならないうちにまた飲み込んでしまつた。

――大正八年六月四日――

編輯局より

■學界の權威論壇の雄福田德三博士は、本月號に執筆せられたるを機會に今後愈々其蘊蓄を注ぎ筆硯を磨して本誌讀者に見へんとす八月號には長編數十頁に亘る論案を構して時事問題を批判し、社會問題の警鐘を鳴らして民衆の覺醒を絶叫せらるべし

■文壇の耆宿坪内逍遙博士は、時事の非、劇壇の不振を深慨し、『民衆教化と演劇』と題し近時稀に見る五六十枚に亘る大論文を八月號に寄せらる。一字白熱に燃え一句赤熱の焰あり。或は當局の文藝に對する無理解を痛撃し、劇界の低調を嘲つて峻烈秋霜の如し。溫乎玉の如き博士の人爲りと較して殆んど別人の感あり。世に慨する者に非ずして發するを得ざるものと云ふべし。

■京都大學は學界の淵叢と稱せらる、佐々木惣一、米田庄太郎、河田嗣郎三氏は卽ち此淵叢に於ける少壯にして天下の崇敬を擅にしつゝある人たり。今や筆端を硺きて本誌八月號に剴切深奧なる政治問題社會問題の長論を寄せらる。內田魯庵氏の「ボルセビキズムとウイルソニズム」の一篇と共に深緣論界の最高表現たるべし。

■八月號より經濟欄を特設し、財政に、經濟に深刻なる批評を下し、資本家、勞働者の生活狀態に對しても、痛切なる論斷を與へんとす、本月新に大阪に支局を置くことゝせり。

東京南品川東浅間臺二四六

發行所　改造社

電話高輪一一九〇振替東京八四〇二

本號に限り金五十五錢・稅二錢

定價		
增大號は其時々に定價を定む		
	定價	送料
一册	三十五錢	一錢五厘
六册	二圓十錢	送料共
十二册	四圓十錢	送料共

每月一回一日發行

大正八年六月二十六日印刷納本
大正八年七月　一　日發行

東京南品川東浅間臺二四六
編輯兼發行兼印刷者　横關利藤太

東京市京橋區西紺屋町廿七番地
印刷所　秀英舍

發行所　改造社
東京南品川東浅間臺二四六
電話高輪一一九〇
振替東京八四〇二

大賣捌所　東京堂　上田屋　至誠堂　北隆館　東海堂　良明堂

注意

新刊圖書寄贈、廣告其他編輯上に關する用件は凡て改造社へ御申出で下されたく候

(改造第一卷第四號)(大正八年六月二十六日印刷納本、大正八年七月一日發行)

東京秀英舍印刷

(大正八年三月二十一日第三種郵便物認可)(毎月一回一日發行) 本誌に限り 定價金五十五錢